ハイスクールD×D〜道を貫き抜きし者〜

後より出でて先に断つもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイスクールＤ×Ｄ～道を貫き抜きし者～

【Ｎコード】
Ｎ１９２８Ｕ

【作者名】
後より出でて先に断つもの

【あらすじ】
兵藤一誠の幼なじみ、本道進がおりなすハイスクールバトルアクション！！とりあえずヒドい！！なにかって？なにもかもだ！！処女作ですのであしからず。メチャクチャな批判はマジ勘弁してください。作者メッチャ打たれ弱いんで。それでもよいならみてやってください。

俺とあいつの日常編（前書き）

この度、ハイスクールD×D～道を貫き抜きし者～を読もうとしていただき、誠にありがとうございます。さて、この二次小説は私めもはじめてなので、かなり至らないところが多数あると思いますが、続けていく中で力をつけていきたいと思っております。そのためには皆様の感想が必要となります故、できるのであれば感想を書いていただきたく思います。注意事項としては感想で批判的なもしくは、中傷的な事を書かないでいただきたく思います。あくまで、よりうまくなるためのアドバイスとこの作品の感想をかいていただく場であることをご理解していただきたく思います。長々となりましたが、この作品を楽しく読めるようにがんばりたいと思います。

俺とあいつの日常編

『俺、彼女ができたんだッ！！』

そんな天地が前周りして後ろ周りしてハンドスプリングしてトリプルアクセルしてもあり得ないような話を聞かされることになった春。いきなりそんな夢物語をいいだした少年、イッセーこと兵藤一誠。

普通の男子なら『あぁ、よかったな。』ぐらいすむのだが、こいつの場合は違う。

なんてったってエロい。まぁ、エロい奴はこの年ならだいたいそうだろ。みんなエロ本の一冊や二冊くらいは常備してるだろ。しかし、こいつはここで終わらない。なぜなら、学校・・・いや、近隣の学校に通ってる奴なら大体が知っているほど、コイツはエロい。むしろエロさしかない。エロの為に生きてる様なもんだ。ほんと・・・・将来、一体何になるんだ?頼むから犯罪にだけは手を染めないでくれよ・・・・・・・・・

あとは・・・そうだなぁ・・・・・・・・・、結構熱い物をもってる・・・かな。

それが、俺、本道（ほんどう）　進（すすむ）がみてきた。兵藤一誠という存在の簡単な理解だ。

そんな奴であったせいか、俺ははじめこいつのいっていることがまったく理解できなかった。

『うるっせぇーぞ、イッセー！ギャルゲ出来ねぇじゃねぇかッ！！

大体、んな世界が四回転半しようとして失敗して今から地球が太陽に突っ込むみたいな嘘いわなくていいんだよッ！！』

『事実だよ！！てか、俺が女の子と付き合うのは世界滅亡並の嘘と同列なくらい信じられないことなのッ！？』

『うるっせぇーな、うるっせぇーなッ！！こちとら今からギャルゲして二次元の嫁たちに会いにいこうとしてるのを、お前に止められて殺意がわいてんだよッ！！しかも、理由が彼女ができたからぁ！？んな有り得ない事言ってないでささっと帰ってシコってねろッ！！』

まったく、イライラする。俺ははやく嫁たちに会いたいんだ。『あまがみ』してもらいたいんだ。

『いやだからホントだってッ！！ほらッ！！携帯見ろってッ！！女の子の名前書いたるじゃんかッ！！』

そう言って顔の前に無理やり携帯を近づけてきた。

『ほら、見ろって。ちゃんと女の子の名前があるだろ？』

そういって見せてきたディスプレイにはくっきりと（天野夕真）とかいてあった。

『てんの・・・ゆうまさ?え?男?』

読めん・・・いやまじで・・・・・・・・

『あまの　ゆうまッ!!だよッ!!ホント頭弱いね・・・』

そう言って俺に視線を向けてるくるイッセー。

『悪かったなッ!!実際頭が悪くなった原因は親父のせいだッ!!』

ホント、あれはないわ・・・
なんでガキの頃からあんなに殴られなくちゃならん。拳法の練習でも限度があるだろ・・・・・・・・

『まぁ・・・アレはヒドかったけど・・・・・・・・って、そんなことほっといて彼女だよ、彼女。』

ほっとくな。こちとら命がけだったんだぞ、こら。しかし、コレは・・・・・・・・マズいな。

『イッセー・・・・・・・・、ついに空想彼女を創るようになってしまったか・・・・・・・・』

『違うよッ！事実だよッ！！どうしたらわかってくれるのさッ！？』

『ギャルゲ買ってきてくれたら。』

『いくかッ！！』

俺はポンっとイッセーの肩に手をやって。

『セブンズな？』

『よし、わかった。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ってなんでだよッ！！なんでいきなりギャルゲ買ってこなくちゃいけないのさッ！？ていうかなにッ！？言葉を尽くしてもなんでホントだって信じてくれないのさッ！？俺らが積み上げてきた友情はどこ行ったのさッ！？』

『ゴミ箱』

『やめてくれぇぇぇぇぇーーーーッ！！！！！』

～ここから一時間、イッセーがマジ泣きしてました～

『あぁ～、まぁ、世界滅亡がほんとに今すぐ起きると言うのも信じてしまうと仮定において、おまえに彼女が出来たとしよう。』

『ぐすっ・・・ひっく・・・うん。』

うぜぇ・・・まじうぜぇ・・・・・・・・高校生のマジ泣きがこんなうざいとわ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『ほらなくなって、キンチョールまくから。』

『うん・・・・・・・・・ってなんでキンチョールッ!?』

『いや、あったから?』

『疑問文になってるよ!?』

今度はやたらテンションが高くてうぜぇ・・・・・・・・・
もっかい泣かしてや・・・らないでおこう、なんかマジ話っぽいし。

『んで?世界がどうなる?』

『もういやだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーー・・・・・・・・・』

～ここからさらに一時間かかりました～

『ほう、彼女がねぇ・・・・・・・・・』

『うん、いきなりだったぜ・・・』

とまぁ、話は聞いてみたが・・・見たのだが・・・・・・・・・

『それ、なんてクソゲ？』

『ギャルゲですらないの！？』

『いやだって・・・有り得ないじゃん。おまえの噂は近隣の皆さんに多大なご迷惑を被ってるわけで、そんな噂の張本人にいきなり好きですっていうかぁ～？』

ぶっちゃけ新手の犯罪かと思った。

『うっ・・・・・・・・まぁ、そうだけど。』

『それに外見もこんなんな奴のドコが好きになったのやら・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・シクシク』

また泣き出しやがった・・・・うぜぇ・・・・・・・・・

『けど、少なくともその話がホントなら他の連中には見えてないお前の魅力を見抜いたのかもしれないな?』

『へ?』

『だってそだろ?顔だめ、性格だめな奴を好きになる要素があるとしたら、それ以外ないだろ。未だにでていない・・・もしくは、出ていても気づいていない魅力がお前にはあるんだろうよ。それに気づいて惚れちまったんじゃないか?』

『え?でも、そんなのあるか?俺なんかにさ?』

『さぁな。だが、俺はおまえの事が気に入ってる。おまえには俺が気に入るような要素や魅力が絶対にある。そして、俺が気に入った

魅力と彼女が気に入った魅力が同じかはわからないが、人に気にとめられる程の魅力があるのは確かなことだと俺は思うぞ?』

『ーーーーーッ』

あん?なんだよ、コイツ。また泣き出しそうな面してやがる。

『ったく。しかたねぇな・・・。ほら、こっちこい。考えるぞ?』

『へ?な、なにを?』

『デートコース考えんだよ。おまえが俺の所にきていきなり用件言うのは大体は悩みがあるときだろうが。』

まったく、世話の焼ける奴だ・・・

『お・・・・・・・・おうッ!!!!!』

結局、徹夜してデートコースやらなんやらを決めることになっちまった・・・・・・・・

まぁ、今度ギャルゲかってもらうようにしたからいいんだがな・・・・・・

しかし・・・、あいつの彼女の名前・・・・・・・・・難しいな。『
てんの　ゆうしん』だってよ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・
あれ？男じゃね？

俺とあいつの日常編（後書き）

とまあ、終わりです。ぶっちゃけ原作ブレイクしてそうです。細かい設定などは後日張りますのど、次回は速くて今日中遅ければ来週になりますのであしからず。

俺とあいつの日常編～愛しのキンチョールと朝の登校～（前書き）

と言うわけで、更新です。今書いてて思ったんですが、まったく話がすすまない。いや、まぁ。作者の技術がないからしかたないですけど・・・

けど、あと三話ぐらいでリアス嬢が出てくるところまでしたいです。

追伸、お気に入り登録、そしてポイント、ユニーク、ＰＶをつけてくださったみなさん！！ありがとうございますッ！！まだまだ駄文ですが、これからもがんばりたいです！！

それではどうぞ！！

俺とあいつの日常編～愛しのキンチョールと朝の登校～

『・・ダルい』

地球は回る。どこの誰がんなことを調べたかはしらんが、今じゃ小学生でも知っているような常識だ。地球が回ることで昼と夜の切り替えが起きているようなものだ。人間はそれに合わせて活動している。それも人間が進化の中で編み出した無駄のない一番効率的なサイクルだと、どっかの誰かがいっていたようなないような・・・・・・・・

『・・・眠い』

そんなどうでもいいことを考えながら俺、本道進はとりあえず時刻を確認した。うん、朝一番にすることはそれだろ。この時刻しだいで朝の行動パターンがかわるからな・・・・・・・

そんな事を思いながら携帯で時刻を確認しら、時刻はなんと。

『8時21分か・・・・・・・・』

うん、素晴らしいほど早起きだ、ここまで早起きなら普通に一時間目の授業は間違いなく遅刻できる。だが、俺クラスの遅刻魔になるとこの程度ではだめだ。最低でも三時間目くらいから学校に行き、四時間目から授業を受けよう。そのためには睡眠が必要だな、うん。では、寝るか。いやぁ～、春先だがまだ朝は寒いなぁ～。寒いのは嫌いだから布団から出たくないぜ・・・・・・・・

いっとくがちゃんと学校にはいくぞ?たぶん。もう一眠りしたらいくぞ?ホントだぞ?さっきもいったが、寒いのは嫌いなんだ。苦手なんだ。ついでに朝は嫌いなんだ、太陽がケンカ売ってきてるように感じるんだ。だからもう少し暖かくなって太陽が沈んだら活動するようになるよ、うん。じゃ、おやすみ～・・・・・・・・

『・・・・・・・・ってなんでまた寝ようとしてんだよッ!!いい加減起きろよッ!!遅刻するじゃないかッ!!』

なんか、うるさい。誰だ?誰がいるんだ?・・・・・・・・クソ、起きるのが辛い。

『・・・・・・・・なんだ、イッセーか。こんな朝早くから騒ぐなよ。近所迷惑だろ。それ以上騒いだら尻に爆竹積めるぞ。』

『嫌すぎるよッ!!てか、時間ヤバいじゃんかッ!!なんでここの目覚まし11時設定なのさ!?』

うるさいやつだ。コイツ、なんで私服でうちにいるんだ?それに、いま起きたみたいな顔してやがる。

『おい、イッセー。なんでここにいる?学校はどうした?さぼりか?まったくだらしない奴め。』

『おまえにだけは言われたくないよッ!!昨日、ここで2人でデートコースやらなんやら考えてたじゃんかッ!!忘れたのかよッ!?しかも、どこであんな知識覚えたんだよッ!?経験かッ!?やっぱ経験ッ!?この非童貞やろ・・・アパヒレハッ!?』

とりあえず殴った。うん、なんかウザイから殴った。しかし、昨日?あぁ・・・あの話か。

『お前がキンチョールとデートする計画の話か!』

『違うよッ!!なんでキンチョールとデートするんだよッ!!怖いよッ!!怖すぎるよッ!!てか、進は俺をどんな奴にしたいのさッ!?』

『ゴミ箱』

『意味が分からないよぉぉぉーーーーーッ!!??』

『うん。俺もわからん。』

『いった本人も理解不能ッ!?』

『るっせぇーな・・・鼻にキンチョールぶっさすぞッ!?』

『逆ギレ!?え?悪いの俺の方なの!?』

『俺、キンチョールの事を愛する奴はちょっと・・・・・・・・・てか、かなり嫌だ。』

『俺もいやだよッ!!』

『そ、そんな!私の事は遊びだったの!?』（進裏声）

『え?だ、誰ッ!?』

『ヒドい、ヒドいわ、イッセーさん！！』（進裏声）

『ま、まさかッ！？キンチョールかいッ！？』

『あなたの事をずっと好きでいたのに・・・そんな、そんなッ！！』

『ま、待ってくれッ！！キンチョールッ！！どこだ・・・どこにいるんだッ！？』

『サヨナラ・・・イッセーさん・・・・・・・』

『うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーッ！！！！！キンチョールウゥウゥウゥーーーーー！！！！！・・・・・・・俺は、俺はッ！！君（キンチョール）なしじゃッ！！生きていけないんだぁぁぁぁぁーーーーー！！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ってんな訳あるかッ！！なんでキンチョールにこんなに胸躍らせなきゃ行けないんだよッ！！おかしいだろッ！！キンチョールに恋する人間なんていてたまるかぁぁッ！！！！』

『あ、八時半だ。』

『遅刻しちまったじゃねぇかぁぁぁぁぁーーーーーッ！！！！！』

～ここからイッセーがマジでキレ始めた～

『とりあえず、俺は家に帰って着替えたりしてくるからその間に出来ることをちゃんとしとけよ？』

ようやく落ち着いたかと思ったらいきなり帰りだそうとしやがった。

『まぁ、待てよイッ・・・『またないッ！！』・・・』

そう言って出て行きやがった。全く、人の話は最後まで聞くってお母様に習わなかったのかよ・・・

しかし、さっきのやりとりで眠気も吹っ飛んじまったからどうしようかな。やることはあるが、それやるとまたとやかく言われそうだな。

『はぁ・・・仕方ないなぁ・・・・・・・・・』

そんな事をぼやきながら、制服のハンガーに手をのばすことにした。

――――――――――――――――

その後、一時間ぐらいたったあと俺の住んでるマンションの前でイ

ッセーを待ち、2人して登校するようになった。普段ならこんな朝早くから出たくなかったが今日は1人うるさいのがいるため、しかたなく、しかたなく!!一緒に登校している。そんな中、イッセーが・・・・・・・・

『女の子が全くないな・・・』

なんていってきやがった。そら、そだろ。こんな時間帯じゃあ、いたとしても精々オバチャンくらいだよ。てか、女に会いたくないからこの時間帯で登校してるんだからな。

『そりゃあ、俺が女の子と会いたくないからな。この時間帯ならまず会わない。』

『でたよ・・・進の女の子嫌い・・・・・・・・どうしてそんなに嫌いなのさ?エロビデとかは普通に見るのにさ。』

『バッカ。あれは二次元だから良いんだよ。平面なら緊張やらなんやらしなくてすむしな。』

ホント、あれは恐ろしい存在だよ・・・女って・・・・・・・・・・
とくにお母様が一番恐ろしい・・・・・・・・・
あの親父を一瞬で土下座させる人なんてあの人にしかできないよ・・・・・・・・

『てか、彼女がいるならお前はもうビデオいらないよな。』

『えッ!?』

『だってそだろ?もうビデオに用はないじゃねぇか。だったら頼んでた新作、貸さなくていいよな。いやぁ、中々スゴくてな、貸したくなかったんだよなぁ〜・・・・・・・・いやぁ、良かった、良かった』

『ちょ、ちょっと待てよッ!!それとこれとは話は別だッ!!なぁ!!おい!!頼むよ、進ゥゥゥゥゥーーーーーッ!!』

こんな叫びも無視していくのだったとさ。

俺とあいつの日常編～愛しのキンチョールと朝の登校～（後書き）

とまあ、キンチョールでした（笑）

いかがでしょうか?笑えましたか?寒い?文才がない?えぇ・・・

その通りだと・・・・・・・・・

けど諦めずにあがいて見せます!!

次回の更新・・・、今日暇だから今日中にできる?かな?

俺とあいつの日常編～ベーコンレタス疑惑と彼女との出会い～（前書き）

はい。アンサラーです。なんとまぁ、書いてたらこんな時間だよ。
今回は今までで一番長いかな?それでもページ数はたったの五枚・・
・・・・・・

携帯じゃ限界があるな・・・

それではどうぞ。

とまあ、こんなアホな会話をしながら学校にむかったが・・・いかんせん、時間帯がまだ二時間目が始まったぐらいだったため、途中でコンビニにより物色。お菓子やら昼飯を買うことにした。

しかし、コンビニの商品はスゴいな。なんと無印良〇の商品があるじゃねぇか。いやぁ好きなんだよなぁ、こののど飴シリーズ。最近はレモンとジンジャーにハマってるんだよなぁー。

あ、ちなみにイッセーもいるんだが・・・・・・・・・

『ムフー・・・ムフー・・・』

と鼻息荒くして、エロ本コーナーに行こうとしてるのを俺ががっちり左手で捕まえてる。私服ならまだしも制服でいくなよ!!

『離せ、離せ進ッ!!俺は、俺はッ!!あそこに行かないと行けないんだッ!!』

そう言って、振りほどこう必死になるイッセー。

『いや、行かさないから。むしろ逝かしてやろうか?』

ここでいかせたら俺も変な目で見られかねない。それは避けなくてはッ!!そのためなら最悪コイツを殺らなくてはいけない。

『なんか、漢字ちがうくない？』

『いや、合ってる。ここで行かせて俺が恥ずかしい思いをしなくてすむくらな。』

『――――――――なるほどな・・・そういうことか・・・・・・・・・、そうまでしてッ！！自分の世間対が大切かぁッ！！』

『大切だぁッ！！』

『そうか・・・ならもう話す事はないよ・・・・・・・・・、無駄な時間を使わせたな、進』

そう言ってイッセーは拳を握り、俺に向かって構えてきやがった。典型的なボクシングスタイルだ。

『かまわん、時間が無いのはお互い様だ。』

奴は俺を倒し目的（エロ本を読み）、俺は奴の目的（エロ本を読む）を破壊する。かけるものは周囲の商品、だがかまわない。なぜなら――――――――

『『俺たちの戦いはッ！！外敵との戦いではなくッ！！世間対との戦いなのだーーーーッ！！』』

そうして俺たちは激突した

―――――――――――――――

『痛ぇ・・・・・・・・』

完勝した。俺は世間対とプライドを守り抜いた。そのせいでコンビニから追い出されたが。

『そろそろ行くか。時間も丁度良いだろ。』

『あぁ。わかったぜ。』

んじゃ、行きますかね。

―――――――――――――――

とまぁ、二時間目と三時間目の間のに学校に入ってきた。クラスに入ったが、誰とも会話せずに自分の席についた。いやぁ、窓際の席はいいなぁ～。ギャルゲの主人公みたいだぜ。

『よう。珍しいな、こんな時間来るなんてな。』

『そうだな、しかもイッセーと来るなんてさらに珍しいな。』

そういって、やたら笑顔の丸坊主とメガネをかけたキザなやつがき

た。２人ともイッセーの友達・・・てか、同種になる。まぁ、俺もなんだがな。えぇっと、名前が・・・・・・・・・

『ＨＡＧＥ田中とメガネ。今日もウザイな。とりあえず人をやめてくれないか？人じゃなきゃ殺しても罪にならん。』

『相変わらず名前覚えない奴だな・・・』

『いや、コイツの頭のスペックを考えると当・・・グボラッ！？』

とりあえず、メガネがウザイから殴った。俺だって好きで頭が悪いんじゃないやいッ！！

『？なんで元浜倒れてんの？』

と、そうこうしてたらイッセーも来やがった。・・・ったく、一角に男子四人も集まりやがって・・・・・・・・うぜぇ・・・・・・・・・

『さぁな。大方、自分という存在の無意味さと邪魔さに気づいたんだろ？』

『お前のせいだよッ！！』

なんか、キレてきやがった。ったく。コレだから本田は嫌いなんだ。

『まぁ、落ち着けよ同士。それで本道、なんでイッセーときたんだ？いつもなら別々にくるのに、それにおまえならもう一時間くらいサボるのにさ？』

ＨＡＧＥ鈴木が話しかけてきた。窓際だから太陽の光が反射してうぜぇ。

しかし、どう答えたらいいのか・・・、なるべく面白いおかしく答えたいな。・・・・・・・・よし。

『いやな、昨日のよるいきなりうちのマンションに来てさ。色々なことしてたら朝になってた。』

――――――瞬間。世界が静寂に包まれた――――――――

静寂につつまれた世界でイッセーがいち早く反応してきて、

『ちょっと待てッ！？なんか色々端折りすぎだろッ！！もっと色々説明しろよッ！！例えば『あぁ、イッセーが泣きついてきたな。』そうだけどッ！？確かに泣きついたけどッ！？最悪な方に補正をかけるなよッ！！』

イッセーがなんか必死だ。そらまぁ、そうか。自分にベーコンにレタスなスキルがつくかもしれないからな。いやぁ、愉快愉快。俺？俺はその方がいい。何でかって？その方が女と喋る機会が減るからな。

と、女たちのヒソヒソ話が耳に入ってきた。こうみえても俺は身体能力が異常でな。俺の一族自体がもともと異常な身体能力をして産まれてくるのだが、そこからさらに修行で異常に改造していく。つか、させられた。おもに親父に。

中でも親父が言うには、俺は歴代の本道一族でも1、2を争うほど身体能力が異常らしい。ふざけんなッ！！誰のせいでこうなったと思ってんだよッ！！謝れよッ！！俺の幼い頃の時間返せよッ！！

ちなみに、普段は抑えてはいるのだが、元々が高すぎるせいでそれでも同世代の奴からみたら異常だ。抑えに抑えても百メートルを十秒台で出せるくらいの身体能力だ。

――――――っと。話がそれたな。それではその異常な聴力で聞いてみるとしよう。

『やっぱり、本道クンって・・・』

『うん。前々からそんな感じはしてたけど。』

『けど、相手はッ！？やっぱり兵藤！？兵藤×本道クンなの！？』

『イヤーッ！！そんなカップリングいやよ！！やっぱり木場クン×本道クンが一番よッ！！美男子と中堅ッ！！これがベストよッ！！』

『けど、まさかリアルなＢＬがこんな近くにいたなんて・・・・・・、神様ありがとうッ！！』

なんて聞こえてきた。いやぁーしかし、反応がおもしろいねぇ～。

そうこうしてたらメガネが恐る恐る聞いてきやがった。

『・・・・・・・おい、イッセー・・・・・・・・それは、本当か？』

『いやいや、かなり省かれた説明ですからねッ！？むしろ要点がなに一つ伝わってませんからねッ！？おい、進ッ！お前からもなんかいえッ！！』

と、まぁ。んな感じでふってきましたよお話を。頼むから真実を話してくれって目してましよ。はぁ・・・仕方ないなぁ・・・・・・・・

『何だよ、イッセー・・・。俺とお前の熱い夜はどこに消えちまったんだよ・・・・・・・・。２人で色々して疲れたから寝たんじゃないか。』

そんな顔された、どん底に落としたくなるじゃないか♪

『なんでそっち方面に突き落とすんですかコノヤロウゥゥゥゥゥゥゥーーーーーッ！！！！』

イッセーの絶叫と女共の黄色い歓声が聞こえる。あ、２人ともドン引きしてる。

『イ、イッセー。おまえ・・・』

『ま、まじかよ・・・・・・・・』

うん、２人ともいい反応するねぇー。

『ま、まてッ！！待ってくれッ！！確かに俺はコイツのウチに行って泣いたり泊まったりなんかしたが、ベーコンでレタスな事なんてしてねぇッ！！』

う～～～ん。たのしいが、これ以上するのはマズいかな？

『あぁ、確かにコイツはウチに来たが、相談事があったから来たんだ。んで、その問題を解決するために考えてたら夜遅くなっちまったからウチに泊まったんだよ。』

『え?ほ、ホントだよな?嘘じゃないよな?信じていいよな?』

メガネが恐る恐る聞いてきやがった。隣にいるＨＡＧＥ・・・めんどいな。ハゲもどうなんだ?って顔してやがる。

『ホントだって。さすがこれ以上やると冗談ですまなくなるからな。いい加減にネタばらしだよ。』

そういうとクラスからは脱力感と失望感が三人からは安堵のため息が出てきた。

『いやぁ、焦った。まさか我らが同士、イッセーがベーコンでレタスなのかと思ったぜ。』

『そうそう。危うくメガネが割れるとこだったせ。』

『いや、俺悪くないから。悪いのはす・・・『キンチョール』進様ではなく、すべて私悪いのですハイィィィィーーーーッ!!』

すごい早さで土下座したぞ?コイツ・・・・・・・・

そんな土下座しているイッセーにメガネが思い出したように聞きやがった。

『そうだ。それでその相談って一体何なんだよ?俺や松田には言えないようなことなのか?』

『水くさいじゃないか同士。俺たちの中にエロは合っても遠慮はないだろ?』

ハゲ、誰がうまいことといえっていった。あと、その中に俺は入っているのだろうか・・・

土下座していたイッセーがその言葉で思い出したように顔をあげた。

『そうだッ!!3人とも今日、午後からあいてるか?見せたいものがあるんだ。』

『なんだよ、イッセー見せたいもの?新しいエロDでも買ったのか?よし、今日見に行こうじゃないか。なぁ、元浜』

『あぁ、そうしよう。まったく、イッセーも水くさい奴だな。そうと決まれば、学校においてあるビデオを持って行こうじゃないか。手伝ってくれ、松田。』

そんな感じに浮かれてる2人をよそに、俺はイッセー聞いた。

『なぁ、イッセーもしかして件の人にあわせるのか？』

『あぁ、２人には悪いが、俺はもう別次元の世界にいることを証明しなくてはいけない。そう俺はッ！！勝ち組だからなッ！！エロエロな事が出来るからなッ！！』

『あぁ、そ。ノロケかよ・・・、まあ俺も行くかな。てか、眠いから寝るな？放課後になったら起こしてくれ。』

了解という言葉を待たずに俺は眠ることにした。しかし、あいつの・・・彼女の・・・・・名前・・・・・・・・・なんだっけ？・・・・・・・・・・・・・・・・まぁ、いっか。

――――――――――――――――

ところ変わって放課後時刻は四時半。地元でも大きめの公園に野郎４人はきていた。

『なんだよ、イッセー。こんな所に連れてきて。パンチラもブラチラもなにもないじゃないか。』

といってメガネをキザっぽくあげる山田。

『まぁ、まてよ。そろそろ・・・あ、きたッ！！』

イッセーが向いていた方向にスレンダーで整った顔をした美少女が歩いてきた。

『おまたせ、イッセークン。』

キレイな声をした女だ。うん、確かに。カワイい。するとイッセーが自慢げに。

『紹介するぜ、お前ら。天野夕真ちゃん、俺の彼女だ。』

そういった瞬間2人がさわぎたしていたが、俺にはまったく聞こえなかった。なぜなら――――――――――

のど元にナイフを突きつけられているような恐怖にみまわれていたからだ。あれは、マズイ。あれは、いけない。アレは、俺以上の異常な存在だ。――――――――――逃ゲロ

逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ
逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ
逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ
逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ

逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ
逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ
逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ逃ゲロ――――
――――――――

そうして俺は確信した。これは一種の詐欺じゃないのか？と。

『厄介な事に・・・なったな・・・・・・・・』

誰にも聞こえないようにそんな事を呟いた。

俺とあいつの日常編～ベーコンレタス疑惑と彼女との出会い～（後書き）

と、まあこんな感じでした。

松田と元浜ってこんな感じかな？あんまりのってないからわからない・・・・・・・・・

次回の更新は・・・最悪来週になるかも知れません？いや、受験生でして？すみません。なるべく早くします。

この作品を呼んでくださったり、お気に入り登録してくださったり、ありがとうございますッ！！

俺とあいつの日常編～作戦名と愉快な先生～（前書き）

一週間無理とか言っときながらの更新です。いやぁー、なんか考える時間が取れまして。

え？何でかって？学校が文化祭の準備期間中だからサボって考えてるんですよ。

リア充爆発しろォォォォーーーーッ！！

それでは、どうぞ。

イッセーが彼女を紹介して数日後、その間にあったことといえば、いつものハゲとメガネがなんかより一層ウザくなった。具体的に言えば、やたら絡んでくる。イッセーじゃなくて俺に絡んでくる。

なんか、2人とも信じてた物に裏切られた、みたいな面してやがる。知るかよ。こちとら、んなどうでもいいことに神経割いてる暇はねぇッ！！

あの日見た、〈天野　夕真〉という存在に感じた感情・・・、今まで生きてきて感じたことのないモノだった。・・・・・いや、今まで感じたことはあったが、あれほどまで強く感じた事のない感情、〈恐怖〉だ。

文字通り、アレと過ごした時間、生きた心地がしなかった。人の形をした・・・それでいて、決して人では感じることのできない禍々しいオーラ。いつ殺されるかわからない恐怖を俺は感じた。断定できる。アレは人であって人でないものだ、とな。

しかしここで、問題がある。そう、アレはイッセーの彼女だという事実だ。下手に俺が言った所でアイツは絶対に聞かないだろう。仮に聞き入れても、アレは恐らく追ってくる。自身の目的を完遂させるためにな。だったらどうするか？俺がイッセーを護るしかない。

幸い、アレも派手な行動はできないでいる。当然だ。派手に行動出来たなら、間違いなくはじめにイッセーをどうにかしてるだろ。なにが行動を派手にできないのかは知らないが、こちらとしては好都合だ。精々利用しよう。それに、そうでもなければイッセーと付き合うなんていう回りくどいことはしない。

・・・・・・・すまん、イッセー。だが事実なんだ。受け入れてくれ。

まぁ、取り合えずだ。アレの対処としては
『1、倒す』
『2、逃げる』
『3、誰かに倒してもらう』ぐらいだろう。

1はどうかわからん。実力はあるが、本気の殺し合いを経験したことがない俺じゃまず無理だろ。
2は一回ならまだなんとかなるが、二回目からは難しい。結局、3になるのだが、コレが一番の解決法だ。なぜかって?親父に言えばなんとかなるだろ。いやいや、マジだって。アレに勝てるのはマジでお母様しかいないって。

では、結論を決めよう。今の俺じゃあ、アレに勝てないが親父なら勝てる。だが、イッセーがアレの異常性に気づくまでは下手に手を出せない。アレも派手に行動する事はできない。よって恐らく、人気のない所で行動をおこす!がアレにとってのベストな結果だろう。

それに、あのイッセーだ。アレに「人気のないところにいきたい」なんていわれてみろ。間違いなく欲情してついてくぞ。股間の反応速度は世界最高クラスだからな・・・・・・・

それを阻むためには俺が、奴を倒すか、逃げて親父に倒してもらうかの二択だ。どっちにしても倒さないと意味がない。倒したら倒したで面倒だが。先のことより今を優先しないといけない。

それにどちらを選択するのにもイッセーが納得するような理由が必要になる。

だから今回は、作戦名〈失恋キューピット　恋に破れて命を救う、リア充の不幸はホアグロソテー味の納豆〉を行う。

え？内容？アレが本性だした所を俺が乱入して逃げる。んで親父に頼んで倒してもらう。なぁ？簡単だろ？んあ？だったら前半のヤツは何だったんだって？別に意味ははない。ただの暇つぶしだ。飛ばしても問題ないはずだ。

「――――――――ぅ」

すべて作戦名〈失恋キューピット　恋に破れて命を救う　リア充の不幸はホアグロソテー味の納豆〉で全て伝わるだろ？

「――――――――――道！」

何ッ！？わからないだとッ！？それに名前がダサいだとッ！？お前の感性は歪みまくってるッ！！某協会の某麻婆神父と同じレベルで歪んでるよッ！！

「――――――本道！」

まったく、おまえたちには失望したよ・・・・・・・・・・

顔を削って出直してきな。

そりゃあもうガリガリと、ハンドミキサーでやるといいぞ♪

しかし、さっきから誰か俺の名前を呼んでないような、呼んでないような・・・、うん、呼んでないな。よし、寝よう。

「――――――いい加減起きろッ！！本道進ッ！！！！！」

バシンッ！！という擬音語が似合うような音を立てる、分厚い本のような物が頭に当たる。

「痛～～～～～～～ッ！！？？」

ガタンと机に体をぶつけながら、顔をあげた。そこには、現代文の担当教師が立っていた。右手には教科書がある。あぁ、さっきの本

はそれか・・・・・・・・って危なッ!?頭かち割れるわッ!!コイツ、生徒に遠慮とかないのか。

「痛いじゃないですかッ!!俺、なんか悪いことしましたかッ!?ただいつも通りにしてましたでしょッ!?」

「そのいつも通りが悪いんだッ!!なんだその授業態度はッ!!学校に11時半にきて、寝ては昼食を食べて、また寝ては家に帰るなどッ!!おまえはどれだけふざけてるんだッ!!」

「ムッ?失敬な。俺はマジですッ!!」

「どのへんがだッ!!どの辺がマジだと言えるんだッ!!どこにも言えるような要素は無いぞッ!!」

「学校に来ることがマジですッ!!」

「おまえのマジのレベルが低すぎるわぁぁぁぁッ!!そんなのはデフォルトだぁッ!!学生の基本装備なんだよッ!!」

「俺をただの学生と同じ括りにしておく事態が間違いですよ。」

「なんでそこで誇らしげなんだ貴様ッ！！お前はいったい学校になにしにきているッ！！一三字以上、十五文字以内で答えようッ！！」

なんだよ、いきなり問題出しやがって・・・だが、舐めるなよ？

「高校卒業という経歴を得るため」

「きっかり１４文字じゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

そういて先生がでてっちまった・・・・・・・・

まったく、愉快な先生だ。しかし、クラスからの視線が痛いぜ。よし・・・・・・・こういう時はッ！！

「――――――――――――――――グウ」

寝るに限る。なんかクラスの連中がずり落ちるような音が聞こえたが、きにしないぜ。さて、寝よう。

しかし、思いだしたんだが。イッセーの彼女名前・・・何だったっけ?解らないから、ずっとアレって言ってたけど。・・・・・・・・・まぁいっか。

俺とあいつの日常編～作戦名と愉快な先生～（後書き）

とまぁ、先生でした。たぶん、二度とでない。

しかし、この小説・・・、まったく話が進まない。一巻で僅か１０ページぐらいで死ぬイッセークンがまだ生きてる。ビックリだね。

それでも次回は遂に死にます。死なせます。ちなみに進は・・・・・・・になって・・・・・・・・になります。さぁ、答えは何でしょう?後書きの最後に書きます。

そしてついに我らがスイッチ姫ッ!!リアス嬢登場ッ!!いやぁ、やっとバトれる。テンションが上がってきたぁぁッ!!ハイスクールバトルアクションと書いておいて、全くバトルのないただの寒いギャグのオンパレード・・・、作者の明日はどっちだッ!?

あと、ヒロインで思い出したんですが、この小説も恋愛をつけるべきですか?作者としてはやりたいですが、原作の風味を壊すのは避けたいので誰か1人と・・・。みたいな感じにしたいんですが・・・・・・どうしましょ?感想の所に感想と一緒に書いてくれると嬉しいです。あ、リアス嬢とアーシアはダメですよ?あの2人はイッセークンになくてはならない存在ですから♪

次回の更新は明日に、早ければ午前四時頃、遅ければ明日の今頃にします。それでは、また。

問題の答え「進はベーコンレタスになってキンチョールになる」

俺とあいつの日常編～本気と本気～（前書き）

更新遅れてすみません。いやぁ、今日も俺はなにもしないつもりでいたらなんと仕事が回ってくる回ってくる（笑）疲れましたよ。

そして、小説何ですが。キリが悪い。リアスでてない。前と言ってることちがくてすみません。書いてたらどんどん付け足していってこんな感じになってしまった。けど次はでます。本当にでますからぁッ！！

それではどうぞ

俺とあいつの日常編～本気と本気～

そんなこんなでやってきました、デートの日。イッセーが朝出てくるまで、奴の家の前に張り込む。時刻は午前6時頃。

常人ではありえない視力を持って遠距離から監視する。直線距離からして、大体一キロってとこか。俺からしたらコレくらい普通の距離、細部まで見えてるのが普通なんだが、さすがにこれ以上になると護衛ができなくなるため無理。だが近いとアイツの家の近くに身を潜めるところがないため監視する事ができない。

本当に閑静な住宅街に普通にたってる普通の家。それが兵藤一誠・・・正しくはイッセーの親父さんの家になるのか。そう、普通。アイツは俺が知る限り普通の人生を歩んでいるはずだ。

確かに万年発情期でその発情期間がとんでもなく永い（↑字は合ってるぞ）奴だが、それを除けばなにもなくな・・・いやいやいや、至って普通のへんた・・・・・・・いやいやいや、普通の・・・・・・普通・・・か？普通、だよな？うん、普通、だと信じ、よう。・・・・・・・・っと、とにかくッ！！俺みたいに奇想天外な人生を歩んでないのは確かだ。

そう、どこにでもいるような？いないよな？いたら怖いが・・・・・・。まぁ、あんな異常なモノに狙われるような人生は送ってないだろ。

しかし、アイツは今狙われてる。そう、その異常な存在に。理由はわからん。知る気にもならん。知ろうとも思わん。だが、もしアレがイッセーを殺したなら、俺は間違いなくアレを殺す。どんな手を使っても、俺の手で確実に殺す。

・・・・・・・・・・・・・・・はぁ・・・、イッセーを殺さないために俺がいるのに、なんでイッセーが死んだ後の事を考えているのやら。丸で死亡フラグだな。

さて、どうこう考えている内にイッセーが家から出てきた。どうやらデートのようだ。時刻は9時。待ち合わせは10時ってとこだな。俺もそろそろ降りて少しづつ距離をつめないとな。

あぁ？今どこにいるんだって？電信柱の一番上だよ。したからやたらと携帯のシャッター音が、聞こえる。あいつらのせいで隠密行動が出来ねぇじゃねぇか・・・・・・・・

―――――――――――――――

アイツはアホか。新生のバカか。仮性〇茎かッ！？なんで待ち合わせの三時間も前から現地に行くんだッ！？楽しいのかッ！？デートで相手を待つのがそれほどアイツにとっては楽しいことなのかッ！？だったら帰れッ！！アレがきて、「いや、俺も今きたところだから」なんてほざきやがったぞアイツッ！？アホかッ！！お前にとっての三時間はいったいどれだけあっと言う間なんだッ！！待ってる

途中、メガネっ娘を百まで数えてたろッ!?なんか変な紙貰ってただろッ!?アイツの頭の中・・・今、キンチョールでいっぱいなのだろうか・・・・・・・本気で心配になってきたよ。命の危機と精神の危機、両方来てるんだなアイツ。

とそんな事を心配していたら、手を繋いで歩き出した。あ、イッセーが泣いてやがる。アレ、間違いなく脱水症状でて死ぬくらい涙でてるんだが、ツッコんだら負けだな。

とまあ、デートだった。そらぁもうデートだった。全国のリア充の基本的なデートだった。・・・・・・・殺していいか?なんで、デートを付け回さなくちゃいけないのかマジで考えたよ。アイツ、あのまま死んでも本望じゃないかなと本気で思う。あまりのイライラのせいでファミレスの店員をマジ泣きさせちまった。あらぬクレームたてまっくって、放送禁止用語オンパレードにして。いや、最後の方、客も俺の敵に回って追い出そうとしてた。そんな事を同じファミレスでやっていても俺の存在をあいつ等は気づかない。少し、傷ついた・・・・・・・

そんなこんなで要約終わりのようで、人気のない町外れの公園にきてやがる。あぁ、行動を起こす気だなと一瞬でわかった。しかし、ホントに長かった。わかるか?リア充をひたすら観察する俺の気持ち。たぶん、わからんだろうな。わかったら友達になろう。スカ○

プのＩＤ教えてやるよ。

「さて・・・・・・・・」

スイッチを切り替える。いつでも駆け出し、一瞬でアレの間に割って入れるように。いつでも戦えるように。いつでも逃げられるように。集中力を高める。子供の頃からの癖だ。集中力を高めるとき、決まって服の着崩れを直す。体に密着した方が戦いやすい。そして、集中力がある程度高めたあと、自身の身体能力を上げていくのも行う。今回は未知の敵。倒さなくていい。一撃を加えて、即刻離脱する。それだけだ。

そうして、高めた身体能力がアイツらの会話を耳にした。

「ねぇ、イッセーくん」

「なんだい、夕真ちゃん」

「私たちの記念すべき初デートって事で、一つ私のお願いを聞いてくれる？」

イッセーが固まる。大方、その言葉で欲情したんだろ。単純な奴だ。

「な、何かな、お、お願いって」

「死んでくれないかな」

（やはり、アレはイッセーの死がお望みのようだ。）
そんなことを思いながら俺は体をクラウチングスタートの体制をするように動かし、構えた。

「・・・え?それって・・・・・・・あれ、ゴメン、もう一度言ってくれない?なんか、俺の耳変だわ」

（聞き間違いじゃねぇよ、イッセー。ソレは・・・）

「死んでくれないかな」

そういって、アレの背から黒い翼が生えた。その瞬間、俺は自身の足に力を込め、地面を抉るように蹴りつけた――――ッ!!

「お前の死がお望みだ」

瞬間、体が銃弾のように撃ち出され、異常なスピードで距離を詰めるッ!!狙うのは首筋ッ!!後ろから一撃で跳ね上げる――――ッ!!

俺が放った手刀が空気を切り裂くような音をあげ標的の首に襲いかかる。そして――――――

『ガギリ』と。普通の人間の体からは決してでない。鉄鋼と鉄鋼がぶつけ合ったような音が出た。そして、放った手刀の威力を受けて、黒き翼をもつ異常者は数メートル先にある電柱に一直線でぶつかっていった。

（痛ッ・・・・・・・・）

手が痛い。鋼鉄のような体だ。下手したら右手が砕けていた。アレはまだ地面に伏している。今の内に逃げないとマズい。アレは勝てる気がしない。

と、そんな一瞬の出来事の結果を目の当たりにしたイッセーが声をあげた。

「え？え？アレ？夕真ちゃん？どこに行ったんだ？確かに今までここにいたのに？あれ？なんで進がこんな、ところに？」

パニクってるな。そらそか、彼女だと思ってた奴にいきなり羽とか生えたら誰でもそうなるわな。しかし、今それを説明する余裕がない。無理やり掴んででもつれて逃げる。

「説明は後だ。とりあえず逃げ――――――――ッ!!!!??
?」

瞬間、とてつもない殺気を背に感じた。

「ウソ・・・だろ?・・・・・・・・・」

ありえない、俺が持てる全力を載せた手刀を食らって、こんなに早く立ち上がるなんてッ!!

「いえ。危なかったですよ?あなたが本当に全力なら、今頃私の首は体とお別れしていたわ」

俺の困惑を察したかのように彼女が答える。その答えに疑問がでた。全力なら?どういうことだ?俺は確かに全力で手刀を――――

「全力の意味が違うわ。あなたが力を全力にするじゃなくて、殺す覚悟が全力じゃなかったのよ。殺気がまるで感じられない攻撃だったわよ?殺す気がない攻撃で、私たち堕天使を殺そうなんて可笑しな話ね。」

そういって、冷笑を浮かべる。そうかい、あんたは堕天使なのかい。俺としては死神しか見えないがな。夢なら覚めて欲しいぜ。俺はまだ死にたくない・・・・・・・・が、それは無理そうだな。

「おい、イッセー。俺はこの娘に用があるから、席をはずしてくれなか？込み入った話になりそうでな。親父とあう予定を入れているんだが。直接、予定が変わったと言ってきてくれないか？」

どうやらここで死ぬらしい。だが、コイツは護らないと。俺の友達を護らないといけない。

「な、なに、言ってんだよ、進？なんで、そんな事」

冗談だろ？って顔をしながら声を震わして問いかけてきた。俺も冗談であってほしかったんだがな。

「なんだよ。難しいこと頼んでないだろ？親父に伝言頼んでるだけだろ？それぐらいしてくれよ。」

「な、なんでそんな事しないといけないんだよッ！！わっかんねぇよッ！！なんで夕真ちゃんに翼が生えてるんだよッ！！そんでなんで進が死にそうな顔してるんだよッ！！どうなってんだよッ！！誰か教えてくれよッ！！」

俺も教えてほしいが、どうやらそれは無理そうだ。目の前の死神が鎌を研ぎ終えたらしい。

「ふぅ～ん・・・、君そんなにイッセーくんの事が大切なの？」

「あぁ、大切だね。たった1人の友達だからな。それに、友達は助けろって体に刻み込まれてるからな。引くことはできないぜ？」

「何というか・・・気持ち悪いわね。見てて吐き気がするからとりあえず殺してあげるわ」そりゃあどうも。

「イッセー、俺が合図を出したらいけよ。親父への伝言頼んだぜ」

「ちょっとま――――――」

イッセーの言葉を遮るように死神が身をかがめ足に力を入れ、踏み込んできた。

――――――来るッ！！

「行けッ！！イッセーッ！！」

しかし、アレは俺に向かわずに――――――――――――――

「ッ！？しまっ――――」

「けど、アナタに興味がわいたわ。アナタの本気の姿、見てみたいの。だから・・・・・・・・」

死神は俺を通り過ぎて、俺の親友の腹をその細い腕（鎌）で突き刺した（切り裂いた）

俺とあいつの日常編～本気と本気～（後書き）

うん。ようやく戦闘しはじめました。長かった。いやぁ、長かった。
しかし、区切りが悪い。けどこれから書く気にはもう今はなれない。
書きたいが書きたくない。そんな感じ

次の更新は・・・明日？明後日ぐらいにやります。

中途半端ですみません。

俺とあいつの日常編～鮮血とストロベリー～（前書き）

遅れてすみませんッ！！学校が本当に忙しいですッ！！いやもうほんとッ！！

とまぁ、更新です。いやぁ今回初めての本格バトルです。やっとアクションでた。永かったなぁ～・・・・。けど、厨二病全開だから書いててマジ恥ずかしくなりましたよ。

それでもいいならどうぞッ！！

「あ・・・れ・・・・・・・・・？」

丸で、障子に穴を開けるように死神は俺の親友の腹を貫いた。

「ゆ、夕真・・・ちゃん・・・・・・・・？」

イッセーが問いかける。少し前まで彼女だと思っていた存在に「なんで？」と。言葉ではなく、視線で問いかけていた。

「楽しかったわ。あなたと過ごしたわずかな日々。初々しい子供のままごとに付き合えた感じだったわ」

そういて、冷笑を浮かべながら容赦なく腕を引き抜いた。同時に赤い液体が大きな蛇口を捻って出てきた水のように溢れ出した。そして、ゆっくりと。少なくとも俺からみたら非常にゆっくりとした動きで赤い液体の水たまりにイッセーが前のめりで崩れていった。

瞬間、俺は悟った。イッセー〈親友〉が死んだと。もしくはもう死ぬと。溢れ出す鮮血がそれを証明している。もう、助からないと。

「さぁ、あなたの大事な大事なお友達を殺してあげたわよ？アナタは次に・・・どうするのかしら？」

クスクスと、丸で新しいオモチャで遊ぶように俺に視線を向ける。
その目にはもうイッセーは移ってはいない。

「イッセー・・・・・・・・」

親友が死んだ。だというの、なぜかとても冷静だった。普通こういう時どうしたらいいのだろうか、わからない。自分が今どんな顔をしているのか、自分が今、どうしようとしているのかすらわからない、わからない、ワカラナイ。――頭ノ中デ、問イカケル。

〈イッセーガ倒レテイル〉

もう助からない。

〈ナゼダ？〉

血がいっぱいでいるから。

〈ドウナルンダ？〉

死んでしまう。

〈死ヌトハナンダ？〉

その人間が動かなくなり、目を覚まさなくなる。

〈ドウシテコウナッタ？〉

俺が護れなかったから。

〈何故マモレナカッタ？〉

俺が弱かったから。

〈ドウシテヨワイノダ？〉

俺が甘かったから。

〈何故甘カッタノダ？〉

アレの力を見誤って、俺が油断したから。

〈イヤ、違ウ。ソレジャナイ〉

え？

〈原因ハソレジャナイ。オマエノ人トシテノ甘サガ、コノ事態ヲ引キ起コシタ。人ノヨウナ形ヲシタバケモノガ、人ノ心ヲモトウトスルカラダ。――――――――――――――――――――――――原因ハ、オマエダ。オマエガ親友ヲ殺シタ。〉

――――――ッ！！そんなわけッ！！そんなわけあるかッ！！けっ

して違うッ!!アレがッ!!アレが殺したッ!!アレがイッセーを殺したんだッ!!

〈ソレハ結果ダ。タマタマアレガイッセーヲ殺シタニ過ギナイ。ソノキッカケヲ作ッタノハオマエダ。ソレニオマエハ気ヅイテイタダロ?アレノ異常性ニ〉

あぁ・・・気づいていた。だか、それは関係な――――――〈ナイワケナイダロ?アレハオマエ以上ノ異常者ダ。人ジャアナイ。一番ハジメニ解ッテイタコトダ。オマエハソノ時点デ選択ヲ間違エテイル。――――――――――――――――――異常者ト異常者ガ戦ッタラ異常性ガ強イ方ガ勝ツノハ当然ダロ?〉

――――――――ッ!!!???

〈ソウ。ソノ時点デ選択ヲ間違エテイル。アレト戦コトヲ選ンダ時点デ、イッセーガ死ヌノハ決定事項ダッタンダヨ。ナノニオマエハアレト戦ッタ。他ニ方法ガアル中、ソレヲ選択シタンダ。オマエノ甘サガイッセーヲ死ナセタ〉

そうか・・・そうだったのか。俺が、俺がイッセーを・・・・・・・・

〈アァ、全部オマエノセイダ、本道進。オマエガ全ノ原因ヲ作ッタ。

ソシテ、オマエハ復讐シナクテハイケナイ〉

なに？

〈復讐ダ。イッセーヲ殺シタ自分ニ。イッセーヲ殺シタアイツニ。復讐シナイトイケナイ。ソレガ、オマエガデキル事ダ〉

だが、イッセーは復讐なんて・・・

〈望マナイダロウ。ダガ、オマエハ納得デキルノカ？自分自身トアノ存在ニ、ナンノ償イモサセズイル事ヲ。納得デキルノカ？〉

――できない。

〈ウン？〉

できないッ！！俺は、俺はッ！！アレを許すことができないッ！！許せないッ！！俺という存在も許せないッ！！アレが生きているのもッ！！俺が生きているのもッ！！俺は許せないッ！！

〈ダッタラ、ヤルコトハ決マッテイルダロ？〉

――――――――殺す。

殺す、殺すッ！！！！

アノの存在を。俺という存在を。何者でもない、俺という異常者の復讐と自己満足のためにッ！！俺は殺すッ！！殺してみせるッ！！殺し尽くすッ！！

〈アァ、ソウダ。ソレデイイッ！！ソレデイイゼーッ！！本道進ッ！！〉

――――――――――

次に気がついたときには、視界に地面が見えた。

「あら？やっとお目覚め？」

そんな期待に胸を踊らした子供のような声が耳に入ってきた。どうやら死神はご丁寧に待っているようだ。

「あぁ・・・待たせたようだな。」自分が殺される事を、アレは待っていたようだ。

瞬間、自分の中にあるどす黒く醜い感情をすべて奴にぶつけた。そして――――――――――――――

「――――――――ッ！！！！！？？？？？」

――――――――――世界が震えた。

自分の中で初めて生まれた感情。この世で一番人間がもってはいけないものを、俺は今本当の意味で初めて手にした。

（あぁ、コレがなにかを殺したいとする感情か）

黒い。本当にどす黒い何かが、噴水のように溢れ出てくる。コレが憎む事か。コレが、俺に足りなかったものか。

「・・・・・・・・・へぇ、ここまで凄いんだ。アハハ。この殺気、普通の人間だったら間違いなく失神してるよ。」

そうして、その感情を一心に向けている存在が子供の成長を喜ぶ親のような笑顔で呟いた。

「スゴいね、君。人間の力でそれほどの高さまでくるなんて。いったいどんな生き方をしてきたの？」

目の前の存在がそんなどうでもいい事を囁いてきた。なにか言っているがそんな事は知ったことではない。だが――――

「・・・・・・・・だんまりか。まぁいっか。とりあえず「――――――だまれ」――――――ッ！？」

――――ヤツの声を聞いているととても不愉快になる。

「お前がイッセーをなぜ殺した理由なんか、聞く気はない。聞きたくもない。話す必要はない。そのかわり――――――」

アレが憎い。目の前の存在が。俺という存在が。憎くて憎くてたまらないッ！！

「――――――――――だまって俺に殺されろッ！！！！！！！！！」

そういって、狂ったように襲いかかった――――――ッ！！

――――――――――――――――

「はッ！！」

拳を放つ。この一撃で容易く人の骨など砕ける威力だ。さらに速さも常人ではまず反応できない速さでもある。それを一息で四つ放つ。しかし、

「よっと。」

かわされる。まるで蝶が舞うように軽やかにかわされていく。

「ふッ！！」

ならばといわんばかりに、蹴りを放つ。狙いは太もも。ノーモーションからの蹴りだが、足にあたれば動きを止められるだけの威力は十分にある。

「ほっと」

だが、またかわされる。俺が放つ攻撃を軽々とよけていく。俺の攻撃がすべて解るように、だ。

「君の攻撃。確かに殺気が乗って威力も速さもましたけど、その殺

気が攻撃する箇所に強く来るから次の攻撃が簡単に解るのよ。全体的に能力は上がったけど、頭に血が上りすぎてフェイントや足運びが全くになってるわ。はぁ・・・とんだ期待外れよ。リミットを外してもこの程度なら、ささっと殺しておけばよかったかしら？」

「喋んなってッ！！いってんだろうがぁぁぁぁぁぁ――――――――――ッ！！」

それと同時に拳を放つ。しかし相手はまたかわす。が、今回は大きく跳躍して先ほどぶち当たった電信柱の上に着地する。

「つまらない。非常につまらなかったわ。そんなつまらない時間を提供してくれたあなたに、私から死（最高）のプレゼントをあげるわ」

そう言うと奴の周囲に光の槍が形成されていった。どうやら、アレで貫きたいらしい。数にして六本。とてつもない光を発している。間違いなく一発でも当たれば死ぬものだと直感で理解した。

「さよなら、異常者さん。あの子と仲良く死ねばいいわ」

そして、右手を上げると一斉に降り注いでくるのと同時に、自身の足に力を込めるッ！！

普通ならこの場合どうするだろ？この槍が一直線にしか飛ばないこ

とを祈りながら、必死になってよけるだろうか？はたまた、運に任せて除けにはいるか？間違っても、当たるのを全く気にせず、そのまま突っ込んでいく、なんて異常な事はしないだろう。

しかし、残念ながら。この主人公は普通じゃなくて異常だ。異常な存在は異常な行動を起こしてしまうのが異常者たる由縁だ。

「グガアァァァァァァァァ――――――――――ッ！！！！！！」

そして、地面を抉るようにして蹴り、その降り注いできた光の槍に迷うことなく突っ込んでいった。

当たり前だ。初めっから、お前の事を殺すこと以外、なにも考えちゃいないッ！！

「――――――――ッ！！！」

瞬間、左肩と右太腿、わき腹に激痛が走る。どうやら貫かれたようだ。傷口がとてつもない熱を持って痛みを発している。

「なっ――――――！？あの中を突っ込んでッ！？」

だが、そんな事はどうでもいい。失神しかねない痛みを感情だけで

無理やり閉じこめる。俺にとってお前を殺すことがッ！！何より大切なんだよッ！！

そんな覚悟をもって突っ込んでいった。どうやらもう三本は外れたらしい。そして、奇跡的に無傷であった右拳に自身の今ある全てをのせる――――――ッ！！

本道一心流四季極が一つ「秋葉」

四季極の一つ「秋葉」。捻りを限界まで加えることで、拳に貫通力と突破力を加える技の一つ。

「オオオォォォォォォォォ――――――――――ッ！！！！！！！！！！」

雄叫びをあげながら放った一撃は敵の腹部を完全に捉えた――――ッ！！

「――――――――――がはっ！！？？」

バキリという音をたてながら拳が砕けていったが、かまわず振り抜く。

「吹っ飛びやがれぇぇぇぇ――――――――――――ッ！！」

その言葉通りに、堕天使は後方へ衝撃で飛んでいく。さきほどとっんでいった時との違いはただ一つ。「秋葉」の効果により駒のように回転しながら飛んでいっている点だけが違う。

堕天使は数十メートル先のコンクリートの壁まで飛んでいき、壁にめり込むことで回転を止めることに成功した。

――――――――――――

殴った後、電信柱を通り越してしまったため、そのまま地面に着地する。瞬間、腹部と左肩、太腿に激痛が走る。そういえば、さっき槍が刺さっていたがどうなったのだろうかと思い傷口を確認した。

「あのやろう、人様の体にでかい風穴あけやがって――――――！！」

傷口には直径１０センチ前後の風穴が発生していた。うん、風通りが非常に・・・・・・・・冗談はやめよう。

「――――――――――痛ッ！！」

右腕の痛みにたまらず声にでる。どうやら筋肉が断裂したようだ。まちがいなく「秋葉」が原因だろう。

「あ、やべ。」

油断したせいでバランスが崩れ、前のめりに倒れる。ふと横を見ると、イッセーが倒れているのがわかる。

「イッセー・・・」

血まみれの親友をみる。俺が、俺のせいで死なせてしまった。殺してしまった親友をみて、たまらず呟く。

「・・・・・・・・？」

よく見ると、先ほどと少し違う。なにか・・・持っている？あぁ、あれはデートまちのときに貰っていた変な紙か。なんであんな大事そうに。なにか、もっていたら願いがかなうのかなぁ？

そんな事を思った次の瞬間、紙が青白く輝きだした。

「なっ――――――――！！？？」

あまりの衝撃に声をあげる。おいおい、今日はマジックのオンパレードか？今ならキンチョールが実は宇宙人だったなんて言われても素直に受け入れられる自信がでてきたんだが。

ピカッとより一層。光が強くなったからたまらず目を閉じる。そして、次に自分の目の中に入ってきた映像を生涯、俺は忘れることはないだろう。

紅い――ストロベリーブロンドよりさらに鮮やかな紅の髪。そうまるで、自身の鮮血のような色をした髪をもった女性がそこに現れた。

そして、つぶやいた。

「どちらかしら？私を呼んだのわ？」

この時、俺は知る由もなかった。この出会いで、伝説の赤竜帝と紅髪の滅殺姫と史上最強の異常者が世界を変えていく事になるとは露にも思っていなかった。

俺とあいつの日常編～鮮血とストロベリー～（後書き）

とまぁ、リアス嬢でましたよ。やっとです。ちなみに主人公は名前を覚えてません。ウチの進くん、名前を覚えないのに定評がありますから。

戦闘どうでした？ましでした？ひどかった？やめた方がいい？あと、堕天使気を失ってるだけです。いや死なすと話の展開がね。

キャラクター設定をあげてほしいと言われました。あげることは予定してますが、進が悪魔に転生してからにします。だいたいあと二話ぐらいですかね。

あと、ヒロインのアンケート？何ですが、今、ロスさんとオーフィスに一票ずつ入ってるんですよ。・・・・・・・まずくない？敵のトップとの恋愛はさすがに。なのでそれを回避するためにも意見をお願いします。

次回の更新は・・・明日にはできたらなぁ～

俺とあいつの日常編～契約と転生～（前書き）

とまあ、更新です。いや～やっと死にましたよ。2人とも長かった、本当に永かった。

それではどうぞ。

紅い髪をした女性。凛とした顔立ちで、自信に満ちあふれたオーラを漂わせながら、彼女はこういった。

「どちらかしら？私をよんだのわ？」

その言葉を聞いて俺は、

「さぁな？とりあえず俺じゃないことは確かだ」

けだるさと脱力感にみまわれた。

（まためんどくさそうな奴が出てきたな・・・）

そんな事を思いながら、とりあえず無理矢理にでも立ち上がることにした。いかんせん今非常に眠たい。横になっていたら間違いなく寝る。

傷口や筋肉が悲鳴をあげるかのような激痛を無視して立ち上がることには成功したが、フラフラして安定しない。ヤバいな、血が出まくってる。意識をしっかり持たないと。

「そう、だったらこの子のようね。けど、ふつうに考えればそうよね。この子、紙を持ってるし」

そう言いながら倒れたイッセーを女は見た。そして、上品な笑みを浮かべながら呟く。

「死にそうね。傷は・・・へぇ、おもしろいことになっているじゃないの。そう、あなたがねぇ・・・・・・・。本当、おもしろいわ」

クスクスと興味ありげな含み笑い。野郎の傷口みて何がおもしろいのやら。よくわからん。

すると、今度はこちらじっと見てくる紅髪の女性。いや、そんな植物を観察するように見てくるなよ。

「あなた、よくその傷で立ってきたわね?普通ならもう死んでるわよ?」

と驚き半分、好奇心半分ぐらいの声色で話しかけてきた。

「生憎、普通の体の作りをしてなくてね。人の数十倍は頑丈だよ。」

とりとめもなく返答する、が声を発するのにも激痛がつきまとう。

「少し、質問してもいいかしら？」

といって女は俺に許可を求めてきた。

「却下。俺はやらなきゃいけないことがある。話はその後にしてくれ」

そう、まだアレを殺していない。アレの回復力はどれくらいかはわからんが、なるべく早くトドメを指さなくてはいけない。

「もし、あなたのそのやる事と言うのが堕天使についてのことならあきらめた方がいいわ。もうこの近辺にはいないわよ？」

「なに？いないだと？」

「ええ。私が現れたことで引いたのでしょ。少し前までなら気配がしたのだけれど、もう近くにはいないわ。命拾いしたわね？アナタ」

おかしいな。気配がまったく感じられなくなってるなんて。コレは、本格的にマズいかな？

「なんで引く理由がある？俺は満身創痍。もう動く事もままならない相手だというのに」

「さぁ？私にはわからないわ」

「？あんた、アレの仲間じゃないのか？アレほどハッキリとは感じないが、少なくともあんたは人じゃないだろ？」

「えぇ、人じゃないわよ？私は悪魔。正真正銘の悪魔よ。あなたの判断は正しいわ。でもね――――」

次の瞬間、周りの温度が下がる。

「私を堕天使と同類にみないでちょいだい。むしずが走るわ」

こちらを睨んでくる青色の瞳。その中には、憤怒の色が見える。どうやら怒らしちまったようだ。

「んなことしるかよ。俺は今のいままで、悪魔やら堕天使やら見たことがないんだよ。解るのは、人間かもしくは人間じゃないかまでだ。間違えて当然だろ。たが、怒らしちまったのは悪かったな。一回は見逃してくれ」

「・・・えぇ、まぁ。事情を知らなければ仕方ないことね。いいわ、許してあげる。けど、次はないわよ？」

「そらどうも。んじゃ、怒らしちまった詫びに質問に答えるよ。」

「あら、意外と紳士的ね、アナタ」
どっちにしろ。しばらく動けない。俺の回復力でも、この傷は深い。せめて、傷口が閉じるまでは、じっとしておこう。

「では、まず自己紹介から私は――――――」

「あぁ、いいよ。どうせ覚えられない。俺のだけあんたが覚えてればいいだろ？俺は本道進。私立駒王学園二年だ」

といって名前を言う前に

少し、話が変わる、俺は人の名前を覚えない。そらぁもう覚えない。覚えてるのは、家族とイッセー一家しか覚えてない。何でかって？

ガキの頃から、やたらと訓練やら修行やらを繰り返していたせいで脳細胞が吹っ飛びまくってな、今じゃ学校のテストも勉強しなければ赤点が約束されている。それぐらい悪い、いやもうビックリするぐらい悪い。そんな脳みそだから初対面の人間の名前なんかは覚えた試しがない。顔もすぐに忘れる。それが例えどんな存在であってもだ。覚えさせる方法はただ二つ、二年間毎日声をかけ続けるか、俺が気に入るかだ。ちなみにイッセーは後者。それ以外は前者だ。

「それは、いささか失礼じゃなくて？女性の名前を聞かない、なんて」

「生憎と、とてつもなく出来の悪い頭をしてるでな。初対面の奴の名前を覚えた試しがないからいわなくてもいいんだよ」

「そう・・・それは、ご愁傷様」

「哀れまないでくれ、まじで。泣けてくるから。」

俺だって好きでこんな悪くなったんじゃないやいッ！！

「もう名前はいいから話を進めてくれ」

と、ため息をつきながら言う。

「・・・・・・・まぁ、いいわ。この状況、どうなっているの？」

「そこで倒れてる奴、イッセーつーんだけど、そいつが堕天使にやられてな。それを見てた俺がその堕天使とドンぱちやってその結果がこうなったわけだ」

要点だけいう、てか、要点しか言いたくない。喋るのが本当にツラい。くそ、傷口がなおらねぇ。予想以上に深いな。

「要点しか話してないわね・・・、まあいいわ。それで？あなたは一体どういう存在なのかしら？」

つまり、おまえはどういう化け物だ？て聞いてるんだよな、これ。・・・・・・・・失礼な。

「人間だよ。正真正銘の人間様だ。怪我をすれば血が出るし、風邪をひけば熱もでる。ただ普通の人間より体が異常に頑丈で、凄まじいくらい強いだけだ。まいったかコノヤロウ。」

「魔術も神器もしらない人間が、堕天使とやりあって勝つ事ができるなんて・・・・・・・・・。どこのコメディ映画かしら？」

頭が痛いと言わんばかりに手で頭を抑える悪魔。俺の存在をギャグとすんなッ！！

「んで？まだききたいことはあるのか？」

「いえ。大体の事情が解ったからもういいわ。答えてくれてありがとう」

「そうかいそれはなりよ――――ゴホッゴホッ」

いきなり咳き込んだので手で口元を覆う。みると血が付いている。おかしい、いくらこの傷が深くても、傷の箇所は肩と太ももと横腹、どこも急所でない。急所でなければ、俺の回復力なら短時間で傷口が塞がらなくても、血が止まりはじめるくらいの時間はたったはずだ。だが、止まるどころか傷がますます悪化している。

そんな俺の困惑を見透かしたように悪魔は囁く。

「堕天使の攻撃は人間や悪魔にとっては猛毒よ？いくら急所が外れていてもいくら回復力が高くても、人間のスペックでは限度があるわ。だから確認したのよ、アナタどんな存在だ、て」

「ちょっと待て。じゃ、俺は――――？」

「このままなら確実に死ぬはね。もって・・・あと五分くらいかしら」

五分？五分だと？俺が？あと五分で死ぬ？この俺が？死ぬ？

「・・ふざけるな・・・・・・・ふざけるなッ！！俺はッ！！俺はまだ死ねないッ！！死ぬわけにはいかないッ！！アレを殺さない限りッ！！俺を殺さない限りッ！！俺の復讐をなさない限りッ！！俺はまだ死ぬわけにはいけないッ！！」

「それを私に言われてもどうしようもないわ。ただ解っていることは一つだけ、あなたがあと五分でつきるということだけよ」

突然の余命宣告。それも五分。体からはどんどん力が抜けていき、もうたっているのも辛い。それに体が万全でも今からアレを探してもみつかりはしまい。八方塞がり。もう道がない。俺は・・・死ぬのか？復讐もできず、なにもなさぬまま。あと五分で死ぬのか？死ぬしか、ないのか・・・

そう思った途端、怠惰が心に満ちあふれる。と、そんな中悪魔が声をかけてくる。

「本道進。あなた、まだ死にたくない？」

「あぁ・・・まだ、まだ死ねない・・・！！俺は、アレを・・・アレを殺すまでは死ねないッ！！」

「そう。目的があるのね？――――――――――だったら私と契約しなさい」

「？契約だと？」

「そう、契約よ。私があなたに新しい命をあげるわ。そのかわりあなたは命ある限り、私に忠誠を誓いなさい」

要するに、下僕になれと言いたいらしい。文字通り悪魔との取引だな。だが、今の俺には神よりかは悪魔の方がちょうどいいぐらいだ。

「２つ・・・条件がある」

「なにかしら？」

「一つは、俺が俺の命を断ってからその命をくれ」

「なぜかしら？」

「俺の復讐には俺という存在も復讐の対象になっている。だから俺が俺を殺した後、その命を俺にくれ」

「・・・・・・・・」

沈黙。時間にして十秒程度短い沈黙が生まれた。

「わかったわ。それで二つ目は？」

どうやら了承してくれたようだ。案外、人の事を考えているのかもしれない。

「二つ目はそこにいるイッセーにも命をやってほしい」

イッセーはまだいきていてほしい。それが俺の願いだ。ダメ元だが、一応言っておくがたぶん無理――――――

「えぇ、いいわ。あげるわよ？あの子にも」

――――――かもしれないと思ったけどすんなりいっちゃいましたよーッ!!??

「――――っていいのかよッ!?」

叫ばずにはいられない。傷口が痛いが叫ばずにはいられない。

「えぇ、元々あの子にもあげるつもりだったし」

「・・・理由を聞いてもいいか?」

「あの子には、とてつもないものが眠っている、とだけ言っておくわ」

そういいながら薄く笑みを浮かべる悪魔。もうどうにでもなれ・・・

「それで?条件はそれだけかしら?」

「あぁ、それだけだ」

「じゃあ、早くあなたは死になさい。私はその間にあの子を助けてくるわ」

といって機微返そうとする前に聞かないといけないことがある。

「あんた、名前はなんて言うんだよ?」

俺の言葉をきいて少し面食らった顔をした悪魔。何だよ、そんなおかしいかよ。

「人の名前は覚えない主義じゃなかったかしら?」

「いやまあそうなんだが・・・。その・・・こ、これからッ!!世話になる?世話をする?・・・・・・・・あーもうッ!!主になる人に対して・・・その・・・おい、とか、おまえ、とかはやっぱダメかなぁーと、思ったから・・・・・・・・・・／／／」

なにこれ、いっててめっちゃハズいんだけどッ!!

「あのあれだッ!!あんたの名前なら覚えてやってもいいかなぁ～って／／／だぁ～～～もうッ!!いいから名前教えろッ!!早くッ!!」

「クフフ、アナタ。それ素でやってるのかしら？」

クスクスと笑いをこらえるような笑いをあげている悪魔。死にたい・・・マジ死にたい・・・・・・・恥ずかしくて死ねる・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「アハハ、いいわ。リアスよ。リアス・グレモリー。それがアナタの、本道進のご主人様の名前よ」

リアス・グレモリー・・・・・・・・・よし、覚えた。しっかりと確実に覚えた。

「そうか、じゃあ後は頼むわ、ご主人様」

「えぇ、頼まれたわ。本道進」

そう言って、イッセーの方にある歩いていく。ふと、周りをみるとあたりはもう真っ暗で、満月が出ている。俺はその月を見ながら死ぬことにしよう。

「しかし、今日は本当に月がキレイだ」

その言葉が俺の人間としての最後の言葉になった。

俺とあいつの日常編～契約と転生～（後書き）

とまあ、ツンデレな主人公でした。ツンデレ・・・か？ツンデレなのか？わからない・・・みんなはツンデレだと思うかい？野郎のツンデレ・・・・・・・・どうよこれ。

リアスの口調、変じゃないかな？大ジョブかな？

ヒロインアンケート？の投票数は・・・・・・・・・

オーフィス：一票

ロスヴァイセ：一票

黒歌：一票

うん、主要キャラにはゼロ。ちなみにこのアンケートもどき、期限はまだ決めてないので～。

次回の更新・・・明日か明後日には。ではでは

俺とあいつの日常編～終わりと変化～（前書き）

題名からしてようやく日常編の終了です。長かったなぁ・・・・・・・・・

しかし文が荒そうだよ。どうしよう。

それではどうぞ。

俺とあいつの日常編～終わりと変化～

「・・・だりぃ」

過去にこれほど、朝がダルいと思ったことがないほどダルい。学校行きたくない。けど、さすがに先生やイッセーのおじさんやおばさんから連絡があったからいかないとマズい。

さすがに連続して休みすぎた。どれくらいかって？軽く一週間だ。今までも、休む日はあったがせいぜい二、三日だ。一週間は今までなかったから連絡がきた。人に心配させるのは好きじゃない。さて、そんなダルいダルい学校への登校の間にその一週間にあった話をするよ。とりあえず、日中の眠気がました。いや、そらぁもうました。おまけによる寝れない。前までは3時4時ぐらいに寝ていたんだが、最近じゃ6時、7時になっちまった。おそらく契約の影響だろうな・・・。

あと、あれだ。太陽がダメになった。日中に太陽の光に当たるだけでダルくなるっつーか、めんどくさくなるっつーか・・・・・・。まぁ、んな感じだよ。そのせいで日中部屋の外から出られなかった。なんだよ、太陽がダメってどこのドラキュラだよ。ぶっ殺すぞ、この野郎（↑某翼がない、ファルコン風ボイス）

とまぁ、この二つについては最近になってようやく慣れるようになった。ただでさえ、朝が弱いからこんな事になっちまったからどうなるかと思ったが、案外なんとかなった。そうこの二つについては、だ。もう一つだけ、俺にとって下手すれば俺の魂が削られちまう問題が起きた。

それは、夜になるとさらに身体能力が異常になることだ。うまれたときから異常な身体能力を異常に改造して異常なほどあげた体がより一層異常になっちまった。４異常だぞ、４異常。いままでは３異常だったのが、あれいらい４異常になったんだよッ!!ただでさえ３異常の時から日常生活が難しかったのに４異常になってからはもうホントに生活ができない。

箸は折れる、ドアノブは握りつぶす、鍵は曲がる、リモコンは握りつぶす、・・・・・・・ＥＴＣ。ここまではまだいい。いや、よくないがいい。なんとか対策がうてるからな。だが、それよりも大変なのがゲーム機をぶっ壊しちまうことだよッ!!アレだぞッ!?ボタンを押しただけで押した部分が凹むんだぞ?連打なんかしてみろッ!!リアル北斗の件だよッ!!死活問題だよッ!!一週間でゲーム機が何台壊れたと思ってやがるッ!?

１３台だよッ!!１３台ッ!!最近、毎日ゲーム機を買いにいってて、まとめ買いしてるんだからなッ!?店員の視線とかマジで死にたくなるような視線くるからなッ!?わかるかッ!?なにッ!?だったらゲームをしなければいいだとッ!?

このあほんだらがぁぁぁ――――――ッ！！！！！それでも俺はッ！！したいギャルゲがあるんだぁぁぁぁ――――――ッ！！毎日かかさずしたいんだよッ！！二次元の嫁が待ってるんだよッ！！わからないのかッ！！リアルなんていうクソゲーからログアウトして、二次元にログインしたいんだよッ！！なのにッ！！そのために必要なパスポートが壊れまくっちまったんだよッ！！

――すまない。どうやら、取り乱してしまったようだ。こちらも色々とあるんだ。察してくれ。

とまぁ、こんな感じで問題やら不備やらなんやらで死にたくなる数日を過ごしてる。うん、マジ死にたい。もう一回死ぬのはゴメンだが死にたい。

あと、補足。イッセーはあの日の事を何も覚えてないようだ。いや、覚えているがそれを夢のような事だと認識している。それにアレの存在が、元々居なかったように消されてもいた。だが、イッセーは軽くだが覚えているようだ。現にアレの事について聞いてきた。その時は、うまく誤魔化したが、いずれ思い出すだろ。俺のご主人様がなにも行動しない以上、何もしないのが一番だろ。

とまぁ、んな事を考えていたら学校についた。時刻は１１時３４分。今から教室にいけば、丁度授業が終わって入りやすいだろう。それじゃ、一週間ぶりにいきますか。

―――――――――――――――

チャイムがなり終わり、先生が去った後教室に入る。軽く周りから視線がきたがすぐに拡散した。もはや俺が遅刻するのはこのクラスの常識みたいなものだな。

「・・・・・・・・」誰とも会話せずに自席につく。クソ、太陽の光がウゼェ。誰だよッ!!窓際の席最高ッ!!なんていった奴。俺に土下座しろよ。

「おはよ、本道。今日は学校に来たんだな?」

「ゲームはしなくていいのか?貯まってたゲームはなくなったのか?」

と、馴れ馴れしく話しかけてきたハゲとメガネ。ウゼェ。なにがうざいって?こいつらの存在が。

「おう、ハゲにメガネ。とりあえず俺に土下座しろよ。理由は俺の機嫌が悪いからだ」

「相変わらずムチャクチャな・・・」

「というか、いい加減名前を覚えてくれ本道」

イヤだよ、おまえらの名前は意地でも覚えないよ。

「あ、進。今日きたんだ？」

と、件のイッセーが喋りかけてきた。が、よく見ると少しけだるそうな。どうやらイッセーも大変なようだ。

「あ、イッセー。なんかおもろいことしろよ。飛び降りるとかして」

「なんでおまえの退屈しのぎのためにそんな命張らないといけないんだよッ！！」

「チッ・・・・・・・役立たずが」↑大声

「陰口を大声でいうなよッ！！てか、もはや陰口ですらないッ！！」

「イッセーッ！！早く・・・早くいくんだッ！！」

「え?な、な、なに?どうしたの?」

「ここは俺達が抑えるッ!!だからおまえはッ!!」

「え?なにッ!?なにこの状況ッ!?全然ついてけてないんだけどッ!?てか、クラスの連中もノリ良すぎッ!?みんなしてドアの方向向いてるッ!?」

ほう、案外ノリがいいな。こいつら。

「おまえはッ!!飛び降りるんだッ!!」

「いやいやだから死ぬってッ!!」

「「「「飛び降りるんだッ!!」」」」

「まさかのクラス全員ッ!?えッ!?俺が飛び降りるのがおまえらの望みなのッ!?」

「「「「はやく飛び降りるんだッ!!!」」」」

「そんなにッ！？そんなに早く俺飛び降りないといけないのッ！？てか、クラス全員が俺の敵なのかッ！？」

「「「「「はやく飛び降りるんだッ！！！！！」」」」」

「ちょっとまてぇぇぇぇ――――――ッ！！隣のクラスからも聞こえたてきたぞッ！？そうまでしてとばしたいのかよッ！！」

「イッセーッ！！おまえが・・・おまえがッ！！おまえが飛ばなきゃッ！！誰が飛ぶんだよッ！！」

「間違いなく俺じゃないからッ！！」

「イッセー行くんだッ！！いまいかなきゃ・・・いつ逝くんだッ！！」

「少なくともこんな状況じゃないことは確かだよッ！！」

「「「「「「チッ・・・・・・・・チキンが」」」」」↑大声

「だから陰口を大声で言うなよッ！！」

「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・」」」」」」

「え？無言？まさかの無言？めっちゃいかないといけない空気作られてるんだが・・・・・・・・」

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・」」」」」

「わかったよッ！！いけば・・・いけばいいんだろッ！！飛んでやる・・・飛んでやるぜッ！！」

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・グウ」」
」」」

「て、寝てるのかよぉぉぉぉぉぉぉぉ――――――――――――

―――――ッ！！！？？？？」

その後、イッセーは三時間泣き続けた。

―――――――――――――――

「なぁ本道。今日これから空いてないか？」

授業が終わり、いざ帰ろうとしたらハゲがはなしけてきた。

「あぁ？別に家帰ってギャルゲするだけだけど？」

「つまり、暇なんだ？」

「暇じゃねぇよ。俺の四大欲求の一つをみたす大切な事だよ」

俺クラスのキャルゲーマーならもはやギャルゲすることは呼吸と同じくらい当たり前で大切な事なんだよ。コレくらいまでいってようやく一人前だ。

「ギャルゲすることが人間の基本欲求レベルまでいってるのかよ・・・・・・・」

「まぁな。んで?話は?話だけは聞いてやる」

「あぁそうだ。実は最近イッセー元気なかってさ。励ましついでに俺ん家で鑑賞会するだけど、くるか?」

鑑賞会・・・あぁ、エロDね。

「悪いがパスだ。今日は家に帰るよ。」

「なんだよ、たまには連もうぜ?」

「普段ならいってもいいが、今日は眠い。かえって寝ると今決めたから無理なんだ。悪いな」

「そうか・・・・・・・・・・ってていまかよッ!!」

「あぁ、今だ。俺は今に生きる男だからな」

実際、今からギャルゲする。ようやく力加減が出来るようになってきたからな。はやくしたい作品が山のようにある。

とそこにイッセーとメガネが俺の方に歩いてきた。

「どうだった?松田。進くるって?」

「いやいや、来るだろ。奴も男。下についているものが飾りでない限りかなら・・・・・・・・ギャフンッ!?」

とりあえず殴った。メガネを倒した。メガネは死んだ。やったー・・・

「やる気なさ過ぎだろッ!?」

といって、キレてきたメガネにレバーブローをかました。なんか、気を失っちまった。しかし、なんでメガネはキレてくるんだ?ただメガネを殴っただけだってのにさ。まったく、これだから最近のメガネは・・・

「いや、本道は来ないってさ。」

「え?進来ないの?」

この二人、メガネの事放置してやがる。案外エグいな。

「あぁ、今日は帰って寝たい」

「そっか、じゃ先に帰るよ」

「じゃあな本道ッ!!また明日も来いよッ!!」

といって、メガネを引きずっていった。てか、顔面をずっていってないか?アレ・・・・・・・

――――――――――――――――

ふっと、外に視線をやる。少しだけ、茜色に染まりかけた空。チラホラと下校していく生徒がいる。毎日をバカみたいにはしゃいで、単純だがそれなりに楽しい生活。それが俺とあいつの日常だった世界。だが、俺達がそこに戻ることはもうけして出来ない。あの日、俺達の世界は完全に壊された。あの堕天使に、あの悪魔に、そして俺達自身が、今までの世界を壊した。完全に壊したものは直らない。どんなに誤魔化してももう直らない。そして、壊れたものの代わりをたてないといけない。その代わりがどれほどのものなのか、俺達

にはまだ解るはずもない。だが、一つだけ確かだ。それは・・・

「俺とあいつの日常は、ここでピリオドだ」

次の世界がもうすぐそこまで来ているのを今までの日常を眺めてながら、確信した。

俺とあいつの日常編～終わりと変化～（後書き）

とまぁ、これでようやく日常編は終了です。次回は前に要望があったキャラ設定をあげます。しかし、イッセーの扱いがヒドいな、進。

ヒロインアンケートの途中経過です。

ゼノヴィア　三票

黒歌　三票

オーフィス　二票

ロスヴァイセ　二票

朱乃　二票

イリナ　一票

ソーナ　一票

九重　一票

小猫　一票

うん、意外にゼノヴィアが食い込んでいる。自分の予想では朱乃が

ぶっちぎるかと思ったんだがな・・・・・・・・・

そしてまさかのオーフィスッ！！強い・・・ホント強い・・・・・・・・・

さて、アンケートなのですが、一人で複数のキャラに票を入れても大丈夫です。てか、なんとなくわかってるよね。みんな。

次回の更新は明日ッ！！いやだって、キャラ設定だからさ。

進のヒ・ミ・ツ？・・・・・・・・・うん、キモイ（前書き）

とまぁ、要望があったキャラ設定です。

見にくいですが許してください。

では、どうぞ。

進のヒ・ミ・ツ？・・・・・・・・・うん、キモイ

本道（ほんどう）　進（すすむ）

外見情報

髪型／髪質・・・サラサラストレートヘアー。色は黒。イメージとしてはＤＴＢのヘイのような感じ
視力・・・幼少からの訓練で無駄にいい

聴力・・・幼少からの訓練で無駄にいい

頭脳・・・非常に悪い。テスト勉強を毎日七時間、二週間続けて最高によくて平均点の１０点下ぐらい。しなければ間違いなく赤点。さらに記憶力が悪く。初対面の人間の名前と顔は間違いなく三歩歩いたら忘れる。覚えるには、進が気に入るか、二年間話かけ続けないといけない。だが、頭の回転は早く。発想力や想像力、戦略をたてるのは得意。

体格・・・ガチガチの骨太&筋肉質。筋肉は異常な人体改造のせいで速筋と遅肉が半分半分でできている。さらに手と足が長く。肩幅も広い。しかし着やせするタイプ

ギャルゲ・・・もはや三大欲求ならぬ四大欲求の一つ。進にとってギャルゲをすることは呼吸する事と同じくらい大切で当たり前。

靴・・・ロングソーツの革靴。ブーツ系が好き。あとコン？ースのスニーカーも。持ってる割合としては６：４：２ぐらい

ファション・・・上はジャケットやスーツ系の大人っぽいのが好き。
ボトムスは上に合わしたストレートジーンズで揃える。

記述設定

誕生日　1月17日

血液型　ＡＢ型

身長／体重　178？／68？

足サイズ　28？

趣味　ギャルゲ・イッセーイジリ・掃除・観葉植物の手入れ・靴や服の新作チェック

特技　盗聴・盗視・ギャルゲの段階的評価・カラオケ（↑主にＧＲＡ？ＲＯＤＥＯかアニソンを歌う）

好きな？？

食べ物　甘いもの・辛いもの

本　なし、読めない漢字がいっぱいあるため

音楽　アニソン、ゲーソンを主に聞く。歌手として好きなのはＧＲＡ？ＲＯＤＥＯ

ゲーム　ギャルゲもしくは戦闘が面白いゲーム

テレビ　戦闘シーンがあるアニメ。熱い系やシリアス系、鬱系が好き。

映画　オー?ャンズシリーズが好き。解りやすくて派手だから

動物　猫。あとは熱帯魚。

その他　睡眠・高い所・金・散歩・酒（ダメ年だがのむ、主に日本酒）

嫌いな?:?

食べ物　さんま、いわし、あじなどの魚。

本　よめないから嫌い

音楽　童謡、演歌、ラブソング

ゲーム　自由度が低く戦闘がつまらないゲーム

テレビ　恋愛ドラマ

映画　恋愛映画

動物　軟体動物、ヌルヌルした生物

特記事項

身体能力・・・特殊な血筋で、生まれながらにして非常に高い身体

能力を持っている。また、その身体能力を異常に改造したため歴代の本道一族でも屈指の身体能力である。だが、経験や技術が未だ未熟。

家族・・・父と母の二人。幼少の頃から父に鍛えられていたので始めは父が一番強いと思っていたが、経済的・家庭的・性格的に母の方が一万倍くらい強いことを知る。今現在は力関係が、進＜父＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜越えれない壁＜＜＜＜＜＜＜＜越えられない境界＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜越えられない時空＜＜＜＜＜母となっている。

武術・・・古式武術「本道一心流」。技としては「四季極」の中の４つしかない。しかし、その技を放つには異常な身体能力が必要となるため、まず人体改造を始めないと話にならない。進は身体能力としては高いが、技の精度、熟練度がないため修行がまだ必要だが形としてなら「四季極」を放つ事が出来る。

女嫌い・・・母の圧倒的権力の前になすすべなく過ごした幼少がトラウマになり、女性が嫌いになった。ただし、二次元の女は大好き。理由は「裏切らないからさ・・・・」

恋愛・・・女嫌いなため未だしたことがない。まったくのチェリーさ?ただ、他人の感情の読み取りは上手いため、他人の色恋沙汰には敏感。しかし自分への好意はまったくわかっていない。理由は学校で公然と「女が嫌い」といっているため、間違っても女子が好きになるはずがないと自分で思っているため。しかし、顔の出来も中の中から中の上くらいなため、割とモテる。

性格・・・ぶっちゃけ、ヘタレでツンデレ。ツンデレ・・・なのか

？ただ、他人に対して基本無関心。しかし、困っている人がいたらなぜか助けたくなる。

神器・・・ここはまだ秘密だ。

進のヒ・ミ・ツ？・・・・・・・・・うん、キモイ（後書き）

話を進めていく中でできた事についてはまた随時書いていきます。

それではまた。

次回は土日かな？

悪魔（のしもべ）始めました（前書き）

とまあ遅くなりました。更新です。いやぁ昨日更新したかったんですが、友達のうちに泊まっていまして。朝五時まで遊んでましたよ。

出来としては・・・聞かないで。

それではどうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました

朝。

それは地球に住んでいれば、必ず迎える事になるもの。また生物にとって必ず必要となるものだ。太陽の光を当たらないでいると人の骨はモロくなり、植物は成長しない。つまり太陽は生物に多大な影響を与えているのだ。また、人々の生活や気分にも影響を与える。

さらにその日の始まりを司り、沈むことで終わりを知らせる。昔の人々は太陽の位置で方角を調べ、または次の天気を予想した。そして太陽を神とみたて様々な神話、伝承や伝説を生み出した。それは自分の感じた太陽に対する印象を他人に伝えようとした結果、そういった夢幻な物語を作り出したのである。

このように、太陽の存在は重要で生物との関係は話の根本に太く複雑に絡まっているのである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・滅びろ、太陽」

太陽がどれだけ大事な物なのか知ったことかぁッ！！とりあえず俺

のために滅びろッ！！

そんな、生物が滅亡しかねないような事を朝起き一番に呟く。

だってあれだぜ？太陽うざくね？太陽が昇ってきたら、（あぁ・・・また1日始まるのか・・・）ってならね？憂鬱で死にたくならね？わからない？なにもする気が起きなくなるのがわからないか？そう、今の俺はなにもしたくないんだ。動いたら負けだなと思ってる。働くんじゃないぞ？動くんだぞ？そこ重要だから。

とゆうわけで、俺は寝る。非常に正当で正論な理由で寝る。あれだ、太陽が沈んだら起きるよ。いやそのころには動くから大丈夫だよ。なんてたって、太陽が沈んでるからな☆じゃ、トゥトゥルー。

そう思い、目を閉じるとピンポーンと間の抜けたインターフォンの音が部屋に鳴り響く。どうやら誰かきたみたいだ。こういうときは無視だ。例えドアの前にこの世のものとは思えないほどの美女が、待っていたとしても俺はいかない。決していかない。第一、俺は女性は嫌いだ。第二にそんな事はありえない。自分で考えといてなんだが、ありえないから。どうせイッセーだから。

あ、でも。イッセーだったら行かないとな。いって確認してから殴って寝よう。うん。そうしよう。あれだよ、動かなきゃ負けだよ。誰だよッ！！動いたら負けなんてクソカスな事言ったのッ！！謝れッ！！今こうやって動こうとしている俺に床がめり込むぐらい謝れッ！！

そう思い立ち、重いからだを動かしてドアの前までダラダラと歩く。
いやぁ、重労働だ。秒給２８万くらいもらえるんじゃないか？まったく、なんて俺は真面目な青少年なんだ。

「もしもしー？進ー？起きてるー？」

いつもの声で、普段ならまずあり得ないことを聞いてくる。いつもならこの時間帯は寝ているが珍しく目が覚めた。この後二度寝をするがとりあえず応答しといてやるか。

「ま、まさかッ！！イッセーさんッ！？イッセーさんなんですかッ！？」（↑進裏声）

「えッ！？だ、誰ッ！？」

「あなたの八番目の愛人、ホッチキスですッ！！」

「知るかぁぁぁッ！！なんで学生の文房具を愛人にしてるんだよぉぉぉッ！！しかも八番ッ！？え？俺本妻と愛人が七人もいるのッ！？本妻に申し分けなさすぎるだろッ！！てか俺軽すぎだろッ！！」

「違いますッ！！イッセーさんッ！！私は業務用ですッ！！業務用ホッチキスですッ！！」

「ツッコむところはそこじゃなぁぁぁぁいッ！！てか業務用ホッチキスなんてものがあるのかぁッ？！」

「知りませんッ！！」

「知らんのかいッ！！てか、もういいからッ！！進もういいからッ！！起きてるのはわかったからッ！！いい加減顔出せッ！！」

なんだよこいつ。今日やけにのりが悪いな。ふだんならもう少しツッコんでくるのに。てか、さっきからなぜかアレの気配がするんだが・・・・・・・気のせいだよな。イッセーと朝からアイツが俺の家のドアの前に二人並んでいるわけないよな。もしそうなら今度こそイッセーは犯罪をしちまった事になるよな。

・・・・・・・ヤバい、はやく何とかしないと。もしそうならイッセーの金ボールを潰そう。そうしないと収集がつかなさそうだ。・・・・・・・よし。とりあえず、聞いてみよう。

「あのー・・・イッセーくん？そこに誰か居ませんかね？なんか気配がするんだが・・・気のせいだよな？」

ドアごしに恐る恐る聞く。頼むからいないと言ってくれ。

「ん?あぁ、いるぜ?さっきお前のことを話たら先輩がお前の事知ってたらしくて。どうせなら一緒に学校いこうってことになったから、一緒にきてもらったんだ」

ん?この子は何を言っているのだろうか?俺の求めている答えと全く違う答えが帰ってきたのだが、気のせいだよな?聞き間違いだよな?そうだよな?パト?ッシュ・・・

「イッセーくんイッセーくん。さらにお伺いいたしますが、まさかその先輩というお方は、紅い髪の女性じゃないですよね?」

「いや、その通りだけど?というか、なんでそんな敬語なわけ?キモいぞ」

ダメだコイツ、もう手遅れだ。どうやら幻覚を見ているらしい。間違ってもあの人と一緒に来るわけがないのに来ていると錯覚している。・・・・・・・かくなる上は俺がこの目で見定めるッ!!真実はいつも自分に都合よくッ!!絶対にあの人じゃないッ!!そう俺は信じるッ!!

そして、ドアノブに手をかけ、ドアを開いた。そこに立っていたのはッ！！

「おはようございます」

紅いカツラをした等身大のキンチョールが建っていた。

―――――――――――――――

「・・・・・・・・ってあり得ないだろッ！！」

そんな事を叫びながら飛び起きる。辺りをみる限り俺の部屋のようだ。体中いやな汗をかいてる。くそ、なんて夢だ。まさかのキンチョールだなんて・・・。もういいよ、キンチョール。勘弁してくれ。

時刻を確認する。どうやら五分ほど寝ていたらしい。しかしビックリだな。まさか目を閉じた瞬間寝るなんて。早業すぎだろ。

しかしどうしよう。さっきの夢が衝撃的すぎて眠気が吹っ飛んだ。どうしよう？このまま学校にいくか？いや、それは俺のプライドが・・・。しかし、出席日数もあるからな・・・・・・・・。仕方ない、行くか。そうと決まればまず顔を洗おう。

そうして朝の支度を始めていく。顔を洗いおえ、制服をきて靴をはいてるときにインターフォンが鳴り響く。瞬間、全身から冷汗がでる。

「おーい、進ー？起きてるー？」

さきほどみた夢と同じ状況。マズい。非常にマズい。なんかドアあけたらマジでキンチョールがいそう。紅いカツラしたキンチョールがいそう。いやだぁッ！！そんなシュールな光景みたくないッ！！

「イ、イイイイイイッセーッ！？そこに女性はいるかッ！？」

「な、なんだよ！？なんでそんな動揺してるんだよ！？」

「うるさいッ！！答えろッ！！答えなきゃ金？けりつぶすぞッ！！」

「怖すぎるわッ！！どんな脅しだよッ！！あとなんでわかるんだよッ！！ゴルゴかッ！？おまえはゴルゴなのかッ！？」

――――――――――ッ！！！！！！！？？？？？？

イッセーの返答に固まる。まじか？マジでキンチョールなのかッ！

？まさかのキンチョールなのかッ！？勘弁してくれ、キンチョールッ！！

恐る恐るドアノブに手をかける。ヒンヤリしていたが今はどうでもいい。体中が震えている。汗も滝のように出ている。ここまでドアを開けるのに勇気が必要だった事はあったか？いやない。

そして思い切り、ドアを開けたッ！！そしてそこにはッ！！

「おはよう、本道進くん」

紅い髪をした悪魔がたっていた。そうリアス・グレモリーがそこにいた。

悪魔（のしもべ）始めました（後書き）

キンチョールはもう最後なんで許してください。もう使わないので。

とまあ辛い。後書きとか前書きって予想外に辛い。なんか本文書いてからのコレはなかなかくる。

ヒロインアンケートの中間発表です

黒歌　四票

オーフィス、朱乃、ゼノヴィア　三票

ロスヴァイセ、小猫　二票

ソーナ、九重、イリナ　一票

ってかんじです。このアンケート、とりあえずまだしばらくは続けます。

次回の更新は、水曜日かな？

悪魔（のしもべ）始めました～野郎の嫉妬と女の嫉妬～（前書き）

遅くなってすみません。あと内容グダグダです？

悪魔（のしもべ）始めました～野郎の嫉妬と女の嫉妬～

今、奇跡が起きている。あろう事かこの俺が、普通の時間帯に登校している。・・・・・・・・いやいや「それが普通だ」みたいなメタなツッコミは止してくれ。俺からしたらまずあり得ないことだから。はぐれメタルが三体連続で出現するくらい珍しいから。いつぶりだろうな・・・・・・・・高校入ってからだと二桁にはいってないはずなんだが。

まぁ、今はそんな事はどうでもいい。今は――

「んで？なんかようかよ？リアス・グレモリー」

――自分の主っぽい感じの人に質問をぶつけることが重要だ。

「そうね・・・。簡単にいうと、2人にはもうそろそろ私の下僕として働いてもらおうと思ったのよ」と、なんかわりと楽しそうに言ってくるご主人様（クソ悪魔）。ったく、こっちはなにされるかわからんから不安がバーゲンセール状態だぜ。そんな中イッセーが質問してきた。

「せ、先輩、じゃあやっぱり進も・・・」

「えぇ、アナタと同じ悪魔であり私の下僕よ」

どうやら、イッセーは俺たちが悪魔だって知ったようだな。

「イッセー、いつ悪魔だって聞いたんだ？」

「今日の朝だけど？ていうか、進は俺やおまえが悪魔だって知ってたのか？」

「ん？まぁな。てか、なんかうっすらと血の匂いがするぞ？どっか怪我したのか？」

さっきから微かに匂っていて気になってた。イッセーから強く匂うから、どこか怪我でもしてるんだろうか？

「え？うん。ちょっと昨日な」

・・・・・・・どうやら、昨日別れたあとになんかあったっぽいな。てか、今考えたらおかしいな。朝からイッセーとご主人様（クソ悪魔）が一緒にウチに迎えにくるなんてさ・・・・・・・ん？一緒に？

「おいイッセー。話は変わるがなんで2人できたんだ？おまえならともかく、リアス嬢が朝からウチに来るなんておかしいじゃねぇか」

「え〝ッ！？い、いやぁ！？たまたまじゃない！？」

「あほんだら。んな偶々あるか、ボケ。おい、リアス嬢。どういうことだよ？」

と、ご主人様（クソ悪魔）に問いかける。

「昨日、イッセーのウチに泊まったからよ。ちょっと、用事でね」

なん・・・だと？・・・ま、まさかイッセーは犯罪を！？コレは聞いておかないと！！下手したらイッセーの金？けり砕かないといけない！！

「・・・それ、どういう用事だ？」

少し睨みながら聞く。多少強くでないとこういうタイプは何も教えてくれないからな。イッセーが間違いを犯してないことを強く願う。

「・・・昨日、少し堕天使との戦闘があったのよ。その時に彼が負傷したの。傷がヒドかったから治療のために彼のウチに泊まったの。わかった？」

「堕天使・・・、アレか？」

脳裏に浮かぶ忌まわしい堕天使の顔、イッセーを殺した実行犯。俺の復讐すべき対象。また、アレが――――ッ！？

「天音夕真のこと？アレとは違う堕天使よ。危うく私の可愛い下僕を殺される所だったわ」

どうやら外れたらしい。しかし、案外いるんだな。人外の存在って奴が。

「せ、先輩？今、夕真ちゃんの事・・・」

イッセーが驚いた顔をしてリアス嬢に聞く。そういや、イッセーはアレの事を覚えていたな。すっかり忘れてた。

「その事についてだけど、もう少し時間をとって話しましょ。学校の登校時間中じゃあ、人目や時間が足りないわ」

周りを見るとちらほらとうちの学校の生徒が見える。当たり前だが、悪魔であることは秘密にしとかないといけないようだ。

「わかり、ました・・・」

苦虫を噛んだみたいな顔をしながらイッセーが呟いて、それ以降その話題にはふれなかった。

―――――――――――――――

と、そんな会話が終わってから何も話さずに登校していたら、なぜか周りから視線を感じる。学校に近づくにつれて強くなっていく。けど原因はすぐにわかった。

「・・・・・」

このお隣にいるリアス嬢が学校でも屈指のサボリ魔と学校最強クラスのエロ男と一緒にいたらそら機会に見るわな。それに俺たちがいなくてもリアス嬢の容姿だけで視線はひくだろな。

よくよくみたら非常に整った顔立ちをしてる、紅い髪も目立つ。けどそれ以上に目立つのが。動くたびに存在のでかさを示す胸だろ。なんだよ、アレ。ブルンブルンしてんすけど。動くのと同時にゆれてんすけど。今までみてきた女の中で一番でかいんじゃね？ってくらいデカいんですけど。アレだ、デカメロンだ。メロンじゃないデカメロンだ。デカいんだ。もうデカいとしか言えない。それにイッセーの鼻息が荒いんですけど。どうにかなんないっすか、みなさん・・・

まぁいい、あんま気にしないようにしよ。と煩悩を殺したが周りが非常にうるさい。それに会話の内容が

「どうしてあんな男たちと・・・」

とか

「リアスお姉さまがあんな下品な男たちと一緒だなんて・・・」

いわれてるだが、俺関係なくね？てか逆恨みじゃね？俺なんかしましたっけ？こんなナイフみたいに鋭い視線を受ける理由が見あたら・・・・・・・ないこともなかった。イッセーか・・・。イッセーがすべての原因か。・・・・・・・ますます俺関係ないじゃん！！クソ・・・なんで俺がこんな目に・・・・・・・正直泣きたい。

――――――――――――――――

やっとの思いで校門を抜け限界前の下駄箱についた。何人か奇声あげて倒れる奴もいたんだが・・・・・・・気にしたら負けかな？

「あとで使いを出すわ。放課後また会いましょう」

と俺達に告げて、自身の教室に向かっていった。

「なぁ、イッセー・・・」

リアス嬢が去った後、隣にいたイッセーに話しかけた。

「なんだ？進」

「・・・・・・・スゴかったな」

「・・・・・・・うん」

2人してあのデカメロンのゆれぐわいを思い出していた。

――――――――――――――――

その後、下駄箱で靴を履き替え教室にたどり着いた時、教室から異様な殺気を感じた。なんだこれ?凄まじいくらい殺気がでてるんだが。間違いなく殺されるくらい殺気が出てるんだが、私なんかしましたっけ?ただ学校に来ただけで殺されそうになるってどんなんだよ。このまま家に帰りたい。けど今日は学校にいないといけない。いないとリアス嬢の約束を破っちまうことになっちまう。アレだよ。女の人との約束は命を全力燃焼してでも守れってお母様の教えなんだよ。・・・よし、覚悟を決めたぜ。

「いこうか、イッセー」

隣にいる相棒に同意を求める

「あぁ、進。覚悟が決まったぜ」

そして、俺はドアに手をかけ思い切りドアを開けた!!

瞬間、机が俺達めがけて飛んできた。

「「あぶなッ!?」」

反射的に教室の壁に身を隠した。そしてもの凄いスピードで机が飛んでいき、派手な音をたてて壁に激突した。

「「……」」

絶句。何も声がでない。なんだあれ？机ってあんなスピードで飛んで来るのか！？あたったら間違いなく骨が折れるくらいの威力だったぞ、アレ・・・。

壁から教室の様子を盗み見ようとして顔を出した瞬間、鋭い何かが飛んできた。慌てて顔を引き戻してよける。すると、グサッと音が床から聞こえてきた。音がした方を見てみると床に五センチくらい突き刺さった鉛筆やらシャーペンが目に入った。

はぁッ！？な、なんだこれッ！？なんだよこれッ！？ヤバいって今のコース間違いなく頭直撃コースだったって。てか、ジャイロ回転してたぞ！？シャーペンジャイロ回転してたぞ！？メジャーリーガーがウチのクラスにいるのかよ。

「す、進？なんか今とてつもないものが飛んで来たんだけど気のせいかな？気のせいだよね？気のせいにだとしたいよ！」

「イッセー、現実逃避すんな。俺も目を背けたいが間違いなく真実だ」

てか、ウチのクラスの連中の戦闘能力たかすぎだろおい。どこの学校にシャーペンをジャイロ回転で投げる奴にいるんだよ。

「てか、この状況どうするよ。このままだと2人して殺されるぞ？」

「フッ・・・甘いなイッセー。俺に作戦がある。ただこの作戦には2人の絶対的な信頼が必要になる」

「ぜ、絶対的な信頼・・・」
「そうだ。俺はおまえの事を信頼してる。あとは、おまえ次第だ」
「・・・・・わかったぜ、進。お前を信頼するぜ。作戦はすべて任せるぜ」
「あぁ、任せな。んじゃ逝こうか、イッセー」
イッセーが頷いたのをみて、教室にいる連中に聞こえるような声で。
「降服だ。俺たちの負けだ、だから攻撃をやめてくれ」
「「「・・・」」」
沈黙。時間にしては大体三十秒ほどだったが、とても重い沈黙だった。
「・・・いいだろう。降服を受け入れよう」
かえってきた返答に俺は安堵する。ここが通らなきゃ何も始まらないからな。
隣にいるイッセーに合図を出し2人で教室に入る。すると周りからの視線、視線、視線・・・。嫉妬と恨みが詰まった視線を俺達は受ける。クソ、予想以上に堪えるな・・・
「兵藤一誠、本道進。単刀直入に聞く。なぜ我が駒王学園の二大お姉さまの1人、リアス・グレモリー先輩と登校した?」

問いかけてきたのはハゲ。どうやら奴が代表らしい。奴と話をつけない限り俺たちに明日はない！！

作戦を始める前にイッセーにアイコンタクトを送る。今の俺たちは目と目だけで相手の伝えたいことが解るのだ。

「イッセー・・・始めるぜ？これから行う作戦はお互いの信頼が――――」

目で訴える。それを受けと奴も。

「クドいぜ、進。二年や三年の付き合いじゃないだろ？俺たちの絆は簡単には切れやしないぜ」

「――――――そうか。わかった、始めるぞ」

そう言って、俺はハゲと向かい合う。

「ハゲ・・・その前にいっておかなきゃならない事がある」

「なんだ？」

オペレーション・・・スタートだ！！

「おまえらが裏切られたように、俺も裏切られたんだ。・・・・・・・・・この兵藤一誠によって！！」

「「「――――ッ！？」」」

俺の一言に全員固まる。イッセーさえも固まっていた。そしてしば

らくしてハゲが。

「それは・・・どういうことだ?」

よし、食らいついてきた。

「確かに、今日俺はリアス・グレモリーと一緒に登校してきた。だが、その登校時の俺の姿は、どうだった?少なくとも喜んでいたように見えたか?むしろ疲れた顔をしていたと思うが?」

「た、確かにあのときのおまえは喜んではいなかった」

俺の指摘に全員が息をのむ。よし、今の空気は悪くない。このままいくぜ!!

「じゃあ、逆を聞こう。ここにいるイッセーはどうだった?俺と違い喜んでいたんじゃないか?」

「あぁ、イッセーは嬉しそうにしていたよ。だが、それは関係――」

「――があるから言っているんだ。考えてみてくれ、リアス・グレモリーみたいな美女と一緒に学校に登校して嬉しくない奴がいると思うか?いないだろう。じゃあなぜ、俺は嬉しくなかったのか。それは・・・」

少しためる。その短い時間にイッセーにアイコンタクトを送る。

「進ぅぅぅぅ――――――!?大丈夫なのか!?本当に大丈夫なのか!?なんか俺の立場どんどん悪くなってるんですけど!?」

「俺を信用しろよ、イッセー。大丈夫だ、すべて作戦通りだ」

「なんかひたすら俺の立場が悪くなっていってるのは俺の気のせいなのか!?」

「だから作戦通りだって。俺を信用しろよ、イッセー」

「あぁ、わかったよ。任せたぜ!!進!!」

アイコンタクト終了。この間わずか一秒。そして――――

「イッセーが俺を裏切って、リアス・グレモリーと仲良くしてたんだよッ!!」

「さっきまで信用とか信頼の話はどこにいったんだよコラァァァッ!!てか、今おまえ裏切ったよな!?あらぬ理由たてて俺裏切ったよな!?」

「どっちがだよ!!さきに裏切ったのはそっちだろ!!俺たちの十年以上かけて積み上げてきた友情を砕きやがって!!」

「おまえだよ!裏切ったのも、友情砕いたのも全部進だよ!!」

「見たかおまえら!?コイツ裏切ったのを誤魔化そうとしてやがるぞ!?」

そういって周りをみる。だがあまり反応がよくない。

「それでおまえは何がいいたいんだ?」

なるほどつまり核心を話せと言いたいのか。

「簡単だ。俺はおまえたちと同じ被害者だって事だよ」

「その理由は？」

「それは俺がここにいることが最大の理由だ」

「何？」

「俺がこんな朝早くから学校に来ていることが最大の理由だっていいたいのさ」

「どういうことだ？」

「俺が朝から学校にくるなんてことは年間でも数回しかない。理由は簡単、朝が苦手だからだ。だから寝坊して昼頃に学校にくるのさ。しかし、今日はどうだ？朝から来ているじゃないか。つまり朝誰かにむかいにきてもらったということだよ」

「「「――――――！！」」」

どうやら解ったようだな。

「そして今日、朝向かいに来たときにはイッセーとリアス・グレモリーがいた。つまり！！イッセーとリアス・グレモリーは並々ならぬ関係にあるっていうことなんだよ！！」

「でっち上げと嘘のオンパレードだなッ！！てかマジでコイツ友情を踏み砕きやがった！？」

イッセーが叫んでくるが無視して話を続ける

「じゃ、じゃあおまえは・・・？」

「あぁ、おまえたちと同じ被害者だ。そして・・・俺たちの敵は兵藤一誠だッ！！」

そしてイッセーの方をむいてアイコンタクトをする。

「進ッ！！どういうつもりだよ！？こんな裏切るみたいなことしやがって！」

「裏切る？違うな。これが作戦だよ。」

「な、何ッ！？」

「あの状況で2人が助かる確率は低い。ならば片方を犠牲にすることでもう片方を生かしただけにすぎない」

「そ、そんな・・・」

「じゃあイッセー。生きてたらまたあおう。」

「な、何？何を言って？」

そしてイッセーは気づく。奴の周りに引かれたイッセー包囲網に。

今俺たちの敵はイッセーただ一人だからな。

「裁きを・・・」

「怒りの鉄槌を・・・」

口々に恐ろしいことを言いながらイッセーに向かっていくクラスメートたち。

「ま、まて！！みんな進騙されてるんだ！！アレは、アレは全部でた・・・・・・・・らめじゃなかったぁぁぁぁぁ！？」

そう、俺の言ってることは全て真実。ただ少し言い方を変えてるだけだ。

「ま、まって！！ホントまって！？アレが！？本道進が！！本当の敵なんだって！！わかってくれよお・・・・・・・ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――――・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、イッセーは星になった。

――――――――――――――――

そして時間は過ぎてホームルーム。担任の先生が教室に入ってくる。と、俺に気づいたようだ。

「なんだ？本道。珍しいな、朝からいるじゃないか」

「たまには来ますよ。」

「そうか。コレからも普通に来てくれ」

「床に頭擦り付けてくれるなら考えなくもないですよ？」

「おまえはどれだけ上から目線なんだ・・・」

それ以降は普通に連絡事項を述べる担任。そして一通り言い終えた後。

「それから・・・さっきから思ってたんだが。ゴミ箱を被ってパンツ一丁でベルトで固定されて体中あざだらけなのは兵藤か？」

「えぇ、そうですが？」

「・・・・・・・誰がしたんだ？」

「あいつ自身が望んでました」

「そうか、なら問題ないな。では解散」

どうやらこの学校。兵藤は無視ってみんなの共通認識のようだ。

悪魔（のしもべ）始めました～野郎の嫉妬と女の嫉妬～（後書き）

遅れた理由やらアンケートの経過は次の更新に載せます！！じゃ。

悪魔（のしもべ）始めました～歓迎とシャワー～（前書き）

・・・言い訳は一つ。シュタゲが面白すぎただけだ・・・・・・・・・・

すみません、本当すみません。

それではどうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました～歓迎とシャワー～

「ヒドい目にあった・・・」

イッセーがつぶやく。あのゴミ箱をかぶった状態で丸々1日過ごし、ようやく解放されたようだ。

「なんだ？その顔。どうせ顔面スライディングでもしたんだろ？アホが」

「こんな顔を見て一切心配してくれないのもアレだけど、その原因を作った張本人が事件を忘却してることに対して俺はどう反応したらいいんだよ！？てか、なんで進は無傷なんだよ！！」

「美形だから」

どや顔しながら甘い声で言い放つ。

「あんた真顔でなにいってんの！？てか、謝れよ！！今日1日ゴミ箱被り続けた俺に謝れよ！！」

「サーセンｗｗｗ」

「全く悪いと思ってないな・・・」

「うん」

「即答！？」

「だってゴミ箱被るのおまえの趣味だろ？」

「ねぇよ！！んな事実まったくねぇよ！！てか、やめろって！！そう言うこと言って俺の変な趣味を増やそうとするなって！！」

「いいよるなウザい！！」

そう言ってイッセーにパンチ

「反抗期！？」

顔面にジャストミート。なのに無傷だった。コイツ、体の強度あがってね？

そんなバカ騒ぎをしていたら不意に後ろに気配を感じた。

「すまない。君達が兵藤一誠君と本道進君で間違いないかな？」

振り向いてみるとそこには薄く笑みを浮かべたイケメンな青年がたっていた。だが、それよりも驚いたのが俺との距離だ。３、４歩程度の距離があいているがこの距離になるまで俺が気配に気づかなかった。確かに気を抜いていたがそれでも驚愕に値する。

コイツ、俺とタメぐらいでコレほど気配を消せるとは・・・。なかなかスゴいな。てか、イッセーが半眼で睨んでる。そういやコイツ、イケメンが嫌いだったな。つーか、うるさい。周りが超うっさい。どうしてこう女の声って耳にキンキンくるんだ？軽く殺意がわくんだが・・・。とりあえず質問に答えるか。

「ちげぇよ。俺は本道進だが、コイツは逆さゴミ箱っていう名前だ。ちなみに名字は逆さ、名前がゴミ箱だ」

「ちがうから！一文字も合ってないから！！前からいってるだろ！！そうやって初対面の人間に変なうそつくなって！」

「アァン？テメェ・・・今がないなんて本気で言ってんのか？」

「――――ッ！？」

怒気をはらませながら言う。すこし強張った顔を見せながら、

「まぁないがな」

「ってないのかよ！？」

あっさり裏切ることにした。

「ははは、とりあえずあってるのかな？」

といって苦笑しながらつぶやく、どっかのイケメン。

「だからちがうって。コイツの名前は下半身生物『イッセー』だよ」

「どんなんだよ！！下半身生物って！！てか、さっきと言ってることが違いすぎる！！」どんなっておまえそりゃぁ・・・

「基本的に物事を下半身にちなんだ考えをする奴の総称だが？」

「すみません・・・生きてすみません・・・」

「え、えーと・・・、とりあえず僕はリアス・グレモリー先輩の使いできたんだけど、一緒にきてくれないかい？」

まぁ、予想はしてたがな。

「了解。おい下半身、いくぞ？」

「・・・俺、この話が終わったら自殺するんだ・・・・・・・・・・」

いきなり死亡フラグを建ててきた。しかも生き残っても死ぬのかよ。斬新だ。

「おうやれやれ（笑）」

「へぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん」

イッセーがいきなり泣き出した。だが、今は気分がいいから俺は

「うざい（笑）」

「へぐぶッ！？」

腹に蹴りをかます。うん、見事にみぞに入って悶絶してる（笑）

「り・・・理不尽、な・・・・・・・・ガクッ」気絶したか。チッ、使えない玩具だ。さて、引きずってくか。顔面をな。

「んじゃ、行こうぜ」

「え？か、彼は大丈夫なのかい？」

戸惑うモヤシ。まぁ、普通はそうだわな。

「いいんだよ。単なるこいつの趣味だから。あ、わりい。ちと待っててくれ。荷物の準備をする」

「あ、あぁ・・・わかったよ」

その言葉を聞いて身支度を始める。いやぁ持って帰るものが多い。マンガにゲームにラノベ。うん、いっぱいだ（笑）

「・・・哀れな・・・・・・・・」

モヤシがイッセーをみて、そんな事を呟いた。

―――――――――――――――――――――

モヤシの後に続きながら向かった先は、後者の裏手だ。確か、旧校舎だったかな？今は使用されてなかったはずだが・・・。てか、なんかオーラがすごい。なんていうか、いかにもでるぞみたいな雰囲気だ。けど外見は古い感じなだけで窓もどこも割れてない。

「ここに部長がいるんだよ」

モヤシがそう告げる。・・・部長？アイツ、何か部活してんのか？つーか、コイツも同じ部になるのか？まぁ会ったら話してくれるだろうからいいが。

二階建ての木造校舎を二階まで進みさらに奥にまで歩く。床を見てみるとほこりがみあたらない。割と掃除してるんだな。そうこうしていたらモヤシの歩が止まる。どうやら目的地のようだ。どうやら教室のようだ。戸にはプレートがかけられている。

『オカルト研究部』

・・・・・・・オカルトがオカルトを研究部するなんて。自分研究したらはやくね？

「部長、連れてきました」

引き戸の前からモヤシが確認をとると「ええ、入ってちょうだい」というお返事。律儀だな～

モヤシが戸を開けて入っていく。それに続くようにしてイッセーと一緒に入る。ちなみにイッセーはあれから三分で復活した。・・・化け物だな。

部屋の中を見てみるとあらびっくり。変な文字がやたらと書いてある。壁やら床やら天井やら。んでさらには教室の真ん中に変な円陣。ぶっちゃけひくわ～…

あとは、ソファーとデスクが数台ある。と誰か座ってるな。誰だ？あの女。ロリなコンが喜びそうな体型をした美少女だ。いや正しくは美幼女か？まあ可愛い部類される顔立ちだ。つか眠そうだなコイツ。あとそこはかとなく同じ感じがする。何となくだがな。

「こちら、兵藤一誠君と本道進君」

モヤシが紹介しやがる。それに応じて彼女も頭を下げてくる。

「あ、どうも」

イッセーが頭を下げる。俺はというと右手を軽く上げて答える。それを確認すると食べかけの羊羹を食べ始める。・・・うまそうな羊羹だ。

シャー。

部屋の奥から、水が流れる音が聞こえる。シャワーか?みるとシャワーカーテンを発見。誰か使ってるようだ。あぁー・・・みないようにしよ。てかシャワーて・・・どんなんだよ・・・・・・・・・

キュッ。

水を止める音。

「部長、これを」

あん?カーテンの奥にもう一人いるのか?声からして女のようだが、アイツのじゃない。

「ありがとう、朱乃」

隣を見てみるとイッセーが顔を赤くしていた。間違いなくエロいことと考えてる。

「・・・いやらしい顔」

ぼそりと一言。どうやらあの羊羹が言ったらしい。

「言ってやるな、これがデフォルトなんだ」

「言ってることがムゴい・・・」

ジャー。

カーテンが開く。そこにいたのは制服を着たアイツ。てか、髪ちゃんと乾かせ。痛むぞ。

「ゴメンなさい。昨夜、イッセーのお家にお泊まりして、シャワーを浴びてなかったから、今汗を流したの」

それをきいてイッセーが応える。

「あ、そうだった・・・げはっ!?」

「「「!!??」」」

とりあえず、イッセーを蹴ってみた。イッセーは引き戸の所まで転がりドアに当たり止まった。おー、みなさん驚いてる。

「・・・・・よし?」

「よしじゃねぇよ!!人けってよしじゃねぇよ!!つか意味もなく蹴るなっていってるだろ!?」

「いや、理由はあるぞ?なにか全国のおっきなお友達がテレパスィーを送ってきてそれに従っただけなんだ。うん、だから俺は悪くな

いからな」

「そっか、じゃあしょうがない、みたいな事になるかぁぁぁぁ！！意味わかんねぇよ！！なんで俺蹴られなきゃならないんだよ！？」

「いやだから全国の――」

「ただ単におまえが蹴りたかっただけだろうが！！」

「うん」

「素直にいっても意味がない！！むしろ悪意を感じます！！」

「悪意じゃない殺意だ」

「今すぐ俺は逃げたしたいです！てか俺がなにしたっていうんだよ！！」

「光合成した」

「もう人じゃねぇよ！！人間のスペック上無理だから！！」「じゃエロい妄想した」

「誠に申し訳ありません」

静かにイッセーが土下座している。スゴいな、もはやイッセーの土下座が日常と化してきた。

「ほ、本道君？これはいったいなに？」

リアス壌が聞いてくる。若干戸惑っているようだ。

「気にするな。いつもの事だ」

「・・・これがいつもかしら?土下座するのがいつもかしら?」

「しまいになれる。」

全国のおっきなお友達・・・恨みははらしたぜ・・・・・・・・

「おら、イッセー。頭蹴り上げられたくなかったら今すぐ立ち上がりやがれ」

涙を流しているイッセーを無視ってシャワーを見る。なんであるんだ?不思議すぎるだろ。とよくみたら奥に人がいる。

「横暴にもほどがある・・・」

質の良さそうな黒髪をポニーテールにした女の人だ。その顔には笑顔を浮かべている。・・・どことなくお母様に似ている気が・・・・・・オーラとか色々。

「あらあら。はじめまして、私、姫島朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを」

なんか裏がありそうな笑顔をして挨拶してくる。・・・・・・・・・・

いい声はしてる。

「こ、これはどうも。兵藤一誠です。こ、こちらこそ、はじめまして!」

イッセーがかなり緊張している。なにやってんだこいつ？

「本道進だ。・・・はじめまして」

いかん。もう名前を忘れてしまった。ヤバいな・・・。

「これで全員揃ったわね。イッセー、進」

そう言って確認をもとめてくるリアス嬢。

「は、はい」

「・・・」

「私たち、オカルト研究部はあなた達を歓迎するわ」

「え、ああ、はい」

「・・・」

「悪魔としてね」

「――――っ」

「・・・・・・・・グウ」

「て寝るなよ進！！」

もう眠いよパトラッ？ュ・・・・・・・・・

悪魔（のしもべ）始めました～歓迎とシャワー～（後書き）

実はアンケート何ですけど、趣向を変えようかと。期間性じゃなくて、規定量を超えたものをヒロインにします。んで、ヒロイン枠を一人から三人に増やして、とりあえずヒロイン三人で話を進めて、その後もう一度アンケートとってメインヒロインを決めたいと思います。んで後の二人をサブにします。いきなり変えちゃってすみません。

中間順位は

オーフィス　五票

朱乃　黒歌　四票

ゼノヴィア　三票

ロスヴァイセ　小猫　二票

ソーナ　九重　イリナ　一票

ってかんじです。とりあえず１０票を目安にします。

それではまた、次回は日曜日くらいには・・・

悪魔（のしもべ）始めました～神器と自己紹介～（前書き）

長かった。今回一番ながかった。そしてついに進の神器が！！

話はいきなり変わるんですけど、セイクリッドセブンってアニメが案外おもろい。あの中二くささがね・・・・・・・・

悪魔（のしもべ）始めました～神器と自己紹介～

「粗茶です」

「あっどうも」

ソファーに座る俺達に、・・・黒ポニーがお茶を淹れて渡してくる。
淹れられたお茶をずずっとイッセーが飲む。

「うまいです」

「あらあら。ありがとうございます」

イッセーの言葉で嬉しそうにわらう黒ポニー

「進はのまないの？」

「俺はいい。今喉は渇いてないからな」

テーブルを囲んでソファーに座る俺、イッセー、もやし、チビスケ、リアス嬢。

「朱乃、あなたもこちらに座ってちょうだい」

「はい、部長」

黒ポニーがリアス嬢の隣に座る。全員の視線が俺達に集まる。あれか？俺たちは動物園の珍獣かなんか？みせもんじゃねぇぞ？とそんな中リアス嬢が口を開く。

「単刀直入に言うわ。私たちは悪魔なの」

いや、状況的にそうでしょうよ。

「信じられないって顔・・・ではないわね、進。イッセーは仕方ないわ。でも、あなたも昨夜、黒い翼の男をみたでしょ？」

やはり。イッセーは昨日のうちに堕天使にあってるようだな。・・・よく生き残れたな。

「あれは堕天使。元々は神に仕えていた天使だったんだけど、邪な感情を持っていたため、地獄に堕ちてしまった存在。私たち悪魔の敵でもあるわ」

この世界に堕天使やら悪魔やらマジでいるとわな・・・

「私たち悪魔は堕天使と太古の昔から争っているわ。冥界――人間界で言うところの『地獄』の覇権を巡ってね。地獄は悪魔と堕天使の領土を二分化しているの。悪魔は人間と契約して代価をもらい、力を蓄える。堕天使は人間を操りながら悪魔を滅ぼそうとする。ここに神の命を受けて悪魔と堕天使を問答無用に倒しにくる天使を含めると三すくみ。それを大昔から繰り広げているのよ」

つまり、アンパンマンとカレーパンマンが土地を巡ってバトってるなかに独り占めしようとしてしょくぱんまんが乱入したってことか？

「いやいや、先輩。いくらなんでもそれはちょっと普通の男子高校生である俺には難易度の高いお話ですよ。え？オカルト研究部ってこういうこと？」

「オカルト研究部は仮の姿よ。私の趣味。本当は私たち悪魔の集まりなの」

・・・俺たちの存在自体がオカルトだろ？

「――天野夕麻」

その名前に、怒りがこみあがる。イッセーも驚いてるようだ。

「あの日、あなたには天野夕麻とデートをしていたわね？」

「・・・冗談なら、ここで終えてください。正直、その話はこういう雰囲気で話したくない」

お～う。珍しくイッセー怒ってるよ。まぁ、残念ながら冗談じゃないんだよな。

「彼女は存在していたわ。確かにね」

といって、イッセーにハッキリと告げるリアス嬢。

「まぁ、念入りに自分であなた達の周囲にいた証拠を消したようだけど」

そういって指を鳴らすリアス嬢。すると黒ポニーが一枚の写真を出してきた。そこには俺達から日常を奪い去った存在が写っていた。

「この子よね？天野夕麻ちゃって」

拳を強く握る。自分の中にある殺気を押さえる。コイツだ。コイツが俺の、復讐の対象。待ってろよ、必ず俺が殺してやる。

「この子は、いえ、これは堕天使。昨夜、あなたを襲った存在と同質の者よ。この堕天使はとある目的があってイッセーに接触した。そして、その目的を果たしたから、あなたの周囲から自分の記憶と記録を消させたの」

「目的？」

その目的はおそらく。

「おまえを殺すためだろ、イッセー」

イッセーが驚愕する。そして俺に噛みついてきた。

「な、なんで俺がそんな！」

「知るか、その理由はそこにいるリアス嬢が教えてくれるだろうよ。つか、俺も巻き込まれた？側の方なんだよ。俺も分からんことが多い」

むしろ突っ込んでいってたよな？俺・・・・

「落ち着いてイッセー。仕方なかった・・・いいえ、運がなかったのでしょうね。殺されない所有者もいるわけだし・・・」

「運がなかったって・・・」

おいおいおい。俺達の死んだ原因が『運がなかった』って・・・ショックでなくぞゴラ。

「あの日、あなたは彼女とデートして、最後にあの公園でお腹を貫かれたのよ」

「でも、俺生きてるっスよ！だいたい、なんで俺が狙われるんだよ！」

そうだ。そこが疑問だ。なんでイッセーが狙われなきゃならなかったんだ？こんな性欲を除けば何も残らない奴をなぜ殺さなきゃならなかったんだ？

「彼女があなたに近づいた理由はあなたの身にとある物騒なモノがついているかいないか調査するためだったの。きっと反応が曖昧だったんでしょうね。だから、時間をかけてゆっくりと調べた。そして、確定した。あなたが神器を身に宿す存在だと――」

神器――――

確か、アレもそんな事を言っていたような？いないような？

すると今度はモヤシが話し出す。

「神器とは、特定の人間の身に宿る、規格外の力。例えば、歴史上に残る人物の多くがその神器所有者だと言われているんだ。神器の力で歴史に名を残した」

「現在でも体に神器を宿す人々はいるのよ。世界的に活躍する方々

がいらっしゃるでしょ?あの方々の多くも体に神器を有しているのです」

モヤシの次に黒ポニーが説明してきた。とりあえず、質問をぶつける。

「じゃ、アーサー王のエクスカリバーもその・・・神器?に部類されるのか?」

「はい。だけどそのクラスの神器は滅多にありませんわ」そうなのか?だったらクーフーリンのゲイ・ボルクとかもそれに部類されるのか・・・

「大半は人間社会規模でしか機能しないものばかり。ところが、中には私たち悪魔や堕天使の存在を脅かすほどの力を持った神器があるの。さっきいったようなエクスカリバーもそうよ。そしてイッセー、手を上にかざしてちょうだい」

「え?手?手!?」

「いいから、早く」

リアス嬢に急かされながらイッセーは左腕を上に上げた。

「目を閉じて、あなたの中で一番強いと感じる何かを心の中で想像してみてちょうだい」

「い、一番強い存在・・・。ド、ドラグ・ソボールの空孫悟かな・・・」

あぁー・・・あれは確かに強かったなぁ～。

「では、それを想像して、その人物が一番強く見える姿を思い浮かべるのよ」

それをきいてイッセーが目を閉じる。あ、たぶんドラゴン波を想像してるな。

「ゆっくり腕を下げて、その場で立ち上がって」

指示通り、イッセーが立ち上がる。

「そして。その人物の一番強く見える姿を真似るの。強くよ?軽くじゃダメ」

まじかよ!?あの年でドラゴン波をやるのか!?羞恥プレイにもほどがあるだろ!?イッセー・・・や、やるのか?やってしまうのか!?その年で!ドラゴン波を!!てか、俺は耐えられるか?みなさんマジ空気のなかやったドラゴン波をみて俺は笑いをこらえることができるのか?断言しよう、無理だ。

そしてイッセー構えてそして!

「・・・ド、ドラゴン波!」

開いた両手を上下に合わせて前へ突き出す格好をとる。

「～～～～～～ッ!?」

まじか！！やりやがった・・・やりやがった！そして笑いがおさえられない。ヤバい、マジ耐えられないｗｗｗ

「さあ、目を開けて。この魔力漂う空間なら、神器もこれで容易に発現するはず」

え！？ドラゴン波で！？俺以外だれもうけてないドラゴン波で！？

するとイッセーの左腕が光り出した。

「何これ！何これ！」

マジか！？マジなのか！？神器所有者はみんなこれをくぐるのか！？こんな羞恥プレイをくぐるのか！？

光が形を形成していき、左腕を覆っていく。そして光が止み赤色の籠手らしきものが装着されていた。特徴としては凝った装飾と手の甲部分の宝石らしきところだろ。

「な、なんじゃ、こりゃぁぁぁぁ！」

うわぁー・・・なんかできてるよー・・・・・・・・・

チョー驚いてますよ、イッセーさん。するとリアス嬢が。

「それが神器。あなたのもよ。一度ちゃんとした発現できれば、あとはあなたの意志でどこにいても発動可能になるわ」

あの赤いのがねぇー。てか、よく知ってるね。

「あなたはその神器を危険視されて、堕天使――――天野夕麻に殺されたの」

つ、つまり、あれが原因？

「瀕死のなか、あなたは私をよんだのよ。この紙から私を召還してね」

するとリアス嬢が一枚のチラシを取り出す。それはイッセーがデートの待ち合わせの時貰ったチラシだ。そこには『あなたの願いを叶えます』という感じで書かれている。うん、胡散臭すぎだろ。よくみたら魔法陣が書かれている。ん？床のと似ているような？

「これ、私たちが配っているチラシなのよ。魔法陣は、私たち悪魔を召喚するためのもの。最近は魔法陣を描くまでして悪魔を呼び寄せる人はいないから、こうしてチラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配っているのよ。お得な簡易版魔法陣。あの日、たまたま私たちが使役している使い魔が人間に化けて繁華街でチラシを配っていたの。それをイッセーが手にした。そして、堕天使に攻撃されたイッセーは死の間際に私を呼んだの。私を呼ぶほど願いが強かったんでしょうね。普段なら眷属の朱乃たちが呼ばれているはずなんだけれど」

あんな胡散臭い紙切れを信じる奴がいるのか・・・

世の中疲れてるなぁ～…

「召喚された私はあなたを見て、すぐに神器所有者で堕天使に害さ

れたのだと察したわ。問題はここから。イッセーは死ぬ寸前だった。堕天使にお腹を貫かれていたから、瀕死の状態だったのよ。あのままじゃ助からなかった。だから私はあなたの命を救うことを選んだ」

それが悪魔への転生ってわけか。

「す、進は？進もなんですか？進も夕麻ちゃんに――？」

「あー・・・あれはー、殺されたのか？いや、どっちかというと自爆に近いのか？うーん・・・」

イッセーの問いに悩む。アレはどちらに部類されるんだ？自爆殺害？事故？え？どれ？

「そういえば、あの状況の細かい所まで聞いてなかったわね。いいわ、進。今ここではなしてちょうだい。」

リアス嬢からの許可もでたから言ってみよう。うん。みんなら事故か自爆か殺害かわかるだろ。

「えっと・・・天野？だっけ？イッセーがそいつを紹介してきた時から違和感を感じてな。直感で人じゃないってわかったんだ。んで、気になったからイッセーのデートを尾行してアレの目的を探ってたんだ。そしたら、イッセーを殺そうとしたから間に割って入って戦った。はじめは一撃加えて逃げるつもりだったんだが失敗してな。そしたらアレに興味持ち出して、見せしめにイッセーが殺されたんだよ」

よく考えたら、イッセーが一番哀れだな。

「え？じゃ俺がやられた理由って進のせいなの？」

「いえ、元からイッセーを殺すつもりだったのでしょう。ただ、予想外な横槍が入ったからまず目的を果たすことを優先しただけだわ」

「どっちにしろ俺は殺されてたんですね・・・」

ま、そゆことになるな。

「んで、イッセーが殺されたのを見て俺がマジギレして、後先まったく考えず特攻してたのよ。なんか光の槍みたいの体を貫かれたっぽいけどそのまま突っ込んでいって、一発デカいのをアレにぶちかましてやった。そのあと、アレが吹っ飛んでいった後にリアス嬢が現れたんだ」

話し終わるとイッセー以外なんか引いてる。あれ？なんか変なこといいました？真実話しただけなんですけど・・・

「す、進？その話は本当かしら？」

「む？失敬な。真実ですがなにか？」

「い、いえ。堕天使の光の槍をくらったら普通は悪魔じゃなくても人間なら即死なのだけれど・・・、信じられないわ」

事実だからな、事実だからな。

「じゃ、じゃあ進はそれが原因で？」

「ん?まあ、そうなるんじゃね?てか、即死じゃやなかったぞ?普通にアンタしばらく話しただろ?」

「規格外すぎるのよ、あなた・・・」

また全員から引かれてる・・・、いやだから全部真実だから。

「ま、まあ、そういう経緯であなた達を私、リアス・グレモリーの眷属として生まれ変わらせたの。私の下僕の悪魔としてね」

リアス嬢がそういった瞬間。堕天使とは違うコウモリのような翼がリアス嬢の背に現れた。

バッ。

音が背中からでる。背中をみてみると同じように翼が出てきていた。

・・・かっちょいいー。

「じゃ、改めて紹介するわ。祐斗」

とリアス嬢からの命でモヤシがこっちを向いてくる。

「僕は、木場祐斗。本道君や一誠君と同じ二年生ってことはわかってるよね。えーと、僕も悪魔です。よろしく」

よし、モヤシだな。覚えたぜ。

「・・・一年生。・・・搭城小猫です。よろしくお願いします。・・

・悪魔です」

小さく頭を下げるチビスケ。

「三年生、姫島朱乃ですわ。いちおう、研究部の副部長も兼任しております。今後もよろしくお願いします。これでも悪魔ですわ。うふふ」

深く頭を下げる黒ポニー。

「そして、私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、イッセー、進」

・・・どうやら予想以上に厄介な事になったようだ。

「本道進だ。よろしく」

とりあえずもう一度自己紹介をする。それにつられてイッセーももう一度。

「兵藤一誠です。よろしくお願いします」

俺達の自己紹介をきいてリアス嬢が笑顔でこたえる。

「えぇ、よろしく。さて、早速だけど進。あなたにしてもらうことがあるわ」

その言葉に疑問をもつ。すること？いきなりだな。

「マジで早速だな。ＯＫ、なんだ？」

「さっきイッセーがやったようなことをしてもらうわ」

「さっき？神器の発動か？」

「えぇ、そうよ。あなたからは微弱だけど神器の反応があるの。せっかくだからここで発動させましょう」

まじかよ。てか、今日俺『まじかよ』って何回いったっけ？かなり言ったような・・・
ん？まてよ？発動？神器を？ま、まさか・・・

「あ、あのぉー・・・？つかぬことをお聞きしますが、まさか私もドラゴン波をしないといけないのでしょうか？」

もしそうなら発動しなくていいよ、マジで。あんな羞恥プレイ耐えられない。

「あなたの中でイッセーと同じように強い姿がそれなら同じようにしてもらうけど、どうなの？」

あ、そ、そうだったな。いやぁー焦ったぜ・・・。まさか俺がドラゴン波をしなくちゃならないのかと本気で悩んじまったぜ・・・

「いや、違うけど・・・」

「じゃあ、なたの中で一番強いと感じる何かを想像してちょうだい」

「お、おう・・・」

と言われても困るんだけど・・・。俺の中での最強だろ？だったら当然お母様になるわけだが・・・、ち、違うよな？そういう最強じゃないよな？

だとしたら次に強いとしたら、・・・認めたくないが親父だよな。時速二百キロ近いスピードで突っ込んでくる五トントラックを右ストレート一発で弾き返すような化け物だよな。・・・・・・・・本当にさ、人なのか？

「え、えっと・・・俺の中での最強って親父なんだけど、その真似をすりゃいいのか？」

助けて、リアえもん！！

「えぇ。あなたの中でのイメージがあなたのお父さんならそうよ。心の中で想像してちょうだい」

取りあえず目をつむる。親父を想像するってやだな・・・。まぁ、仕方ないか。親父、親父。・・・あれ？なんでだろ？なんだが目から暖かいものが流れてくるよ？

「イ、イッセー？なんで進は泣いてるのかしら？」

「・・・聞かないでやってください。進にとって親父さんはトラウマの塊みたいなものですから」

「そ、そう・・・。大変ね、彼・・・・・・・・」

よ、よし。なんとかイメージは出来たぜ。

「リアス嬢。次は？」

「次はその人物が一番強く見える姿を思い浮かべるのよ」

強い姿ね。・・・やっぱり、正拳突きしてるところかな？ガキのころからずっとみてるが、全くもって無駄がなく、速く、力強いんだよな。

「・・・いいぜ。次は？」

目をゆっくり開いて指示を待つ。

「ゆっくりたって、その姿を真似るの」

「真似るのはいいが、少し場所がせまい。移動してもいいか？」

「構わないわ。やりやすいようにしてちょうだい」

了解、と。

俺はソファーから立ち上がり、少し移動する。距離にしたら2、3歩程度かな？その位置でとまりゆっくりと目をまた閉じる。

「「「・・・・・・」」」

全員の視線が集まるのを感じるが、集中すれば気にならなくなるだ

ろ。・・・よし。

「いくぞ」

腰を落とし、股を肩幅ほどに開く。左手を前に突き出し、右手を胸の辺りに持ってくる。左手は甲は上、右手は甲は下にある。そして――――

「フッ――――!!」

腰を捻らせて、右手を突き出す。と同時に左手を胸の位置にまでしまう事を行う。さらに右手を捻らせながら１８０度回転させながら突き出す。そして――――

パァンッ!!

打ち出した拳が空気を弾かせる。うん。いつ聞いてもいい音だ。親父もこんな音を出してたな。ただなにか違和感を感じた。なんか音が?音のでるタイミングがおかしかったような?そう、なんか拳を突き出し終わった後から聞こえたような?

「す、進・・・今、さ。音があとから聞こえたような?」

イッセーが戸惑うように質問してくる。うん、俺も同じように事を思ったよ。

「お、音速を超えたのかしら?」

「た、たぶんそうじゃないでしょうか部長」

「規格外ですわ、本当に」

「・・・ビックリ、です」

え?あれ?マジで?音速越えちゃったの?マジで?秒速３６キロこえたの?マジで?

「・・・もういいわ。進、目を開けてちょうだい」

「あ、おう・・・」

目を開けてみる。そこには皆さん疲れたような顔をしてました。いや、俺のせいじゃないから。やれっていったのリアス嬢だから。

するといきなり――――、俺の全身が光り出した。

「え?は?はい!?」

めっちゃ光ってる!?体がめっちゃ光ってる!?ヤバいぐらい光ってる!?太陽拳全身版みたいな感じだよ!?え?大丈夫なのか?俺!?

「落ち着いて、進。神器が反応してるのよ。大丈夫、しばらくしたら光らなくなるわ」それでもビビるわ!!てか、今の俺って、等身大蛍光灯みたいな感じなんだけど・・・・・・・早く終わってくれ――――!!

すると光はイッセーの時と同様に、形を成していった。まるで全身

を包むようにゆっくりと光が動いていった。

そして、光がやんだとき、俺は制服の上に真っ黒なコートを着ていた。

真っ黒な、本当に真っ黒なコートだ。装飾は愚か、ボタンやチャックすらもない。襟もいたってふつうだ。本当にシンプルな、それでいて色濃いコートだ。長さとしてはすねぐらいまである。

これが――？神器？イッセーのとは全然違うな。

「ふ～ん、それがあなたの神器か」

リアス嬢が話しかけてくる。てか、これどうやってしまうんだ？

「あのさ？これどんな力があるんだ？」

てか、それが一番重要じゃね？

「それは私でもわからないわ。メジャーな形をしたものならだいたいわかるかもしれないけど、私もコートの神器なんて始めてみたからどうにも・・・」

そすか。まあ別にいいが。

「神器については調べておくわ。それよりも二人とも、これから悪魔の基本的な活動について説明をするからこっちにいらっしゃい」

・・・・・・・どうやらまだ今日は続きがありそうだ。俺、もう家に帰りたい。帰りたいよぉぉぉぉッ！！

カムバック！！日常！！

悪魔（のしもべ）始めました～神器と自己紹介～（後書き）

進のコートのイメージはＤＴＢのヘイのコートです。裏地も黒ですが・・・

ちなみにこのコートの禁手状態、友達にしたら、「チートすぎだろ」っていわれました。それぐらいしないとだめなんだよ！！けど、最終的にごり押しになる。それに能力はチートだけど相手に直接ダメージはないチートだからそんなに・・・

中間順位は

オーフィス　五票

朱乃　黒歌　ゼノヴィア　四票

小猫　三票

ロスヴァイセ　二票

ソーナ　九重　イリナ　一票

こんな感じです。

次回は・・・、休日までに一回は更新します。

あと、進のコートの名前、募集します。作者ネーミングセンスないから（笑）

悪魔（のしもべ）始めました～爵位と目標～（前書き）

はい、更新です。

そしてついに進が壊れる！・・・はじめから壊れてたな。

それではどうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました～爵位と目標～

深夜――――

誰もが寝静まった中を俺、本道進は駆け抜ける。月と星に照らされた家々の屋根の上をスーパーボールの跳ねる。その速度は自転車など比較にならないほどのスピードだ。

（まるで、忍者だな・・・）

心の中でぼやく。今の俺の状況って『ｍｏｄｅｒｎ　ｓｔｒａｎｇｅ　ＮＩＮＪＡ』？近代に蘇った奇妙な忍者？うん、かっちょいい。後はあれだな、『猫の目』（男ｖｅｒｓｉｏｎ）だな。あんな感じじゃない？今の俺。

俺が家々を跳ねる理由は、このチラシ。そうチラシ配りをしている。イッセーが持っていたものと同じのだ。欲がある人間がこれを使うと俺たち悪魔が召喚されるってやつだ。

手に持ってる携帯機器をみると、モニターには周囲の町マップが表示されている、そして赤い点が点滅している。そこには欲がある人間がいるってわけだ。んでそこにこのチラシをわたしにいく。この繰り返しをここ数日ずっとしている。

「・・・はぁ。いつまでこれを繰り返したらいいんだ？」

そんな事を、空を駆け抜けがなから呟いた。

――――――――――――――――――――

あの日、俺達がリアス嬢に呼ばれた日に遡る。

ちなみに神器は念じたら消えた。ビックリだぜ。あと悪魔の翼なんだが、なれたら飛べるらしい。マジでかっちょいいな・・・

「私のもとに来ればあなたの新たな生き方も華やかになるかもしれないのよ?」

悪魔になったことについて頭を抱えているイッセーにリアス嬢がウインクしながら言い放つ。俺?別に気にしてないからな。元々化け物みたいな存在が本当に化け物になっただけだからな。

しかし、どうやら俺達は悪魔に転生したかわりにリアス嬢の下僕として生きてかなきゃならないらしい。まあそんな事を言ってたしな。

人間から悪魔に転生したやつは、絶対的に転生させた悪魔の下僕としていきてかなきゃならんらし。なんか社会的ルールらしい。・・・俺の嫌いな言葉だ。そういうルールは大っ嫌いだ。

「でもね、悪魔には階級があるの。爵位っていうのがね。私も持っているわ。これは生まれや育ちにも関係するけど、成り上がりの悪魔だっているわ。最初は皆、素人だったわ」

「どこぞの学校のCMみたいなこといわないでください!つーか、本当ですか?いまいち信用できない」

・・・よく知ってるな。古いCMなのに。ん?なんかリアス嬢がイッセーに耳打ちしてるぞ?てか、小声でも俺の聴力なら拾えるんだが・・・

「やり方しだいでは、モテモテな人生も送れるかもしれないわよ？」

「どうやってですか！？」

早っ！？反応早っ！？もはや脊髄反射クラスじゃね？てか、そこまでいくと素晴らしいな、おまえのスケベ根性。てか、なんかリアス嬢からでてるんだが・・・、オーラ？みたいなのが。あれが魔力か？

「純粋な悪魔は昔の戦争で多くが亡くなってしまったのよ。そのため、悪魔は必然的に下僕をあつめるようになったの。まあ、以前のような軍勢を率いるほどの力も威厳も消失してしまったけれど。それでも新しい悪魔を増やさないといけなくなった。悪魔にも人間同様に性別はあるから悪魔の男女の間に子供は生まれるわ。それでも自然出産で元の数に戻るには相当な時間がかかってしまうの。悪魔という存在は極端に出産率が低いから。それでは堕天使に対応できない。そこで素質のありそうな人間を悪魔に引き込むことにしたわけ。下僕としてね」

「やっぱり、下僕じゃないですか」

いやまったくもってその通りです。

「もう、そんな残念な顔をしないで。話はここから。ただそれでは下僕を増やすだけで力のありそうな悪魔を再び存在させることにはならない。だから、悪魔は新しい制度を取り入れたわ。力のある転生者――つまり、人間から悪魔になった者にもチャンスを与えるようになったのよ。力さえあれば、転生者でも爵位を授けよう――と。そのせいもあって、世間に割と悪魔は多いわ。私たちみたいに人間社会に潜り込んで行動している悪魔も少なくないしね。イッセーや

進も知らず知らずのうちに悪魔と町中ですれ違っていたと思うわ」

ま、まじかよ。でも確かに時々街中で違和感を感じることはあったが・・・

「悪魔って案外身近に存在するだな？」

「ええ。もっとも、認知できる者とできる者がいるわ。欲望が強い者や悪魔の手でも借りたいほど困っている人間は悪魔に強く認識しやすいわね。そういう人たちに魔法陣つきのチラシを配ると私たちは召喚されやすいのよ。悪魔を認知できても、先ほどのイッセーのように私たちの存在を信じない者も多いけれど、魔力を見せれば大抵は信じるわ」

じゃ、イッセーがリアス嬢を召喚したのは欲望が強かったからか。まあ欲望だけなら史上最強じゃね？ん？までよ？

「でもよ、リアス嬢。俺はうっすらだがあんたらに違和感を感じたぜ？少なくとも人じゃないのはわかったんだが・・・」

つまり、俺は欲望が強いのか？う～ん、そんな強い方じゃないんだが・・・

「あなたの場合は、直感で感じたんでしょ？まったく、知れば知るほど人間離れしてたわね・・・」

「さいですか」

まあ、そうだろうと思ったよ・・・。といきなりイッセーが思いついたように叫んだ。

「じゃ、じゃあ！やり方次第では俺も爵位を！？」

「ええ。不可能じゃないわ。もちろん、それ相応の努力と年月がかかるでしょうけど」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！」

イッセーが叫び出す。てか、隣にいるんだから叫び出すなよッ！！鼓膜破れるだろうが！！

「マジか！俺が！俺がハーレムを作れる！？エ、エッチなことしてもいいんですよね！？」

「うわぁー・・・最低だぁー・・・」

さっきまでの真面目な話を一瞬で色欲の方へ持ってくとか・・・。マズい、早く何とかしないと・・・

「そうね。あなたの下僕ならいいんじゃないかしら」

っていいのかよ！！その人に人権とかはないのかよ！！もはや一種のレ？プじゃね？

つか、イッセーの喜びようが、ヘンパないんだが・・・。そんなにハーレム作りたかったのか。まあ現代社会じゃハーレムは難しいわな。下手したら後ろから刺されるし、首飛ばされるし、ヤンデレに殺されるし・・・。某誠くんがいい例だ。あれ？イッセーって一誠だよな？一文字あってるよ？・・・・・・こいつ、死ぬんじゃ

ない？

「うおおおッ！！悪魔、最高じゃねぇか！何、これ！何、これ！チョーテンション上がってきたよ！いまなら秘蔵のエロ本も捨てられ――――」

とそこで真顔で考え込むイッセー。てかよかったな。俺はテンション下がる一方だ。

「いや、エロ本はダメだ。アレはダメだ。俺の宝だ。お袋に見つけられるまではやっていける！それとこれは別だ。うん、別だ！」

「フフ。おもしろいわ、この子」

リアス嬢が笑う。いや、おもしろいじゃなくおかしいだろ、常考。

「あらあら。部長が先ほどおっしゃっておられた通りですわね。『おバカな弟達ができたかも』だなんて」

といって黒ポニーがにこやかに笑う。いやいや、確かに俺はバカだが、イッセーはおバカなレベルじゃないからな。てか、なんかどっかずれてないこいつらッ！？

「というわけで、イッセー。私の下僕というわけでいいわね？大丈夫、実力があるならいずれ頭角を表すわ。そして、爵位をもらえるかもしれない」

「はい、リアス先輩！」

「違うわ。私のことは『部長』とよぶこと」

「部長ですか？『お姉さま』じゃダメですか？」

お、お姉さまて・・・、こいつもう本格的にだめなんじゃないかな？つか、それを真剣に悩まないでくれよ、リアス嬢。

「うーん。それも素敵だけれど、私はこの学校を中心に活動しているから、やはり部長のほうがしっくりくるわ。いちおう、オカルト研究部だから。その呼び名でみんなも呼んでくれてるいるしね」

「わかりました！では、部長！俺に『悪魔』を教えてください！」

うん。言葉だけきいたら素晴らしいが、動機が不純すぎだ・・・

「フフフ、いい返事ね。いい子よ、イッセー。いいわ、私があなたを男にしてあげるわ」

といってイッセーのあごをなでるリアス嬢。・・・なにをどうつっこんだらいいかわからない。

「ハーレム王に俺はなるっ！」

「いやいやいや！！『海賊王に俺はなる』てきなのりでいうなよ！！てかおまえは杉崎か！？杉崎なんか！？超高性能副会長なんか！？」

・・・聞いてないぞ、コイツ。目が超キラキラしてるよ。

と、思い出したように俺の方を向くリアス嬢。

「進はどうなの？爵位に興味は？」

「ないな」

「あら？本当？爵位をもらって成り上がりたくないの？」

「ないな」

「あら、即答。なぜかしら？」「だって、めんどくさいだろ？そんな権利やら爵位は、俺には必要ない。必要とも感じない。もっていても使わないだろ、それに俺は使わないものは持たない主義だ」

「じゃあ、女性には？イッセーのようにハーレムに興味は？」

「それもないな」

「・・・それはなんでかしら？」

「ぶっちゃけ、興味ない。それに女性って扱いが難しいだろ？そんなことは超一級フラグ建築士がやることで、俺はまったくもって興味がない」

それに・・・女性が恐いって身にしみてるからなぁ・・・。あんな存在とは付き合いたくない・・・

「じゃあ、何を目的に生きてくのかしら？」

目的？それなら簡単だ。

「親父を血祭りにすることだな」

そう、俺の人生を奪い去った存在をぶちのめすのが目的だ！

「・・・現段階では無理なの？」

リアス嬢が戸惑いながら聞いてくる。フッ・・・そんなの。

「無理だな」

「・・・・・・・・」

いや、無理だって。アレ殺すのはまだ無理だって。冗談で水面を走る奴にはまだ勝てないって。

「あ、あともう一つある」

「な、なにかしら？」

顔をひきつらせながらリアス嬢が聞いてくる。俺の夢は全世界のオタクの夢だ！

「あぁ、二次元に行くことだ！！」

「「「・・・・・・」」」

その場にいた全員が絶句した。さっきまではしゃいでたイッセーもだ。な、なんだよ！そんな哀れむような視線は！

「次元を越えることが目標って・・・」

「予想斜め上すぎますわ・・・」

「変人、です」

「あ、あはは・・・」

「進も十分ヒドいよな・・・」

な、なんとでもおもいやがれ！けどおまえらならわかるだろ！？リアルなんていうとこからログアウトして二次元にログインしたいだろ！？俺達、二次元人の永遠の夢だろ！？さあ！同士よ！俺と一緒に叫ぼう！

「二次元に、俺は行くッ！！」

悪魔（のしもべ）始めました～爵位と目標～（後書き）

・・・夢だよね、僕らの。二次元に行きたいよね・・・、嫁たちとキャッキャッウフウフしたいよね・・・

アンケートの途中経過

オーフィス　小猫　ゼノヴィア　五票

朱乃　黒歌　四票

ロスヴァイセ　二票

イリナ　九重　一票

とりあえず、アンケートですけど締め切りを一巻の終わり頃にします。

あと、コートの名前も募集中です。

追記、なんといつのまりやら三万ＰＶ越えと五千ユニーク越えしていました。さらにお気に入り登録数も五十越えです。ありがとうございます。非才の身ですがこれからも足掻いていきます！

次回は土日中には。

悪魔（のしもべ）始めました～汗と気のせい～（前書き）

とまあ更新です。書いてて思ったんだけど、本当にイッセーの扱いがヒドい。加減したれよ、進・・・

あと、微妙にフラグを！たてる？

悪魔（のしもべ）始めました～汗と気のせい～

その後、部長（この呼び方で俺と一悶着あったがこの際はぶく）から悪魔の基本的な事を教わった。

まず、集まりは旧校舎のオカルト研究部の部室。時刻は深夜。なんで夜かというとそっちの方が悪魔の力が発揮されるからだそうだ。悪魔だから闇の世界になると力が増すらしい。うん、そのせいでゲーム機が何台壊れたか・・・

あと、朝がさらに弱くなった理由も悪魔になったからだそうだ。悪魔は光を嫌う。光が強いと体に悪いんだとさ。俺が学校にいけなかった理由も悪魔に転生したてだから日の光に慣れていなかったからだそうだ。え?もともといってないだろ?んなばかな（笑）人間の頃でも昼からはいってたぜ?

俺もイッセーも悪魔になって日が浅いから、まず悪魔社会の仕組みについて勉強しないといけないらしい。・・・やだな、勉強。てか、したって覚えられる訳ないじゃねぇか。まあ、今のところこのチラシ配りを夜中にしてればいいだけなんだが、もうしばらく続きそうだ。

あ、あとは学園についてだ。俺の通ってる駒王学園は部長の領土になってるしいくて、部長は学園の裏の支配者らしい。学園のお偉いさんも悪魔関係者でグレモリー家に頭があがらないらしいぞ?つまり学園はリアス嬢の私物みたいな感じだ。そのおかげで夜中に学園に集まれるんだがな。・・・今度頼んだら成績あげてもらえるかな?

んで話はチラシ配りになるんだが、魔法陣がかかれたチラシを謎の

機械で点滅してるお宅に届ける。この謎の機械なんだが、悪魔の科学が生んだ秘密道具らしい。・・・これが登場したとき某ＮＥＫＯ型ロボットが道具を出すときの音を口にしてしまった。いや、だってね？お約束でしょう。

携帯ゲーム機似でそれプラスタッチパネル式だ。意味もなく力が入ってるな。なんか、悪魔ごとに人間界で活動できる範囲は決まってるらしくて、その範囲内でしか仕事――つまり、人間との契約で相手の願いを叶えることだ。代償としてお金や物、最悪命をもらうらしい。まあそんな命をかけるやつなんて滅多にいないらしがな。

んでこの謎の機械に点滅してるところが欲が強い人間がいる家ってわけ。点滅が続く限り、俺のスーパーボール的な移動は止まらない。悪魔になったおかげか他の人間や警察に認知されなくなった。なんでも仕事中は人間に存在を認識されないようだ。試しに不法侵入したんだが、不幸にもハードゲイ真っ盛りな家に行っちまってな・・・、アレはヒドかった・・・・

そ、それから悪魔の活動時間はよるだけらしい、なんでも昼は神やら天使やらの時間なんだとさ。チラシは使い捨てらしいから、味をしめた人間が悪魔に願いを叶えたくなったらまたポストにブチ抜かないといけない。・・・何回も同じことしてたら一回キレちまってさ、人のいえのポストに風穴あけちまった。あ、あはは。

まあ、詰まるところこのチラシ配り、まだまだ続くってわけだ。はぁ・・・だりぃ・・・・

「早く人間に――――、じゃなかった、妖怪人間か俺は。早く二次元にいきたーい！」

そう叫びながら、ポストを破壊しながらチラシを詰め込んでいった。

――――――――――――――――

ある日の放課後？実は今日学校が終わってから登校してきたからどういえばいいんだろうな？遅刻？欠席？まあいいや、ぶっちゃけ部活しに学校にきた。・・・なんだよ、昨日徹夜で『空の境界』見てたんだよ。幹也マジでパネェよ。

俺は旧校舎の玄関でイッセーと待ち合わせして二人で部室に向かっていった。ちなみに普段のチラシ配りはコウモリやらネズミやらを使役して擬人化してやってるらしい。そらまた便利だな。

あ、あとほかの部員の名前、前つけたあだ名通りで呼んだら怒られた。おもにチビスケと黒ポニーに。けど理由をイッセーが話したら納得してくれた。・・・してくれたんだが、あの哀れむような目を向けられたきがしたが気のせいだよな？ハゲとメガネの前でそう呼んだらつかみかかってきたが返り討ちにしてゴミ箱にねじ込んでおいた。いやー傑作だった。・・・と、部室に到着した。

「はいりまーす」

イッセーがそう言ってから入ると、すでにほかのメンツは揃っていた。・・・てか、なにさこの教室。窓はしめ切って暗幕かけてるし、床には火のつけられたロウソクがあるし、うん怪しい。

「来たわね」

俺達を確認したら、黒ポニーに指示を送る部長さん。いやそらぁ、こいっていったのアンタですから。

「はい、部長。じゃあまずはイッセーくん、魔法陣の中央へきてください」

イッセーはその指示に従いながら中央に向かっていき、そこで止まった。あん？なにすんだ？

「イッセー、進。あなた達のチラシ配りはもう終わり。よくがんばったわね」

笑顔でいってくる部長さん。なんだ、終わりか。案外楽しくて好きだったんだがな。

「改めて、あなた達にも悪魔としての仕事を本格的に始動してもらうわ」

「おおっ！俺達も契約取りですか！」

「ええ、そうよ。もちろん、初めてだから、レベルの低い契約内容からだけれど。小猫に予約契約が二件入ってしまったの。丁度いいから進とイッセーにいってもらうわ」

「・・・よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げてくるチビスケ。堅苦しい奴だな。

「進、少し魔法陣に入ってるわ。移動してちょうだい」

「ん？ああ、了解」

俺が魔法陣から離れると魔法陣が青白く光りだした。

「あ、あの・・・」

「黙っていて、イッセー。朱乃は、いまあなたの刻印を魔法陣に読み込ませているところなの」

ほう、魔法陣にね。パソでゆうとエロゲをインストールしてる感じか？え？ちがう？

そういや、部長が眷属悪魔にとってこの魔法陣は家紋のようなものだって言ってたな。つまり、召喚するもの、契約を結びたいものにとって、これが俺たちを表す記号になる。魔力とやらの発動もこの魔法陣を絡めたものになるんだと。モヤシたちの体にはこの魔法陣が大小各所に書き込まれていて、魔力の発動と一緒に機能するそうだ。俺やイッセーはそれよりも先に魔力コントロールから始めないといけないらしい。

「イッセー、手のひらをこちらに出してちょうだい」

部長さんの指示にイッセーが従い、左手を部長に向ける。すると部長がイッセーの手のひらをなぞる。なぞり終えたら、イッセーの手が光り出す。よく見てみると魔法陣のようだ。なるほど、さっきは魔法陣を書いてたのか。

「これは転移用の魔法陣を通って依頼者のもとへ瞬間移動するためのものよ。そして、契約が終わるとこの部屋に戻してくれるわ」

ほぇー、便利だなぁー。

「朱乃、準備いい？」

「はい、部長」

そういって黒ポニーが魔法陣の中央から離れていく。

「さあイッセー、中央にたって」

部長にそう促され、イッセーは中央に立つ。瞬間また強く光り出す魔法陣。おお、なんか光がイッセーのオーラにみえる（笑）

「魔法陣が依頼者に反応しているわ。これからその場所に飛ぶの。到着後のマニュアルは大丈夫よね？」

「はい！」

「いい返事ね。じゃあ、行ってきなさい！」

うおおおお！マジか！？ワープすんのかワープ！？いーなぁー！めっちゃいいなぁー！かっちょいいなぁー！俺もはやくしたいしたいしたぁぁぁぁい！！

うおっ！？なんかさらに光出したぜ！？くっ・・・・まぶしぃー！

そしてイッセーが瞬間移動を――――！！

――――――――――移動を・・・・・い、動・・・を・・・・。
あれ？イッセーさん、そのままにして光が消えちゃったんですけど？どゆこと？

周りをみると、部長は額に手をあて、困り顔を浮かべ、黒ポニーは「あらあら」と残念そうな顔をし、モヤシはため息をついていった。

「・・・イッセー」

部長が目を点にしているイッセーを呼ぶ。

「はい」

「残念だけど、あなた、魔法陣を介して依頼者のもとへジャンプできないみたいなの」

・・・はい？今なんて仰いましたか？ｐｌｅａｓｅ　ｋｉｌｌ　ｍｅ　ａｇａｉｎ，ん？ちがうな。まあいいや。

「魔法陣は一定の魔力が必要なやけだけど・・・。これはそんなに高い魔力を有するものではないわ。いいえ、むしろ悪魔なら誰でもできるはず。子供でもね。魔法陣ジャンプなんて初歩の初歩だもの」

えーと？つまり？

「つまり、イッセー、あなたの魔力が子供以下。いえ、低レベルすぎて、魔法陣が反応しないのよ。イッセーの魔力があまりにも低すぎるの」

な、なんだってぇー・・・。つまり、あいつは子供以下だということか？

「な、なんじゃそりゃぁぁぁぁ！？」

叫びだすイッセー。いや俺でも叫びだしてるわ。これじゃあ依頼者のもとにいけないんじゃないか？だって遠回しに役立たずっていわれてるみたいなもんだ。

「・・・無様」

ぼそりと無表情で呟くチビスケ。うん、俺なら首を吊ってるな。

「今日からイッセーは役立たず、か・・・」

「シャレにならねぇよ！！」

すると黒ポニーが困り顔で部長さんに尋ねる。

「あらあら。困りましたわねぇ。どうします、部長」

「判決、死刑」（↑進声まねリアスｖｅｒｓｉｏｎ）

「ゴオオオオオオオ！マジですか！？」

「えぇ、マジよ。ほら早く死になさい。そして二酸化炭素削減に協力しなさい」（↑進声まねリアスｖｅｒｓｉｏｎ）

「ううっ、わかりました。部長がそういうならこの命ッ！！ここでたってたまるかぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

そう叫びながら俺の方を向くイッセー。チッ・・・バレたか。

「やめろよ！そうやって傷心してる俺の心に塩塗りこむみたいなことやめろよ！危うくマジで死ぬとこだったよ！」

あん、俺がそんなことするわけないじゃないか。まったく、イッセーは疑い深いな。親友の俺を疑うなんて。俺、泣いちまいそうだ。

「ちくしょうッ！！もう少しで長年ウザイと感じていた害虫が死ぬところだったのにッ！！まあいい、またのきかいで死なせてやるぜッ！！」

「今思ってることと言ってることがまったくの逆だろッ！！超穏やかな顔しるのに言ってることが残酷だから余計傷ついたわッ！！てか、どっちなんだよ本心！！」

アン？そらぁ・・・

「口に出したほうじゃね？」

「余計悪いわばかたれぇぇぇ――――――ッ！！」

そういってＯｒｚ状態で泣き出すイッセー。なんだよ、ようやく自分の存在価値がわかったのかよ。まったく、気づくの遅いぜ。おまえはいるだけで悪影響を及ぼすんだからな。

すると右から人の気配を感じた。振り向いてみるとそこにはチビスケが。

「なんだ？チビスケ。なんかようか？」

「・・・本道先輩、イッセー先輩に容赦ないですね」

「容赦？あれぐらいでイッセーが凹むかよ。ましてや泣き出すなんて」

そうそう、あの程度今までに比べたら屁でもないだろうに。アイツ、いじられ検定「１０級」の持ち主だからな。

「・・・思いっきり泣いてるように見えるんで――――」

「ちがう、アレは全部汗だ」

「・・・汗、なんですか？思い切り『うわぁぁぁん』って言ってるように聞こえるんですけど・・・・・・」

「それは気のせいだ。イッセーはあの程度で泣くようなヤワな奴にしつけ――、じゃないな。ヤワな奴じゃない！！」

「今、躾っていいかけましたよね？」

「気のせいだ」

「いやでも――――」

「全部気のせいだ」

「・・・は、はい」

ふぅー、どうやら納得してもらえたようだ。まったく、理解してもらうのも大変だ。ん？さっきから考え込んでたリアス嬢が話し出した。

「イッセー」

「は、はい」

「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。イッセー！」

「はい！」

「前代未聞だけれど、足で直接現場へいってちょうだい」

「あ、足！？」

そ、その手があったぁぁぁぁ！！やべぇよ！ウチの主、マジ天才だよ！

「えぇ、チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。仕方ないわ。魔力がないんだもの。足りないものはほかの部分で補いなさい」

「チャリですか！？チャリでお宅訪問！？そんな悪魔存在するんですか！？」

ビシッ。

無言でチビスケと俺が指を指す。もちろん俺は中指を。

「ほら、いきなさい！契約を取るのが悪魔のお仕事！人間を待たせてはダメよ！」

そういってまた汗をながしながら、

「う、うわぁぁぁぁぁん！がんばりますぅぅぅ！」

部室をダッシュで出て行った。

―――――――――――――――

「「「・・・・・・」」」

無言。静寂がこの教室に訪れる。イッセーが走り去って一分。この静寂は継続されていた。うん、なんか空気がね。

「う、うん。気を取り直して、進。貴方のもしましょう」

といってくる部長さん。え？マジで？あの事故の直後に俺しなきゃならんの？ど、どうにかして回避しなくては・・・

「あ、あ～～・・・、部長さん。」

「なにかしら？」

「いやその、な？今、しないとダメか？」

「正当な理由があるのなら、別にかまわないけど。可能ならしてもらいたいわ」

くっ・・・、正当な理由だと?んなもんあるのか?否!諦めるな!頭の中の何色か知らない細胞をフル稼働すればなんとかなる!!・・・・・・・はっ!閃いた!

「実は、俺まだこの体に慣れてなくてな、それでまだ俺も走っていきたいなぁーと」

「なれてない?どういうことかしら?体に不具合でも?」

「いや、そうじゃなくてな。ただ単に、悪魔になったから身体能力があがったろ?もとが異常だったからさらに異常になっちまってまだ加減がよくわからないんだ。そうだから俺もイッセーのように自分の足でいきたいんだよ。自分の体の具合をみながらさ」

「あぁ、そういうこと。・・・まぁそういうことならわかったわ。じゃあ、足でいってきてちょうだい」

よし!回避したぜ!いやぁー危なかったなぁー。さすがは俺の何色かわからかない脳細胞だ。

「けど、また同じように準備するのも面倒だから、今回は魔法陣でいってちょうだい」

回避できませんでしたぁー(笑)

「朱乃、準備して」

「はい、わかりました。進くん、少し待ってて下さいね」

「・・・はい」

結局こうなるのか、ＧＯＤ。天を仰いでいると隣にいたチビスケがしゃべりかけてきた。よく喋るなコイツ。

「・・・先輩、優しいんですね」

ＨＡＨＡＨＡＨＡ、何を言ってるのだろうか、このチビスケは。

「おまえ、今すぐ脳外科か眼科いってこい。どこをどうみたら優しいになるだよ」

「だって、さっきのイッセー先輩の事を気遣っての事じゃ」

「・・・」

この子、よくわからんこだなぁー・・・。俺は一ミリもそんな事思ってないんだが・・・。ほ、本当だからな！

「・・・違うんですか？」

その言葉に軽く微笑んでそしてこう答えた。

「それこそ気のせいだ」

そう言って、魔法陣の中央に歩いていった。

悪魔（のしもべ）始めました～汗と気のせい～（後書き）

とまあ、こんな感じ。小猫ってこんな感じだったか？次回はあれです。契約ですよ。フッ・・・なめるなよ？うちの進が！普通な事ができると思うなよ！

途中経過は

朱乃　ゼノヴィア　六票

オーフィス　黒歌　小猫　五票

ロスヴァイセ　イリナ　二票

九重　ソーナ　一票

コートの名前ですが、能力がわからないから答えにくい、という意見を貰いましたからしばらく保留にします。能力がわかった時にまた募集します。

悪魔（のしもべ）始めました～ドアと茶菓子～（前書き）

さて、更新です。

言い訳はただ一つ、勉強とギャルゲに夢中になっていただけだ。いやだってね？「失われた未来を求めて」だよ？激おもしろいんですけどッ！！そして一番の魅力はグラフィックですっ！！皆さんもこのまま携帯で画像検索してみてください。ここまできれいなのみたことないよ・・・・

悪魔（のしもべ）始めました～ドアと茶菓子～

「みーつめるＣＡＴ'ＳＥＹＥ!ｍａｇｉｃ　ｉｓ　ｐｌａｙｄａｎｃｉｎｇ!緑色にひかぁーるー！」

知ってたかい?この曲、発売から五週連続でオリコンチャート一位取り続けて、最後には甲子園のテーマソングになったらしいぜ?マジパネェな。ま、俺は『ｃｉｔｙ　ｈｕｎｔｅｒ』の方が好きだがな。十トンハンマァァァァ――――ッ!!!!!

まあ、こんな感じでノリノリで名曲を歌いながら契約待ちの人間の所に『ＣＡＴ'Ｓ　ＥＹＥ』の人たちがやっていたように屋根の上を走ってるのよ。あ、ちなみに歌い方としては・・・そうだな、『キューティーハニーを歌う諏訪?さん風』だな。まあ、ニコニコにあがってるからみて見なされ、腹筋が捻れ狂うから。そういやタグに、『我が腹筋、捻れ狂う』ってかいたっけな。

あん?なんでワープしなかったんだって?いやだって、なぁ?あんな事故があった後じゃ呪われてるかもしれないだろ?ワープしたら、イッセー菌が体内に入って、『おっ?い症候群』がでるかもしれないだろ?やだよ、そんなのやだよ!だからとりあえず登録だけして、風のように逃げたのさ。

とまあ、こんな経緯から絶賛スーパーボール状態なわけだが、目的地までが案外遠いんだよな。最短ルートからなのにあと五分はこうしてないといけないようだ。はぁ・・・たりなぁー・・・・・

――――――――――――――――――――

「ここ、か・・・」

走ること15分、ようやく到着した。五階建てのマンションだ。手元の機械にはここの四階をしめしている。そこに依頼者がいるわけだが、まったく、この俺にこんなことさせやがって。何様のつもりだよ。とりあえず床がへこむくらい土下座させんぞこら。

「はぁ・・・ダルいな」

そういって俺はマンションのフロントの方へと向かう。ひろいロビーを通り過ぎ、そのままエレベーターへ。

「四階と・・・」

エレベーターにのり、ボタンを押した後、壁に寄りかかる。するとエレベーターが動き出し、上へと向かっていった。

―――――――――――――――――――――

「・・・」

エレベーターから降りて先ほど確認した部屋の前に立つ。一応へんてこ機械で確認したからまず間違いないと思う。まぁ、間違っていても、今は仕事中だから依頼者以外の人間には認識されないわけだから大丈夫なんだがな。

「この場合、普通ならピンポンなんだけどな」

コンコン

ドアをノックする。いやなんでもノックしないといけないらしいんだよな。理由は、しらないけど部長が念を押されて言われた事なんだよ。

「・・・・・・?」

ノックして十数秒、一向に人が出てくる気配がない。アレ?おかしいな?電気がついてるし。場所も間違いないはずなんだが・・・

「すんませーん!悪魔グレモリーの使い魔なんスけど、召喚した家ッスか?」

ノックと交えて言う。だが、一向に出てくる気配がない。・・・・・なんか、腹立ってきたな。俺は人をムシるのは好きだが、ムシられるのは大嫌いなんだよ!だが、俺は大人だ。まだこの程度怒るわけがない。

「オラッ!!」

怒ってはいないが、イライラした腹いせにドアを蹴破るくらいはしちゃってもかまわないだろ?

「あ、あーーッ!!ド、ドアがッ!?」

すると、ドアの向こう部屋の住人らしき人がドアの惨劇をみて駆け寄ってくる。いや、加減したから壊れたないって。鍵をかける機能以外わ。

「お、おま、おまえ何してるんだよ!?」

俺を確認するやいなや突っかかってくる村人A。

「いや、ノックをあろう事かこの俺が二回もしてやったのに、一向に出てこなかったから蹴破って差し上げだのですがなにか？」

「色々とツッコミ所はあるけど、まず君の沸点の低さにビックリだよ！？あと、その超上から目線がスッゲー腹立つ！！」

「チッ・・・うるさい奴だな。ドアを蹴破ってやったのに感謝の言葉もないのか？いったいどういう教育を受けてきたんだ？」

「そらこっちのセリフだよ！人の家のドアを蹴破ってるのにまったく反省の色がみえない！！誰のせいでドアが壊れたと思ってるんだよ！？」

「あんただろ？」

「全部おまえのせいだよ！！」

――――――――――――――――

とまあ色々、ギャーギャー騒いでしまったせいで、ほかの住人から苦情がくるのを避けるために家の中にあがってやった。

「おい、村人B。おまえは客人に茶も出さないのか？ふざけるのも対外にしろよ？」

「お前こそ対外にしろよッ！！俺、人生ではじめてここまで上から目線な奴と会話したよ！！」

「そうか、それはめでたいな。おい、日本酒を用意しろ。俺としては松の司が飲みたい」

「誰も感謝なんてしてねぇよ!!つか、何気に要求があがってる!?」

まったく、どうしてそうやって騒ぐんだ。俺はこんなにも落ち着いてるのに。

「それで?あんたは何者なんだよ?」

と言いながらお茶をだしてくる、モブキャラC。ったく、早く出せっての。

「だから、悪魔だって。あんたさっきチラシ使ったろ?それできたんだよ・・・ズズ」

・・・・まずい。安物だな。風味の欠片もない。ただの色の付いた水だ。いや、水というか、あえていうなら緑色の泥水だ。

「う、うそだ!?おまえみたいな奴が悪魔なわけ・・・あれ?なんでか否定できない!?なんか悪魔ってこんな感じかもって思ってしまう!?・・・・・・・と、とにかく!!俺の知ってる悪魔じゃない!!悪魔ならチラシを使ったらすぐにくるはずだし、それに俺が呼んだのは小猫ちゃんだ!」

こいつ、遠まわしに俺が悪魔みたいな性格だっていいたいのか?

「今回が俺のはじめての仕事だから、無理言って徒歩できたんだよ。それにあのチビスケは人気らしくて、今日は代役で来た。おら、わ

かったらとっとと願いを言え。あと茶菓子だせ」

「迷惑極まりないからとっとと帰ってくれ!!それが俺の願いだ!!」

「その願いは却下だ。そんな事は契約したら叶うから違う願いにしろ。あと、茶菓子」

「何でおまえが願い事を選んでるんだよ!?ふつう逆だろ!?あとでないよ!!」

なんだと!?茶菓子が出せないっていうのか!?ふざけんな!!茶菓子目当てでここまできたのに・・・

「じゃあとっとと願いいえやコラッ!!シバくぞワレッ!!」

「茶菓子がでないってだけでそこまでおこるなよッ!!厚かましいんだよッ!!」

「んなことねぇよッ!!子供の頃はな、近所のおばあちゃんから『進くんはいつもなにかせがんでくるわねぇ』ってよくいわれたんだぞッ!?」

「間違いなくそれは厚かましい行為ですッ!!」

「んなことどうでもいいからとっとと願い事言えッ!!」

「チッ・・・わかったよ!!ちょっと待ってろ!!」

そう言ってイスに座りながら考え出す通行人Z。いやしかし、なかなかいい家にすんでやがる。２ＬＤＫぐらいあるぞ？

「じゃ、じゃあハーレ・・・」

「却下」

「即答ッ！？つかなぜに俺の願い拒否られてんのッ！？」

「いや、俺が個人的に嫌だから。あと同じ理由で金持ちも却下」

「なんでだよッ！！なんでおまえに俺の願いを選ばせないといけないんだよッ！！」

「ここでは俺がルールだ。解ったか？使い捨てキャラ」

いまだ名前もでていないじゃないか。

「あんたホント容赦ないなッ！？てかおかしくないッ！？ふつうなら立場逆じゃないッ！？願いを叶えるためにきたんじゃないのかよッ！？」

「俺、他人が幸せになる願いは叶えない主義なんで」

「じゃここにきている意味ないじゃないかッ！？」

「意味ならあるぞ？アンタみたいな奴のリアクションみて楽しんでる」

「もう、なんもいえない・・・」

――――――――――――――――

それから１０分。被害者Ａからでてくる願いを却下し続けていた。
そしたらさすがに泣き出して

「じゃあなになら叶えてくれるの？」

と言ってきた。

「アン？俺がきめていいのか？」

「ぶっちゃけ、なんでもいいからとっととかえってほしい・・・」

まったく、困った依頼者だな。優柔不断にもほどがあるな。

「そうだな・・・明日、髪がレインボーカラーになるとかは？」

「不自然すぎるわッ！！何ッ！？朝になって鏡みたら自分の髪が七色になってるのッ！？もう外にでれないよッ！！」

文句の多い奴だ。髪の色くらいかえたら名前だって出てくるのに・・・。最悪でも『レインボーヘアー』という称号がつくのだが。

「じゃあ・・・明日デートするとかは？」

「あ、まあそれなら・・・。あ、相手は？とびっきりの娘がいいんだが・・・」

興奮気味にいってくる、レインボー（仮）

「あぁ、まかせろ。とびっきりの・・・ブロッコリーとデートさせてやる」

「まじかよッ!?いやぁー楽しみだなぁー!俺、明日とびっきりのブロッコリーなんかとデートしてたまるかぁぁぁぁぁッ!!!!」

おぉ、すげーなコイツ・・・。流れるようにツッコミに変えたぞ?

「なんで、俺ブロッコリーなんかとデートしなくちゃならないのッ!?つか恐いわッ!!街中歩いてたら、片手にブロッコリーもった奴がチラチラとブロッコリーみて頬赤める奴がいたら恐怖で固まっちまうわッ!!」

「おまっ、世の中にはなぁッ!!キンチョールとデートして業務用ホッチキスを愛人に持ってる奴がいるんだぞッ!?それに比べたら、ブロッコリーなんてまだ植物だろうがッ!!まだましだよッ!!」

「確かにましかもしれないけどそれでも十分おかしいからッ!!」

「うん、まあ、確かに・・・アイツおかしいわ」

・・・イッセー、はっきり言おう。一般常識的におまえはおかしいという事が今判明された。

「しかし、だとしたら俺からの考えはもうないぞ?どうするんだ?」

「二つだけ!?それも髪の色かえるのとブロッコリーとデートする

の二つだけッ！？」

「俺の全力だ。もうなにもでない」

「ギャグ方向にはホントに全力でしたねッ！！」

―――――――――――――――――

そこから小一時間話し合った結果、『明日の仕事が休みになる』にきまった。理由はなんか疲れたからしいんだが・・・。まったく、最近の若者は脆いな。ただ仕事しただけで疲れるなんて。

「んじゃま、契約ありがとさんと。そんじゃ、お暇させていただきやす」

「・・・・・」

なんか、契約し終わった後からずっとソファーでぐったりとしているんだが。なんかあったのか？まぁいいや。そのまま玄関に向かい靴をはく。さっき鍵をぶっ壊したドアノブに手をかけて外にでようとしたとき、大事な事を言ってなかったのを思い出した。これだけは言っておかないとな。

「次はちゃんとお茶と茶菓子用意しとけよ。じゃあな」

それだけ告げてエレベーターの方に歩いていく。途中で「二度と呼ぶかクソボケェェェェ――――ッ！！」って聞こえたが、どこかで、夫婦喧嘩でもしているのだろうか？まったく、時刻を考えてくれ。はた迷惑だな。

そのままエレベーターに乗り、一階を選択し、ロビーを通り過ぎて自動ドアから出た所で呟いた

「はぁ・・・前途多難だな・・・・・・」

そういって俺は、来たときと同様に、ＣＡＴ-Ｓ　ＥＹＥを歌いながら帰ることにした。

―――――――――――――――――――

「・・・・・」

次の日の放課後。部長が怒っていた。いやそらぁもう怒っていた。なんだ?あれの日か?

「２人して前代未聞だよ」

とモヤシが苦笑しながら言ってくる。

「・・・まず、イッセー?」

うわぁーおー、コワーイー・・・

「はい!」

「依頼者と漫画のことを語って、それからどうしたのかしら?契約は?」

そう、イッセーは契約をとらず、ずっとドラグ・ソボールを依頼者と語っていたらしい。なんか楽しそうだな。

「け、契約は破談です・・・。あ、朝まで依頼者の森沢さんと、とある漫画のバトルごっこをして過ごしてしました！」

「バトルごっこ？」

「は、はい！ま、漫画のキャラを演じて、お互い空想の戦いを繰り広げる行為です！」

え？嘘だろ？その年でごっこ遊びしてたのか？・・・・・・・・何もいえないぜ。

「じ、自分でも高校生として恥ずかしい――いえ、いち悪魔として恥ずかしいと思えてなりません！は、反省はしてます！すみませんでした！」

・・・けど、楽しそうだな、ごっこ遊び。久々にしたいな。

「・・・契約後、例のチラシにアンケートを書いてもらうことになっているの。依頼者の方に『悪魔との契約はいかがでしたか？』って。チラシに書かれたアンケートはこの紙に表示されるわけだけど・・・」

ほう、だったら俺の方にも書かれてるはずだが、まあ悪くない評価だろうな。相手は泣いて頼んでたし。

「・・・『楽しかった。こんなに楽しかったのは初めてです。イッセーきんとはまた会いたいです。次はいい契約をしたいと思います』・・・。これ、依頼者さんからのアンケートよ」

おう。なかなか胸を打つていい話じゃないか。やっぱりイッセーには不思議な魅力があるよな。

「こんなアンケート、初めてだわ。ちょっと、私もどうしていいかわからなかったの。だから、少しイッセーに対する反応に困っていたの。ごめんなさい」

「悪魔にとって大切なことは召喚してくれた人間との確実な契約よ。そして代価をもらう。そうやって悪魔は永い間存在してきたの。・・・今回のイッセーのけんは、私も初めてでどうしたらいいかわからないわ。悪魔としては失格なんでしょうけれど、依頼者は喜んでくれた・・・」

と、さっきまで困り顔をしていた部長が笑みを浮かべる。

「でも、面白いわ。それだけは確実ね。イッセー、あなたは前代未聞尽くめだけれど、とても面白い子ね。意外性ナンバー1の悪魔なのかもしれないわ。けれど、基本のことは守ってね。依頼者と契約を結び、願いを叶え、代価をもらう。いいわね?」

「はい!がんばります!」

とかなり気合いをいれて言い放つイッセー。まあがんばれよ。

「さて、次は・・・進なんだけれど・・・・」

とさっきまでの笑みを消し、また困り顔で話し出すリアス嬢。ん?俺なんかしたっけ?

「イッセーとは逆にちゃんと契約をとってきたわね。まあお願いとしては低いレベルの願いだったから、代価もたいしたものじゃなかったけど、一回目としてなら及第点よ」

「あ、あぁ・・・そらどうも」

と、褒めて?くれているはずなんだが、なぜまた困り顔してるんだ?

「ただ、アンケートがね?私もいまいち意味が解らないのよ」

「なんて書いてあったんだ?」

「・・・ただひとこと、『悪魔のような奴だった』ってね」

「・・・・・」

え?なに?そら悪魔何だけどさ、なんでアンケートにそれを書くんだ?意味がわからんぞ?

「進?とりあえず、昨日の契約の話を聞かせてちょうだい」

「ん?あぁ、了解」

といって説明をするが、結局わからずじまいだった。だって俺、普通に玄関から入って、普通に会話して、普通に契約して、普通に帰ってきたってだけだ。どこにもおかしな点なんてない。

「進?お話って何をはなしたの?」

「アン?いつも通りにだぜ?適当に思いついた事をポンポンと。チ

ビスケが来れなかった理由とか、俺が新人だって話ぐらいだよ」

「そう・・・変ね？話を聞く限りおかしな点なんてないのだけれど？」

ホントに何でなんだろうな？

悪魔（のしもべ）始めました～ドアと茶菓子～（後書き）

とまあ、横暴性が非常に高かったな、今話・・・

進ってギャグパートでホントにヒドいと書いてて感じたよ（笑）

しかし、俺の書いてる作品のギャグはおもしろいのか?ほとんど思いつきでかいてるんだが・・・。まあ、ぶっちゃけ思いつきで書いてるようなもんだよな。

アンケートの途中経過はかわらずです。いや、ハーレムになぜか三票入ってたな?今、ヒロインの人数でまた悩んでます。やっぱり三人はちょっと・・・

悪魔（のしもべ）始めました～駒と特性～（前書き）

とまあ更新なのです、はい。

・・・暑い。なんだよ、この暑さッ！！節電しろって世間で言われてるが、あまりの暑さにクーラーをオール完備しちまってるよッ！！節電する前に太陽の光をどうにかしてくれ・・・。ジメジメした暑さが一番堪える

あと、今話はギャグ控えめ。それじゃどうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました～駒と特性～

「二度と教会に近づいちゃダメよ」

俺やイッセーが本格的に悪魔稼業を開始して数日がたったある日の夜。とてつもなくご立腹な様子の部長がイッセーに言い放つ。

なんでも、イッセーは今日の昼頃に教会の関係者の人と会ったらしく、危うくその人に連れられて教会に入るところだったらしい。んで、その事を部長さんに話したら大変お怒りになられているのでありますよ。

「教会は私たち悪魔にとって敵地。踏み込めばそれだけで神側と悪魔側の間で問題になるわ。今回はあちらもシスターを送ってあげたあなたの厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけれど、天使たちはいつも監視しているわ。いつ、光の槍がとんでくるかわからなかったのよ？」

とかなり怒気をはらませていうリアス嬢。てか、物騒だな。近づいただけで即ドンパチか？みなさん、カルシウム足りてますか？

「教会の関係者にも関わってはダメよ。特に『悪魔払い』は我々の仇敵。神の祝福をうけた彼らの力は私たちを滅ぼせるほどよ。神器所有者が悪魔払いなら尚更。もう、それは死と隣り合わせるのと同義だわ。イッセー」

「は、はい」

おー、おっかな。眼力がスッゲー強い。ま、それだけ真剣にイッセ

ーを心配してくれてるってことなんだろうけどさ。つか、俺も気をつけないとな。

「人間としての死は悪魔への転生で免れるかもしれない。けれど、悪魔払いを受けた悪魔は完全に消滅する。無に帰すの。――無。何もなく、何も感じず、何も出来ない。それがどれだけのことかあなたはわかる？」

・・・いやいや、無って言われてもわからんて。死ぬのとなんか違いがあるのか？まあ、理由を言われても俺の頭のスペックじゃ理解は無理だがな。

「ゴメンなさい。熱くなりすぎたわね。とにかく、今後は気をつけてちょうだい。・・・進もよ」

「はい」

「うえ～～～～い」

とまぁ、要約すると教会には某『幸せを幸せと感じることのできない外道麻婆神父』がいるから近づくなってことか？え？違う？だったら、『超絶毒舌シスター』がいるからか？え？違う？じゃあ、誰がいるんだよ？金ピカか？青タイツか？てか、神父キャラってラスボス的なキャラが多いなぁー・・・

「あらあら。お説教はすみましたか？」

「おわっ」

と、さっきこっそり（↑俺からしたらバレバレだったが）入ってイ

ッセーの背後をとっていた黒ポニーが話し出す。

「朱乃、どうかしたの？」

という部長さんの問いかけに少し顔を曇らながら黒ポニーが言う。

「討伐の依頼が大公から届きました」

――――――――――――――――

――はぐれ悪魔。

そういった存在があるらしい。爵位持ちの悪魔に下僕にしてもらった者が、主を裏切り、または主を殺して主なしとなる事件が極稀にあるとかないとか。

んで、そういった野良犬による被害を最小限に抑えるために、見つけだして、主人、もしくは他の悪魔が消滅させるのがルールなんだと。

これは、天使や堕天使側でも言われてることらしくてはぐれ悪魔がいたらみつけしだい殺すんだとさ。

まあ、野良犬を野放しにするってのは良くないことだしな。

というわけで、我々オカルト研究部一同。町外れの廃屋近くにきておりまーす！！テンション高いなって？いや、ただでさえ暗いのにさらに暗くしてどうするんだよ。

なんでも、ここで毎晩はぐれ悪魔が人間をおびき寄せて食ってるら

しいぜ?そうか、悪魔の主食は人間なのか、あるあ・・・ねぇよ。

「リアス・グレモリーの活動領域内に逃げ込んだため、始末してほしい」っていうのがお偉いさんから届いたもんだから、こうしてクエストを受託して目的地へ向かっているとです。

時刻は深夜。辺りには背の高い草木が生い茂っていて、そのさきに廃屋が見える。夜でも目がきくのが悪魔なんだとさ。

「・・・血の臭いがひでぇな」

「・・・はい」

そうさっきから廃屋に近づくたびに血の臭いが強くなっていく。隣にいたチビスケは制服の袖で鼻を覆っている。臭いのキツさからして、一人二人が犠牲になったわけじゃないな。

そして、もう一つ。近づくたびに強くなってるものがある。それは周囲に満ちている殺気と敵意だ。まあ、イッセー以外のメンツからしたらこれくらい普通みたいらしいがな。俺?この程度、そよ風より優しく感じるよ。伊達に毎度毎度親父に殺されかけてないよ。

「イッセー、進。2人にはちょうどいい機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

その部長の一言に少し驚く。まさかいきなり戦わせるとは。

「いやいや、リアス嬢。俺はともかく、イッセーにはちょっとまだ早いだろ。さすがに無理がある」

「まあ、確かにね。進は大丈夫でもイッセーにはまだ無理ね」

いやいや、そんなバッサリ言ってやるなよ、傷ついてるぞイッセー・・・

「でも、悪魔の戦闘を見ることはできるわ。今日2人には私たちの戦闘をよく見ておきなさい。そうね、ついでに下僕の特性を説明してあげるわ」

「下僕の特性？説明？」

怪訝そうな表情を浮かべながらイッセーが部長を見る。うん？どういう意味だ？

「主となる悪魔は、下僕となる存在に特性を授けるの。・・・そうね、頃合だし、悪魔の歴史を含めてその辺を教えてあげるわ」

そういって俺とイッセーに現在の悪魔の状況を説明し始める。

「大昔、我々悪魔と堕天使、そして天使を率いる神は三つ巴の大きな戦争をしたの。大軍勢を率いて、どの勢力も永久とも思える期間、争い合ったわ。その結果、どの勢力も酷く疲弊し、勝利する者もいないまま、戦争は数百年前に終結したの」

部長さんの言葉にモヤシが続ける。

「悪魔側も大きな打撃を受けてしまった。二十、三十もの軍団を率いていた爵位を持った大悪魔の方々も部下の大半を長い戦争で失ってしまったんだ。もはや、軍団を保てていないほどにね」

次に黒ポニーが口を開ける。

「純粋な悪魔はそのときに多く亡くなったと聞きます。しかし、戦争は終わっても、堕天使、神との睨み合いは現在でも続いています。いくら、堕天使側も神側も部下の大半を失ったとはいえ、少しでも隙を見せれば危うくなります」

「そこで悪魔は少数精鋭の制度を取ることにしたの。それが『悪魔の駒』――」

部長の話で気になる単語が出る。

「イーヴィル・ピース？」

イッセーも疑問に思ったらしく、部長に聞いている。

「なんスか、それ？」

「爵位を持った悪魔は人間界のボードゲーム『チェス』の特性を下僕悪魔に取り入れたの。下僕となる悪魔の多くが人間からの転生者だからって皮肉を込めてね。それ以前から悪魔の世界でもチェスは流行っていたわけだれど。それは置いておくとして。主となる悪魔が『王』。私たちの間で言うなら私のことね。そして、そこから『女王』、『騎士』、『戦車』、『僧侶』、『兵士』と五つの特性を作り出したわ。軍団を持てなくなった代わりに少数の下僕に強大な力を分け与えることにしたのよ。この制度をできたのはここ数百年のことなのだけれど、これが意外にも爵位持ちの悪魔に好評なのよね」

「好評？チェスのルールでか？」

「競うようになったのよ。『私の騎士は強いわ！』、『いえ、私の戦車のほうが使える！』って。その結果、チェスのように実際のゲームを、下僕を使って上級悪魔同士で行うようになったのよ。駒を生きて動く大掛かりなチェスね。私たちは『レーティングゲーム』と呼んでいるけれど。どちらにしても、このゲームが悪魔の間では大流行。今では大会も行われているぐらいだわ。駒の強さ、ゲームの強さが悪魔の地位、爵位に影響するほどにね。『駒集め』と称して、優秀な人間を自分の手駒にするのも最近流行っているわ。優秀な下僕はステータスになるから」

・・・きにいらねぇな。つまり、お偉いさんの娯楽のために人生狂わされる奴が出てきちまうってことかよ。そんなに自分の栄誉や評価が大切かよ。

「そのゲームにはもう部長たちは出たりしてるんですか？」

とイッセーが部長に向けて質問をぶつける。

「私はまだ成熟した悪魔ではないから、公式な大会などには出場できない。ゲームをするとしても色々な条件をクリアしないとプレイできないわ。つまり、とうぶんはイッセーや進、ここにいる私の下僕がゲームをすることはないってことね」

「じゃあ、木場たちもそのゲームをしたことはないってことか？」

「うん」

イッセー達のやりとりを横目に、俺は臨戦態勢に入っていた。そう、さっきまで満ちていた殺気がこちらに凝縮されたのを感じたからだ。

「部長、俺の駒は、役割や特性って何ですか？」

・・・そういや、特性やら役割やらなんか言っていたな。けどなイッセー。

「イッセー、その話は後っぽいぞ？やっこさん・・・ようやく出てきたぜ？」

「――――――ッ！？」

凝縮された殺気がさらに深さを増す。どうやらイッセーも感じ取ったようだ。まあ、ここまで敵意剥き出しにしてるのに気づかない方がおかしいが。そして、何かの気配が近づいてくる。

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？甘いのかな？苦いのかな？」

・・・なんかイライラする声色だ。今すぐ相手の喉を潰したくなるぐらい嫌な声だよ。

「はぐれ悪魔バイザー。あなたを消滅しにきたわ」

部長が声を高らかに言い放つ。すると――――、

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ・・・・・・。

とても人間がだすような声じゃないモノが聞こえてくる。・・・さらに腹が立つな。人語を話せ、人語を。

暗がりから姿をゆっくりと何かが現れる。・・・上半身裸の女だ。少し、目を凝らしてみる。するとそこには下半身が獣の体をしていた。上が女で下がバケモノ・・・、とりあえず、整形してこい。んななりしてたらまず間違いなく男はよってこねぇよ。

さらに細かくみてみると、両手には獲物としての槍が一本ずつ、下半身は四本足があり、すべて太く、爪も鋭い。尾には蛇が見える。ん？蛇は独立して動くのか？大きさも五メートルは軽くある。うん、正真正銘の『見た目バケモノ』だ。よし、見た目バケモノ賞をやろう。てか、ようやく悪魔っぽいのが出て来たな。

「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れまわるのは万死に値するわ。グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげるわ！」

「こざかしぃぃぃ！小娘ごときがぁぁ！その紅の髪のように、おまえの身を鮮血で染め上げてやるわぁぁぁぁぁ！」

中2病＆amp;死亡フラグ乙

「雑魚ほど洒落のきいたセリフを吐くものね。裕斗！」

「はい！」

部長の呼びかけでモヤシが飛び出す。おー、なかなか速い。

「イッセー、進。さっきの話の続きをするわ」

話？特性がどうってやつか？

「裕斗の役割は『騎士』、特性はスピード。『騎士』となったものは速度が増すの」

部長の言うとおり、モヤシの動きは徐々に速くなる。うん、結構速いな。俺といい勝負ができる、か？てか、野良犬の方よ。ただ振り回してるだけじゃねぇか。槍の使い方がなっちゃないぜ？双槍よりまずナイフで刃物の使い方から習い直してこい。んな使い方じゃ、まずあたらねぇよ。

「そして、裕斗の最大の武器は剣」

そして、足を止めたモヤシの手には鞘に収まった西洋剣が握られていた。ん？なんかいきなり剣が出てこなかったか？あれも魔法か？

モヤシはそのまま剣を鞘から抜く。そして、再び走り出す。そして敵が認識するよりも速く、両腕を切り落とした。

「ギャァァァァアアアっ！！」

敵の悲鳴が木霊し、両腕から鮮血が飛び散る。

「これが裕斗の力。目では捉えきれない速力と、達人級の剣さばき。ふたつが合わさることで、あの子は最速のナイトとなれるの」

確かに、剣はちとかじったぐらいはあるが、あのモヤシの腕はかなりのだというのはわかる。間違いなく、剣じゃ上手だよ、あのモヤシ。

悲鳴を上げるバケモノの足下にはいつの間にやらチビスケが立っている。なんかユラユラとでってったが大丈夫か？

「次は小猫。あの子は『戦車』。戦車の特性は――――」

「小虫めぇぇぇぇぇっっ！！」

その言葉と同時に、野良犬はチビスケを踏み潰しにかかる。しかし、バケモノの足は地面につくことはなく、チビスケに全衝撃を受け止められた。え？マジで？あのチビスケがか？

「『戦車』の特性はシンプル。バカげた力。屈強なまでの防御力。無駄よ。あんな悪魔の踏みつけたぐらいでは小猫は沈まない。潰せないわ」

ん？今なんて？バカげた力？屈強なまでの防御力？ま、まさか・・・俺って・・・・。

グンッ！！

完全にバケモノの足を持ち上げてどかすチビスケ。

「・・・・ふっ飛べ」

チビスケは空高くジャンプし、バケモノの腹に拳を撃ち込む。拳の威力にバケモノの体が後方に吹き飛ぶ。

いーパンチしてるなぁー・・・。みなさん、今日のチビスケのは薄めの水色だぞ。うん、ロリコンなら感激で涙していたろうな。俺？残念ながらリアルには興味なしだ。

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。あらあら、どうしようかしら」

黒ポニーが笑みを浮かべながら、さっきの一撃で倒れこんでいるバケモノのもとへ歩みだす。

「朱乃は『女王』。私の次に強い最強の者。『兵士』、『騎手』、『僧侶』、『戦車』、すべての力を兼ね備えた無敵の副部長よ」

「ぐぅぅぅぅ・・・・」

近づいてきた黒ポニーを睨みつけるバケモノ。それをみてまた笑みを浮かべる。

「あらあら。まだ元気みたいですね？それなら、これはどうでしょうか？」

そういって黒ポニーが天に向かって手をかざす。すると――――

カッ！

文字通り、天からの一撃。バケモノに雷が落ちた。

「ガガガガッガガガガッガガガッッ！」

それを受けて苦悩な声をだすバケモノ。うわ、全身黒こげだ。・・・ロケット団かよ。

「あらあら。まだ元気そうね？まだまたいけそうですわね」

カッ！

再び雷がうち下ろされる。いやい、もう瀕死じゃね？元気じゃなくね？

「ギャァァァァッッ！」

それを受け、また声をあげるバケモノ。これで終わったかと思ったら、三発目が落下する。

「グァァァアアアアッ！」

いやいやいや、やりすぎだろ。黒ポニー、ちょっと加減しようよ。ん？あいつ・・・うわぁ、メッチャ楽しんでるよ。笑ってるし。

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。雷や氷、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。そして何よりも彼女は究極のSよ」

あ・・・なるほど。俺が感じてたのはそこか・・・。黒ポニーはお母様と同じで、ドSなのか・・・・・・。俺、泣いちゃいそうだ・・・

「普段、あんなにやさしいけれど、一旦戦闘となれば相手が敗北を認めても自分の興奮が収まるまで決して手を止めないわ」

えー・・・まじかよ。なんという自己中・・・。

「・・・うぅ、朱乃さん。俺、怖いっス」

たぶん、俺と同じでイッセーの頭の中ではお母様がでてるだろうなぁー・・・。二人してガキの頃、メッチャ怒られたから、もうトラウマもんだよな・・・。

「怯える必要はないわ、イッセー。朱乃は味方にはとてもやさしい人だから、問題ないわ。あなたのこともとてもかわいいと言っていたわ。今度甘えておあげなさい。きっとやさしく抱きしめてくれるわよ」

「え？俺は？」

「進は・・・・・・。まあ、敵とは認識はされてなかったはずよ？」

いやいやッ！目をそらしてボソッというなよ！！怖いじゃねぇかッ！

「うふふふふふ。どこまで私の雷に耐えられるかしらね？ねぇ、バケモノさん。まだ死んではダメよ？トドメは私の主なのですから。オホホホホホッ！」

・・・もしかしたら、一歩間違えていたら、あそこでこんがりされてたのは俺だったかもしれないのか・・・

それから数分間、黒ポニーのＳＭショーが続いた。

―――――――――――――――

黒ポニーが一息ついたのを確認したら部長が完全に戦意がなくなったバケモノのもとへ歩き出す。そして、地面に突っ伏すバケモノに向かって、部長は手をかざす。

「最後に言い残すことはあるかしら?」

おーう、慈悲深いねぇー。

「殺せ」

バケモノの小さく声を発する。

「そう、なら消し飛びなさい」

すると、部長の低い、冷たい声音とともにどす黒い魔力の塊が手のひらから撃ち出される。塊はバケモノの全身を包み込み。そして、魔力が宙に消えたとき、バケモノの姿も完全に無かった。文字通り、塵も残らなかったな。

「終わりね。みんな、ご苦労さま」

やれやれ、全員がその気だったら、あんなの瞬殺できたろうに。わざわざ、わかりやすレクチャーするためになぶるとか、鬼畜すぎだろ。

しかし、これが悪魔の戦いね・・・。嬉しいね。コイツらみたいに強いがまだまだいっぱいいるなんてさ。ちょっと、期待したくなるな。

しかし、なんか忘れてる気がするんだが・・・。あぁ、そうだ。

「部長さん、聞きそびれたんだが」

「何かしら？」

「俺やイッセーの駒・・・、下僕としての役割はなんなんだ？」

「あ、そうだったそうだった。部長、どうなんですか？」

思い出したようにイッセーも聞いてくる。しかし、なんとなく、予想はついてるんだが・・・

答えをまつ俺達に『紅髪の超絶美少女、リアス・グレモリー』（↑超棒読み）がハッキリ告げる。

「進。あなたは『戦車』よ。あなたには『戦車』の力をあげたわ」

ですよねぇー（涙）あぁ、日常生活が著しく困難になった理由が今解明されたよ・・・

「そして、イッセー。あなたは『兵士』よ」

俺の相方は、どうやら一番下っ端らしい。

悪魔（のしもべ）始めました～駒と特性～（後書き）

はい、今回はギャグが少なく戦闘しやしたね。まあ次回はクソ神父登場だッ！！・・・・・コトミーじゃないよ？

一応、この小説の大まかな流れは考えているんですが、二巻のライザー編・・・考えついた話がまあヒドい・・・・。ライザーが、ね・・・・・。まあ別にいいよね？だってリア充だもん？文字通り、リア充爆発させてやるよ？

アンケートは前から変化なしだ。あとやっぱりヒロインの人数を２人にします。コロコロ変えてすみません。

一巻の半分ぐらいで１７話・・・。もう少し、頑張るか。あ、進の駒は『戦車』ですが、ロスヴァイセファンのみなさん、安心してください。大丈夫、ちゃんと眷属としてだしますから。どうやってかって？それは話が進んだらわかりますよ（笑）

悪魔（のしもべ）はじめました～神父とソファー～（前書き）

はい、更新です。

ちょっと私事でいそがしくて。

では、どうぞ。

「まずいわね・・・」

契約からかえった手前、我らがオカルト研究部の部室に俺、本道進が戻ってきて、ドアを開けて三歩進んだときにリアス嬢が言った一言が耳に入る。

部室にはイッセーを除いたメンバーが少しピリピリした雰囲気を放っていた。

「？おい、部長さん。なんかあったのか？」

「ん？あぁ、進。帰ったのね。無事でなによりよ」

リアス嬢の言葉に疑問が湧く。無事？なぜに体の心配をされてるんだ？

「そりゃあ、まあな。てか、なんだよ？危ない事でもあったのかよ？」

今回の契約もいつも通り、スーパーボール式移動術、『ハネハネ虫』を使って現地に向かって、依頼者と契約、そのままスーパーボール式移動術、『跳ねます・・・超跳ねるでござるッ！！』を使って帰ってきた。もう何度もしてきたことだから、ケガをするなんてことはないんだが・・・。ちなみに、俺が契約すると、毎回依頼者が涙してるか脱力しきってるかの２つなんだ。・・・・・なんでだろう？

「えぇ、少しマズいことになったのよ。・・・朱乃、とりあえずあっちにいくわよ。魔法陣の準備を」

「はい、部長。小猫ちゃん、手伝ってくれるかしら？」

「・・・はい」

部長の指示で、なにやら準備を始める黒ポニーとチビスケ。ん？なんだなんだ？わけがわからんぞ？

「あのさ、部長さん。いったいなにがあったんだ？」

「イッセーが襲われてるの」

「はぁ？」

え？襲われてるて、誰に？〇女にか？それともハードなゲイに？

「『悪魔払い』にだよ。」

と、いつの間にやら剣を携えたモヤシが立っていた。・・・いつ得物をとってきたんだよ・・・

「『悪魔払い』ってのは確か・・・、なんだったけ？」

すまん、スッポリ忘れた。さすがは俺の虹色の脳細胞。ご都合主義だなぁ（笑）

「神や堕天使によって強力な力を与えられ、悪魔を滅ぼす存在、だよ」

「あぁ、そうだったそうだった。サンキューモヤシ」

えっと、そいつらが今、イッセーを襲ってるわけだから・・・。

「ヤバいじゃん、イッセー危ないじゃん」

「だから焦ってるのよ」

部長さんが嘆息しながらいう。

「てか、よくわかったな。イッセーが襲われてるって」

エスパーですか？

「前回、前々回と。契約は破談になるけれど何故か依頼者の評価が抜群だったから、どうしてかしらと思って使い魔を使って確認してたの、そしたら――」

「『悪魔払い』が依頼者の家に待ち受けていたんだ」

部長とモヤシの懇切丁寧な説明で、俺とアイツにプライバシーがないことが判明した。俺たちに人権はないのか？

「しかしマズいわね。イッセー、大丈夫かしら・・・」

心配そうな顔をしているリアス嬢。モヤシも同様に、少し顔を強ばらせる。

「まあ、大丈夫じゃね？イッセーだし」

「え?」俺の一言に意外そうな顔をするリアス嬢。いやいや、何故にんな面をする?

「イッセーと俺の付き合いってさ、だいたい十年くらいなんだよ、その十年の中で俺が何回イッセーを殴ってると思う?」

「さ、さぁ?あなたの事だから、軽く一万くらいは越えてるのじゃないかしら?でも、今それは関係ないんじゃ――――」

「それがあるんだよ。俺、人を殴るとき無意識で急所を狙っちまうんだ。後頭部とか顎とか、喉とかさ」

「とてつもなく迷惑な無意識だね」

そういわないでくれ、モヤシ。全部親父のせいなんだから。俺は悪くねぇよ。

「それを十年近く受けてるイッセーはさ、俺と同じで無意識でよける。もしくは急所をはずすように動くようになっちまったんだよ」

「「・・・・・・」」

俺の言葉に絶句する二人。なをともいえない表情をしてるぜ。かまわず俺が続ける。

「おまけに体の耐久度も上がってるから。余程の力の差がなければすぐには殺されないだろ」

「そ、そう。なぜかしら、とてつもない説得力があるわ・・・」

「・・・同感です」

そのお陰で、アイツは良質なサンドバ・・・ゲフンゲフン。打たれ強くなったからよしとしようや。

「部長、準備が整いましたわ」

俺と部長、モヤシが話をしている間に準備が終わったらしい。教室の床にはかなりの大きさの魔法陣。

「ありがとう、朱乃。・・・みんな、あっちには『悪魔払い』がいるわ、戦闘になることは覚悟して。油断しないように！」

「「「はい！」」」

俺以外のメンバーが返事をする。と、今度は部長が俺の方を向く。

「進、あなたは・・・」

「『残っとけ』とかいったら、今すぐその髪剃り落として、寺に出家させて尼さんにすっからな」

睨みながら答える。しばしの沈黙が俺と部長の間に流れる。と、先に口を開いたのは部長だ。

「・・・わかったわ。ただし、足手まといには――」

「なめんな、んな中途半端な実力じゃねぇよッ！！」

にんまりと、いたずらをするガキのような笑みを作る。それをみた部長や他の連中も薄く笑みを作り、そして――

「――――――いくわよッ！！」

「「「はいッ！！」」」

「あいよッ！！」

部長のかけ声とともに、全員魔法陣の上に乗った。

――――――――――――――――

魔法陣による転移。一言で感想を述べるとしたら、文字通り『一瞬』だった。青白い光を強くはなったと思ったら、次の瞬間には真っ暗な空間だぜ？ビックリだわ。う～ん、暗がりでよくわからんが、どうやらどっかの家の中らしい。

「す、進ッ！？みんなッ！？」

声がした方を向く。そこには、俺達が現れた事に驚いている『ぼろ雑巾』が一枚。

「あん？なんだおまえ、イッセーか。ぼろ雑巾にみえたぜ？」

「兵藤くん、助けにきたよ」

俺とモヤシがイッセーに話しかける。まあ、生きてて何よりだよ。

「あらあら。これは大変ですわね」

「・・・神父」

そのチビスケの一言で周りを見渡す・・・いた。白髪の若い野郎だ。タメぐらいか？格好は神父みたいな格好だ。あと、美少年だ。あと、すぐ近くに金髪の美少女（この場合、清楚なかわいい系）のシスターがいた。

「ひゃっほう！悪魔の団体さんに一撃目！」

神父が斬り込んでくる。

ガキン！

金属音が鳴り響く。神父の一撃にモヤシが対応していた。

「悪いね。彼は僕らの仲間でさ！こんなところでやられてもらうわけにもいかないんだ！」

「おーおー！悪魔のくせに仲間意識バリバリューですか？悪魔戦隊デビルレンジャー結集ですか？いいねぇ。熱いねぇ。萌えちゃうねぇ！何かぁい？キミが攻めで彼が受けとか？そういう感じなのなの？」

つばぜり合いを繰り広げながら、神父が舌をベロベロと出して、それプラス頭を揺らしていた。野郎・・・、なめやがって！

「・・・下品な口だ。とても神父とは思えない・・・。いや、だからこそ、『はぐれ悪魔払い』をやっているわけか」

「あいあい！下品でござーますよ！サーセンね！だって、はぐれちゃったもん！追い出されちゃったもん！ていうか、ヴァチカンなんてクソくらえって気分だぜぃ！俺的に快楽悪魔狩りさえ気が向いたときにできれば満足満足大満足なんだよ、これがな！」

なおも続く斬り合い。つーか、こいつ二チャンネラーか？最近の神父はスゴいなぁ～…。

「一番やっかいなタイプだね、キミは。悪魔を狩ることだけが生き甲斐・・・僕たちにとって一番の有害だ」

「はぁぁぁ！？悪魔さまにはいわれたかないのよぉぉ？俺だって精一杯一生懸命今日をいきてるの！てめぇら、糞虫みてぇな連中にどうこう言われる筋合いはねぇざんす！」

「悪魔だって、ルールはあります」

「え？あるの？」

微笑みながら言う黒ポニーだが、視線がするどぉい。あと、俺の一言が原因かしらんが、チビスケにチョー睨まれてるっす。

「いいよ、その熱視線！お姉さん最ッ高ッ！！俺を殺そうって思いが伝わってくるよぉ！これは恋？違うねぇ・・・、俺は思うよ。これは殺意！最高！これ最高！殺意は向けるのも向けられるのもたまらんねぇッ！！」

あのネラー神父。ドMなのか？

「なら、消し飛ぶがいいわ」

声がした方をむくと我らが部長さんが、そこにッ！！となりにはイッセーがいた。・・・わ、忘れてた訳じゃないからな？

「イッセー、ゴメンなさいね。まさか、この依頼主のもとに『はぐれ悪魔払い』の者が訪れるなんて計算外だったの」

イッセーを謝る部長。俺も近寄り、話し掛ける。

「・・・イッセー、ケガしてないか？血の臭いがオマエからもするぞ？」

「え？あぁ・・・足をな。すみません、その撃たれちゃって・・・」

半笑いで誤魔化そうとするイッセー。・・・いまなんつった？撃たれた？誰にだ？・・・・・アレにか？目の前のクソ神父にか？

「私のかわいい下僕をかわいがってくれたみたいね？」

――――決まりだ。アイツの未来が決まりだ。いいぜ・・・久々にマジギレだ・・・。俺のマジギレの責任をとらせるてやるよ。あぁ、もちろん――――

「はいはい。かわいがってあげましたよぉ。本当は全身くまなくザクザク切り刻む予定でございましたが、どうにも邪魔が入りまして、それは夢幻に――――」

――――半端な責任じゃねぇがなッ！！

「死ね、クソ神父」

奴が話している途中で俺は飛び出す。奴が視認できないほどの速度で、相手に近づく。近づく中、右拳を握る。狙いはあのクソみたいな顔面（ツラ）だ。距離を詰めきる。間違いなく拳が届く距離まできた。そして、いままでの勢いをそのままに相手の左半身の方に左足を奴の足と一直線上になるように踏み込み、奴の顔面に拳を放つッ！！

ドゴンッ！！

自身の右が顔面にめり込む。もちろん、俺が放った拳の威力はその程度で収まるはずもなく。奴は体を後方へと吹き飛ぶ。そして、リビングの家具の一部にあたってとまる。

「おい、たてよクソ神父。手加減したから気絶はしてねぇだろ？てめぇは、ミジンコに生まれ変わった方が幸せだと思うぐらい殴ってやるよ」

「・・・・・・」

神父に反応はない。いまだに、壊れた家具の上で仰向けで倒れている。

「――――――ッ！！」

「――――――――。」

後ろの方で、みんなが話しているようだ。けど、今の俺の頭の中には全然入ってこないが。

「・・・痛てぇ・・・」

むくりと、首だけあげてくる。みると、鼻が変な形をしていて、鼻血がでている。口からも血がでているようだ。

「痛てぇよ、痛てぇよ!、痛てぇよッ!!クソッ!!、クソクソクソッ!!痛てぇじゃねぇか、クソ悪魔ッ!!悪魔になんざに殴られちまうなんてなッ!!」

クソ神父は起き上がり、左側のホルスターみたいなのにしまってあった銃を抜き、俺に向けてくる。

「決まりだッ!!オマエ、殺すッ!!俺がッ!!絶対ッ!!オマエを殺すッ!!」

その顔には憤怒の色が見える。いいぜ・・・、第二ラウンドと――――

「進ッ!!」

「んだよ、部長ッ!!今からいい感じでやり合うんだから邪魔を――」

「今すぐ魔法陣に入りなさいッ!!」

みると、すぐ後ろには青白く光る魔法陣が出現していた。どうやら退却らしい。チッ・・・これからだってのにッ!!

「・・・わぁったよッ!!」

後方に大きくバックステップする俺。すると、剣を携えて斬り込ん

でくるクソ神父。

「逃がすかって！」

瞬間、俺の隣から大きな質量の物が飛んでいく。・・・ソファーだ。
投げだのは・・・間違いなく、チビスケだな。

ソファーが薙ぎ払う頃には、俺たちは部室に転移していた。

なんか、俺。どんどん恨む相手増えてない？

悪魔（のしもべ）はじめました～神父とソファー～（後書き）

とまあ、ちょこっと主人公が活躍。書き終わって気づいたが、アーシア一言も話してないよ・・・まあいっか。

さて、ようやく一巻の終わりまで近づいてきました。あ、ヒロインアンケートのやつは一応、一巻の終わり頃までを期限にしてますんで、まだの人はお急ぎを。

あと、3～4話で一巻終わりかな？

さて、セイクリッドセブンみて寝るか。先週、オープニングとエンディングの曲が入れ替わって流れてた。・・・はじめまったく気づかなかったけど・・・

悪魔（のしもべ）始めました～魔力とコート～（前書き）

まじこいＳのＯＰ公開中ッ！！やべえ、テンションがあがってきたあああああああああ――――――ッ！！！

自分的に、一番好きなヒロインはマルギッテだぁぁぁ――――――ッ！！！！！前作で攻略できなくてどれほど絶望したかぁッ！！わかるかッ！？わかる奴はいるかッ！？いたら返事をしてくれぇぇえええ――――――ッ！！

悪魔（のしもべ）始めました～魔力とコート～

「悪魔祓い（エクソシスト）は二通りあるわ」

さきほどの神父との一戦で負傷したイッセーの足の治療をしながら部長が話をはじめる。

「ひとつは神の祝福を受けた者たちが行う正規の悪魔払い。こちらは神や天使の力を借りて、悪魔を滅するの。そして、もうひとつ。――『はぐれ悪魔払い』よ」

「はぐれ？」

イッセーの問いに部長が頷く。

「またはぐれか？まったく、どこに行ってもそういった集団の中で空気が読めない奴がいるもんなんだな」

苦笑混じりで俺が呟く。すると、部長が顔をこちらを向ける。

「えぇ、あなたみたいに」

「うわ、辛辣・・・、泣くぞゴラ」

俺のプラスチックハートが割れちまいそうだ。落ち込む俺を放置して部長が続ける。

「悪魔払いは神の名のもとに魔を滅する聖なる儀式。だけれど、悪魔を殺すこと自体を楽しむようになるエクソシストがたまに現れる

の。悪魔を倒すことに生き甲斐や悦楽を覚えてしまった輩のこと。彼らは例外なく神側の教会から追放されるわ。もしくは、有害とみなされて裏で始末される」

「始末、ね。中々グロいことをする」

先ほどのようにまた苦笑がでる。なんか、一種の軍みたいだな。

「でも、生き延びるものもいる。そういう輩はどうなると思う？簡単よ。堕天使のもとへ走るの」

「堕天使って黒い翼のですよね？」

「えぇ。堕天使も天から追放されたとはいえ、光の力――悪魔を滅する力を有しているわ。堕天使も先の戦争で仲間や部下の大半を失った。そこで彼らも私たちと同じように下僕を集めることにしたの」

そこで、俺もイッセーも気づいた。

「悪魔を殺したいエクソシストと悪魔が邪魔な堕天使は利害が一致したってことですね？」

「そうよ。『はぐれ悪魔払い』とはそういうこと。悪魔狩りにはまり込んだ危険なエクソシストたちが堕天使の加護を受けて悪魔と悪魔を召喚する人間へ牙をむいたのよ。さっきの少年神父はそれ。背後に堕天使がいる組織に属する『はぐれ悪魔払い』の者。正規の悪魔払いではなくても危険極まりないわ。いえ、リミッターがはずれている文、普通の悪魔払いよりも相当危ないわね。関わり合いになるのは私たちにとって得策ではないわ。イッセーの行った教会は神側ではなく、堕天使が支配しているもののようね」

なるほどね。確かにあんなネラー神父がたくさんいる堕天使陣営に関わるのは危険だわな。まあ、俺としてはあのクソ神父はぶち殺しときたいがな。

「部長、俺はあのアーシアって子を！」

いきなり声を先ほどの三割増しぐらいであげるイッセー。アーシア？アーシア・・・あぁ、あのシスターの事か。というか、知り合いだったのか。

「無理よ。どうやって救うの？あなたは悪魔。彼女は堕天使の下僕。相容れない存在同士よ。彼女を救うってことは、堕天使をも敵に回すことになるの。・・・・・そうなったら、私たちも戦わねばならないわ」

イッセーの態度とは反対に部長は冷静に言い放つ。その言葉には、眷属への配慮が見える。そう言われたイッセーはだまりこくってしまった。

あぁ～・・・、コレはかぁーなり、落ち込んでおりますよ、みなさん。・・・大丈夫か？イッセー。

―――――――――――――――――――――

「あ、進は残ってちょうだい」

イッセーの足の治療が終わり、いざうちに帰ろうとしたら部長に止められる。ったく、何だってんだよ。まあ、主の命令だから従うことにした。イッセーの護衛はモヤシに頼んでおいたから、まあ大丈

夫だろ。

イッセー、モヤシ、チビスケが家に帰り、教室には俺を含めた三人が残る。

「んで？なんだよ、部長さん。これから熱い告白がまってんのかよ？」

冗談まじりに言う。それを聞いた部長もまた軽く笑い。

「ふふ、安心しなさい。間違っても進にはしないから」

「こりゃまたひどい返しだな。まぁ、んな冗談はやめてだ。・・・・・用件は？俺、やることがあるんだが？」

「そのやることっていうのはイッセーのこと？」

・・・驚いた、よくわかりますね。

「まぁ、な。アイツとは付き合い長いから。落ち込んでるときとかよくわかるんだよ」

昔っから、落ち込んでんのがスッゲーわかりやすかったからな。しかし、あれはちょっと重傷だな。

「・・・その件も大切な事だけど、こちらの用件も大切なことなのよ・・・朱乃」

「はい、部長。進君、神器を出していただけませんか？」

「神器？別に構わないが、いったいなにをするんだ？」

俺の問いに黒ポニーが笑いながら、

「進君の神器を解明しますわ」

といった。

――――――――――――――――

テーブルの上には俺の神器である、黒色のコートが広げられている。ちなみにこれ、ボタンがないから前が止められない。コートとしては欠陥品だな。

「さて・・・。まず、進？あなた、コレの能力は確認できた？」

「それがまったく。家で取り出したりして調べてみたが、チンプンカンプンだ」

そう。話は数日前に戻るが初めて神器を発動させた日に部長さんに

「とりあえず、神器については調べておくから、自分たちでもなるべく調べておいて？」と言われたのだよ。んで、言いつけ通り調べてみたが、何もわからず現在に至るというわけ。

「やはり、なにかのアクションがないと発動しないのかもしれませんわ。例えば、持ち主のある感情に反応する、とか」

黒ポニーが意見を述べる。か、感情て？欲望とか（笑）

「・・・なんとも言えないわね。けど、可能性としてはあると思う

わ。でも、どんな形であれ、今までの神器は所有者の意志で能力の発動が出来ているから、そこに例外はないと思うわ」

口元に手を当てながら言う部長。

「じゃ、神器の発現がまだ不完全なんじゃないか？」

「それはないわ。これはもう完全に発現してるもの」

さいですか。

「となると、本格的にわからないわよ？どうしたら・・・・」

「部長やはりここわ・・・」

お二人がなにやら専門的な話を始める。いや、俺は放置ですか？・・・・あ、そうですか。放置ですか・・・

ふんだ・・・自分一人で考えるもん。いーもんいーもんッ！！俺もう明日の夕食の献立、考えちゃうもんッ！！・・・・・・ごめん、キャラじゃなかった。

と、とりあえず考えよう。よーく考えよー、だ。確か、冷蔵庫の中にキュウリともやしが入ってたから、それをまぜてドレッシングで味付けて、あ、あとサバがあったから味噌煮にしてだな。そうそうナスがもあったから煮干しを入れて煮込むか。お吸い物はやっぱりワカメと豆腐だな、鉄板だ。あやべ、ジャガイモの賞味期限が近かったんだどうしようか・・・、ガーリックマーガリンで味付けして温ためて食べるか。いやー、材料がいっぱいあるなぁー（笑）

・・・・・・・・・なんだろう。今引っかかるフレーズがあったよ

うな？なんだろう。『ガーリックマーガリンで味付けして』か？いや違うな。『ジャガイモの賞味期限が近い』いやもっと近かったような。じゃあ、『いやー、材料がいっぱいあるなぁー（笑）』そうだ、コレだよ。なんでひかかったんだろ？

・・・・・てか、なんで俺はご飯の献立考えてんだろ？献立だけなら超健康的な献立が完成してるような・・・だって野菜：肉：ご飯＝５：２：３ぐらいになってるもん。食で一番大事なのは野菜だと思ってるからね。

・・・確か神器の能力について一番はじめに考えてたんだよな？それがなんでこうなるんだよ。神器と料理は関係な――――――――――――――――――――くもないッ！！

そうだ、そうだよ、そういうことだよッ！！料理と一緒だッ！！いやまぁ実際は違うけど・・・、仮定が一緒ってだけだけど。つまり、俺がいいたいのは神器を『完成された料理』と例える。そしてその『完成された料理』を作るには、なんであっても絶対に必要になるもんがある。そう『材料』だ。『材料』がなければ『料理』は作れない。超単純な事だけど、めっちゃくちゃ見落としてた。つまり、『材料』となるものは俺の中から生まれるわけだ。

「なぁ、リアス嬢。わかったかもしれん」

「？なにがわかったの、進？」

俺の言葉に、さっきまで話をしていた二人がこちらを向く。

「神器の発動条件だよ」

「わかったのッ！？」

部長と黒ポニーが驚く。まあ頭が残念な俺がわかったらそら驚くだろうが

「あぁ、この神器つーのは、所有者の力を媒体に能力を発動させるんだったな？」

「え、えぇ。そうですわ。それが絶対条件ですわ」

「じゃあ逆に考えて、神器の発動は絶対に所有者のもっているものに限られるわけだ」

部長が俺の言葉に顔をしかめる。

「そう・・・だけれども。その燃料がわからないから困って――」

「俺さぁ・・・・、自分で言うのもなんだが、体力や精神力は化け物クラスだと思うんだよ」

「・・・進君が人間のデフォルトでしたら三大勢力ではなく四大勢力になってしまいますわ」

苦笑混じりで言う黒ポニー。俺が人間のデフォ・・・こえー。

「そんな関係ない話は――」

「関係があるんだよ。さっきの確認事項からさ。このコートの能力発動には体力や精神力が関わってないわけだ」

そこまでいってようやく俺が言ってることが理解したららしく。驚

愕の顔をするお二人。頭いいなぁーこの人ら。

「ま、まさかッ！？」

「そのまさかだろうよ。たぶんこのコートは俺の――――」

そう、この真っ黒の布切れは、今まで俺が積み上げてきた体力や精神力物には反応せず。逆に最近になって存在を知ったものが燃料となっている。そして、イッセーにとって決定的に足りない物だ。

「――――魔力が燃料なんだろうよ」

――――――――――――――――

といった経緯からコートの燃料を推測したんだが。燃料がわかったから「はい、やってみましょう」とはいかなかった。何でかって？だって魔力のコントロールができないもん。いやいや、最近になって魔力ってもんを知ったんだから、すぐにコントロールなんてできる訳ないだろ。つーわけで早速魔力コントロールの修行を始めた。

「そう、そのままです。そのまま集中して手のひらに魔力を集めてください」

修行を初めて二時間。黒ポニーと部長による魔力の説明をされたが始まって四十秒であきらめて『感覚でやってみよう』に切り替えた。いや、今までそんな感じでやってきたから。やっぱりこっちの方がしっくりくる。

「で、できたぜッ！！」

そうこの二時間の格闘の末。ようやく手のひらに集めることに成功した。色は・・・・かなり濃い青だ。ただ、問題が一つ。

「・・・できては、いますが。そのサイズが・・・」

そう、手のひらに魔力を集めたら、バスケットボール並みの大きさになってしまった。

「ま、まあ。二時間でここまできたらたいしたものよ。量の調節は今後の課題ね」

「そうですね。今回はこれぐらいでやめて、当初の目的通り、神器の能力の判明に移りましょう」

といって、コートを渡してくる黒ポニー。俺はそれを魔力を集めている手の反対の手で受け取る。しかし、実験する前に一つ。どうしても聞きたいことがあった。

「なぁ、能力が発動したら爆発とかしないよな?」

こう、『コート式爆弾』みたいな新しい武器だったりしたらいやじゃん?アフロになる、みたいなギャグ補正がきくとは思えないし・・・

「「・・・・・・」」

「頼むから黙らないでくれ・・・」

不安になるじゃないかぁッ!?・・・・・・もし爆発したら・・・。

えぇいままよッ！！爆発がおきても爆発に当たる前に逃げれば問題ないわッ！！

「いくぞぉぉぉッ！！」

「「――――ッ」」

そっと、魔力の塊をコートに近づける。そして魔力の塊がコートに当たる。そのまま塊をコートの方へ押していくと、コートに当たっている魔力がどんどんコートに吸われていく。だが、まわりや俺の体に一切変化はない。なにかの変化が起こるかと思ったが、どこにも見当たらず手に集まった魔力が吸われつきても何も変化が生まれなかった。

「失敗、か？」

たまらず呟く。やはり俺の推測は間違い――――

「いえ、成功よ」

かと思ったら、部長が声をあげる。成功？今のがか？

「どのへんが成功だよ」

「さきほどの魔力。コートに当たった瞬間。コートに吸収されていきましたでしょ？あれはコートが魔力を吸収していったわけですから、魔力が燃料であることがわかったのです」

「コートの能力は目に見えない形で出ていただけよ」

なるほど、魔力が吸われるなんて事が起きたから、推測通りだったってわけか。

「そうね・・・、次はコートを着てやってみましょうか。進、コートをきてから腕に魔力を集めてちょうだい」

「ん？あぁ、了解」

部長の言葉通りコートに腕を通す。しかし、ピッタリだな。肩幅やら手の長さやらまで完璧だ。

「じゃあ、進君。もう一度集中して、手に魔力を集めてください」

黒ポニーの言葉に従い、集中する。そして、高めた集中をそのままに自身の中にある力を腕に集めるが・・・

「あれ？」

「どうしたの？進」

「いや、手に魔力が集まらないんだ。さっきと同じように、なんかコートの方に吸われて行ってる感じが」

さきほどのように手に魔力を集めようとしているが、魔力が体の外に出ると同時にコートに吸われて行っている。と、俺の言葉に何か気づいたような表情をし、すぐに指示を出す。

「進、そのまま魔力を送り続けてちょうだい。朱乃、ボールペンを持ってきてちょうだい」

「？わかりました、部長」

「別にいいが、なるべく早く頼む。慣れてないし、加減がわからないからすぐにガス欠になっちまう」

そう。さっきから今の俺では細かいコントロールができないから、ずっと同じ量の魔力を腕に送っているのだ。それも含めて、習いたてであるから、体力の消費もかなりのものとなっているのだ。

「部長、お持ちいたしました」

「ありがとう、朱乃」

と、先程の指示通り、ボールペンを持ってきた黒ポニーはそれを部長に渡す。部長はボールペンの先を出して、なぜかそれを俺の左肩に向ける。

「進、現状維持のまま、ボールペンの感触を感じたら言ってちょうだい、わかった？」

「え？あ、あぁ」

まるで状況が読めない中、部長のボールペンを左肩に当たる。だが、――――まったく、当たっている感触がしなかった。第三者や自分からみたらコートに触れているのにまったく感触がないのだ。

「進、少し力を入れてボールペンをつきだすけど、いいかしら？」

「あ、あぁ。続けてくれ」

俺の返事を聞いた部長は頷いてからボールペンを俺の左肩に突き刺そうと力を入れる。しかし、ボールペンは突き刺さらずに停止してしまった。さらに力をいれて部長が押すが――――

バキッ

――――と音をたてボールの先が割れてしまった。

部長は音をたてて割れてしまったボールペンのさきを確認する。そして、黒ポニーの方へ向き、話を始めた。

「今のみた？朱乃」

「はい。――――決まり、ですわね」

「えぇ、間違いないわ」

「ちょ、ちょっと待てよ。何が決まったんだよ」

たまらず俺が声をあげる。当たり前だ。ボールペンの先が割れるほど力を入れて突き刺そうとしていたが、最後まで俺はボールペンの感触を感じなかったのだから。ここまでくると、不思議というより不気味だ。

「進、あなた神器の能力が解ったのよ」

「能力が？いまのでか？」

「えぇ、今ので」

たったあれだけの事で？いやまぁ、俺が頭悪いだけなんだろうけどさ。

「進。あなたの神器は所有者の魔力を吸収している間、コートの強度が飛躍的に上がるの。それはもう、私たちもビックリなくらいによ」

どうやら、また凄い物を引き当てたらしい。

悪魔（のしもべ）始めました～魔力とコート～（後書き）

とまぁ、そんなこんな感じですよ、コートの能力。まぁ、みなさん、余裕で予想がついてたでしょうが。作者的に、あくまで『主人公の武器は拳ッ！！』を貫きます。せいぜい、コートは補助的な感じですよ。

え？なんだって？どっかで見たことがある戦闘スタイルだな？・・・・・あぁ、あぁそうだよッ！！イメージは『キャプテェーーーーーーン・・・ブラボォーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！』だよッ！！なんだよ、悪いのかよッ！！武装錬金面白かったよッ！！あ、ちなみに自分的にパピ☆ヨン（かなり、愛を込めて）の服のセンスはアリです（笑）

さてはて、今ほんっとに悩んでるッスよ。『真剣で私に恋しなさい』の小説を書くか書かないかで。けど書き始めたら絶対こっち放置しちゃいそうだしなぁー・・・。それに今年受験だし・・・。でもなかなか面白いネタが浮かんでるんだがなぁー・・・・・・、どうすれば、どうすればいいんだＧＯＴッ！！

ヒロインアンケートもどきは今現在

オーフィス　七票

以下変化なし。

前の更新後に二票も・・・、オーフィスの人気に愕然ッ！！

あともう少しで、一巻も終わりだね。アンケートまだのかたはお早

めに。

悪魔（のしもべ）始めました～能力と名前～（前書き）

遅くなってすみません。いやぁー、受験なんでいろいろとしてまして？

それではどうぞ？

悪魔（のしもべ）始めました～能力と名前～

ガコン

学園内にある自動販売機で炭酸買ってる今日この頃。いやぁ・・・渇いたのどに炭酸がしみるなぁ・・・

しかし、炭酸は炭酸でもコーラはあまり好きじゃないんだわ。いやだって、あれメチャ甘いじゃん?甘過ぎじゃね?飲み始めから甘過ぎるんだが・・・。けど俺はゼロはまだすきなんだよねー。

・・・なんだって俺はこんなどうでもいいことを考えているのだろうか。

「ふあぁぁぁ～・・・・・・」

しかし、眠い。ヤバいぐらいに眠い。人を罵声しながら寝れるくらい眠い。まあ、その気になれば歩きながら寝れるからいいんだが・・・。けど、極力したくないな。だって、前に一回やってみたらとなりの県までいってたし・・・

つか、こんな眠いのって、間違いなく昨日のあれだよね?神器の実験だよね?どことなく疲れが溜まってるし・・・。まあそのお陰で神器についてはかなり解析できたがね。・・・そうだな。ここらで一つ整理しておくかな。

まず、はじめに俺の神器・・・、ヤベ、今気づいたが神器の名前まだ決めてない。どうしようか・・・、まあ今後の課題だな。とりあえず話を進めよう。

まず、俺の神器の特徴は『防御力』。それもかなりの耐久力をもった防御力だ。強度についてはまだ見定められていないが、さわった感じかなりのものだとわかる。また折り合いをみて細かく調べておくことにしよう。

逆にこのコートの短所は2つ。それはコートが、所有者、つまり俺がコートに対して魔力を送ることにより神器が発動するしくみになっていて、俺が魔力を送らない限り決して能力は発動せず、ただの布切れとなるんだわ、コレが。

だからコートの能力発動条件としては直接俺が魔力を注ぎ込むかたちになる。魔力はコートにふれた瞬間吸われていくため、コートを着てでの戦闘では俺は魔力系の攻撃ができない事になる。コートを着た状態で魔力を手に集めようとすると、体外に魔力が出た瞬間、魔力をコートが吸っちまうからな。いやー、不便だ。

もう一つは魔力の量だ。その後の実験でこのコートはどんなに微弱だろうと俺の魔力なら問答無用で吸っちまうことがわかった。あ？それがどうしたってか？まあ簡単にいうと、コイツにはどうやら送られてくる魔力に対して量の基準があるらしく、その規定の魔力量以上の魔力を送らない限り能力は発動しない。

おまけにコイツは魔力を送り続けていないとたちまち本のコートに戻っちまう。つまり、このコートを長時間使い続けようとするなら、魔力をある一定以上の量をひたすら送り続けないといけないってわけだ。

ちなみに、魔力量を多く送ってもコートの強度に変化はなさそうだ。おくれば送るほど堅くなる、なんて都合の良いもんじゃなかったよ。

しかし、なんつー燃費の悪さだ。今の俺が持続させて使おうとすると、二十秒が限界だ。まだ魔力コントロールができていないし、その規定のラインもわかってない。それがわからない限りこのコートは相当燃費が悪いことになる。まあそこは今後の頑張り次第って事で。

とまあ、こんなところか？短所についてはゆっくり直しておくとして、とりあえず早急に名前を決めないとな。・・・はぁ、誰かいい名前くれないかなぁ。

―――――――――――――――

さきほど買った炭酸を片手に持ち、我らがオカルト研究部へと向かう。昨日は神器について調べていたら朝になり、学校があるからという理由で中止。お二人はそのまま授業を受けるといっていたが、そのときの俺にはそんな気力はなく、真っ直ぐに下校した。いやぁー変な目で見られたよ。登校ピーク時に一人だけ下校してるんだもん。これでまた一つ、へんな伝説が生まれちまった。

家に帰った後はベッド　イン。ついさっきまで寝ていて、少し寝過ごしてしまった。おそらく部室にはもういつもの面子が揃っているだろう。まあ、今日は見事にすべての授業をサボってしまった。文字通り部活しに学校に来ているようなもんだ。

今日はいったいなにをするのだろうか、などと考えている。思いのほか、自分はあの空間が気に入っているのだな。見たことも聞いたこともない事に対しての単純な好奇心だとすぐにわかるが、それでも楽しみなものは楽しみだ。

そんな事を考えながら先ほど我慢できず少し遠回りしてまで手に入れた炭酸を飲み尽くす。すこし冷えているジュースを飲み干し、缶を握りつぶす。そのまま同じ手で違う方向から握りつぶす。それを数回繰り返すと、直径一センチ程度の鉄の塊へと変貌する。それをポケットにいれ、部室へと歩いていく。

向かう先は旧校舎、我らがオカルト研究部。今日も楽しい事があることを、少しだけ期待しようかな。

――――――――――――――――

「チース・・・」

数分後、何事もなく部室に到着する。しかし、教室の中は昨日と同じくらいピリピリとしていた。ん？なんだ？またイッセーがおそわ・・・れてないな。普通に部長さんと話を――――

パァンッ！！

と思ったらいきなり部長さんがイッセーに張り手かましましたよ、みなさん。え？なに？なにがあったの？

「何度いったらわかるの？ダメなものはダメよ。あのシスターの救出は認められないわ」

え？シスター？シスターって、昨日のシスターのことか？そういや、知り合いっぽい雰囲気だしてたような・・・。

とりあえずどういう状況なのかわからないから、教室のソファーに

座っているモヤシとチビスケに聞くことにしよう。

「やあ、本道くん。遅かったね」

「・・・こんにちは、先輩」

俺が近づいていくと、モヤシはイケメンスマイルで、チビスケはあまり表情をかえずにあいさつをしてくる。

「よう、お二人さん。ちょっと寝るのが遅かってな。つい寝過ごして遅れちまった」

「・・・何かしてたんですか？」

チビスケがたずねてくる。表情に変化はないがポテチを食べながらという動作が加わっている。

「ちょっとした調べものだ。つーかそれより、何あの状況？」

イッセーと部長を視線を向けながら開いているソファーに腰を下ろす。うわぁー・・・ふかふかだぁー・・・

「うん、実はカクカクシカジカなんだ」

「なるほど、四角いムーヴなのか」

「・・・祐斗先輩・・・」

俺たちのやりとりをみていたチビスケが睨んでくる。主にモヤシを。

「ご、ごめん。ちょっとした冗談なんだけど」

むしろ、お前が案外絡みやすいことについて驚いたんだが・・・

「んで?今どういう状況?」

――――――――――――――――――――

とまあ、モヤシから簡単に状況を説明された。なんでも、アーシアっていうシスターの女の子が堕天使に攫われちまったから助けにいきたいってイッセーがいっているらしい。

けど、部長からしたら自分の眷属がムザムザ死ににいってしまうのをとめようとしているわけだ。・・・悪魔の主ってみんなこんなに慈悲深いのか?

「そんなことできるわけないでしょう!あなたはどうしてわかってくれないの!?」

それまで冷静にイッセーを諭すようにしていた部長だったが、イッセーの頑固さに痺れをきらしたか声を上げてイッセーを叱咤する。

だが、イッセーはなおも食い下がる。

「俺はアーシア・アルジェントと友達になりました。アーシアは大事な友達です。俺は友達を見捨てられません!」

「・・・それはご立派ね。そういうことを面と向かって言えるのはすごいことだと思うわ。それでもこれとそれとは別よ。あなたが考えている以上に悪魔と堕天使の関係は簡単じゃないの。何百年、何千年とにらみ合ってきたのよ。隙を見せれば殺されるわ。彼らは敵

なのだから」

「敵を消し飛ばすのがグレモリー眷属じゃなかったんですか？」

「・・・」

睨み合う両者。まあ、予想はしてたけど、あの状態のイッセーさん止まらないんだよねー。もう諦めて行かせてやれよ部長。なんて心の中で呟くわ・た・し♪・・・ごめん、ちょっと疲れてるだけだから気にすんな。

「あの子は元々神側のもの。私たちとは根本から相容れない存在なの。いくら堕天使のもとへ降ったとしても私たち悪魔と敵同士であることは変わらないわ」

「アーシアは敵じゃないです！」

「だとしても私にとっては関係のない存在だわ。イッセー、彼女のことは忘れなさい」

残念ながらなリアス嬢。そういって素直に聞くたまだったら、俺は今まで苦労してないよ。

と、部長のもとへそそくさと近づく黒ポニー。そのまま耳元で耳打ちをする。その顔にはいつもの笑顔が消えていた。

黒ポニーが耳元から離れると、部長もまた先ほど以上に険しい顔をする。なんかあったみたいだな。

ちらりとイッセーをみたあと次に部室にいる全員を見渡してから言

った。

「大事な用事ができたわ。私と朱乃はこれから少し外へでるわね」

急な話にすかさずイッセーが噛みつく。

「ぶ、部長、まだ話はおわって――」

しかし、イッセーの言葉を遮るように、部長の指がイッセーの口元へと向かった。

「イッセー、あなたにいくつか話しておくことがあるわ。まず、一つ。あなたは『兵士』を弱い駒だと思っているわね？どうなの？」

部長の言葉にイッセーが頷く。

「それは大きな間違いよ。『兵士』には他の駒にはない特殊な力があるの。それが『プロモーション』よ」

『プロモーション』？聞き慣れない言葉だな。

「実際のチェス同様、『兵士』は相手陣地の最深部に赴いたとき、昇格することができるの。『王』以外のすべての駒に変化することが可能なのよ。イッセー、あなたは私が『敵の陣地』と認めた場所の一番重要なところへ足を踏み入れたとき、『王』以外の駒に変ずることができるの」

それ、なんていうチート？それがあれば状況に一番適した状態で有利に戦闘できるじゃん！！

「あなたは悪魔になって日が浅いから最強の駒である『女王』への

プロモーションは負担がかかって、現時点では無理でしょう。けれど、それ以外の駒になら変化できる。心のなかで強く『プロモーション』を願えば、あなたの能力に変化が訪れるわ」

いーなぁー、俺も兵士がよかったなぁー。プロモーションしてみたかったなぁー。

「それともうひとつ。神器について。まずイッセー、神器を使う際、これだけは覚えておいて」

そういいながら、イッセーの頬をなぞる部長。

「――想いなさい。神器は想いの力で動き出すの。そして、その力も決定するわ。あなたが悪魔でも、想いの力は消えない。その力が強ければ強いほど、神器は応えるわ」

――想い、ね。何事も最後は強い気持ちだと聞くが、それはどこにいっても変わらないのだな。

「そして、進。あなたにも一つあるわ」

こちらを向いて話してくるリアス嬢。

「あ？なに？」

「あなたの神器、その防御力はかなり控えめにみても並みの堕天使の攻撃では傷一つつかない強度よ。だから安心して攻撃をくらいなさい」

「いやいや、攻撃に当たる前に攻撃しますから。そんな怖いこと試

しませんから」
いやだって、堕天使や天使の光は弱点だっていったのあなたでしょ？んなバクチをぶっつけ本番にしたくないですけど・・・

「そう。まあ、それはあなたしだいということで」

その変な期待、やめてくんないっすか？マジキツいッス。

「最後にイッセー、絶対にこれだけは忘れないこと。『兵士』でも『王』を取れるわ。これは、チェスの基本よ。それは悪魔の駒でも変わらない事実なの。あなたは、強くなれるわ」

それを言い切ると部長と黒ポニーは魔法陣からどこかへジャンプした。教室に残ったのは俺、モヤシ、チビスケ、イッセーの四人。

「イッセー」

俺が声をあげる。呼びかけられたイッセーはこちらを向いてくる。

「一つ、確認したいことがある」

「何を？」

「お前が今日あったっていう堕天使、そいつは天野夕麻か？」

俺の復習の対象。俺の親友の敵。悪魔になったあの日から毎日毎日、アレを殺したいと何度思ったかッ！？

「・・・・・・・・・あぁ、そうだ。そこに夕麻ちゃん・・・レイナーレが必ずいる」

ドッと。どす黒い感情が湧き上がる。止めることができないほどに。
際限なく沸き上がってくる感情。

あぁ、そうだ。久しぶりだ。コレは、この感情は、純粋なる殺意だ。
あぁ――やっと、やっとアレを――――

「よし、決まりだ。俺もいくぜ」

「なっ!?進ッ!?」

俺の言葉にイッセーが戸惑う。

「止めるなよ、イッセー。お前に譲れないものがあるように俺にも
譲れないもんがある。それにな、親友が危険な所に1人で行かせる
わけにはいかないんだよ」

「――――ッ!!」

俺の言葉にイッセーが驚愕する。いやだって、親友だぞ?さすがに
いかせらんねぇよ。

「・・・親友だったらそこはさ、止めるのがふつうじゃない?」

イッセーが皮肉気味に言ってくる。みると、少し目が潤んでいる。
なんだよ、なきかけか?

「アホ。何年の付き合いだとおもってんだ?止められないからこう
するんだよ。そんな事ができるならはじめから苦労はしねぇ」

「ハハ、その通りだな」
「だろ？」

2人して笑みを浮かべる。さて、んじゃまそろそろ行くか。
そうして教室をでようと動いた俺達に対してモヤシが話しかける。

「行くのかい？」

「あぁ、行く。行かないといけない。アーシアは友達だからな。俺が助けなくちゃならないんだ」

「俺もちょっとした野暮用でな。いい加減、決着つけないとさ」

「・・・殺されるよ？いくら神器を持っていても、プロモーションを使っても、エクソシストの集団と堕天使を本道君はともかくイッセー君では相手にならない」

ま、正論だわな。地雷原を走り抜けるようなもんだしな。それはイッセーもよくわかってることだろし。2人だけでいったら俺はともかくイッセーは間違いなく死ぬな。さすがに俺もそんな所でイッセーを庇いながらは戦えない。

「それでも行く。たとえ死んでもアーシアだけは逃がす」

「いい覚悟、と言いたいところだけど、やっぱり無謀だ」

「だったら、どうすりゃいいってんだ！」

どなるイッセーにモヤシがハッキリ告げる。

「僕も行く」

「なっ・・・・・」

「ハッ・・・・」

まさかの一言に2人とも驚く。てっきり止めてくるもんだと思ってたんだが。

「僕はアーシアさんをよく知らないけれど、君達は僕の仲間だ。部長はああおっしゃったけど、僕はイッセー君の意志を尊重したいと思う部分もある。それに個人的に堕天使や神父は好きじゃないんだ。憎いほどにね」

・・・コイツ、どこかで俺と似ているな、とは思ってたが。そういうことね。俺と同じで復讐鬼ね。

「部長もおっしゃっていただろう?『私が敵の陣地と認めた場所の一番重要なところへ足を踏み入れたとき、王以外の駒に変ずることができるの』って。これって、遠まわしに『その教会をリアス・グレモリーの敵がいる相手陣地だと認めた』ってことだよね」

「「あっ」」

そういやそんな事いってたな。ってことは、プロモーションの発動条件が揃うじゃねぇか。

「部長はキミにいってもいいって遠まわしに認めてくれたんだよ。もちろん、それは僕にフォローしろって意味合いだとも思うけど。

部長に何か考えがあるんだろうね。じゃなければ、キミを閉じ込めてでも止めると思うよ」

ったく、あのお姫様。素直じゃないことこの上ないねぇー。普通にいやいいじゃねぇか。

と、さっきまで傍観していたチビスケが一歩前に出る。

「・・・私も行きます」

「って、おいおいチビスケ？」

「・・・三人だけでは不安です」

・・・まじかよ。なんだよ、単騎特攻するき満々だったのに・・・。いや、数が少ないのには変わらないが。つーか、このチビスケ。普段なに考えてるか読めないが、本質はかなりのお人好しのようだ。・・・てか、眷属全員そうだな。「感動した！俺は猛烈に感動しているよ、小猫ちゃん！」

隣にいたイッセーが文字通り感無量な表情を浮かべ叫ぶ。

「あ、あれ？ぼ、僕も一緒に行くんだけど・・・・・・？」

放置されてなんとも寂しげに笑みを作る我らが『騎士』様。

「あんま気にすんなよ、祐斗。イッセーもああはしてるがちゃんと感謝してるって」

「え？そ、そうなのかな・・・」

「あぁ、そうだよ色男」

「そうか・・・・・・ってえッ!?」

といきなり、こちらを凝視してくる祐斗。な、なんだよ?なんかしたか俺?

「い、今・・・名前で・・・・・・」

驚愕の表情を浮かべたまま話かけてくる。名前?あぁ、ついさっき覚えたからな。みるとイッセーやはたまたチビスケまでもが驚いている。だから何でだよ。

「あん?なんだよ、名前よんじゃダメなのか?」

「いや、そうじゃないけど・・・」

「だったらいいだろ、祐斗。呼び方ぐらい自由にさせてくれよ。変わりに俺の事も、好きに呼んでいいから」

俺の言葉を聞いて、少しずつ表情が変わる。驚愕から笑顔へとかわっていく。

「わかったよ、進君」

と、まさしくイケメンスマイルでいってきた。いや、野郎にその笑顔を向けてどうするんだよ。

と、そんな事を思っていたらいつの間にやら目の前にチビスケが立

っていた。なんとな・・・いや、確実に不機嫌なのが凄くわかる。

「なんだよ、どうかしたのか？チビス――――――ゲェッ！？」

名前を呼びかけた瞬間、足のすねに有り得ない激痛が走る。たまらず俺がすねを抑えながらうずくまる。なんだこれ？なんだこれッ！？俺なんで蹴られたんだッ！？蹴られるような要素が一つも見当たらないのだけれどッ！？マジでわかんないんだけどッ！？それに蹴ったのに未だにご立腹なチビスケさんがいるんだけどッ！？かなり怖いんだけどッ！？そんでかなり痛いんだけどッ！？

「な、なに、すんだ、チビ――――スガァッ！？」さらに反対のすねも蹴られる。いやだから何で蹴るんだよッ！！いてぇ・・・メッチャいてぇよッ！！もう戦えねぇよッ！！俺にとっての敵はコイツなのかッ！？

「だ、大丈夫か進ッ！？」

「進君、気をしっかり持ってッ！！」

男二人が寄ってくる。心配してくれるのはありがたいが、とりあえず目の前の悪魔を倒してくれ・・・

「こ、小猫ちゃん。どうして蹴ったりしたんだい？」

「そうだよ、なんか進が悪い事したか？」

そう、それだよ。あまりの痛みで言葉がでない俺のかわりに魔王（チビスケ）に聞いてくれ。

「・・・名前」

「「はい？」」

ボソッと零した言葉にイッセーと祐斗がハモる。え？今なんと？

「・・・名前、ちゃんとよんでほしいです」

・・・野郎全員目が点状態だよ。え？そんだけ？俺が名前呼ばなかったかだけで二回もすね蹴られたの？

と、それから「なるほどね」なんて声を出す祐斗。いやだからなにが？

「ゆ、祐斗？とういうこと？まったく解らないんだけど？」

1人納得している祐斗に俺が訪ねる。ようやく痛みがひいてきて、なんとか立てるぐらいになったぜ。

「あぁー・・・、僕が言ったら殺されそうだからやめておくよ」

「いや、それだとなんの解決にもならないからッ！？」

が、俺の叫びも虚しく、祐斗はあらぬ方向を向く。次にイッセーに視線を向けるがコイツも『？』状態だッ！！

「進先輩」

「――――ッ！？」

名前を呼ばれ硬直する俺。マズいッ！マズいッ！！マズいッ！！！ど、どうすればいいんだよッ！？ねぇ、だれか答えてくれッ！？

「名前、ちゃんとよんでください」

といいながら何故けるフォームをとるんですか？またけるんですかね？今度こそ蹴られたらすねが折れそうなんですが・・・

マズい。それは回避しないと。何故か戦う前からピンチなのはこの際もういいや。よくないがいいや。状況からして、俺に原因があるようなのはわかるが、名前ってなんだよ。普通によんでるじゃねえか。どこに問題があるんだよ。普通にあだ・・・名、で・・・・・・・。

それだよッ！あだ名が原因だよッ！？そういやさっきからチビスケって呼ぶ度に蹴られてたよッ！！え？マジでッ！？名前呼ばなかったかだけで俺すね蹴られたのッ！？

「名前を・・・」

といって一歩歩み寄る魔王。けどあってんのかッ！？なんか名前間違えたらまた蹴られそうだよ。こ、今度はどこだッ！？またすね・・・じゃないよな？二回とも違う足だし。だとしたら、一体・・・・・・。ま、まさかッ！？股間かッ！？股間蹴られんのかッ！？あの怪力娘のッ！？全力の蹴りがッ！？俺の股間にめり込むのッ！？間違いなく再起不能になりますねッ！？

ヤバい・・・本格的にヤバい・・・。下手しなくとも死ぬ。人として男として死ぬ。それだけは・・・それだけはッ！！

「早くしないと蹴りますよ・・・？」

「わかった、わかったッ！！わかったからやめてくれ、小猫ッ！！」

・・・ハッ！？

い、いってしまったぁぁぁぁ――――――ッ！？ヤバいよッ！？あってるよねッ！？あってるよねッ！？名前、あってるよねッ！？あってなかったら、間違いなく死んじまうよッ！？ホントに死んじまうよッ！？

「・・・わかりました、もうしません、進さん」

――えッ！？

「今、なんと？」

今、我が耳を疑うような天使の囁きが聞こえたんだが、鼓膜が腐ってんのかな？

「・・・だから、もうしません。ちゃんと名前をよんでくれましたから」

幻聴ではなかったようです。

「今後から、ちゃんと名前でよんでください、進さん」

・・・・・・もう、訳がわからねぇ。あと、祐斗。テメェニヤニヤしてないで助けろや。

悪魔（のしもべ）始めました～能力と名前～（後書き）

とまあ、危機一髪的な感じでしたね、進。なんか小猫、ちょう書きやすくて・・・

アンケートの状況は・・・

オーフィス　朱乃　ゼノヴィア　七票

小猫　六票

黒歌　五票

ロスヴァイセ　イリナ　九重　二票

ソーナ　レイヴェル　一票

予想以上に上位がデットヒート。いやぁーまさかここまでとは・・・。アンケートなのですが、締め切りを次回の更新までとします。まだ票を入れてない方はお早めに。アーシアとリアス以外でお願いします。複数の違うキャラにいれても良いですよ。

最近考えてるんだけど、まじこいに進を放り込んだらどうなるだろうって・・・。どうなるだろ？

悪魔（のしもべ）始めました~足止めと同種~（前書き）

今週はなんてワンダフーな一週間なんだッ！！テイルズの新作がでたよッ！！ヤベェよ、早くしたいよッ！！けど暇がないよッ！！さらにＦａｔｅ／ＥＸＴＲＡ　ＣＣＣが発売されるぅぅぅ――――――ッ！！ヤベェ、ＥＸＴＲＡの続編だよッ！！テンションがあがってきたぁぁぁぁ――――――ッ！！赤セイバーがいるだけで１ヶ月戦えるッ！！キャス狐がいるだけで３ヶ月は戦えるッ！！両方いれば一年は戦えるぜぇぇぇ――――――ッ！！キャス狐がかわいくて死ねる・・・。けど、赤セイバーもかわいくて死ねるよ・・・

けど、どんどん魔法使いの夜が遠ざかる気がする・・・。ｔｙｐｅ－ｍｏｏｎさん、ＤＤＤや月姫２や月姫リメイクも出してほしいが、まず魔法使いの夜を出してください？早くしたいよぉぉぉ――――――――――――ッ！！

悪魔（のしもべ）始めました～足止めと同種～

とまぁ、様々な謎を残したまま俺達は目的地へと向かう。本当になんで俺は蹴られたのだろう、と何回も自問自答したが答えはでなかった・・・。でも、恐怖だけは心に刻み込まれた。もうあまり、小猫の事怒らさないようにしよ・・・

そんな思考を巡らせながら、目的地へと向かう。あたりはもう暗い。道にある街頭が光を発している。現在、俺とイッセー、祐斗や小猫の四人は教会の見える位置で様子を窺っている。

人の出入りは見当たらないが、教会に近づけば近づくほどに悪寒が体中を駆け巡る。アレと初めてあったときと同じように感覚がする。祐斗が言うには、気配からして、堕天使が中に必ずいるそうだ。

「これ、図面」

祐斗が路面に建物の見取り図らしきものを広げる。へぇ、見取り図なんて用意してたのか。

「まぁ、相手陣地に攻め込むときのセオリーだよね」

・・・ごめん。俺や親父のセオリーは、壁をぶち抜いて突撃なんだけど。いや、文字通り壁をぶち抜いてそこから攻める。・・・よく考えたら親父にセオリーなんてなかったな。あの人、気分で作戦決めるし。けど全部似たような感じだし。それに付き合わされる俺の身になってくれ・・・

「聖堂の他に宿舎。怪しいのは聖堂だろうね」

祐斗が地図を見ながら言う。

「宿舎は無視するのか？」

「おそらくね。この手の『はぐれ悪魔払い』の組織は決まって聖堂に細工を施しているんだ。聖堂の地下で怪しげな儀式を行うものなんだよ」

「どうして？」

イッセーの疑問を口にする。それを聞いて祐斗が苦笑を浮かべる。

「今まで敬っていた聖なる場所、そこで神を否定する行為をすることで、自己満足、神への冒涜に酔いしれるのさ。愛していたからこそ、捨てられたからこそ、憎悪の意味を込めてわざと聖堂の地下で邪悪な呪いをするんだよ」

うわぁー、そらまた一段と頭がおかしいことで。はぐれ悪魔払いはみんなそうなのか？でも、あのネラー神父が神なんて敬ってるようには見えなかったんだが・・・

「入り口から聖堂までは目と鼻の位置。一気に行けると思う。問題は聖堂の中に入り、地下への入り口を探すことと、待ち受けているであろう刺客を倒せるかどうか」

刺客、ね・・・。これさ、間違いなく神父フラグだよね？

―――――――――――――――――――

月明かりに照らされながら、俺たちは教会の入り口で顔を見合わせ、頷きあった。さて、行きますかッ！！

ダッ！！

入り口を潜り、一気に走り抜ける。教会に入った時点で、敵は俺たちの侵入を察知するらしい。これでもう後戻りはなしだ。栄光か死か、その2択のみだッ！！

ドンッ！！

俺の蹴りで扉を蹴破り、聖堂に足を踏み入れる。中は長椅子と祭壇。オーソドックスな聖堂だ。いや、聖堂とかきたことないけど、イメージ的に・・・。

ただ、一つだけイメージと異なる点があった。十字架に磔となっている聖人の彫刻。その頭が消し飛んでいた。

パチパチパチ・・・

鳴り響く拍手の音。音の方を向くと、柱の物陰からネラー神父が現れる。

「ご対面！再会だねぇ！感動的だねぇ！」

「ご対面。再会だねぇ、屈辱的だねぇ」

あいっかわらず、ふざけた野郎だ。腹立つわぁー。

「俺としてはぁー、二度会う悪魔はいないってことになってんだけ

どさッ！ほら、俺、メチャクチャ強いんで悪魔なんて初見でチョンパなわけですヨッ！！一度会ったらその場で解体！死体にキスしてＧｏｏｄ－ｂｙｅッ！！それが俺の生きる道でしたッ！！でも、おまえらが邪魔したから俺のスタンスがハチャメチャ街道まっしぐら、ダメだよねぇ～。俺の人生設計を邪魔しちゃダメ～！だからさ！ムカつくわけで！死ねと思うわけよ！特にそこのクソ黒髪悪魔ッ！！光速で死ねつーのッ！！このクソ悪魔がよぉぉぉぉぉぉぉぉぉッッ！！」

といって、一回のセリフで喜怒哀楽をすべて表現し、一気に激昂するネラー神父。つーか、メッチャ目の敵にされてるじゃん、私。

ブィィン

懐から拳銃と柄だけの剣を取り出し、光の刃を出現させる。確か、あれに斬られるとマズいらしい。なんでも光の力で大ダメージをくらうんだと。拳銃も同様だ。

「てめぇら、アーシアたんを助けにきたんだろう？ハハハ！あんな悪魔も助けちゃうビッチな子を救うなんて悪魔様はなんて心が広いんでしょうか！てか、悪魔に魅入られてる時点であのクソシスターは死んだ方がいいよね！」

そら、無関係な人間をいきなり殺そうとする奴よりはまだ良心もってるっつーの。

「おい！アーシアはどこだ！」

「んー？そこの祭壇の下に地下への階段が隠されてございますヨ。そこから儀式が行われている祭壇場へと行けますぞい！」

祭壇をゆびさしながら、割と簡単に場所を吐きやがった。よし、もうコイツに用はないよな？

「セイクリッド――」

「おまえら、先に行け」

ほかのメンツが臨戦態勢に入る直前に俺が告げる。すると、イッセーが噛みついてくる。

「な、なにいってんだよ進ッ！！ここは全員で――――」

「全員がコイツにかまう必要はねぇ。俺が相手してる間に、さきに進むのが得策だ」

「け、けど・・・ッ！！」

俺の提案にイッセーが渋る。みると、祐斗や小猫も迷っていた。

「大丈夫なのかい？相手ははぐれとはいえ悪魔払いだ。それもかなりの手練れだ。進君ひとりでは、――――――」

「大丈夫だっつーの。俺はそこのネラー神父より八次元ぐらい飛び越えた実力の奴と毎日戦ってたんだぜ？問題ねぇって」

「しかし・・・・・」

祐斗もまた黙る。まあ悩むとこなのはわかるが、今は時間が惜しいところだ。

「それにだ。俺たちが侵入してかなり時間がたったが、刺客として現れたのはコイツのみ。普通なら、もう一人二人はきても不思議じゃないが、現れていない。つまり、俺達の侵入より優先して何かしているって事じゃないか？」

「ごめいさぁーつ、その通りだぜ、腐れ悪魔。なんかぁー、今アーシアたん使って事を起こそうとしてるっぽいデスヨ？」

俺たちの会話に割り込んでくるネラー神父。てか、んな教えていいのか？刺客としてはダメじゃね？

「だそうだぜ？アーシアって助けるんなら、急いだ方がよくないか？俺なら大丈夫だ。仮に敵が増えても、死なないように専念して戦えば、あと4、5人増えても問題ねぇよ」

「・・・・・・」

俺の発言に考え込む祐斗。ったく、とっとと行けっつーの。時間の無駄だ。

「・・・わかった。ここはまかせるよ、進君」

答えはどうやらＹＥＳか。よっしゃ。やる気出てきたぜ。

「あぁ、まかされた。おまえらもしっかりな」

と、俺たちのやりとりにイッセーが割り込む。

「木場ッ!?本気かよッ!?進一人にまかせるだなんて・・・」

・・・ったく、相変わらず人に優しいやつだこと。少しは自分の心配をしろっての。

「本気だよ。敵の話を信じるのはどうかと思うけど、確か今の状況はおかしい。あの神父は間違いなく足止めだ。それがわかっていて、戦闘で時間をかけてる暇はないからね」

「けど・・・」

未だに迷うイッセーに、俺よりさきにネラー神父が痺れを切らした。

「いつまで待たせるんだっつーのッ！！」

そう言い放つと、鋭く踏み込んでくる。距離にして十メートル前後。それがみるみる縮まっていく。

それと同じように俺も飛び出す。かなりのスピードで飛び出すが、奴は俺を目でとらえていた。ったく、大した胴体視力だ――――ッ！！

ガキンッ！！

俺と神父が激突する。俺が放った拳を奴は銃身でうけとめ、奴の剣は塚の先端を抑えて剣身を振り下ろさせないようにしている。

「ハッ、やるねぇッ！！」

神父が笑みを交えながら言ってくる。その間、剣や銃にこもる力が

増す。俺も対抗して力をさらに込める。

「進ッ！！」

後ろからイッセーが叫ぶ。ったく、なにしてんだよッ！！

「まだんな所にいるのかッ！！早く行けッ！！先にお前からぶっ殺すぞッ！！」

顔だけ向きながら俺が叫ぶ。その叫びが届いたか、イッセーが拳を握り締め、そして――――

「わかったッ！！行こうッ！！木場ッ！！小猫ちゃんッ！！」

三人が祭壇に走り出す。すると、途端に前方からの力が消える。慌ててむき直すと、神父はバックステップで距離をとっていた。そして、銃を三人の方へ向けるッ！！

「行かせるかクソ悪魔ッ！！」

「どアホがッ！！素直に行かせとけッ！！」

すかさず俺も神器を発動させながら、奴の銃の進路の前に向かう。クソ、間に合うかッ！？

引き金が引かれ音がでない光の弾丸が撃たれるッ！！それと同時に俺も神器に魔力を送る。信じるぜ、部長。頼むぜ、俺の神器（セイクリッド・ギア）ッ！！

弾丸の進行方向に割り込むが弾丸が胸に当たる。ニヤリと笑みを浮かべた神父だが、すぐにかき消えた。当たり前だ。俺は無傷なのだから。

「コート？コイツ・・・神器所有者かッ！！」

目の前の光景の原因を知り毒づく神父。こっちは内心ビビりまくってんだよッ！！マジで、防げてよかったぁーッ！！

「進さんッ！？」

と、今度は小猫が振り向いてくる。だから、いちいち振り向くなっつーのッ！！

「問題ねぇッ！！とっとと行けッ！！」

「小猫ちゃん、早くッ！！」

祐斗の声に反応して走り出す。んじゃま、こっちは悪魔払いならぬ神父払いをしますかッ！！

ダッ！！

先ほどの速さより速く敵に近づくが、コレも目でとらえられてる。コイツ、ホントに人間かよッ！？

「バッサリ死んじまえよッ！！」

神父が完璧なタイミングで剣を横に薙ぐ。このままのスピードなら間違いなく真っ二つになる。だが、残念だったな。このスピードでならそのタイミングは完璧だが、俺はまだ速くなれるッ！！

剣身が迫り来る前に、

さら地面を蹴りもう二段階スピードを上げる。

「なっ――――!?」

スピードの変化に驚く神父。だが、もう遅い。おまえは剣をもう振り出してる。どんな達人であろうと、繰り出し始めた攻撃を突然止めるのは無理だッ!!

そして、剣身よりもはやく俺が奴の懐に入る。この距離じゃ、銃も使えないぜッ!?

右拳を握り締める。狙うは溝。一撃で沈める――――ッ!!

「フッ――――!!」

そして、一撃でゾウをも沈める拳を放つ。しかし――――

「くっ――――!!」

銃をもった手を使い、銃身で防ぐ。でも、それだけでは威力は殺せないぜ。このまま無理やりこじ開けてやるッ!!

だが、すぐに奴は後ろに体重移動をし、足に力を入れていた。

バックステップだ。後方に自分から飛んで威力をかき消すつもりだ。クソ、ここで距離を離されたらマズい。今度は俺が技後硬直で隙ができちまう。

コートの力で防げるが、このあとの戦闘も考えると連発はしたくない。それに超至近距離タイプの俺じゃ、オールレンジの奴に近づく

だけで苦労しちまう。ここは無理矢理でもアイツに一撃与えるッ！！

奴の体が後方に飛び退く。そして、見事に俺の拳は振り抜かれる。
だが、奴にダメージはない。拳を振り抜くと同時に自分から引いてダメージをゼロにしやがった。コイツ、ホントにつよいな。

俺とアイツの距離がはなされていく。奴はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべガードに使った銃をこちらに向けようと動かす。そんな中、俺は足に力を込める。拳を放ちきった今の状況では連撃は無理だ。一撃で決めようとして大ぶりになったのが仇となっちまった。

仮に今から足を使って距離を詰めても上半身からの攻撃は2テンポ遅れてからしか放てない。それでは威力もなく、カウンターも決められやすい。だから、拳を撃つのはやめだ。

ダッ！！

足に込めた力（爆弾）を爆発させる。奴のバックステップよりも格段に速い速度で距離をまたつめる。だが、詰めた所で技は出せない。だから――――

「オオオオォォォォ――――――ッ！！」

――――体ごと、ぶつけるしかねぇッ！！

「なっ――――――」

ドゴンッ！！

奴に体当たりをかまし。そのまま2人とも壁を突き破って外でてい

った。

―――――――――――――――

体当たりした時の勢いが殺されることもなく。神父と俺は教会の壁を突き破って外にでる。このまま神父と一緒に転がり回るのはゴメンだ。そう思い、神父を突き飛ばす。

突き飛ばした反動で体が離れるが、それでも勢いは止まることはなく。無様に地面を転がり回る。頭と頭を両腕でガードしながら、勢いが衰えるまで待つ。

が、その考えをすぐに捨てる。なぜなら、進行方向に何か鉄の棒があるからだ。やべぇ、直撃コースだッ!!このスピードで当たったら内臓がグロい事になっちまうッ!!

だが、そう思った時にはもう遅く。俺の頭は鉄の棒に直撃する。ヤベェ・・・意識が・・・・・・。

―――――――――――――――

「ん・・・、痛ッ・・・・・・」

目を覚ますと同時に頭に激痛が走る。たまらずおさえると頭がかち割れていて、血が出ていた。

「はぁー・・・つれぇ・・・」

・・・どうやら気を失っていたようだ。体を起こす。もう絶対体当

たりなんかしない。

口の中に血の味が広がる。さっきの体当たりで口の中を切ったみたいだ。

「ペッペッ。クソ、口の中、砂が入ってて気持ち悪い・・・」

口の中ジャリジャリする。あぁー、うがいしてぇー・・・。てか、よく生きてたな俺。気を失ってる間にあの神父によく殺されなかったよ。

「つーか、さっきの鉄の棒なに?」むっくりと起き上がる。所々痛むが、まあこれぐらいなら問題ないな。すぐにひくだろ。

頭をおさえながら立ち上がる。するとすぐに鉄の棒を見つける。だが、鉄の棒は鉄の棒でもただの鉄の棒じゃなかった。

「ウッ・・・・・・」

また、鋭い頭痛が襲う。痛みで頭を抑える。なるほど、そら確かに頭痛がおきるわな。

自分が鉄の棒だと思っていたものには先端が十字架となっていた。そう、西洋の墓だ。名前は・・・、霞んでいてよくわからないな。よく見ると、あっちこっちにあるな。けど、大体は折れてたり崩れたりしてる。それに錆びてるし。原型を残してるのはコレだけか。・・・ん?あれは・・・ネラーか?あぁ、俺と同じように墓に頭強打して気絶してる。なるほど、だから助かったのね。

「・・・・・罰当たりだが、壊しとくか。すまんな、また今度建ててもらうよう頼むから勘弁してくれよ」

といってから、軽くパンチ。十字架はいとも容易く砕けた。十字架による頭痛は消えたが、頭が割れて起きた頭痛は止まらない。

「いつつ・・・。さて、とりあえずあのネラー神父を――」

「俺を、どうするってッ!?」

声がしたほうに振り向く。そこには、気絶していたと思っていた神父がたっていた。頭や口からは血が出ているが、目はちゃんと座っている。

「・・・驚いたな。気絶していたのじゃないのか?」

「ちげぇよ、バァカ。さっきの体当たりのダメージが今の今まで抜け切らなくて立てなかっただけだっつーの」

なるほど、けどその割にはしっかりたってるじゃねぇか。

「すらまたごめんなさいと。んで?どうするんだ?続きするのか?」

「当たり前ッ!!悪魔は斬って殺して撃って殺すもんだっつーのッ!?ファッ○ン悪魔ッ!!」

そういって銃口をこちらに向けてくる。銃は持ってたか・・・、剣は・・・・・ラッキー、だいぶ奴から離れてやがる。

「そうか、まあ戦わないと言っていても、殺していたがな」

「悪魔でぇすねぇー、悪魔でぇすねぇーッ!!根っからの悪魔でぇすねぇーッ!!」

ケタケタと愉快そうに笑う神父。直感でわかる。コイツとは気が合わないな。

「おまえさぁー、今までの悪魔の中でダントツにムカつく悪魔なんだけどさー。ほら、あのイッセー?だっけ?を殺す時も邪魔するし、さっきも邪魔されたし、極めつけは体当たりデスヨ?ムカつきますよぉー。けどさぁー、なんかあんたの事、直感で嫌いなのよ。はじめてあった時から嫌いなのよ。なんでかわかるかよ?」

「・・・さぁな」

「たぶんあんたと俺は、似たもの同士なんだよ。んで、お互いがお互いを嫌いなのはさぁー、同族嫌悪してるからなわけよ。おわかりですかい!?」

神父の告白を受けて、俺は驚いた。スッキリしたのだ。同族嫌悪という言葉を聞き、自分の中にあった理由がわからなかったやつに対する嫌悪感が、スッキリするほど無くなった。

それと同時に、無くなった嫌悪感より、もっと強い嫌悪感が生まれる。あぁ、理由がハッキリしたから、もっとお前の事が嫌いになったよ。

「アンタも俺も本質は一緒だッ!!戦いしか存在意義がないんだよッ!!戦いしか自分を計れないんだよッ!!生と死をかけてるとき

しか興奮しねぇ、この世で一番たちの悪い性病だッ！！」

なおもさえずる神父にさらに心がかき乱される。黙れよ、その霞んだ声でさえずるなよ。

「だから一つ言っとくぜぇッ！？アンタは遅かれ早かれ壊れるッ！！間違いなく壊れるッ！！俺と同じようになるか、俺より歪になるか、２つに１つだッ！！」

「・・・言いたいことは、それだけか？」

拳を握り、腰を落とす。臨戦態勢だ。こちらの殺気にあちらも反応する。

「ハッ！！そうですか！そうですかッ！！今すぐやり合いたいですかッ！！クハッ！！確定だッ！！間違いなくアンタは俺と同種だよッ！！」

こちらに向けていた銃の引き金に指をかけている。いいぜ、今すぐ黙らせてやるよ。

「んなわけないだろッ！！クソ神父ぅぅぅ――――――――――ッ！！」

そして、同族同種の延長戦が始まった。

悪魔（のしもべ）始めました~足止めと同種~（後書き）

とまあ、今回はシリアス気味だったね。シリアスだよね？割と戦闘も書けてたと思う。どうだろう、大丈夫かな？なんかあればいってください。感想やら意見があればご自由にどうぞ。ただ批判だけはやめて、書く気失せるから。

アンケートですが、今日一杯までとします。変更や追加をしたいならお早めに。

最近、プリンセスラバーってゲームを出した会社の新作をみて、かなり欲しくなった。プリラバはＰＣをしたが、かなり自分のツボだったんだよ・・・。特に作画がねッ！！優ルートとシルヴィはよかったなぁー・・・。でも、あの作品、エロシーンスゲー生々しいんだよね・・・。わかる人いるかな？

下からは、今日作者にあった不幸話です。興味なければみなくていいです。

―――――――――――――――――――――

今日、晩飯を食べていたら。食卓に動き回る黒い影をみた。それは素早く動き回る直径六センチの生物『ＧＯＫＩＢＵＲＩ』通称Ｇ。

Ｇは突然現れて、食卓を蹂躙する。俺や母は悲鳴をあげながら机から飛び退く。いやもホント無理なんですアレ。もう見ただけで鬱ります。

母と私の死闘の末、なんとか床に落とし、キンチョールを発射。（この時、キンチョールをみて進を思い出して笑ってしまった）見事に直撃したが、そこから悲劇が始まるッ！！

ヤツは最後の力と言わんばかりに壁を駆け上がる。だが、ヤツはキンチョールをくらい、もはや瀕死だ。そうもう死にかけだ。無論、壁を上っている最中に動けなくなって落ちるのは予想できた。そして、予想通り、壁を上っているさなか、事切れてしまった。そして重力に従い落下。すると――――――

ポチャン

さっきまで俺が食べていたら味噌汁にホールインした。

ドリフかよッ！！リアルドリフかよッ！！なんでピンポイントに俺の味噌汁の中に入るんだよッ！！完璧すぎるだろッ！！あまりの完璧さに愕然としたからなッ！？プカーって浮いてるのみて、絶句してたからなッ！？誰が頼んだんだよッ！！味噌汁＋ゴキブリなんて誰が頼んだんだよッ！！求めてねぇよッ！！あと、速攻で味噌汁捨てたわッ！！食材やら貧しい人等にあやまりながら捨てたわッ！！食えよー、とかいうなよッ！！おまえ食えるかッ！？おまえ食えるかッ！？プカーってゴキブリが浮いてる味噌汁くうか？無理だろッ！？生理的に無理だろッ！？わかってくれよ、頼むからッ！！

最後に1つだけ、食材を無駄にしたのは俺のせいじゃない。

悪魔（のしもべ）始めました～チップと死激～（前書き）

更新が遅れた理由は一つッ！！忙しいッ！！以上ッ！！

すんません、ゴミ投げないで・・・

理由は後書きに書きますから。それではどうぞ。あと、後書きに重大報告があります。

悪魔（のしもべ）始めました～チップと死激～

「シッ！！」

神父の胴体に拳を放つ。それを後方に一歩引いてよけられ、それと同時に銃口をこちらに向けて、光の銃弾が撃ちだされる。

「死・ねッ！！」

撃ち出された光弾は俺の顔面を捉えて向かってくる。それを身を屈めてよける。だが、屈めた所に神父の蹴りが顔に迫ってくる。それを手で受け止め足を掴む。つかんだ足を引っ張る。

「うおッ！？」

すると、奴の体がこちらに引っ張られる。引っ張られてきた腹に拳を撃ち出す。

ドンッ！！

鈍い音がなり、奴の体が後方へと飛ぶ。だが、奴は俺のうった所をしっかりと防いでおり、ダメージは無いに等しいだろう。神父は空中で体の重心移動をし数メートル離れた所に着地した。

「フィー・・・、あっぶねぇーなぁーッ！！」

ガードに使った手をひらひらとふる動作をする神父。その顔には、笑顔が満ちている。

間違いねぇ。コイツ、楽しんでやがる。殺し合いを楽しんでやがる。まるで、自分と相手の命をチップに変えて、ルーレットをしているように感じる。

・・・ますます、気にくわねぇ。

戦闘が再開して数分。何回目かになる衝突がすべて似たような感じだ。ギリギリの所でお互い引いてまた仕切り直す。これが繰り返されている。

お互いの実力が均衡しているのか、互いに攻撃が当たらない。拳を放つとよけられ、銃を撃たれるとこちらも避ける。こうも力が同じだと、決着に時間がかかりそうだ。

いや、それは間違いだ。実力が均衡などしているわけがない。間違いなく、俺が圧倒的に強いはずだ。スピード、パワー、技術、スタミナ・・・どれをとっても、俺が本調子なら瞬殺できる。

けど現状は違う。その原因は自身の身体能力の高さがだ。この高い身体能力をコントロール仕切れていないのが、原因なんだよ。

例えば、普通の人間が悪魔に転生したとする。するとその人間はそれだけで身体能力が跳ね上がる。例をあげるならイッセーだな。アイツは普通の人間から悪魔になったから何段階か能力が跳ね上がってる。そういったタイプなら戦闘の時に困らないだろう。自身の全力を出す以外、戦う方法がないからな。それに元々なにかしていたわけでもないから、自身の身体能力の時の戦闘方法もあんがいスルリと覚えられるだろう。

けど、俺は違う。俺は悪魔に転生する前から、土台となる自身のス

タイル、つまり戦い方がある。本道進が積み上げてきた数年間の努力が作り上げた本道進だけのスタイルだ。それをもう今さらかえるきもないし、変えることもできないだろう。このスタイルを持って、戦っていくしかないのだろう。

だが、ここで問題になるのが悪魔となったときに上がった身体能力だ。人間だった頃の俺の身体能力を普通の乗用車の性能としよう。その車は段階を踏んで能力を上げていく物だったのだ。長い時間をかけて、エンジンやブレーキやギアの回転数を徐々に引き上げていき、最終的にＦ１カーになるものとしよう。だがそれがある日突然、エンジンだけＦ１カーになり、それ以外が普通の乗用車のままになったらどうなるだろうか。エンジンは空回りし、ほかのシステムはろくに機能しないだろう。

つまり、悪魔になった俺が引き出せるパワーをＦ１カーのエンジンであり、そのパワーを使い切る技術、経験をほかのシステムなのである。動力源だけが突飛しすぎて、ほかのシステムが機能できないでいるのが、今の俺の状況だ。

出せる力は絶大だが、それをコントロール仕切れていないのだ。踏み込みは入りすぎてしまう。拳には力が入りすぎてしまう。攻撃は見えすぎてしまう。今までに作り上げた技術があまりにもデカい力について行ってない。

だから、力を抑えて戦うしかないのだ。コントロール仕切れないでいれば隙ができ、命とりになりかねないかならな。幸いにも、今までの訓練のお陰で人間だったころと同じくらいには制御できている。つまり、デカい力を抑えて、人間の頃と同じ出力で今戦ってるってわけ。

「マジでままならねぇよ・・・」

「・・・？なにがだよ、クソ悪魔」

神父が銃口をこちらに向けながら聞いてくる。

「別に、もういい加減飽きたなっていったんだよ」

「同感でぇーすッ！！俺も同じ悪魔と長く戦いたくなんてありませんッ！！より多くの悪魔をチョンパするのが夢なのッ！！だ・か・ら・・・死ねよ」

いきなり引き金が引かれる。音はでないが、弾は撃ち出される。てか、一発でも当たればアウトってどんなクソゲだよ。難易度たかすぎじゃね？

光弾を右に移動してよける。だが、よけたさきに俺の頭めがけて俺の顔の大きさぐらいの石が飛んでくる。

パンッ！！

飛んできた石を左ジャブで打ち砕く。石は粉々に砕かれ破片は地面に落ちる。次の攻撃を確認しようと前を向くと、そこに神父の姿はない。すると――――

・・・ヒュ・・・

風を切り裂く音が微かに俺の後方から聞こえた。慌てて魔力をコートにおくり能力を発動する。同時に腰を捻って背後に回し蹴りをかますッ！！

ガキンッ！！

足が物体とあたり音をだす。剣だ。さきほどまでヤツが使っていた光の剣。それがそこにあった。

なるほど、石を投げた瞬間、落ちてた剣を拾ってそのまま切りかかったってわけね。

「ビンゴッ！！」

残忍な笑みを浮かべながら、銃が握られたもう片方の手を前にだし、引き金をひく。撃ち出される光弾。完璧に俺の顔を捕らえている。

「クッ――――」

それを後方に引いてやり過ごす。コートの能力を使ってもいいが、あとの事を考えると使いたくない。それにあと2回ぐらいしか使用できない。

俺が引いたのを見送る神父。おかしいな、ヤツなら食らいついてくると思ってたんだが。いや、それ以上に気になるのが神父の表情だ。

――――怒っている。

今までのイライラするような顔はどこにいったかと思うほどにその表情は憤怒に染まっている。ったく、なんつー面で睨んでくるんだよ。

「「――――――」」

互いが互いを睨む。どれくらいこうしていたのだろうか。数秒かもしくは数十秒か。その睨み合いを終わらせたのは神父だった。

「――――んだよ。なんなんだよ、おまえッ!!悪魔だろッ!!悪魔なんだろッ!!なんで銃にあたって死なねぇんだよ。剣できられないんだよッ!!ファ○クッ!!ファ○クッ!!ファ○クッ!!死ねよ。死ねよ!死ねよッ!!いいかげん死ねつーのッ!!うぜぇんだよッ!!悪魔は殺すものだッ!!きたねぇ汚物（悪魔）は素直に殺されときゃあいいんだっつーのッ!!俺の快楽の糧になっときゃあいーんだよッ!!」

ヒステリックな声をあげながら神父が狂言する。慟哭と思うほどの叫びだ。ホント、喜怒哀楽が明確なヤツだな。

緩みかけた思考をさらに引き締め直す。腰を落とし、構えをとる。臨戦態勢だ。刮目せよ。これより目の前にいる敵は――――

「悪魔は殺すッ!悪魔は殺すッ!!悪魔は殺すッ!!!絶対に殺すんだよッ!!だからおまえはころされときゃあいいんだよッ!!だけど、なんだよこりゃあ・・・、なんなんだよオマエッ!!オマエが・・・、オマエさえいなきゃ・・・ッ!!――――もった悪魔を殺せたのによぉぉぉ――――――ッ!!」

――――まぎれもない狂戦士（強敵）だ。

――――――――――――――――――

「うらぁッ!!」

頭上から振り下ろされる狂剣。太刀筋もなにもかもムチャクチャだ。だが、コレに切れ味など必要ないのだろう。悪魔の弱点は光。光でできた剣はかすっただけで致命傷となる。

シュッ！ホォッ！！シャッ！！スシャァッ！！

そのすべてをかわす。あたりさえすれば終わるが当たらない限り問題はない。オマエの振り、払い、切り上げの速さは一回みただけでもう見切った。

「ッ！！――――クッ！！」

ブオウッ！！

カウンター狙いでヤツのレバーに拳を放つ。だが、奴は体を捻って無理矢理よけ、距離をとるためバックステップする。放たれた拳が空を穿つ。

「ならコレでッ！！」

これならばと言わんばかり銃を放つ。その銃ももう見飽きた。

「その銃。撃ち出される銃弾の速さは大きく変化しないから、一度感覚がつかめると――――」

シュ・・・

頭を狙って撃たれた銃弾をスレスレで首をズラしてかわす。

「なッ！？」

「簡単によけられる」

銃弾が避けらたことに驚愕する神父。おいおい神父よ――――

「気ぃ緩みすぎだろッ！！」

ダンッ！！

「グゴハッ！？」

距離を一秒でつめ、油断した神父の溝に一撃いれる。体は数メートル先まで転がり、先ほど頭をぶつけたのと同じぐらい痛んだお墓にぶつかり止まった。

「グッ・・・ゴッ・・・グヘェ・・・」

神父が吐瀉物を吐き出す。いや、血も混じってるから吐血になるのか？よくわからん。

「あのさぁ、神父・・・。もう止めにしないか？実力差がクジラとミジンコぐらい違う。普通の悪魔ならきく武器も、俺には効かないみたいだし。もう手札がないだろ？悪いことは言わないから引けよ。もうお前に興味ないからよ」

そう。もう俺の中では、コイツとの戦いにケリがついてる。殺そうと思えば、奴がまばたきする間にだって殺せる。何十回と奴を殺すチャンスをふってきたのだ。

俺の提案が耳に入ったようで、神父がノロノロと起き上がる。ほほぉ～、まだたてるかぁー。手加減はしたが、並みの人間なら余裕で死ぬくらいの一撃だったんだが。

「ふざ、けんなッ！！俺が、俺がいつから悪魔を殺してると思ってやがるッ！？１４だッ！！１４の頃からテメェの同族殺してんだよッ！！その俺がッ！！悪魔に見逃してもらうだぁッ！？ふざけんじゃねぇよッ！！殺し合いしてんだよッ！！どっちかが死ななきゃッ！！終わりじゃねぇんだよッ！！」

神父が激高する。まぁ、俺もんなこと言われたら怒るわ。ん？じゃあなんでいったかって？単純に、ヤツのプライドを粉々にしたいからだ。戦いの決着はついてるが。俺の楽し・・・、怒りがおさまったわけじゃないからな。

「そうか。ちなみに俺は物心ついたときから内乱の一番激しい所を鎮圧するのにわずか一時間ですむ奴と毎日殺されながら殺し合いしたぜ？年期がちがうんだよアホが」

いや、マジだって。親父、いつも見てる番組が内乱の特集で潰れたからっていう理由でいきやがったからな。敵味方問わず、とりあえず銃とか刃物もった奴らだけ半殺しにしたっていってた。コイツこそ悪魔だろ。

「まぁいいや。んでどうするんだ？俺はお前を殺す気はない。アレを殺すまで、それ以外の敵を殺す気はないからな。けど、おまえはどっちかが死ぬまで殺り合いたいんだな？」

「・・・当たり前だろ、クソ悪魔」

「だったら、お前がやることは一つだろ?その一つに、全部かけろよ」

――――――瞬間、世界が凍える。

殺気だ。凄まじいほどの殺気。世界が凍ってしまうかとおまうほどの、冷たくそれでいて鋭利な殺気。その全てが俺に向かってくる。

「――――ハッ!!なんだよ、この殺気(良いもの)だせるんじゃねぇかッ!!いいぜ、いいぜッ!!また、盛り上がってきたぁッ!!」

冷めていた闘志にマグマが降りかかる。心臓の鼓動が跳ね上がる。ドクンドクンと音を上げていく。今はその音がたまらなく愛しい。自分が、生きている感じが、自分がいまここで存在していることを実感する。

そんな中、ヤツの言葉を思い出す。なるほど、確かにたちの悪い性病だな、コレッ!!認めてやるよ、神父。俺とお前は同種だ。確かに、戦いしか興奮できないわ。だが、構うものか。俺が俺であるのに、この麻薬は必要だッ!!

神父の方をむき直す。すると、神父はさっきまで持っていた銃を横へと放る。そして、光剣をゆらりと肩まであげ、そこで止める。間違いない。突きの構えだ。なるほど、確かに払いや切り上げは見たがまだ突きは見てなかったな。

だが、突きは一撃必殺であり、爆弾だ。一番切り方で速さも威力もあるが外せば最後。決定的な隙ができる。それをアイツがわかってないとは思えない。この状況でそれをする度胸。なかなか出来るものじゃない。こちらも、多少は覚悟はしなくてはな。

ヤツは決死だ。決死の攻撃は、よけることは不可能としれッ！！

「神父・・・名は？」

腰を落とし、左足と左手を前にだし右腕と右足を後ろにひく。体重は右足に、左手は掌に、右手は拳に。この構えから放たれるは、死激と知れッ！！

「・・・・・フリード。フリードだ。あんたは？」

短く答えるフリード。剣をより一層強く握りしめる。満ち足りていたいた殺気がより一層濃くなる。その殺気が心地いいのか自然と笑みができる。

「・・・本道進だ。運が良くても悪くても、もう一度くらいはあうかもな」

「ならねぇよ・・・俺が、殺してやるよぉ・・・」

「できるのなら」

睨み合う両者。今日で二回目になる睨み合い。だが、一回目とは決定的に違うのは、一撃にかけるチップの重さ。文字通り、命を賭けている。

「いくぞ、本道進ぅぅぅ――――――ッ！！」

「こい、フリードッ！！」

弾丸を思わせるような速さで突っ込んでくるフリード。その体は一本の矢のように見える。なるほど、空気抵抗をなくすため体を一直線上にしてるわけね。

――――射程圏まで３メートル

最高速度に迫ろうとするフリード。あの状態からの突きは途轍もない威力となりそうだ。普通なら避けるべきだが、そうはいかない。これほどの戦い、味あわなきゃ損だろッ！？

――――射程圏まで２メートル

依然として構えをとかない。一見すれば、この構えはまさしく拳をうつ為だけに思えるが、そうじゃない。そう思わせることに、この構えの特性だ。

――――射程圏まで１メートル

コレは、先の先をとるように見えるがそれは違う。この構えは後の先も同時にとっている。その理由を今から教えてやるよッ！！

――――射程範囲内

フリードが剣を突き出すッ！！全速力で踏み込み、全力を乗せた、決死の一撃。よけるのは不可能、コートで防ぐのは無粋。やることは一つだけだ。

突き出される絶殺の突き。剣先はもう俺の頭の近くまで迫っている。
それを――――

ザッ！！

――――左手でそらすッ！！

避けるのも防ぐのも出来ないのなら、攻撃の起動を変える。つまり、攻撃をそらす。力を加えるのは剣身の中央あたり。そこに左手で軌道を変える

瞬間、左手から激痛。当たり前だ。フリードの持つ剣は光の剣。光は悪魔にとって弱点そのもの。素手で触ろうとすれば、たちまち激痛が走るに決まっている。だが、コレほどまでとは予想していなかったよ。

反射的に引きそうになる左手にさらに力を加える。激痛によりできた叫びを喉で押し返す。ふざけんなッ！！ここで引いたら、この先のどんな相手にも負けることになるッ！！

奴の剣が頬をかする。予想以上の痛みと、自分の度胸のなさで予定より少しそらしきれなかった。頬をきった事で、そこからも激痛が生まれる。だが、それで止まってはいられないッ！！

右足に入れていた体重を左足にシフトする。そして、左足を中心に右足を半回転する。フリードと俺の体が平行に並ぶ。俺の背中には奴の突き出した剣がある。だが、それに当たることはない。

右足をちょうど半回転し終わるとまた再び体重を右足にシフトする。

そして、右足に送った時に生まれた力と腰を回転させて生まれた力を混ぜ合わせた一撃（肘）を、やつの頭に当てるッ！！

パァンッ！！

一撃が完璧に奴の頭の横に入る。そのあまりの威力で奴の体は横に吹き飛ぶ。だが、受けた本人はなぜ吹き飛んでいるのかはわかるまい。

ズシャァァ・・・

勢いが死にきるまで数メートルかかったようだ。奴は人形のように転がっていった。恐らく、もう意識がないのだろう。今の一撃は下手すれば頭を破裂させる一撃だからな。まあ意識があってもしばらくは脳震盪で動けないがな。

仰向けに倒れ伏せるフリードを横目に、傷を確認する。・・・うん、グロい。なんか皮がデロンデロンになってる。あと、血が止まんない。ヤバいな、止血、止血と。

キュ。

「これで、よし」

持っていたハンカチでしばり止血をする。てか、治るよね？この傷・・・

「さて、と・・・」

一応、フリードの生死を確認してからイッセーたちの方に向かうかな。確認するために、フリードのもとへ向かう。意識は・・・、ま

じかよ。まだあるよ。気ぃ失いかけだが。

「よぉ、フリード。まさか今のくらって意識があるとは思わなかったぞ。しゃべれ・・・るわけないか。じゃあな、俺は行くわ。中々、楽しかったよ」

それだけ言って背中を向ける。一歩踏み出そうとしたところで、言葉をかけられる。

「・・・ヘッ・・・、同、種（化物）・・・が・・・・・・・」

それだけいうと事切れたようにフリードは気を失う。その言葉を聞いて、俺は奴に振り向かず歩み始める。

「あぁ。・・・いまさら、気づいたよ」

悪魔（のしもべ）始めました～チップと死激～（後書き）

なんか、書いてて主人公が途中神父にみえた。進鬼畜すぎだし・・・。つか、神父のキャラ崩壊しちゃったような・・・。まあいっか。あと数えるほどしかでないしね。

遅れた理由は色々なんですが。まず一つ。日曜日、模試。これの為に割と勉強してた。あと、話がね。今回、三回くらい書き直しました。いやぁー、うまく戦闘が書けなくて。ゆるしてください。

ヒロインアンケートの集計は終了し決定しましたッ！！ヒロインはなんとッ！！小猫ちゃんッ！！それとゼノヴィアですッ！！おめでとーパチパチ

アンケートに協力してくださったみなさん。ありがとうございます。これからも不肖、アンサラー。頑張っていきます。どうかこれからもよろしくッ！！

と、最後に一つ。突然ですが、三週間ほど休載しようと考えています。実は来週は学校のテストがあり、再来週には大学の試験、つまり受験があるんです。さすがに、この小説をかきながら行うのは難しく、ましてや欠点や不合格を取ってはならないので、休載しようと考えています。この小説を楽しみにしている方がどれほどいるかはわかりませんが、休載します。本当にごめんなさい。

それでは、また次回。次は十月の中頃になりますが、どうかよろしく。

悪魔（のしもべ）始めました～帰還と治療～（前書き）

みなさん、おはこんばんにちわッ！！

アンサラー、世間の荒波にフルボッコにされて帰ってきました。いやぁー、世辞辛いなぁー。テスト危なかったなぁー。受験疲れたなぁー。

そんなわけで連載再開ですッ！！いや、実はもっと早く更新しようとしたんですけど、母が風邪引いたんで色々家事してたら時間が無くなっちゃって・・・。あと、予想以上に小説書くのが鈍ってまして。

まぁ、そんなこんなで戻って参りました。しばらく、変な書き方するかもですが、そこはご容赦を。では、どうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました～帰還と治療～

「いててて・・・」

先程ほど負傷した左手をさすりながら、教会へと歩く。足取りは重い・・・というかダルい。

「しかし、予想以上に痛かったな・・・」

左手を視界に入れる。うわ・・・、皮膚がただれてるよ・・・。これは痛いというよりグロいな・・・。自分の体だけど若干引いてしまった・・・。

「な、なおるよな、コレ。ホント治るよね？」

治ると信じたいな・・・。ま、まあ、んな事は後で考えればいっか。それよりも、教会にいる三人が気になるな。アイツら、無事だといいんだが・・・

「少し、急ぐか」

ダラダラと歩くのをやめ、教会に向かって走り出した。

――――――――――――――――

しばらく走ると、少し大きめな穴が見えてきた。さっき俺が開けた穴か？それとも別の誰かか？

教会に近づいたので、それと同時に気配を消す。中に誰かいて、ひょこり顔だしたらいきなりドンパチとか勘弁だ。やるなら後ろから

か寝込みだろ？

気配を消して近づきながら、聴覚に意識を向ける。音から中に人が居るかを確かめるかな。

「――――――ッ！！」

「――――――――。」

・・・よく聞いたことがある奴の声がしたんですけど？イッセーの声がしたんですけど・・・。じゃあ、もう一人は誰だ？部長っぽいな・・・。なんで部長がここに？

てか、よく気配探ったらやたらとあるし・・・。５人、か？ここにきた時のメンツが俺を抜いたら三人だったから。部長と黒ポニーがあとからきたのか？んだよ、なんだかんだいってきたのかよ。まったく、厳しいご主人様だこと。

オカメン（↑オカルト研究部のメンツの略、某有名サークルから頂きました）が俺入れて六人だから。・・・数ぴったりだな。よかった、全員無事っぽいな。だったら気配消す必要もないな。

そう思い、気配を断つのをやめさっき作ってしまった穴をくぐる。それと同時に、俺の顔面に迫り来る剣。・・・ん？剣ッ！？

「あぶなぁぁぁぁぁッ！？」

完全に頭に向かってきていた剣身を慌ててかがんでよける。剣身は宙を裂く。まさか交戦中だった？クソ、俺にしてはあり得ないくらいの凡ミスだ。

――――カチ

脳内を再び戦闘用に切り替える。よし、相手の獲物は振り切られてる。この隙に懐に入って一撃入れて沈める。

ザッ！！

屈んだ姿勢のままで踏み出す。この体勢からじゃ、相手の肩から上が見えないが、筋肉の動かし具合でだいたい予想できる。

右手の指を伸ばしきる。狙うのは喉。一撃で潰して呼吸困難にして無力化する！！

シャッ！！

抜き手の要領で右手を打ち出す。その時、始めて顔を上げる。相手の顔が視界に移る。そこにはどこかでみたようなイケメンが・・・。って、イケメンッ！？

「祐斗じゃんッ！？」

慌てて右手を喉元から狙いを大きくそらして空を切らせる。さすがに撃ち出してから急停止させるのは無理。祐斗も切り上げた剣を振り下ろそうとするのをやめ――――――ずに素直に振り下ろしてきたぁッ！？

「ぬおおぉぉぉぉッ！？」

全力でバックステップしてよける。このイケメン、なんの躊躇もな

く振り下ろしましたよッ!?

「ん?あれ?進君?」

「『ん?あれ?進君?』じゃねぇよッ!!」

思わず思い切り叫ぶ。だが、解ってくれ。さっきまで仲間と思ってた奴にいきなり殺されそうになる俺の心情を察してくれッ!!

「気づけよッ!!もっと早く気づけよッ!!なんでいきなり襲ってくんだよッ!!ガチでビックリしたじゃねぇかッ!!」

つか、間違いなく殺す気だったぞコイツ。頭直撃コースだったぞ?え?なに?おまえ俺に恨みあるの?

「ご、ゴメンッ!!いきなり気配が出たからまた敵かと思っちゃって・・・」

「その考えは賛成できるが、せめて敵を視界にうつしてから攻撃してくれッ!!いきなり切りつけられると心臓に悪いッ!!」

今ので寿命が一年くらい縮んだッ!!悪魔は長寿らしいがそれでもコレは本気でビビるから。仲間だと解ったから、気を抜いた瞬間その仲間に襲われるんだからなッ!!

「ゴメン、ホントゴメン」

シュンと効果音がつきそうな顔で謝ってくる祐斗。な、なんかこっちが悪いことしたみたいな気持ちになってきたんだけど・・・

「いや、まあ、いいけどさ・・・。次から気ぃつけてくれたらいいけどさ」

なんかこっちが悪いことしたみたいな心情なんだが・・・。ん、あれ?ちがくない?悪いのあっちじゃね?

「ご、ゴメンね。次から気をつけるから」

そういって苦笑しながら謝ってくるイケメン（祐斗）。なんか謝ったから許してやってもいい気がしてきた。・・・これがイケメンクオリティーか。

コホン、とわざとらしく咳払いする祐斗。次に俺の方をしっかりみて話しかけてきた。

「とりあえず、無事でよかったよ。1人で残しちゃったから心配してたんだ」

さきほどくぐった穴を通ってみんながいる方にあるきながら会話する。

「まぁ、なんとかな。思いのほか手間取っちまってな。いやぁー、なかなか強かったよ」

「仕留めたのかい?」

首をかしげながら聞いてくる祐斗。

「うんにゃ。とりあえず気絶だけさせた。まぁ、しばらくは起きないだろうから、とりあえずこっちにきたんだが・・・終わっちゃっ

た？」

「ちょうどね。ある意味でグットタイミングじゃないかな？」

んだよ、終わったのかよ。余力残してたの意味ねぇじゃねぇか。

――――――ズキン

左手に痛みが走る。痛てぇ。あぁ、そういえば左手治るか聞いとかないとな。

「なぁ、祐斗。話変わるんだけどさ、コレ治る？」

といって手首に布を巻いて止血している左手を見せる。キズはなんかただれたみたいなことになっていて、見るからに痛そうだ。

「うわ、グロいねぇ」

それをみて少し引いてしまう祐斗。そのリアクション、ちょっと傷つくぞ？

「ちょ、おま、人の体の一部みてグロいとかいうなよ」

「あ、あぁゴメンね。うーん、大丈夫じゃないかな？帰ったらちゃんと治療しようね」

そうか、治るのか。いやぁーよかった。さすがにこんなグロい状態でいたくわないからな。

そんな事を言い合っていたら、みんながいるところに到着する。部

長に黒ポニーにイッセーに・・・ん？あれ、小猫は？

「あら、進。・・・よかったわ。無傷では無さそうだけど、無事で良かったわ。死んだかと思ったわ」

意地悪な笑みを浮かべながら言ってくる我らが悪魔の主様、リアス・グレモリー姫様。なんか腹立つ言い方だな。

「そりゃあ皮肉か？死んでたまるかっつーの。・・・それよりも、小猫はどこに行ったんだ？無事なんだろ？」

「えぇ、無事よ。ちょっと拾ってきてもらってるの」

ん？拾ってくる？なにを拾わせにいってんだ？まぁ、拾いにいってんだからすぐに帰ってくんだろ。

俺は紅髪の悪魔から視線を外し、床に座り込んでいる親友に目をやる。おーう、みるからに『激戦でした』ってかんじが出てるな。服とか所々破けてるし、ケガもしてるしな。

イッセーの左手に視線をうつす。そこには赤い籠手が装備されたままだ。ん？前見たときと、若干形が違うような気が・・・

「よーう変態。醜く生きてたか。またあえて忌々しいねぇ」

俺もイッセーの視線にあわせるためしゃがみ込む。親友にはたから聞いたらとてつもない侮蔑の言葉を浴びせる。

いつものことだ。俺はイッセーを素直にほめる、なんてことは出来ないからな。こうやってひねりまくっていうしかないわけ。まあ、

半分はただ罵倒したいだけなんだがな。

「・・・この鬼畜。疲れきった時にお前の罵声聞くのはさすがに堪えるからやめてくんね？」

イッセーも恐らく俺がいってる意味は分かってるだろうけど、さすがに疲れてるようだ。ツッコミにキレがない。仕方ねぇな、やめといてやるか。

「へイへイ。・・・お疲れさん」

右拳を前にだす。それを見てイッセーも右拳を前に出し、コツンと音を立てて当てる。

「・・・ありがと」それを聞いて後、俺は立ち上がり。黒ポニーを方を向く。ニコニコと作り笑顔をしている黒ポニーに話しかける。

「黒ポニー？ちょい、いいか？」

――――――ゾクン

話しかけた瞬間、何故か殺気を向けられる俺。さ、寒ッ！？こわッ！？え？なに？俺なんかしたかッ！？なんで俺こんな殺気を向けられなきゃならんのッ！？

「・・・どうかしましたか、進君？」

あー、目が笑ってないやぁー。超怖いよー・・・。

「あ、あのー・・・黒ポニーさん？私、何かしましたっけ？」

恐る恐る聞いてみる。なんか知らんが話しかけた途端いきなり怒り始めたので、恐らく・・・いやたぶん俺のせいだろうね・・・。

「はい、しっかりと」

「そ、そうですかぁー。スミマセン」

「いえいえ」

・・・しっかりとって所が滅茶苦茶強調されてました。結局、手が治るか聞けなかったし・・・。

つか、何故に私はこんなに女性から目の敵みたいな事になっているのでしょうか?そんな役はイッセー1人で十分なんだよッ!!クソ、さっきも小猫に蹴られたし・・・。まったくもって訳わからんだよ。

「進君、いい加減気づこうよ」

そんな俺の様子をみて呆れたと言わんばかりのジェスチャーをする祐斗。いや、だからなにに?

「はぁ・・・、進君。次に朱乃さんを呼ぶときは普通に呼ぼうね?」

あん?コイツ、なにいってんだ?俺は普通に呼んでるじゃねぇか。

「どういうことだよ、祐斗。意味分からんぞ?」

「ここまでいってわからないとは・・・。それは罪だよ?というか、いつかそれで死んでしまうかもしれないね・・・」

「え？俺死ぬの？何で死ぬの？」

嘘だろッ！？もう俺死んじゃうの？理由もなにもわからないまま？え？本当になんでそうなんのッ！？

「進君。いいかい。次は朱乃さんのこと、普通に名前でちゃんと呼ぶんだよ？」

何故にそんな事を釘を打つようにいってくるんだ？つーか、朱乃って・・・あぁ、黒ポニーのことか。

「呼ばないと、小猫ちゃんの時と同じように痛い目にあうよ？」「ま、マジでか？そりゃ勘弁だ・・・」

「うん。そう思うなら、しっかり名前覚えようね」

「あ、あぁ。わかった、もう理由は聞かないでおくわ」

「うん。賢明だね。じゃ、しっかりね」

当たり前だ。玉潰されたくはないからな。今のうちに覚えよ・・・朱乃、朱乃、朱乃・・・。

俺が名前を覚えていると、拾いもの？から帰ってきたのか、小猫がズルズルと何か引きずって現れた。

「部長。もってきました」

そういって部長に報告する小猫。もってきたって・・・。いったい何を持ってきたんだ？

拾ってきたものに興味がわき、それを見るため歩み寄る。

そこには―――

俺が殺すべき―――

あの堕天使が―――

―――いた。

ドクン、と大きな心音がなる。そしてすぐに速いペースで心臓が音を刻み始める。それと同時に殺気が溢れ出る。当たり前だッ！！今ッ！！目の前にッ！！俺とイッセーから日常（世界）を奪った存在がいるんだッ！！

―――――殺したい。

殺したい！！殺したいッ！！

今ッ！！この場でッ！！コイツの息の根を止めたいッ！！喉元を裂きたいッ！！心臓を握りつぶしたいッ！！頭を飛び散らしたいッ！！コイツを殺したくて殺したくて、もうガマンの限界だぁッ！！

―――――殺すッ！！

一瞬で距離を詰める。やつは仰向けで倒れている。遺言なんていわせるかッ！！テメェは醜く汚く死ねッ！！

そして、頭に向かって右腕を振り下ろした――――――ッ！！

――――――――ガグン

だが、俺が放った拳は奴の頭にめり込むことはなく、鼻先から数センチの所で止められた。

動かない。どれほど力を入れても、そこから一ミリと動かない。

俺はリアスの方を見る。当たり前だ。俺は止める気なんてないのに拳が止まるなんて事、この場でできるのはアイツくらいだ。

案の定、リアスはこちらに手を向け、何かを制御している。だが、予想と2つ違うところがある。それは朱乃も部長と同様に俺の方へ手をかざしていたことと、小猫と祐斗が俺の右腕をおさえていたことだ。

「止めんなテメェらッ！！今すぐコイツを殺させろッ！！」

俺がたまらず叫ぶ。今の目の前に、俺の殺したい相手がいると言うのに、なんで止められなくちゃならないんだよッ！！

「・・・進。言っても無駄かもしれないけど、落ち着きなさい。その堕天使には少し聞きたいことがあるの。まだ死なれては困るわ」

「落ち着け・・・？落ち着けだとッ！？目の前に自分が殺したいと

思う存在があるのにかッ！！寝言いってんじゃねぇぞッ！！んなことが出来ないほど、今の俺は頭にキてんだよッ！！！！！」

俺の叫びが教会に響く。さらに右拳を握り込む。そして、さらに右腕に力をこめはじめる。

「――ッ！？まだこんなに力がッ！？朱乃ッ！！」

「はいッ！！」

部長の朱乃が俺の力が増したことにより、さらに多量の魔力を使って止めにくる。

「進君、やめるんだ。あと少し我慢したらいいだけだ。だから――」

「そんな器用な事ができたら、とっくにしてるってのッ！！」

祐斗の言葉にも耳を傾けず、さらに力を込めようとしたとき。

――――シュッ

体の右から、風を切る音がした。俺の肺目掛けて、何かが迫り来る。

「――――チッ」

それを負傷した左手で止める。瞬間、左手に衝撃が走る。だが、そんな事よりも俺はその拳を放った人物を確認する。

小猫だ。小猫が俺に打ってきたのだ。

「・・・なんのつもりだ、小猫」

怒気と殺気をおりまぜながら俺が問う。それに一切気圧されず、小猫が口を開く。

「落ち着いてください、進先輩。」

「どいつもこいつも、いうこと一緒か」

――――――ズキン

左手から浸透してくる痛みを感じた。出血だ。恐らく、小猫の拳をとめた衝撃で傷口が開いたのだろう。

血はさらに流れ出ていく。その血に乗って、自分の頭の中を駆けめぐっていた感情が抜けていくような気がした。

「・・・進」

と、さきほどまで座り込んでいたイッセーがたってこちらを見ていた。

「お願いだ、進。少しだけ・・・ほんの少しでいいから、待ってほしい。俺もこの子と話したいことがあるからさ。頼む」

そういって頭を下げてくる親友(イッセー)。・・・んだよ、この空気。まるで俺が悪モンみたいじゃねぇか。クソッ・・・居心地悪ぃな。

ハァー、と。俺が深いため息をつく。

「・・・・・わかったよ。待ってやるよ」

そう言ってから右腕から力を抜く。それと同時に右腕も動きようになり、祐斗たちも手を離していく。

「ありがとう、進」

イッセーが笑顔とでそういってきた。クソ、ホント居心地悪いな。

俺は部長の方をむき直し、その横をまで歩いて歩みを止めてから言ってやった。

「五分だ。それ以上は待てないからな」

五分くらいなら、なんとかまてそうな気がした。なんとなく、だけどさ。部長がそれを聞いてから、少し間を開けてから答えてくる。

「わかったわ。ありがと、進」

俺は返事をせずに後ろにある長椅子のほうに歩いていく。と、後ろから誰かくっついてきてるのに気づき振り向く。そこには案の定小猫がいた。

「なんだ？なんかようか？」

俺が気まずそうに質問する。すると小猫はいつも通り無表情のまま答えてくれた。

「・・・左手」

「は？」

「左手、出血がヒドいです。治療しないと」

といって、救急箱を（どこにあった）を前に出してくる小猫。なんだ、わざわざ持ってきてくれたのか？

「あ、あぁ。サンキュ、小猫」

それを受け取ろうと手を伸ばしたが、ひょいっと避けられる。？なんで？なんでなんかな？え？救急箱渡してくれるんじゃねぇの？

「あらあら。進君、小猫ちゃんはきっと、自分がケガさせたから治療したいんですよ」

と朱乃が言ってくる。あー、もしかしてコイツ、自分が左手をケガさせたと思ってんのか？

「え？そうなのか？」

と俺が小猫の方を向いて聞いてみる。すると彼女は小さく、コクンと頷いた。

なるほど、責任感が強い子だな。けど、この場合ってどうしたらいいんだ？

と、そこで俺に向けられる視線に気がつく。祐斗だ。なぜか祐斗がこちらをガンミしてる。そして、口パクで何かを言ってきてる。

え？なに？『しっかりね』？え？なにを？いやいや、グッじゃねぇか。訳わかんねぇから。いやいや、一仕事終わったみたいなかおしてんじゃねぇよ。

もう、祐斗には頼らねー。えっと、小猫は責任感じてるから、俺の手の治療をしたいっていってんだよな。ここは、素直に受けときゃいいのか？

「じゃ、じゃあ・・・お願いします？」

「はい。じゃあ、治療するので座ってください」

「え？あ、は、はい」

そういって長椅子にチョコンと座る。と、座った位地が悪かったのか、小猫が文句をいってくる。

「・・・そんな先に座らないでください。私が座れないので、つめてください」

「へ？は、はぁ・・・」

といって、俺は二人分ほど席を詰める。そして、つめた所に小猫が座り――

――と言ってきたのでした。

「じゃあ、左手見せてください」

・・・さっきから思ってんだが、祐斗と朱乃がニヤニヤしながら見

てきてスゲェウザいんだが・・・、後で殴っていいかな？

悪魔（のしもべ）始めました～帰還と治療～（後書き）

とまぁ、最初から最後までオリジナルな話でしたね。いやぁー、久々に進かいたんですけど・・・ぶれないねー彼。ホント書きやすい。あと同じくらい木場と小猫も書きやすい。逆にイッセーと朱乃がムズい。リアスはまあ普通。なるべく全員の出番を均等にしたいんだけど中々難しいね。ブランクもあるし、しばらくは大変かな？

話なんですが、予定していたほど進まなかった。うん。書いてたらどんどん蛇足しちまったぜ・・・。けどなんか小猫と木場の絡みだけはやりやすい。ホントなんでだろ？

この小説のヒロインは悪魔で小猫だから、小猫にスポットあてないといけないけど、序盤から惚れさせるのは嫌いだから。じっくりいきますね。しばらくは進とのじれったい関係を見て砂糖はいてください（笑）。そんで付き合いだしたら大量に砂糖はいてください（笑）。

さて、次回は・・・まあ、一週間以内には頑張りますわ（汗）

話は変わるんですが、自分受験の時、面接があったんですけど、なぜか受験番号が上から七番なのに一番最後だったんですけど・・・。軽く四時間ぐらい待ってました。なんか四時間も待ってたら、ほかの受験生と知らず知らずのうちに話してて、妙な連帯感が生まれましたよ（笑）。あの面接の順番ってなんか基準があんのかな？

悪魔（のしもべ）始めました～布切れと叫び～（前書き）

マブラヴがしたい、したいよぉぉぉぉぉッ！！全シリーズしたいよぉぉぉぉぉッ！！

あと、『あやかしびと』と『加奈、おかえり』がしたいッ！！まだまだしたいやつはあるが、とりあえず『あやかしびと』とマブラヴは最優先でしたい。

『あやかしびと』は確かｔｙｐｅ　ＭＯＯＮの奈須きのこやほかのスタッフさんがやって、脱帽した作品らしい。クソ、早くしたいッ！！時間もないのに金もないッ！！

『マブラヴ』は一気にしたいから無印から大人買いしたい。けど金がない。

とまあ、上記の作品がしたくてしたくて我慢してたら更新遅れました。すんません。けど許して。

マブラヴはみなさん割と知ってるんですが、『あやかしびと』はそんなに知られてないという・・・。神ゲーですよ？声優えぐいですよ？やった奴挙手してマジでッ！！

さて、今回は・・・、まあ落差が激しい。ではどうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました～布切れと叫び～

「進先輩、動かないでください」

「え？あ、はい・・・」

とまぁ、小猫さんは絶賛治療中なわけだが・・・。

正直に言おう、暇だ。小猫さんは治療に集中してるのか、ずっと俺の左手に意識をそそいでるし、ほかの連中はアレと対話してるし・・・。詰まるところ、誰も俺の相手してくんねーんだわ。

・・・んだよ。人間、何もしてないのが一番の退屈なんだぞ？

普段だったらこういう時は、ギャルゲしてるかイッセー泣かすかしてんだが。今はギャルゲもってないし、イッセーはあっちだし・・・。なんかいい暇つぶしを探してるわけなんだよ。うーん、こういう時は普段しないことをするといいと、著書『外道麻婆神父＆ａｍｐ；超絶毒舌シスターの人生指南書』に書いていたような・・・。

ん？なんだ？本の題名がすごく引っかかる？気にすんなよ。神父の方はｚｅｒｏで忙しいんだよ。徳島行きたかったよぉぉぉぉッ！！

まぁ、とりあえずだ。普段俺がしないこととを探し出すんだッ！！・・・なんだろ？いっぱいあるのに、この状況じゃできないや・・・。

うーん、難しいな。分数の計算より難しいな。・・・・・・あ、そうだ。普段なら絶対しないことなら、人の観察しようッ！！

まてまて、『テメェ、なにいってんの？』的なツッコミはもっともだ。いやほんと言いたいことは分かるから。とりあえず聞けって。俺の話をきけぇいッ！！

コホン。とりあえずだ。俺は他人はクソどうでもいい。いやまあ、全人類似たようなもんだろ、基本的に人間ってこのスタンスじゃね？まぁ、マザー○レサ級のお人好しなら違うんだろうけどさ。

んでだよ。俺も例外じゃなく他人はどうでもいいのスタンスで生きているわけだ。つまり、他人の事がどうでもいいと思ってる俺が他人に興味をしめすことは普段しないことじゃね？ということに行き着いたわけだ。

・・・まぁ、ぶっちゃけほかにみるもんないしね。というわけで小猫ウォッチ開始ッ！！

飽きた、終了。

始めて二秒で飽きた。だって表情かわんねぇーし。ん？二秒じゃ変わんないって？ハハハ、イッセーなら股間に蹴り一発撃ち込めば一秒で青くなるぜ？え？違う？

というわけで、小猫を観察しても面白くないという結論に達したのだった。

え？なに？もうちょっとがんばれ？え？なにを？がんばれってなにを？まばたきをか？まばたき頑張ればいいのか？速くすんの？遅くすんの？どっち？

そして再び周りを見渡して見たが特におもしろそうなものがない。いやもう本当に暇だ。暇すぎる。しゃーない、もう一回小猫ウォッチをするか・・・。今度は外見からわかるデータをまとめてみるか？それなら多少は暇つぶしになるだろ。

「・・・・・・・・」

と言うわけでひたすら小猫の顔を見てるんだが、なるほどみればみるほど可愛い目に顔が整ってるな。可愛い女の子の特徴（二次元の嫁たちから学びました）の目が丸めでクリクリしてるというのがわかるな。

ちなみに美人系は基本的に目は可愛い系に比べるといくらか鋭いのが特徴だな。けど、この特徴をしきりなしに上げてくと、それはそれでメンドいしダルいから却下で。

とにかくだ。目の前にいる存在は紛れもない美少女なわけだ。いや、正しくは美幼女か（笑）いやだって、ランドセルとか背負わせてるの想像してみ？間違っても、俺はコイツを高校生とは認識できないな、とか変なことを想像してましたら私の左手首が締め上げられて激痛を走っているぅぅぅぅぅぅぅぅぅ――――――――ッ！？

「うぎゃぁぁぁぁ――――――――――ッ！！千切れる千切れる千切れる千切れる千切れる千切れる千切れる千切れる千切れる千切れる千切れる千切れる千切れるぅぅぅ――――――――ッ！！！！！」

なおも締めあがる俺の左手首。小猫がさっきまで止血のために巻いていた布を締め上げてるのだ。

いてえって！！なんで手首千切れるくらいに締め上げんだよ！！

「痛い！！痛いからッ！！手首もげっからッ！！いやまじもげっからッ！！やめろ小猫！！やめろってのッ！！や、やめてくださいッ！！やめてくださいお願いしますッ！！ってもしもし！？聞いてますか！？聞いてますか小猫！？俺の叫び聞いてますか！？締めあがってんすけど！？さらに締め上がってんですけど！？俺の手首が体とおさらばしちゃいそうなんですけどッ！？」

そこまでいってようやく布が緩む。あと三秒おそかったらガチで分離してたぞッ！？

先ほどまで締めあがっていた手をさすりながら俺が半泣きで小猫に訴えるッ！！

「おいこらッ！！おいこら小猫ッ！！テメェなんで締め上げんだよッ！！手首文字通り手を振って体とおさらばすっとこだったぞ！？俺がなにしたってんだよッ！！」

俺のうったえをみて小猫は眉一つ動かさず淡々と言う。

「進先輩、何か考えてたんですか？」

「あぁんッ！？」

ハンギレで俺が答える。こいつなにいってんだッ！？俺がなに考えてたってか？

「なに考えてたかって、なんで答えないといけないんだよッ！！」

「いいからこたえてください」

「いやだから――」

「答えてください

「～～～～～～～～～ッ」

何だってんだよコイツはッ！！なんで俺が考えてた事を答えなきゃならねぇんだよッ！！

「別に大したこと考えてねぇよッ！！ただ単に、テメェにランドセル着せたら似合いそうだなって思っただけだが？」

「――――――」

ん？なんだ？なんだこの空気？俺なんかしたか？俺の発言で小猫が固まってるんだが？それと祐斗や朱乃らが『やっちゃった・・・』みたいな感じで視線を送ってくるんだが。

「本道先輩・・・」

小猫が俺の名を呼ぶ。だが、俺は自分の目を疑った。さ、殺気が。殺気がハンパじゃない・・・。

「先輩、こっち向いてください」

いや、それすると俺死んじゃうんじゃないかな？なんとなくじゃなくても俺死んじゃうんじゃないかな？だって、殺気が収束されてるもん。あ、あは、あははは・・・。

「えっと・・・絶対？」

「絶対です」

「マジで？」

「マジです」

「本気？」

「本気」

「ガチ？」

「ギレ」

「・・・・・・」

あ、死んだわこれ。間違いなく死んだわ。今まで親父に殺されてきたが、そのたびにへんな薬とムチャクチャな治療で蘇生されてきたから何とかなってきたが・・・。

これは、本当に、死にそう。

けど向かわなかったらその瞬間俺の首飛びそうだ。まさに八方塞がり。その末路は俺の死。ハハハ、笑い話にも何ねぇー（笑）

「・・・」

ならば、ならば！！意志気よく振り向きそして鮮やかに散りきるのが男の死に様だと今の俺は思う。

チラッ

イッセーたちの方を向く。さっきまでの超シリアス雰囲気がどこにいったのか。敵味方かまわず黙ってこちらを向いている。その顔には哀れみと悲しみがうつっている。あぁそうだよ。俺はこれから死ぬ。最後に、最期に・・・あいつらに伝えないと。

「みんな・・・小猫を、怒らすなよ」

「進・・・、進ッ！！」

「じゃあな、イッセー。お前に逢えて特に意味はなかったよ」

「最期に言うセリフがそれかッ！！ってまて、まて進ッ！！振り向いたら・・・振り向いたら死ぬぞッ！！」

イッセーがこちらに駆けようとするのを祐斗と部長が止める。

「は、はなしてくださいッ！！進がッ！！進が死んじまうッ！！」

「イッセー君・・・もう、もう彼は・・・助からないんだ」

「けど、けどッ！！」

なおも振りほどいこうとするイッセーを部長が諭すように言う。

「諦めなさい、イッセー。進は・・・進は、自分の犯した罪を償おうとしてるのよ。それを邪魔する権利は私たちにはないわ」

部長、俺未だに自分のやった罪が解ってません。けど死ぬのはわかってます。

「じゃあな、元気で」

「進・・・、進ぅぅぅぅぅ――――ッ！！」

バッ！！

そして振り向いた瞬間。

「ギャァァアアアアアァァァァァァァ――――――――――――ッ！！！！！」

俺の股間に小猫の蹴りがめり込んだ。

――――――――――――

「――――――――ハッ！？」

あまりの悪夢に瞼を開ける。そこには先ほどと変わらない状況が広がっていた。アレと話をしているみんなそして隣には――――。

「起きたんですか？」

――――――――小猫がいた。

ゾクリ。

小猫をみた瞬間、何故か体が震えあがる。ん?なんでだ?なんで俺は小猫をみてビビったんだ?・・・まあいっか。気にしないでおこ。悪夢の内容も覚えてないし。

「ん?小猫か?俺、寝てたのか?」

右手で頭をさするとそこには包帯が巻かれていた。よく見ると左手にも巻かれていた。

「『ひまだから寝る』っていって寝たの、先輩ですよ?」

小猫が軽くにらみながら言ってくる。はて?そうだったか?まあ、言われた方がいってんだから間違いはないんだろうな。

「そうかい。そらすまなかったな」

そういって立ち上がる。治療も終わったのだから、アイツらの近くに向かうとするか。

「行くか、小猫。救急箱かせよ。持ってく」

「・・・どうも」

そういって小猫から救急箱を受け取る。そのまま歩き出す。

「手当て、ありがとな」

歩きながら俺が小猫に告げる。小猫はそれを聞き、少し驚いたようなリアクションを見せた。

「んだよ、小猫。なに驚いてんだよ。まるで俺が『他人に感謝しな

い冷血野郎』とでも思ってたのかよ？」

「・・・かなり」

「おま、・・・俺だって心があるんだから傷つくときは傷つくぞ」

「・・・そうだったんですか」

「おまえの中にある俺って存在がどんなのか真剣に問いたいところだ」

少し小猫が考え始める。時間にして十秒程度で結論がでたのか。話してきた。

「超絶冷徹鬼畜男？」

「うわ・・・、俺ってそんなイメージだったのかよ」

真剣に落ち込んじまいそうだ。そらまぁ、確かに俺の印象ってそんな感じかもしれないが面と向かっていわれっとなかなか堪える。

肩を落として歩く俺に小猫が表情を先ほどとかわらない無表情で続ける。

「・・・冗談です」

「あ、そうなの？いやぁー、さすがにそんな印象だったら多少は生き方変えないと駄目かと本気で悩んでたから――――」

「本当はもっとヒドいです」

「ヘイ、カモン転生トラックッ！！」

俺、人生やり直した方がガチでよくないか？人としてあってはならない存在な気がしてきた・・・。

「本気で落ち込まないでください。キモイです」

「その一言がトドメだって気づいてくんないかな？」

そんな冗談？を言い合っていたら目的地に到着。

「あら進、治療はもういいの？」

微笑を浮かべながら聞いてくる部長。俺は左手を上げてひらひらと振る。

「この通り。小猫様がしっかりばっちりきっちり治療してくれたから、動かすのには問題ねぇ」

「そう、こっちもちょうど終わったから。・・・あとは好きにしていいわ」

部長はそう言い終わると、視線をいまだに地に座っている堕天使に視線を向ける。

それをきいて心臓のギアが跳ね上がる。『好きにしていい』と言われた。つまり、もう――――

「了解」

――――――――殺していいということ。

それを聞いて顔を強ばらせる。恐らく、自分が殺される事がわかったのだろう。しかし堕天使はすぐに媚びたような声を上げた。

「イッセーくん！私を助けて！」

その声はイッセーに当てたものだった。アレが出している声は俺やイッセーがまだ日常にいた時に見せた、イッセーの彼女としての演技していたコイツの声・・・ッ。

「この悪魔が私を殺そうとしているの！私、あなたのことが大好きよ！愛している！だから、一緒にこの悪魔を倒しましょう！」

そういって涙を浮かべてイッセーに懇願する堕天使。

・・・んだよ。なんだよ。なんなんだよッ！！その態度ッ！！こんな奴に・・・こんな奴に俺達は・・・ッ。殺されたっていうのかよ。日常を奪われたっていうのかよ。こんな醜く命乞いするような奴にッ！！俺が・・・俺達が大切にしていた日常を奪われたのかよ。

許せるか・・・。コイツをッ！！日常を守れきれなかった俺をッ！！許せるわけがない。コイツという存在がッ！！俺という存在がッ！！弱かった自分がッ！！許せるわけがないッ！！

復讐しよう。コイツに、俺という存在を重ね合わせて、コイツを殺して俺という存在をもう一度復讐しよう。

体に力を入れる。体には熱がこもってる。怒りで頭に血が上る。だ

が構うものか、コイツ（本道進）を殺すのに怒らずにはいられないッ！！

隣にいたイッセーを見る。最後確認だけはしないといけない。

「イッセー」

「わかってる。・・・グッバイ、俺の恋。進、あと頼むわ・・・」

「あいよ。あと、おまえはこれからさきはみない方がいい。かなり無残に殺すつもりだからさ」

「いや、いいよ。最期まで見とく」

そこまできいて俺はもうイッセーに言葉をかけるのをやめた。これ以上は言っても無駄だし、それに俺がもう我慢できない。

「す、進くん！私と組みましょう！私とあなたが組めばここにいる悪魔や天使だって――」

シュッ！！

「――――ッ！？」

奴の言葉を言い切る前にのどをつぶす。これ以上、もう声なんて聞きたくない。

「お前の声は俺の神経を逆撫でするだけだ。これ以上は聞きたくない」

聞こえてくるのは喉を潰された痛みに悶える堕天使の息づかいと俺の声だけ。ほかに何も聞こえない。

俺はコイツを殺す。その事に何の躊躇も同情もない。けど殺すってことはソイツの未来を奪うことだ。俺にその覚悟があるのか、と問われれば『わからない』としか答えるしかない。

「じゃあな、堕天使。――――――――死ね」

だけど俺は止まれない。そうする事でしか、俺の感情（復讐心）を収めることなんてできない。一時の感情に流されることになっても、コイツだけは殺したい。

ザクンッ！！

俺の放った抜き手がやつの心臓を貫く。肉を裂き、臓器を、骨を砕く。右腕はそのまま奴の体を貫通する。

心臓が貫かれた事により、やつの胸から血があふれる。血が逆流したのか口からも大量の血が流れる。

右手を抜き去る。瞬間、血しぶきを上げる。致命傷だ。ほっといても死ぬが、その余裕は俺の心に今はない。

スパン

抜き去った右手の形を、手刀の形に変え、奴の首に放つと首は跳ね上がった。

シャァー・・・

頭をなくした首は血飛沫を上空に上げる。飛んだ血は重力に従って落下してくる。文字通り、血の雨が降りかかる。血が俺の髪や体を濡らす。

もう一つ上空にあがっていた物が落ちてくる。奴の頭だ。恐らくもう機能する事がない頭が俺の右側へと落ちてくる。

パン。

落ちてきた頭を右拳で粉々に砕く。頭の中にあった物が飛び散るが、もう俺にとってはなんの興味もないものだ。

奴の体が地面に倒れていくがそれと同時に体が砂のように消えていく。飛び散った脳も目も砂になって消えてく。

そして、奴の体は地面に伏せる前に跡形もなく砂となって消えた。あとに残ったのは――――

――――充満した血の匂いと奴の堕天使としての羽根だけが残った。

俺の復讐が、終わった。

悪魔（のしもべ）始めました～布切れと叫び～（後書き）

長かった。あと一話でようやく一巻終わる。いやぁー長かった。

しかし、今話の進は容赦ないな。心臓潰して、首とばして、頭潰して・・・。堕天使のライフもうゼロよ！

さて、実はこの作品十万ＰＶ越えたんですよ・・・。え？まじで？マジで越えたの？はい、マジです。よくもまぁそこまでこぎつけたよ・・・。

それもこれも、みなさんのおかげです。というわけでッ！！感謝の気持ちもこめて、番外編を書きますッ！！それで、みなさんなにか希望あります？なんでもいいですよ？時間軸かんけーないんで、進と小猫のイチャイチャやら、進とイッセーの出会いやら、進のテスト奮闘記やらッ！！なんでもいいですッ！！そうですまたアンケートですッ！！ごめんなさい許してッ！！

期限は次の更新までに。一人一つの案を感想の方に書いてください。だれも答えてくれなかったら、それはそれで寂しいですが、こっちでがんばってギャグ系のを書くつもりでいるんで。アンケートの中から一番多かったり、作者も書きたいと思った奴を書くので、そこはよろしく。

さて、最後に３つ。Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏがパネェヨ・・・。作画がｕｆｏ・・・。がんばってくれッ！！

ハイスクールＤ×Ｄのアニメの声優・・・、イッセーはシモンくんか・・・。リアスは澪か・・・。アーシアは誰かわからんかった。

誰かわかる人いる？

受験終わた。Ａｏで受かったからこれから遊べると思ったら、英語勉強しろ？ふざけんなぁッ！！英語だいっ嫌いなんだッ！！

それではまた次回。次は・・・、土日には・・・。

悪魔（のしもべ）始めました～空いた物と満たした物～（前書き）

はい、更新です。ついに一巻が終わります。いやぁーながかった。
小説始めて約５ヶ月・・・。そんだけかかってようやく、か。

では、どうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました～空いた物と満たした物～

「ふぅ・・・」

小さく息を吐く。その吐いた息に今まであった感情が抜けていくような気がした。

終わった。俺の・・・、俺の復讐が終わった。あの堕天使を完璧に、殺しきった。奴の心の臓を貫き、首を跳ね上げ、頭を殴り潰した。この手で、奴の未来を奪った。

悪魔になってから、ずっと願っていた事が叶った。叶った・・・のに。なにも満たされてはいなかった。いや、むしろ心にポッカリ穴があいたみたいだ。さっきまでそこには奴への恨みやらなんやら詰まってたのに、奴を殺したとたん。無くなっちまった・・・。

なんだ?何なんだ?この空虚感は?さっきまでの俺には、奴を殺すという目的があった。だが、それが叶った。叶ってしまった。叶ったとたん、これからどうしていいか・・・わからなくなっちまった。俺はこれからどうすればいいか、何を目指せばいいかわからなくなっちまった。

俺は・・・、これからどうすればいいんだ?

「また一段と、派手にやったね」

そんな事を考えていたら、部長が俺に話しかけてきた。やめだ。この事はあとでまた考えよう。

「好きにしていいっつったのは、アンタだぜ？」

苦笑を浮かべながら部長の方を向く。俺の一言に部長も苦笑を浮かべる。

「それでも、限度があるでしょ？次からはもう少しスマートに片づけてちょうだい。いちいちそんな殺し方してたら時間がもったいないでしょ？」

うわっ、辛辣。詰まるところ、『一撃で殺しなさい』って言われてるんですけど・・・。悪魔って敵対してる存在にはみんなこんな態度なのか？

「ヘイヘイ、後ろに全力ダッシュで検討しときますよ」

左手を降って応える俺。さて、とりあえずこの血みどろな右手をふきたいな。んー・・・、確かさっきの救急箱の中に、タオルがあったような。

「小猫、さっきの救急箱からタオルがあるかないか調べてくんね？いい加減、この血ふきたい」

救急箱の近くにいた小猫に頼む。小猫は無言で頷くと、救急箱の方に向かい箱をあさり、見つけたらぽーいっとこちらにほってきた。

「あんがと」

左手で受け取り、頭からふく。さっき上に上がった血飛沫で濡れたからな。はぁ・・・、どうせならシャワーに浴びたい。

「さて、もう一仕事しましょう」

「え？まだなんかあんの？」

頭をふきながら部長の発言に反応する。みるとほかの連中も少し驚いていた。

「えぇ、まだなにかあるのよ」

「部長、なにを？」

祐斗も怪訝に思ったのか、部長に質問していた。それをきいて部長は少し意地の悪そうな笑みを浮かべながら、何かを握り込んだ右手を前にだして。

「コレを、元の所有者に返しましょう」

そういって出てきた物は、緑色に光る何かだった。

――――――――――――――――

聖堂の宙に淡い緑色の光が浮かぶ。なんでもあれはあの金髪シスターの神器らしい。その神器は悪魔の傷すら回復させる絶対的な回復力をもつ神器らしい。あの堕天使はその回復力を目に付け、それを手に入れようとしてこの町で活動していたってわけらしい。

んで、うまく手に入れたはいいがそこに俺らが邪魔しにきて、結局俺に殺されたから神器だけ残ったらしい。

「さて、これをアーシア・アルジェントさんに返しましょうか」

「で、でも、アーシアはもう・・・」

ちなみに神器所有者から神器を抜くと抜かれた方は死ぬらしい。つまり俺やイッセーも抜き取られたら死ぬっつーわけだ。だからあの金髪シスターは自分の神器を抜き取られたから今死んじまってる。俺らも下手したらあーなってたのか・・・。

と、さっきまで泣きそうな顔をしていたイッセーが口を開いた。

「・・・部長、みんな、俺とアーシアのために本当にありがとうございました。で、でも、せっかく協力してくれたけど、アーシアは・・・」

いや、少なくとも俺は自分の利益で動いたんだがっていったら空気が台無しになるから黙っとこ。

「イッセー、これ、なんだと思う?」

部長が何かをポケットから何かを取り出す。ありゃ・・・チェスの駒か?色は紅いな。普通、チェスの駒って白と黒だよな?だったら、あれは――

「リアス嬢、それが例の?」

「えぇ、『悪魔の駒』よ。『僧侶』のだけど」

「へ?」

イッセーが間の抜けた声をあげる。それに構わず部長は続けた。

「あなた達に説明するのがおくれたけれど、爵位持ちの悪魔が手にできる駒の数は、『兵士』が八つ、『騎士』、『戦車』、『僧侶』がそれぞれ二つずつ、『女王』がひとつの計十五体なの。実際のチェスと同じね。『僧侶』の駒をひとつ使ってしまっているけれど、私にはもう一つだけ『僧侶』の駒があるわ」

えっとそうなると・・・、『戦車』は俺と小猫で埋まっちまってんのか。いやまぁ、どうでもいいんだけどさ。

部長はその駒を金髪シスターの胸に駒をおいた。

「『僧侶』の力は眷属の悪魔をフォローすること。この子の回復力は『僧侶』として使えるわ。前代未聞だけれど、このシスターを悪魔へ転生させてみる」

部長の体を紅い魔力が覆う。

「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、アーシア・アルジェントよ。いま再び我の下僕となるため、この地へ魂を帰還させ、悪魔となれ。汝我が『僧侶』として、新たな生を歓喜せよ！」

駒が紅い光を発して、金髪シスターの胸へ沈んでいく。同時に彼女の神器も入り込んでいった。

駒と神器が完全にはい込んだのを確認すると、部長は魔力の波動やめた。なるほど、俺やイッセーはああやって蘇ったのか。

金髪シスターはそれから数秒たつと、ゆっくりと瞼が開き始めた。イッセーをみると、泣き出していた。ったく・・・、この泣き虫め。

「あれ？」

金髪シスターが声をあげる。それをみて部長がイッセーに笑みを浮かべる。

「悪魔をも回復させるその子の力が欲しかったからこそ、私は転生させたわ。ふふふ、イッセー、あとはあなたが守っておあげなさい。先輩悪魔なのだから」

俺になにもいわないってことは、俺は悪影響だから極力はなすなってことか？

「イッセーさん？」

感極まったのか、イッセーは金髪シスターを抱きしめていた。普段なら蹴り飛ばしてる所だが、ま、今回は、ね。

「帰ろう、アーシア」

お疲れさん、イッセー。

――――――――――――――――――――

「で？」

あの『アーシアたん、救出作戦。闇が蠢く編』があった翌日。俺はデパートに買い物にきていた。いや、正確には眷属悪魔全員で来てる。

なんでかって？いや説明するから待ってよ。あの後、つまりアーシ

アが悪魔に転生した後、部長の一言でこうなったんだ。

『さて、眷属も増えたし一度歓迎会でもしましょうか』

その後はとんとん拍子で決まっていたわけなんだが、ここで問題が発生。なんでもアーシアちゃんは私服を持ってないらしい。

今までのシスターとしての生活を考えりゃわかることなんだがな。んで、ついでに生活用品一式買い揃えようっつーわけで、お出かけが決まったんだ。

まぁ、そこまでは良かったんだよ。けど最悪なのはこっからなんだよ。買い物っつーワードに予想以上に食らいつく女性陣。それも服だ。自分らだって服を見たかったんだろ。それで女性陣全員参加決定だ。

んで、『どうせなら、みんなでいきましょう』つー部長のありがたい、本当にありがたい言葉のおかげで私も参加が強制されたわけだ。てか、男性陣は全員だった。おもに、荷物持ちという役割で。

「なんで俺、ここにいるわけ？」

「あはは、もうあきらめた方がいいよ」

隣にいる祐斗が乾いた声で笑う。うっすらと疲労の色も見える。こいつも苦労してんだなぁ。

まぁ、荷物持ちはわかる。それぐらいはまぁわかる。けど、女の思考回路だけはわからん。なぜ服を買うのに、三時間もかかるんだ？それに今だに終わる気配がしないんだが？そらあ俺も服とかは気を使って買うが、それでも三時間もかからない。せいぜい二時間だ。

「つーか、こんなに買ったのにまだ買うのかよ。袋ごと積み上げたら俺の身長こすんじゃね？」

「女の子との買い物は、命がけだからね。けど、まだ楽になった方だよ。進君達がくる前は買ったもの全部持ってたから。いやぁ、ローテーション組めるようになって本当に助かったよ」

「まじか？おまえ、よく生き残った」

そうなのだ。買い物が始まった一時間が経過して、女の買い物に対する執着を思い知った俺とイッセーは祐斗とアイコンタクトをとり、ローテーションを組んで一時間毎に1人は荷物を持つ為に女性陣についていき、ほか2人はベンチで休むというのを僅か一秒のアイコンタクトで作ったのだ。いやだって、そうしないと体がもたない。ちなみに一回目は俺、二回目は祐斗、三回目は今いったイッセーだ。

「てか、アーシアはともかく。俺とイッセーって『迎え入れられる』方だよな？なのになんで『迎え入れる』方の雑用にかり出されてんだろ？」

今日何回目になるかわからない疑問を祐斗にぶつける。そして祐斗も何回目になるかわからないが答える。

「だから、もう諦めた方がいいって。人生諦めが肝心だよ？」

そういった祐斗の目が死んでいるのにはつっこまない方が良さそうだ。

ちなみに、俺がイッセーにアーシアを紹介された時、すっっっげーー剣幕で睨みながら脅された。絶対覚えろって、念仏いうみたいにいってくんだぜ？マジでビビったわ。

「はい、進君。よかったらどうぞ」

そういって祐斗が差し出してきたのは缶コーヒーだった。隣にある自販機から買ったのだろう。俺はそれを普通に受け取る。ホットじゃなくクールなのが気の利いた配慮だ。

「悪いな。いただきます、と」

「はい、どうぞ」

一度礼をいってからタブにてんかけて開ける。それを迷わず口に運びコーヒーで喉を潤す。口の中に広がる苦味とコクが、疲労を和らげるような気がした。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

俺と祐斗の間に沈黙が流れる。それは疲労による沈黙ではなく、なにか聞きたいことが聞き出せないような沈黙だ。

「まだ、気にしてるの？」

その沈黙を破ったのはコーヒーを一度だけ口をつけて止まった祐斗だった。

「何のことだ？」

そういいながらコーヒーを再び口をつける。

「あの堕天使を殺したこと、だよ」

祐斗のその発言を鼻で笑う。コイツ、どこをどうみたらそうみえんだよ。

「俺が、1人殺した事をくよくよと考えるたまに見えるか？」

皮肉気味に笑いながら祐斗の方を向く。だが、祐斗はこちらを見ずに続ける。

「うん、少しね」

「なるほど、我らが騎士の目はどうやらガラス玉がつまってるようだな」

半分冗談でいう。その冗談もサラリと流しながら、祐斗が続ける。

「まぁ、少し話を聞いてよ。先輩からのアドバイスだ」

「先輩って・・・、タメだろ？」

「悪魔としてだよ」

そういって、再びコーヒーを口にする祐斗。俺もまたコーヒーを飲み直す。

「あまり、気にしないことだね。悪魔として生きるなら、あんな当たり前だよ。それが出来ないならこの世界では生きないよ」

「・・・・・・」

わかってる。恐らく、俺が生き続ける限り、自分と同じ形をしたものを殺す（壊す）のは数えられないほどあるんだろう。そんな殺した（壊した）存在をいちいち気にしてたら、自分が死んじ（壊れち）まう。

どこかで、どこかで区切りをつけないと先には決して進めない。

「じゃあ、お礼に。俺も先輩としてのアドバイスだ」

手に持った缶コーヒーを一気に飲み干す。

「先輩って・・・、タメだよ？」

祐斗は苦笑を浮かべながら答える。テメェ、俺のセリフパクりやがって。

「復讐者としてだよ」

その俺の発言に一気に顔をしかめる祐斗。その顔から驚愕と不信感が漂う。

「・・・何のことかな？」

「ハッ。んな殺気漂わせたらもろばれだぜ？もちっと上手く隠すか、思い切ってみんなに公言・・・しなくていいや。面倒事は勘弁だ」

黙りこくる祐斗に俺は続ける。

「じゃあ、こっから独り言だ。聞き流してたらいいよ。・・・復讐は、あまりオススメしないね」

クキリッ

空になった缶コーヒーを握り潰す。その音は俺の耳によく入ってきた。

「叶ったところで、何も残らない。いや、叶ったら抜け落ちちまう。自分が何のために生きていたのかっつー大事な部分がスッポリと、な」

祐斗が俺を見ずに、下を向く。俺は立ち上がり缶を捨てにいきながら続ける。

「その空いた所に、しっかり何かが入り込まないと。自分無くすぞ？」

「・・・・・・」

缶をゴミ箱に滑らせる。そのまま座らずに、山ずみとなっている服に手をかける。

「そろそろ行こうぜ。イッセーじゃあ、限界があるだろ」

祐斗に立ち上がるように促す。それを聞いて祐斗も少し驚いた顔をしたがすぐにいつもの笑顔をつけた。

「あはは、そうだね。行こうか」

そういって立ち上がり、残った荷物を持ってイッセーの本に向かうため歩き出した。

――――――――――――――――

「進君」

イッセー達を探して歩き回っていたら祐斗が話かけてきた。

「ん？なに？」

「進君は、その空いた所になにを埋めたの？」

少し、驚く。案外気にしてんだな。ったく、シカトかと思った。

「そうだな。俺は――――――」

「あ、進ッ！！」

俺が話そうとした瞬間、後ろからよく聞いた声がする。俺と祐斗は声がした方を向く。

「おいイッセー、探してたぜ？」

「それはコッチのセリフだッ！！部長たちが服の買い物終わったから、次に食材買いに行くからよびにいったのなんで二人していないんだよ？探したぞ？」

イッセーは多少息を切らせながらいう。マジか。行き違いなったのか。我ながら運がない。悪魔だからか？

「そら悪かったな。部長たちは？」

「エレベーター前で待ってて貰ってる。あまり待たせんの悪いから早くいこう」

確かそりゃマズいな。お母様もあまり女の人を待たせんなっつってたな。

「わあった。いくか、祐斗」

「あ、う、うん。行こうか」

「おう、行こう行こう。早く行こう」

部長達に合流するために歩き出した。

――――――――――――――――

（空いた所に何が入る、か）

部長達の所に向かいながら先ほどの質問を思い出していた。祐斗は間違いなく、なにかを復讐したくてたまらないのだろう。だから俺の発言にもここまで食らいついてきたんだろう。

（俺はな。俺の中に埋まった物はな）

あの後、じっくり考えた。奴を殺した後、自分の心を満たしてくれ

る物を。ただその答えはあっさりでた。そしてそれは、俺が生きている限り、尽きることはないだろう。いや、当分はその心配がないものだ。

（より強敵との、より高い次元での命かけた殺し合い、つまり戦闘心だよ）

そう。俺の心はフリードと戦っていたとき、満たされていた。命をかけた。本気の殺し合いの中で、そのやりとりの間だけ、満たされていた。だから、コレ（戦闘心）が俺に埋まるのは必然だろ？

（まぁ、当分は退屈しないですみそうだ。頼むぞ、この世界の強者よ。俺を満たしてくれよ）

悪魔（のしもべ）始めました～空いた物と満たした物～（後書き）

とまあ、主人公一番危ないキャラだと判明した今話。会話の相手が八割木場・・・。あれ？こんなはずじゃ・・・。ま、いっか。書きやすいし。なんか知らんが主人公×木場はちょう書きやすい。

とまぁ、これで一巻も終わり。次は番外編挟んで二巻にいきます。二巻はもうだいたい話は固めてあるんであとは書くだけ。けど時間かかる。二巻は・・・、とりあえずライザーごめんとしか言いようがない。まあお楽しみに。

さて、その番外編なんですけど。今３つ希望が出まして、

・進ＶＳ進父

・進がギャルゲ買いに行ったとき、そこでもしレヴィアたんにあったら。

・本道家の華麗なる１日

何ですけど。ごめんなさい。上と下はなしで。理由はまず上から、この段階で進ＶＳ父親すると、一瞬で進が蒸発しますから勝負になりません。かといって、まともな戦いをさせようとするなら間違いなく禁手化させないと話にならないんです。番外編でネタばれはちょっと・・・。次に下なんですけど、間違いなく主人公が死にますし、死なないような話しを考えたんですけど、何も面白みがなかったので・・・。すみません。ごめんなさい。許してください。

というわけで、このままいけば番外編は真ん中の奴になりますが、みなさんいいでしょうか？『いや、こんな話がいい』ってリクエストがある方は今日、１０月３１日が終わるまでに感想の方に書いてください。

番外編～俺と仲間と魔法少女～（前書き）

はい、更新です。いやぁー、先週はすんません。実は風邪引いちゃいまして。とても執筆できる状態じゃなかったんですよ。ホント許してください。ゴメンナサイ。

さて、今話なんですけど。注意事項があります。

・木場がオタク化してます。

・時間軸は三巻終了したあたりです。

・ツッコミ所が多い・・・、つか、それしかないですけどきにしないでください。

この三点です。まぁ、今回の話、つまりにつまりまして・・・。今までで一番の難産でした。・・・笑えるかどうかは保証しません。つか、ぶっちゃけ作者的にはそんなにでした。だからそんなに期待しないで。１０ページにも及ぶグダグダな話があると思っていてください。さて、それではどうぞ。

Q『進が原作前にレヴィアタンに会うとどうなるか？』

番外編～俺と仲間と魔法少女～

祐斗ｓｉｄｅ

「はい、チェック」

「えっ、うそ・・・うわ」

僕とイッセー君はチェスをしていた。今日何十回目になるチェクメイトだ。イッセーが僕の顔を伺ってくる。

「あ、あのー・・・待っ――――」

「――――待ったはきかないからね」

「ぐ、ぬぬぬ・・・」

僕の一言を聞いた後、イッセー君も今日何十回目になるチェス盤との睨めっこを開始した。イッセー君。さすがにあきらめた方がいい。持ち駒の半数以上とられた状況からはさすがに難しいよ。

ふぅー、とため息を一つついてから周りを見渡してみた。みると、部員たちが各々自分の好きなことをしていた。部長は朱乃さんの入れた紅茶を飲みながら本をよんでいた。朱乃さんもみれば同じように事をしてくつろいでいた。

少し離れたところには小猫ちゃんとアーシアさんがゼノヴィアにお菓子を薦めていた。進君は・・・いつも通り学校をサボったらしい。まったく、単位足りなくなってもしらないよ？

まぁ、もう放課後だし。そろそろ、登校してくるんじゃないかな？うん、登校してはいるんだね。出席はしてないけど。

コカビエルの一件以来、こうやってのんびりできるような時間が取れたのは久しぶりだ。あの一件で、三竦みへの影響や壊れた校舎の修理。その他の多くの事で眷属全員が必死になって働いていたんだ。こうやってのんびりできるようになるまで数日かかるほどに、ね。

それでも、まだまだ問題は残されてはいる。けれど、今はこの仲間と過ごす時間を大切にしたいかな。・・・ふふっ、仲間、か。

・・・ん？誰か近づいてくる？進君かな？アハハ、遅い登校だね。

そう言えば、ライザーの一件の時も、後から来て散々場を荒らしていたね。うーん、まるで嵐のように。

進君は、嵐をまとってでもいるんだろうか。なんだろ、そう思うとしっくりくるね。進君＝嵐。

けど、今日くらいは静かかな？進君も疲れが溜まってたようだし。この前の戦いで一番傷が深かったし。本当、よくあの傷で動き回ってたよね・・・。間違いなく致命傷だった気が・・・。あれが、進君クオリティーなのかも。

そんな事を考えていたらもう教室の近くまで近づいている。はやいなぁー、走ったのかな？まぁ、いいや。それよりもいい加減イッセー君にトドメを・・・。

けど、僕はイッセー君にトドメを指すことは出来なかった。何故な

ら、何故なら。近づいてきた進君（嵐）が――――

「トォロピカルッ・・・イヤッホォォォォォォォォォイッ！！！！」

――――かつてみたことのないほどの笑顔とテンションの高さをしていて、すべてをけちらしにきていたからだった。

――――――――――――――――――――

「トォロピカルッ・・・イヤッホォォォォォォォォォイッ！！！！」

俺の叫びが教室に鳴り響く。ガラスは震え、本もグラグラして今にも落ちそうだった。

ズカズカと教室に入っていく。全員からの『えっ？なにこいつ・・・』みたいな視線が突き刺さるのを感じた。

オーケーだ。わかってる。大丈夫だ、問題ない。この教室と俺の今のテンションの温度差ぐらいどってことない。今の俺は、阿修羅すら凌駕するテンションだ。

「か、かつてないほどのハイテンションだね、進君」

「む・ろ・ん・だッ！！フゥーハッハッハッハッ！！！」

バッ！！

そう言いながら、某鳳凰な凶真さんがするようなポージングをする。未だに、視線が突き刺さるがオール無っ視んぐだッ！！

「今の俺はッ！！テンションで堪忍袋の尾が切れてるぜッ！！」

「部長、進君がおかしいです。言語もうぶっ飛んでます」

「・・・そのようね。あぁ、頭痛がしてきた」

そういいながら、頭を抑えてため息をつく部長。ヘッ！！今の俺はッ！！誰にも止められないぜッ！！

「進・・・、とりあえず聞いてあげる。どうしてそんなにテンション高いの？」

テンションが限りなく深海のそこのように低い部長がきいてくる。んだよ、そんなんじゃ、婚期のがすぜ。

「テンション高いッ！？そんなもん、当たり前田利家のハイキックッ！！」脳内で戦国武将がハイキックかましてるのを想像しといてくれッ！！

「実は明日、魔法少女のイベントが某大の坂の日本の橋であるんだよッ！！カードキャプターさくら（ＮＨＫのロリコン増殖アニメ）を筆頭にッ！！リリカルなのはや新作のまどまぎやらッ！！数々の神作、良作、駄作の魔法少女作品のグッズやらなんやらが売り出せれることからだッ！！」

ひたすら様々なポージングを繰り返しながら、俺が言う。だが、教室の・・・いや、女性陣のテンションは下がる一方だッ！！なんて

こったッ！！

「つーわけで、部長ぉぉぉぉぉぅッ！！明日は俺いってくるからッ！！異論はみとめねぇッ！！それでも止めたかったら、サーザクスでもつれてくるこったなッ！！」

ビシッ！！という擬音語が出るようなポージングをしながら部長に言い放つ。いわれた部長はこれまたいままで見たことがないほどの疲れと呆れた顔をしていた。

「あーはいはい。いってらっしゃい。そのまま来世にいってきて、まともになったら帰ってきてちょうだい」

手をヒラヒラと振ってから部長は手元にあった雑誌に視線を向け始めた。それを皮切りにまた女性が各々好きなことを再開する。あー、俺は放置ですか、そうですか。

しかし、いきなり両肩に何かが触れる。慌てて振り向くとそこには俺と同じように笑顔をしたイッセーと祐斗がいた。

「なんだよ、どうしたんだよお前ら」

俺が軽く睨みながら言う。怪訝に思う俺に二人はある紙をこちらに差し出しながら話しかけてきた。

――――諭吉だった。

諭吉が、そこにいたんだ。二人とも諭吉を差し出していた。

ダッ！！

俺はたまらず涙を流す。滝のように涙がでる。だってそうだろ?諭吉を差し出す、つまりこいつらは自分たちの諭吉を俺に託してるんだ。

「進・・・、フェイトさんを・・・頼んだ」

「僕も、なのはさんをお願いするよ」

二人が諭吉を差し出した手は――震えていた。そうか・・・、そうだよな。おまえらだって行きたいんだよなッ!!自分の足で行き、自分の手でグッズを手に入れたいんだよなッ!!

だけど、それが出来ないから・・・。学校、学校があるからッ!!学校なんてものがあるからッ!!それが出来ないのかッ!!クソ、わかる。わかっちまう。こいつらの気持ちがッ!!痛いほどわかっちまうッ!!自分でイベントに行けない悔しさがッ!!わかっちまうんだよぉぉぉぉぉぉぉッ!!

俺は諭吉を受け取る。そして、目であいつらに伝える。

安心しろよ、おまえら。おまえらの諭吉は、しっかりおまえらの望むのもの買うために使うさ。だから、だからッ!!安心して待っててくれッ!!

俺の視線からすべてを感じ取った二人は泣いていた。あぁ、泣け。今は泣いていい。おまえらの涙も悔しさも、俺が全部持ってってやるからッ!!

せめて、せめてもだッ!!気持ちは一緒になろうッ!!

バッ！！

俺が拳を握り再びポージングをする。

「イッセーッ！！祐斗ッ！！おまえらは魔法少女は大好きかッ！！」

俺の突然の申し出に面食らったような感じの二人だが、すぐに言われた事を理解し、返事をしてきた。

「「あぁ、大好きだッ！！」」

「俺もだバカヤロゥッ！！うおぉぉぉぉぉぉぉッ！！魔法少女サイコぉぉぉぉぉ――――――――――ッ！！！！！！！！」

「「魔法少女サイコぉぉぉぉぉ――――――ッ！！」」

「声が小さいぞッ！！おまえらの魔法少女への思いはその程度かぁぁぁぁぁッ！！魔法少女サイコぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ――――――――ッ！！！！！！！！！！」

俺が煽ると、イッセー達もさらに声を張り上げる。もはや叫びと言っても過言ではないだろう。それほどもだ。

「「うおぉぉぉぉぉぉぉッ！！魔法少女サイコぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ――――――――――――――――――ッ！！」」

教室に俺達の叫びがこだまする。みると女性陣は一カ所に固まって耳を塞いでいた。だが、そんな事は視界から一切シャットアウトッ

！！自分中心で世界が回ってんだよッ！！

「まだだッ！！まだだせっだろッ！！てめぇらの限界はそんなもんじゃねぇッ！！魔法、少女ッ！！サイッコぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！」

俺の叫びにまたイッセー達も反応する。

「「サイッッッコぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！！！！！！！！！」」最後に、イッセーと俺と祐斗を視線を合わせ、タイミングを合わして叫んだッ！！！

「「「イヤッッッッッッッホホホォォォォォォォォォォォォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」

この後来た先生方と生徒会に怒られたのは言うまでもない。

ーーーーーーーーーーーーーー

〜女性陣の会話〜

「まったく、ウチの男性陣は・・・」

「・・・最近私、女性としての魅力が本当にないんじゃないかと思ってますの・・・」

「うぅ・・・、イッセーさん・・・」

「・・・ここはいつもあんな感じなのか？」

「・・・概ね」

―――――――――――――――――――

さて、テンプレのごとく・・・とっとと翌日になったわけだ。俺は宣言通り、イベント会場の近くにある自動車駐車場にきていた。いやいや、例え神が止めにきても戦っていたさ。神さまいないけど・・・。

まってろよ、イッセー、祐斗。おまえらの望むもんは俺・・・いや俺達が必ず手に入れてやるからよ。

「さて・・・いざ」

俺は目的地に向かった。

―――――――――――――――――――

そこは夢と希望と愛が詰まった戦場だった。

「なにっ！？なのはさんの等身大フィギュアが９８０００円だとッ！？くっ・・・買うしかねぇじゃねぇか」

「どけぇッ！！さくらちゃんのｉＰｏｄは俺のもんだぁッ！！」

「・・・この電車代を、この電車代をつぎ込めばマミマミのおっぱいパッドが・・・」

男たちの叫びが途切れることなくこだまする会場。当たり前だ。今日は平日だというのにこれほどまでのオタクが集まった。ざっとみただけでも軽く一万はいる。この一万のオタクたちは学校や会社を休んでまで魔法少女に命をかける奴らだということだ。

そんな男たちが自分の欲する物が高額だという理由で買わないでいると思うか？いやんなわけない。帰りの電車代、自身の今月の給料、半年ためたバイト代、十年以上貯蓄した貯金を今この場でッ！！こいつらは使ってるんだ。どんな手を使っても――否、どんな生活をしてでも自分の望むものを手に入れる。ここに集まった連中はそういった人種だ。

こいつらはきっとお金で生活をしてるんじゃない。魔法少女で生活をしているんだ。

そんな連中の中で俺は――――――、

「どぉぉぉぉけぇぇぇぇぇぇ――――――――――ッ！！！！！」

――――――『神威の車輪』並みに蹂躙していた。

「なっ！？テメェ・・・グハッ！！」

近くにいたオタクを柔術で遥かへと投げ飛ばす。本道式柔術、『地獄車』。その実態は、走りながら近くにいる人間をただ投げ飛ばし続けるという。一対多においてかなり有効な技を、武術などしていない、むしろ身体の強度が障子紙レベルの相手に一切の手加減をせ

ずにかましている。

相手を手を掴んでから後方へと投げ飛ばすのは大体、０．３７秒程度。その投げ飛ばすまでの間に、肩か肘の関節を外す。その作業を走りながら、そして片手で行う。

走っているスピードは自身がだせるトップスピードを維持しながら、近くにいるオタク、もしくは近づいてくるオタク、あと外見がリア充っぽい奴すべてを投げ飛ばす。

恐らく、投げ飛ばされた方からすればいったい何があったのか一切わからないだろう。とてもじゃないが運動神経やら胴体視力が低い奴らでは俺の動きを捉える事は出来ない。中には捉えることので出来る奴もいるが、そういった相手には顎さきと後頭部に一撃ずつ入れている。

そうすることで、脳に脳震盪を起こさせ、誰に投げられたかをわからないようにしているのだ。

この技は、普段の俺でもできる技ではあるが、ここまでの制度、速さではできない。元々は親父が考え出した、柔術の達人クラスの技だ。俺ではその技の威力を最低でも数段以上落としてしか発動することはできない。

だが、今日は違う。今回は二次元が関わっている。二次元が関わった時の俺の戦闘力は、通常時の三倍。それはプラス、今回は仲間から夢を託されてきた。その事もあるから、今回の俺の戦闘力は、通常時の十倍以上。上手く扱えれば１５倍以上はだせるだろう。

今の俺は、仲間のために限界を超えた力を出している。今俺は初め

て、自分の力を自分の為じゃなく、仲間のために使っている。仲間のために俺は命を燃やしている。

突然、手や足が重くなり始める。肺が酸素を求め始める。頭痛がこだまする。先ほどから一切とまらずに走り続け、投げ続けをしているため、体が呼吸を求め始めたのだ。

体から力がぬけはじめる。スピードが失速しそうになる。腕があがらなくなりそうになる。だが、それをすべて気合いでねじ伏せ動かし続ける。

辛くなればなるほどイッセーや祐斗を思い出す。あいつらはただ単に俺に諭吉を渡したんじゃない。あいつらは俺に自分たちの夢を託したんだ。自分には出来ないことを俺に託したんだ。

仲間から託されたんだ。初めて、俺は他人から夢を託されたんだ。だから、託された夢のためにも、俺にある信頼のためにもグッズを手に入れなきゃならねぇッ！！

悔しさに震えていたあいつらの為に、俺はあいつらの望む物を手に入れて、安心させてやりてぇんだ。その為に、俺の目的地付近にいるおまえらが邪魔だ。

「今日の俺は、一切手加減なしだぁぁぁぁぁ――――――ッ！！！！！」

失せろ。おまえらがいたままじゃ、俺がグッズをかえねぇだろッ！！

『なのは』のエリアまであと百メートル。その道にいるオタクたちは約二百人。上等だ。俺達に喧嘩をうるたぁなぁ・・・。いいぜ、

全員、あの世送ってやるッ！！

「テメェら全員ッ！！俺の、俺達の夢の屍になりやがれぇぇぇぇ――――――――――ッ！！！！！！！！！！！！！！」

そして俺は、俺達の夢のために、自分の後方に、オタクの屍をさらに積み上げた。

――――――――――――――――

「あ、ありがとう・・・ございました・・・・・」

「いえいえ、こちらこそ」

そう言って両手に買い物袋を持った俺がレジを後にする。ふぅ、いい買い物だったぜ。これならあいつらも満足するだろう。

「しかし、うむ。少し・・・やりすぎた、かな？」

自分のしたことの惨状を目にする。そこには百人を越すオタクたちが、地に伏していた。

地に伏したものたちはみんな、肘が肩の関節が外れているため、未だに悶絶している。キレイに外したがら、外側から力を加えてもらったらすぐにハマるようにはしたんだが。

周りの視線が俺に集まり始める。そらぁ、１人だけ無傷でたってたらそらそうなるわ。マズいな、厄介事になる前に逃げる。

「まぁ、あれだ。交通事故にでもあったと思うこったな」

三十六計逃げるにしかず、俺は先ほどだした速度と同じくらい出して、その場を後にした。

――――――――――――――――

「しっかし、これからどうすっかなぁー・・・」

買ったものを持ってきたカバンにしまった後、俺はこれからどうするかぶらぶらと歩きながら模索していた。はっきりいって買いたいものはあらかた買ってしまったから、はっきりいって暇なのだ。

イベントがあるらしいんだが、そのイベントも俺が興味をそそるものではなかった。

「どうすっかなぁー、ほんと・・・」

といって、先ほど配っていたこの会場の地図に視線を落とす。なんかないかなぁー、ほんと。

「しっかたない。もう一回り・・・・・えッ!?」

ゆらゆらと地図をみてさまよっていた視線を上げてみると、目の前には、魔法少女のコスプレをした女の人が歩いていた。

「・・・・・」

はじめてリアルで魔法少女のコスプレが似合う人見たわ。そうだよなぁー、ヤッパリ魔法少女は美少女じゃないといけないよなぁー。

そこ絶対条件だよなぁー。

まぁ、コスプレも魔法少女のイベント会場なんだから全然変じゃないし、それになによりも似合ってるから許される。

「そうだな。写真一枚頼もうかな」

あれだけコスプレが似合う人だ。もうお目にかかることがないかもしれないし、記念に一枚とらして貰おう。

そう思い立ち、俺はその魔法少女のコスプレをした女性のもとに駆け寄った。

――――――――――――――――

「すいませーん、そこのコスプレしてる人ー。写真一枚いいですかぁー？」

俺が後ろから女性に声をかけると、女性は数秒してから此方を向いてきた。しかし、まさか俺が女に声をかける日が来るとは・・・。

でも、いいよね。似合ってるんだもん。

「えー、私ですかー☆」

うおっ、喋り方まで似せるたぁーよくやる。こりゃあかなりポイント高いぞ。てか、近づいてみたらさらに美少女ポイントがあがったぞ？間違いなく、部長やら朱乃クラスの美少女だ。

「あー、はい。ソウッス。だめですか？」

「ノンノン♪大丈夫よー☆」

なんとまぁーノリの軽い方だ。けどこれくらいの方がやりやすいから有り難いな。

「ありがとうございまーす」

そういって携帯のカメラを起動させる。俺って元々カメラって持ってないからコレしか手がないのよね。コレをきに買おうかな？

「すいませーん、じゃあこっちに目線送りながらお好きなポージングお願いしまーす」

俺の指示を聞いたレイヤーさんはスティックを人回ししてから答えてくれた。

「はいはーい☆この『魔法少女レヴィアたん』にお任せよ♪」

・・・・・ん？まて、今なんか気になるフレーズがでたような・・・。

『魔法少女レヴィアたん』？んなばかな。このレイヤーがしてるコスは間違いなく『魔法少女ミルキースパイラル7オルタナティブ』の主人公、ミルキーなはずだ。『レヴィアたん』なんてキャラはその作品にはいなかったはずだ。どういうことだ？

「あ、あのーすんません。『レヴィアたん』って誰ですか？」

俺がたまらず質問をぶつける。当の本人はスティックを回しながらポージングをしていた。

「えー☆それは私の名前よー☆」

カチン

俺が一瞬で固まる。え？まて？ちょっとまて？『私の名前』？この人の名前の事か？自分の名前のまえに『魔法少女』をつけてるのかな？

もしかしなくてもこの人、自分は『魔法少女』のつもりでいるのか？『魔法少女』になってるつもりでいるのか？

俺の中で凄いいきよいでさめていくものを感じた。だってそうだろ？この人、『魔法少女』語ってるんだぜ？『魔法少女』になったつもりでいるんだぜ？

・・・違う。違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違うッ！！！！！

一ミリもあっちゃいねぇッ！！『魔法少女』として一ミリもあっちゃいねぇッ！！俺が褒めていたのはあくまでコスプレイヤーとしてだ。コスプレの完成度について俺は誉めてたんだ。けど『魔法少女』としては話は別だッ！！

コイツからは『魔法少女』としての魅力が一ミリも伝わってこねぇ。答えは単純だ。コイツがただ単に憧れだけで『魔法少女』を語ってるだけだッ！！『魔法少女』としての要素が何一つ完成されちゃいねぇッ！！

ビシッ！！

たまらず俺がコスプレイヤーを指差す。クソ、我慢できるかッ！！こんな奴に魔法少女は語らしたくねぇッ！！

「ふざけんな・・・ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――ッ！！！！！！！！！！！」

俺の叫びがこだまする。遠巻きでみていた連中が一斉に此方を見てきたがかまわず俺は続けた。

「テメェ、その程度で『魔法少女』を語るんじゃねぇッ！！舐めんのもたいがいにしろやごらッ！！」

ふざけんなッ！！マジでふざけんなッ！！コイツは許せない。本気で許せない。憧れだけで『魔法少女』語れると思うなぁぁッ！！『魔法少女』には絶対的に必要になるもんがいっぱいあんだよッ！！

「な、なによアナタ！いきなり叫んだりして。ビックリしたじゃない！」

「じゃかましいッ！！ビックリしたならビックリマンチョコでも食ってろ。この似非『魔法少女』ッ！！」

「なっ・・・・」

俺の一言に固まる女。だが、次の瞬間、俺の言ったことにすぐに噛みついてきた。

「わ、私のどこが似非なのよ！正真正銘『魔法少女』でしょ☆」

――――――プツン

あ、キレた。俺の最後の一本がキレた。もう、許さん。完膚なきまでにその思い上がりを叩き潰すッ！！

「似非も似非ッ！！スーパー似非ティック魔法少女だよッ！！テメェからはッ！！『魔法少女力』を一切感じねぇんだよッ！！」

「ま、『魔法少女力』ッ！？」

説明しよう、『魔法少女力』とは。数々の『魔法少女』と名の付く作品の『魔法少女』キャラのもっている力の事であり。この力が強ければ強いほど、『魔法少女』になる確率が高い、と言うことである。例、『ドジッ娘』、『ツインテール』など。

「そうだ『魔法少女力』だッ！この力がない奴は・・・、例え、人気や、ルックスが良かったとしても・・・。どんなに回を重ねても『魔法少女』にはなれないッ！！つまり、この力がないテメェも一生『魔法少女』にはなれねぇんだよッ！！」

「そ、そんな・・・。そんなバカなッ！！」

動揺し始めた女に俺はかまわず追撃する。

「バカなのはテメェだッ！！真の『魔法少女』ならなぁッ！！スティック回す動作だけで可愛いさが生まれるもんだッ！！それにただかわいさを出してるんじゃねぇぜぇ？無意識でそれをだすんだよッ！！」

「なっ・・・、じゃ、じゃあ、私は・・・」

「テメェわぁッ！！ただスティックを回してただけだッ！！そこに可愛さは・・・一ミリもふくまれちゃいねぇッ！！」

「――――――――ッ！！」

俺の告白に衝撃を受ける女。それもそうだろう。今こいつは、自分の夢と現実との差を思い知らされた所だからな。落ち込みもするだろう。だが、この程度で終わると思うなよ？

「ちなみに、先ほどしていたポージング・・・。あれも、真の『魔法少女』なら無意識での可愛さとそのキャラが持っている個性が同時に引き出されていたはずだろう。・・・わかった？自分がどれほど、『魔法少女』を理解していないか、を・・・」

バタン・・・

俺の言葉で力が尽きたのか。女が崩れ落ちる。その肩は震えていた。どうやら泣いているようだ。

「わ、私は・・・、私は・・・」

声を絞り出すように自分に問いかける女。その姿からはさきほどまで楽しく笑っていたとは到底思えない姿だった。

俺はその女に背をみせる。これ以上は野暮だ。夢の壁にぶち当たった彼女が壁をぶち破るには、どうしても自分の力が必要となる。それは一人でしないと、意味がないからな。

立ち去ろうとする俺を見てくる女。だが、俺は一切振り向かず歩き出す。その姿をみて、俺の背中から視線が外れるのを感じた。

しかし、数歩進んだところで立ち止まる。確か夢の壁は自分で破らないといけないが、別に、助言してはいけないとはいっていないだろ？

「この世界に、同じ『魔法少女』は存在しない。すべての『魔法少女』が個性をもち、違いがあるからだ。それは『魔法少女力』でも同じだ。同じ『魔法少女力』を、同じ量だけ、同じ強さで、同じ数だけ持っているものはいない。だがな、どんな魔法少女でも、共通して持っているものが1つだけある」

再び俺の背に視線が来る。沈みかけた女のものだろう。そして、かすれた声で聞いてきた。

「それ、は？」

「決して諦めない心、さ」

「――――――ッ」

そう。すべての『魔法少女』がもっているもの。それは『諦めない心』。どんな状況であろうと、『魔法少女』は決して諦めない。それがすべての『魔法少女』が共通して持っているものだ。

「あんたにそれがあるかどうかはわからない。だがもしあるなら・・・。それを持っていて、さらにひとりで戦争するほどの覚悟があれば・・・あるいは、『魔法少女』になれるかもしるない」

そう言い残し、俺はその場をさった。

――――――――――――――――

「ちぃーすッ！！」

翌日、俺は学校の授業が終わってから登校した。うん、なんか改めて考えてみると変だよな。まぁ、学校にくる目的が部活しにくるじゃ、しかたないっちゃーしかたないけど。

「やぁ進君。今きたのかい？」

一番近くにいた祐斗が俺に声をかけてくる。ったく、優雅に茶のみやがって・・・。

「おう、今きたんだ。あ、そうそう。昨日の戦利品だ。受け取ってくれ」

そういって大きめな袋を差し出す。いやぁー三万も貰ったからやたらと買い込んじまったよ。

「おぉ、悪いね。ありがとう」

そういってイケメンスマイルを向けてくる祐斗。だから、まえからいってんだろ。する相手を間違えてる。

「そりゃあ、いいんだけどよ・・・。さっき、そこで会長さんとすれ違ったんだけど、スゲーやつれてたぜ？会長さんがこっちにいるってことは、ここに用があったんだろ？なんかあったのか？」

そうなのだ。先ほどここに向かう途中で凄くやつれた顔をした生徒

会長とすれ違ったのだ。ホント疲れきった顔してたぞ？なにがあったんだ？

「なんでも、会長さんのお姉さんの『レヴィアタン』様が昨日の夜に大暴れして、堕天使や天使たちに戦争をふっかけようとしてたらしいんだ」

「はぁ？『レヴィアタン』って・・・魔王のか？」

「うん、そうだよ。・・・ていうか進君。悪魔なんだから様を付けないと・・・」

「会ったこともない奴に様なんかつけっかよ。しっかし、穏やかじゃないな」

そう言って、あいていたソファーに近づき座り込む。その近くには昨日と同じように座っている部活がいる。ただ昨日と違う点は、こちらも疲れた顔をしていた。

「んで？ぶっちゃけ戦争始まんの？」

「物騒なことを言わないで。昨日はソーナやほかの魔王の方々の説得でなんとか止まれられたようよ」

「ふーん、だから会長さんつかれた顔をしてたわけね」

そう言ってから手前にあったクッキーを1つ頬張る。おっ、なかなかうまいなこれ。朱乃か？アイツ料理うまいなぁー。菓子までできんのかよ。

もう1つ食べたくなったので手を伸ばす。それと同時にまた部長に質問をぶつけた。

「つーか、なにが原因でそうなったのさ?」

とったクッキーを指の上にのせて、倒れないようにバランスをとる。そんな仕草も普段なら注意する部長が、それをせずにさきに俺の質問を答えるために口を開く。

「さぁ?詳しくはなんとも・・・。ただソーナが言うには、『私の夢のためにも戦争をしないといけない』って言ってたらしいわよ?」

「そらまた・・・いったいソイツの夢はなんなんだよ。ったく、迷惑きわまりないなぁー・・・。なぁ?部長さん」

「えぇ、そうね。こんな事はもう起きないでいてほしいわ。じゃないと次は本当にソーナが死んでしまうもの」

過労死か。姉が無茶苦茶だと、苦労すんのは妹ってわけか。前途多難だなぁー、会長さん。

しっかし、どっかできいたような名前だな?『レヴィアタン』・・・。どこだったっけ?・・・・・・・・ま、いっか。

そう自分の中で自分の質問をふみくだいてから、手で遊んでいたクッキーを頬張った。

番外編～俺と仲間と魔法少女～（後書き）

Ａ『魔法少女の何たるかを伝えて、絶望させる』

とまぁ、最初から最後まで自分の中にあるギャグをだしにだした今回。いかがだったでしょうか？笑えましたか？笑えていたら幸いです。作者がんばったかいがありました。

さて、作者から一言。俺はそんなに魔法少女は詳しくありません（笑）せいぜいなのはとさくらくらいです。それなのになぜか進を書いてると独りでに魔法少女について語り出しました。

・・・もはやうちの主人公。作者すら手が着けられない存在になってしまいました・・・。どうしましょ？しまいに勝手にほかのハイＤの作品に殴り込みかけるかもしれませんが、俺は一切しりません。勝手に進がしてることとです。俺は知りません。え？おまえの主人公だろ？どうにかしろ？それができないから言ってるんです。誰か進の操縦機くれません？鉄人２〇号てきな感じの奴。

さて、これをきに。次回からは二巻に突入します。えぇ・・・、プロットを考えただけで『これはヒドい・・・』と本気で思ったので友達に相談したら、『オモロいからＯＫ』と言われた話しです。・・・俺の頭がおかしいのか、アイツの頭がおかしいのか。どっちなんでしょ？けど、進は変わりません。どんな所、相手だろうとキャラは崩れません！！誰だろうとケンカ売ります！どこだろうとイッセーをいじります！！そんなカッコイい主人公なんです！！だからどうかこれからも進をよろしく！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・カッコイい、主人公かな？

人の邪魔をするのが趣味です（前書き）

正しいとかそうじゃないとか、そういうもんじゃなくて、恋はいつも立ち去る者が美しい。

ども、ＧＲＡＮＲＯＤＥＯの新曲がでてテンションがあがりまくってるアンサラーです。上のはその曲の歌詞の一部です。わかる人いるかなぁー？いたら返事して。

さて、更新したわけですが、ここで注意を。今話はあくまでギャグ、ということをしっかり頭の中で覚えておいてください。決してマジじゃないです。あくまでギャグです。アンダスタン？

また、寝起きに今話を読む方。やめた方がいい。せめてしっかり意識が覚醒してから呼んでください。頼むから。

理由は・・・、まあある程度テンションが高くないと今話は辛いとだけ言っておきます。よんだらわかります。それではどうぞ。

人の邪魔をするのが趣味です

「あぁー・・・、ねみぃー・・・」

どうも、本道進だ。今非常に眠気が凄い本道進だ。意識をつなぎ止めているのが精一杯の本道進だ。あまりの眠気のせいで非常に他人に八つ当たりしたい本道進だ。

ふぅあぁ～と、大きな欠伸が1つでる。あくびをしたあと時刻を確認する。時刻は8時。夜のじゃないぞ?朝の8時だ。うん、ちょうどいい時間帯だ。

さて、そろそろ寝るか。いやぁー、部活終わってから家に帰ってから今までゲームしててたさ。あまりの面白さに時間を忘れてやってた。よくあることだろ?

・・・ちなみに今日は平日だ。つまり学校があるんだが、いつもいってないから、べつにいっか。

ていうか、俺が眠たい思いしないといけない原因って、間違いなく部長だよな。アイツの礼儀の悪さといったら。俺に頼みごとしたいんなら、床にでこ擦り付けて頼まないといけないってのを数学の教科書にのってなかったのか?常識だぜ?

もし、数学の教科書にのってなかったら、その教科書は間違いなく間違ってる。そんな常識をのせないようじゃだめだぜ?

まぁ、それを差し引いても原因は部長だよな。なんてたって悪魔にされちまったからな。

そう俺は少し前まで、人間だったんだけど、色々あって悪魔になったんだわこれが。詳しくは・・・一話からみたらよくね？

まぁあれだ。簡単に自己紹介すっとだ。本道進（ほんどうすすむ）、種族は悪魔だ。ついでにいうと性格は悪魔＋鬼畜だ。わかるとはおもうけどＳっ気の方が強い。んで、朝に超弱い。好きな食べ物はリンゴ。嫌いな食べ物は臭いがキツいの。趣味はイッセーいびり、それと他人の幸せをぶち壊すのが趣味だ。

まぁ、こんなとこか？何がしたいのかイマイチ自分でもわからないが、こんな感じでいいよな？

「とっとと寝よ・・・」

そう言って一切の思考をシャットアウト。ズルズルと芋虫のようにベッドに入り込む。宇わぁー、冷たい。入りたてのベッドって冷たいな。

しばらく布団の冷たさに耐えていると、徐々に暖まり始める。やがて、寝るにはとてつもなく適度な温度になったところで寝ようとしたところで――――

――――ピンポーン、と。今までの人生の中でダントツでインターホン押した奴に殺意がわいた瞬間だった。だってあれだぜ？いざ目を閉じて寝ようとしたところをインターホンで邪魔されたんだぜ？絶妙なタイミングすぎて眠気が吹き飛びかけた。

「・・・・・・・・・・・・」

恨めしく扉の方を見る。昼間だとかなら無視を決め込むんだよ。どうせ変な勧誘とかだから。けど、今の時間帯は?答えは朝の8時です。寝ようとしている俺と違い、頭のおかしい連中が学校なんていう檻の中に収容されるために家を出る時間帯なのだ。

そして、俺の下僕イッセーも頭がおかしいからこの流れに乗って、朝から学校に行こうとする。

別にそれはいいんだ。イッセーの頭がおかしいのは小学生の頃にはもうわかってたことだから。ただそれを、俺に強要してくることだ。

「おーい、進。いい加減でてこーい」

学校になんか行きたくない俺にとっては、これ以上ないほど鬱陶しいものだ。勝手に1人で行ってくれ・・・。

まぁ、無視ってたら勝手に行くだろうから。居留守か・・・。

「進ーっ。居留守決め込んでもいみないぞ。ドア開けないと合い鍵でこっちからあけるぞ?」

チッ・・・。そうだった。あいつ、俺のお母様から俺の部屋の合い鍵を預かってたの忘れてた。イッセー、そうまで俺に学校いかせたいのか。

学校に行きたくはないが、イッセーに部屋に入ってこられてグチグチ言われたくない。しかたない、とりあえずドアの前で先にいかせるにようにしよ。

そうおもい、思い切ってベッドからでる。あぁー、ねみぃー。ベッ

ドからでた途端眠気が・・・。

ノロノロと歩いて玄関のドアまでたどり着く。そこでドア越しにイッセーがしゃべりかけてくる。

「進ー、あけるぞー？いいのかー？」

「開けたらぶっ殺すからな。・・・ドアの前にいる」

「ん？おきたの？じゃあ、ドア開けて？今日は学校いくぞ」

「もしあけなかったら？」

「こちら側から開けるだけ」

「・・・・・・」

このやろう、どんだけ俺の生活リズム狂わす気だ。別に学校に行かなくてもリアス嬢に頼めばどうにでもなるだろ。

「あーはいはい、とりあえずあっけっからちょいまて」

「ほーい」

そう言ってからドアの鍵を外す。そして、ドアを開けるとそこに。

「おはよ、進」

引きつった笑みをするイッセーと。

「おはようございます、進さん」

屈託のない笑顔を咲かせたアーシア嬢がいた。

――――――――――――――――

「正直いって非常に迷惑なんでかえってください」

そういってドアを閉めようとするとイッセーがそれを邪魔をする。

「ドア開けて二秒でしめるなッ！！」

「閉めたくもなるわッ！！眠い中ドアまで必死に出てきたのに、開けたら美少女と一緒にいるだぁッ！？なんだって朝っぱらリア充を視界に収めにゃあならんッ！！」

俺が理由をいうと、イッセーの口が意地悪くつり上がる。

「いや、その気持ちを是非、是非ッ！！味わっていただきたかったからこちらに赴いた次第です、はい」

「なっ――――――」

イッセーの言ったことに固まる。つまりなんだ？こいつ、アーシア嬢をみせしめるためだけに俺のところきたってか？・・・ぶち殺すぞ・・・、がちで。

「まぁそれはともかくとして、早く学校いく準備しろよ」

いや『ともかく』でおわらせんじゃねぇよッ！！ぶっ殺すぞ？

「学校？・・・いかねーって」

「そうわいくか。部長になるべく進を学校にいかせるように言われてるんだよ。つーわけで、ほらいくぞ」

「イヤだ。俺、これから寝る」

「学校でやってることと変わらないだろ？」

「かわるっつーの。俺は今ベッドで寝たいんだ。学校の机で寝たかねー」

あれ、案外寝てると辛いんだよ。無理な体勢で寝てるから起きると体のあちこちが痛むんだよ。

と、そこまで話すとアーシア嬢が会話に入ってきた。

「えっ？進さん学校にいかないんですか？」

心底、残念そうな顔をしながらアーシア嬢がそう言ってきた。

正直言うと、このこ苦手なんだよな。なんていうか・・・オーラというか、性格というか。こう、ボケをボケを返されるから、会話が設立しないんだわこれが。ビックリするぐらい天然だし。

「あ？うん。行ってもしょうがねぇし。安心しろよ、部活には行くから」

「まず学校にいく目的から違うぞ、進」

うるせぇッ!!ほっとけッ!!授業きいたって何一つわかんねぇんだから仕方ねぇだろ。

「べ、勉強なら私が教えますから、だから学校にいきましょうッ!!」

「あー・・・」

ヤッパリ苦手だわ、この子。俺がアーシア嬢を苦手な理由って、この子の生真面目すぎる所だと思うんだよ。こう、『がんばればなんとかなる』みたいな所が、ね。

いや別にそれが悪い事だとは思わないが、日常にこれをされるとなかなか辛い。だからそりが合わないのかな?

ふとそこで気がつく。俺がアーシア嬢を苦手な事などイッセーならすぐに気がつくだろう。なのに俺に会わせてきた。俺とアーシア嬢の相性は最悪なのにだ。

ま、まさかっ――――。イッセーは俺がアーシア嬢を苦手なのをいいことに、そのままアーシア嬢に任せて俺が流されるようにして学校にいくようにするつもりなのか?

俺がチラッとイッセーの方向を見る。その視線に気がついたのか、笑顔で返してきた。

――――――とてつもなく、いやらしい笑みをしていたが。

そういうことかぁぁぁぁぁぁ――――――――――ッ!!!!!!!!

！これは、これは光明の・・・いや、イッセーの罠だッ！！！！！

くそっそういうことかよッ！！つまり、イッセーが考えたシナリオは。純真無垢で誠実清楚なアーシア嬢に俺を学校にいくように諭させてるんだ。

完璧だ。完璧な作戦だ。これが、目の前にいるのがアーシア嬢じゃなく、イッセーならば暴力というなの肉体言語でどうとでもなった。だが、相手はアーシア嬢だ。

俺としては苦手な存在で、尚且つ俺が手を出せない存在、アーシア嬢。コイツに任せることで俺を学校にいかせようってか。例え俺が行かないと言い続けても、イッセーが『このままじゃ、俺たちが遅刻しちまう』といったら全てが終わる。

イッセーはともかく、アーシア嬢を遅刻でもさせてみろ。学校のアーシア嬢ファンが俺を殺しにくる。くっ、八方塞がりか。

正直いってマズい。これはマズい。このままじゃ・・・、イッセーの作戦通り、俺はアーシア嬢に流されて学校にいっちまうことになっちまう。

くそ・・・、このままじゃ。朝から学校なんかにいかなくなっちまう。遅刻しないで学校に登校することになっちまう。朝出席とるときに『今日は本道きてるのかぁー・・・、明日雨じゃなくて核でもふるかもなぁ』なんて教師にいわれちまうよ。

いやだぁッ！！そんなのいやだぁッ！！学校なんて朝からいくところじゃないんだぁッ！！朝はベッドで気の済むまで寝てたいんだぁッ！！

けどこのままじゃ学校に行っちまうことになる。それは避けたい。だったらどうする？――――戦うしかない。戦闘じゃなく、作戦で勝つしかない。

落ち着け、まず落ち着けくんだ。戦場では落ち着いたやつから狙われるんだ。まずは状況を整理するんだ。

時刻は？

朝の８時１０分。学校までの道のりはだいたいここから走れば１０分くらいでつく。だから、タイムリミットまでは五分とみた。

場所は？

俺の家の玄関。

敵は？

イッセーとアーシア嬢。

その二人を詳しく分析。

イッセーは変態、以上。アーシアは・・・、内面的な所はわかってることが少なすぎる。ただ明白なのは２つ。俺と相性が最悪に悪いくらい生真面目で、イッセーの事が・・・好、き・・・・・・。

俺の中でパズルのピースがはまる音がする。――――そうだ、そうだよッ！！こうすりゃあいいじゃねぇか。

アーシア嬢はイッセーのことが好きだ。イッセーは・・・、まあ嫌

ってはいないはずだ。だったらそこを坂手にとれ。状況をフル活用しろ。なんたってここは俺の部屋だ。俺が望む物が必ずある。

――――――集中しろ。建てた作戦から無駄を削り、それをシュミレーションしろ。大丈夫だ。絶対に成功する、いや、させるッ！！

「はぁ・・・、わかったよ」

「へっ？な、なにがですか？」

俺の突然の言葉に素っ頓狂な声を出すアーシア嬢。

「だから、学校に行くって。こっち負けだよ」

俺がお手上げ、といったジェスチャーをするとアーシア嬢が先ほどの挨拶したとき以上の笑顔をみせる。

「ほ、ほんとですか！？」

「ホントホント。行きますって・・・。イッセーもそれでいいな？」

「え？あ、あぁ。うん」

戸惑いながら曖昧に返してくるイッセー。

「んじゃ、着替えてくるからちょっと待っててくれ、すぐにすむ」

「はい、待ってます！！」

「な、なるべく早くな？」

「了解」

そういって部屋の奥へと俺は向かっていった。

ふふふ・・・、後悔するがいいイッセー。おまえがまいた策はおまえの首をしめるだろうよ。

――――――――――――――――

「イッセー」

部屋の奥で準備を整えた俺が玄関の方にいるイッセーを呼ぶ。

「なにー？どうしたの？つか早くしろよー？」

イッセーも玄関から声をだして返してきた。まずは部屋の中に引きずり込まないといけないな。

「早くさせたいならちょっとこっちきてくれー」

「えぇー、やだよ・・・自分でやれよ」

くそっ。イッセーの分際で調子に乗りやがって・・・。

「頼むって。来てくれたら前いってたアレ・・・、貸してやるからさ」

「まったく進は1人じゃなにもできないなぁー♪」

こ、い、つ・・・。人が下手に出てりゃあいい気になりやがって・・・。決まりだ。完膚なきまでに叩き潰す。

ガチャ

イッセーが部屋のドアをあけて入ってくる。さぁ、ショータイムだッ！！

「第１回、ちきちきッ！！あなたのそんなところがイヤなのッ！！不満や妬みや文句をいまこの場で吐き出しちゃおー選手けぇーんッ！！！！！わぁーパチパチパチ」

ドンドンッ！！パフパフッ！！

「・・・はぁ？」

イッセーが完全にフリーズする。それに一切ももくれず続ける。

「司会はお馴染みッ！！イッセーをイジメてこの道３０年のベェテラァンッ！！本道進が、おおくりしやぁーっすッ！！」

「とりあえず疑問は置いといてツッコみから入るわ。・・・まず、第１回目なのになんで司会がお馴染みになってんだよッ！！番組始まって僅か五秒でお馴染みになんのかおまえはッ！！あと、３０年ってなんだよ３０年ってッ！！おまえいったいいくつだよッ！！そんでもって３０年もイジメられてんのおれッ！？つか、イジメっていう自覚あったんですねッ！！」

「さぁ、今回の主役のツッコみを一切無視して、番組を進行していきたいと思います。とりあえず、主役の方。そこのイスに腰掛けて

ください」

「なんで主役が無視られてんのッ!?まずその時点で主役じゃなくねッ!?あと、ご丁寧にどうもです」

そう言ってから、俺に促された通り指示されたイスに座るイッセー。

「さて、まず第1回目なので説明をはしょると所から入りましょうかぁッ!!」

「第1回目から説明はしょってどうすんだよッ!!あと、なんで説明はしょると所からはいんだよッ!!」

えー、説明すんのー?めんどくさいなぁー。仕方ないか・・・。

「しかたねぇーな・・・。この番組では主役の方に文句をいいたい方、なにか不満がある方をお呼びして、この場であらざらいいってもらいましょう。という番組です」

「なんて主役イビリな番組だ・・・」

といって目から潤滑油をだす主役。そうか、そんなに嬉しいか。

「さぁ、今回は主役の方への文句をいいたい方は・・・なんと6人ッ!!ここで多いか少ないか言いたい所ですが、第1回をなので基準がわかっていないので保留とします」

そして、目の前に6つの黒い布で覆われた物体が現れる。今更ながら、ここからは細かいつっこみは考えない方がいいぜ?

「なんか、進の家にくると毎回こんな目に遭ってる気がする・・・」

確かにな。それは同意しよう。けど全部イッセーが悪い。

「では、時間が押しているのでとっとといきましょうッ！！エントリーナンバー一番ッ！！」一番とかかれたプレートの布に手をかけ思いっきり引っ張るッ！！

「キ・ンッ！！チョ～～～～～～～～～～ルゥですッ！！」

布を取り去った台にはキンチョールが置いてあった。

「でーすーよーねーーーーーーーーッ！！」

それと同時にイッセーも叫び出す。そのままイッセーが続ける。

「ていうかもういい加減やめようよそのキンチョールネタッ！！どんだけ引っ張ればいいんだよッ！！二話から続いてんだぞッ！？同じネタが何回も続いてんだぞッ！？もう読者飽きてるってッ！！」

「いやいや、むしろ安心したんじゃないか読者。キンチョールがでて『あぁ、よかった。キンチョールがでたよ』ってきっと安堵してるだろうよ」

「もしそうなら読者おかしくないか！？ギャグパートでキンチョールが出てきて安堵する読者ってそうとうおかしいと思うぞッ！！」

・・・想像してみたが確かに可笑しいな・・・。なんていうかシュールだ。

「てか作者はいったいこのキンチョールをどの方向に持ってくきなんだ!?作者はキンチョールでいったいなにがしたいんだよッ!!」

イッセーのツッコみがこだまする。あ、それ俺も気になってたんだよ。この小説、多分この世界にあるすべての小説の中でキンチョールの使用回数多いと思うぞ?

と、考えていると右ポケットに違和感。何かと思って見てみると、紙がそこに。

「あー作者から今きました。えーと・・・『作者的には、読者がリアルでキンチョールを見たときにこの小説を思い出して吹き出すくらいまでは頑張りたい』っと書いてあります」

「予想斜め上の返答ッ!!目指す位置が限りなく高すぎるッ!!」

うん、それも同意する。

「まぁなにはともかく、キンチョールさん。イッセーに対して、何か言いたいことはありますか?」

マイクを近づけて話しかける俺。端から見たらすげー痛い奴だ。

「捻り切れろ」(↑進の６６６の裏声の一つ)

「はぁーい、捻りきれろ頂ましたぁー。さぁーてどんどん進んでいきましょう」

「まてまてまてッ!!俺キンチョールにいったいなにしたッ!?そのコメントの真意はいったいどうしたッ!?ちったぁ追求しろよッ!!あと俺の弁解聞いてくださいッ!!」

イッセーを例のごとく無視して次の布に手をかける。

「さきほども言った通り、主役の言い訳は一切きかないで番組を進行していきまぁーすッ!!それではエントリーナンバー二番ッ!!」

イッセーを無視しながら、黒い布を思い切り引っ張る。すると・・・。

「隣の部屋のジェニファーの模型ですッ!!」

「もぉーけぇーいぃッ!?」

そこには、身長１６０?前後の金髪のねぇちゃんが座っていた。

「ちょっとまて!!ちょーっとまてッ!!模型ってなんだよ模型ってッ!!なんで模型出てくんだよッ!!隣の部屋のジェニファーって誰だよ!?俺ここに一年以上通ってるけど、おまえの隣の部屋はずっとあいてただろ!?架空か!?架空なのか!?架空の人物を模型にしたのかッ!?あとスタイル良いですねジェニファーッ!!」

こいつ、さらっと自分の感想すりこみやがったぞ?

「いやな、実はなイッセー。一年の秋頃、ベランダで洗濯物干してたらさ。となりにコイツが洗濯はさみに挟まって干されてたんだ。んで、なんか面白いことに使えそうだなぁーって思ってさ。引ったくってさっきまで押し入れの中にぶち込んでたんだ」

俺がイッセーの方を向きながら話しかける。すると、イッセーも立ち上がりツッコミをいれてきた。

「まず誰も住んでいない部屋のベランダに模型がほされていたことにたいしてなぜ疑問に思わないんだよッ!!」

「・・・あぁッ!!確かにッ!!」

「今更ッ!?今更気づいたのかッ!?」

うん。今更気づいた。よく考えたら変だよな。

「まぁ今更考えても仕方がないことなのでこの際スルーの方向で」

「この番組肝心な部分全部スルーしてないか!?」

いや、だから時間の都合上ね。

「ちなみに、このジェニファーなんだが。今さっき調べてみたら、胸はシリコン製で下の方も・・・な?」

「〇〇〇〇〇かッ!!」（↑〇は自主規制）

「〇〇〇〇〇だろうな」（↑〇は自主規制）

・・・・・・・・・・・・・

俺とイッセーの間に静かな間が生まれる。何故か俺があいての出方を伺う形になってる。なんか、〇〇〇〇〇（↑自主規制）だと分かったとたんイッセーの目の色が変わったんだけど・・・。

「あとで俺にジェニファーをくだ――――」

「さぁ、欲望だだ漏れの奴は放置して、次の方にいきましょう。えぇ、時間が押していますからね、はい」

イッセーが何か言っていたが聞こえない。聞こえていない。その方がいい気がするもん。

「さーて次の方は・・・、なんと3姉妹だな。時間短縮もかねて一気にめくっていこう」

「いやいやッ!!ジェニファーの主張はッ!?ジェニファーの主張聞かないのかよッ!?」

「時間の都合上削除します」

「この番組の目的を削除するなぁぁぁぁ――――――――ッ!!!!!」

イッセーの叫びが聞こえるが、俺は無視して三番とかかれたプレートの布に手をかける。

「では、行きましょうか。エントリーナンバー三番、四番、五番」

俺が布を取りあげていき、その姿が露わとなるッ!!

「えー、番号順からいうと。三番は組立式ノコギリの持つ部分。四番はノコギリの刃と持つ部分を固定するネジ。で五番は血がべっとりとついたノコギリの刃の部分ですッ!!」

それをみたイッセーが立ち上がってツッコミを入れてくる。

「3姉妹じゃねぇじゃん、3パーツとか。なんで血がべっとりついてるとか。色々ツッコみたい所はあるがまず始めに、なんでテメェはんな殺人犯が使ったようなものを持っててサラッとさりげなく出すんだよッ!!」

「いや、押し入れの中にあったから」

「テメェの押し入れの中には名探偵コ○ン並の殺人事件が日夜起きてんのかッ!?ドラえもんの四次元ポケット内でもんなぶっそうなこと起こらんわッ!!」

あー、ついにイッセーが壊れてきた。

「ちなみに、このノコギリの刃の部分の血なんだが、まだ真新しいんだ。コイツは生きがいいなッ!!」

「殺人事件直後ッ!?」

「む?イッセー、殺人とは限らんぞ?」

「いやいや何に使うんだよ!?」

イッセーの一言に俺は考え込む。う~ん・・・何に使ったんだろうな?

「料理じゃね?」

「ノコギリの刃使って料理するかぁッ!?まず食材買う前にふつーの包丁かってこいよッ!!」

「いやいや、イッセー。ノコギリを使った方が包丁よりうまくバラせる奴がいるかもしれないだろ？」

「あぁ、そうかも・・・っているわけないだろッ！！しかも今おまえ今『バラす』っていったな！？何バラすんだよ！？肉片か！？肉片バラすのかぁッ！？」

「あぁ、すまん間違えた。バラすじゃないな捌く、だったなうん」

「今更遅いわぁぁぁぁ――――――――――ッ！！」

・・・なんか今日、イッセー叫んでばかりだな。朝っぱらからうるさい奴だ。

「えー例のごとく主役の発言権をすべて踏みにじりまして、彼女たちの主張を聞きたいと思います。一人一言ずつ聞いていきたいと思います」

といって、持つ部分にマイクをかざす俺。うん、シュール。

「イッセーを・・・」（↑進の裏声の６６６の一つ）

「ん？どうやら、バトンリレー式のようですね。持つ部分の次にネジさんが喋り、その次に刃がしゃべるようですね。では、それに従ってみましょう」

そう言ってからもう一度マイクをかざす。すると――――

「イッセーを」（↑例のごとく）

「殺してやりたい」（↑例のごとく）

「ゲゲラッチョ」（↑例のごとく）

「はい、繋ぎ合わせてみると、『イッセーを　殺してやりたい　ゲゲラッチョ』という素晴らしい一句になりました！！いやーすばらしいッ！！特にイッセーを殺すていうところが素晴らしいですッ！！」

しっかり5・7・5に・・・ん？6か？・・・まあいっか。

「いやいやッ！！前半部分もツッコミどころ満載ですけど、一番のツッコミどころのゲゲラッチョなんなんだよッ！？」

「さぁ、主役の呟きは放置して次にいきましょうか」

「ツッコミから呟きにグレードダウンしたッ！？」

イッセー・・・。なんて哀れな奴。コイツからツッコミをとったらエロスしか残らんぞ？

と、次の布に手をかけた所で少し止まる。そうだったそうだった。今思い出した。このノコギリの入手経路を今思い出した。

「あーそうそうイッセー。今思い出したんだがな？このノコギリ、確かジェニファーが干されてたときに右手ににぎりこんであったんだよ。いやーすっかり忘れてたよ。あ、もちろんノコギリの刃には血がベットリだったぞ♪」

ハハハと乾いた笑いをしている俺にイッセーの容赦ないツッコミが炸裂する。

「それメッチャクチャ重要なことじゃね!?一番はじめに言わないといけないことじゃない!?てかなんでジェニファーが握ってんのッ!?ジェニファー一体何してたんだッ!?ヤンデレか!?ヤンデレ人形か!?一体誰を殺したんだジェニファー!?つかますますシュールな光景じゃないかッ!?干されてるジェニファーの手にノコギリが握られてるってとてつもなくシュールな光景だぞ!?なんでそれを疑問に思わないんだよッ!?」

「あぁッ!!確かにッ!!」

「だから今更遅いっつってんだろうがッ!!」

いやだって、あまりにも完璧に干されてたから。

「まあ重要なことだろうがほっといて次いきましょうかッ!!」

「この小説始まって一番の謎をサラッと流すなぁぁぁッ!!!!!!」

いや、だって興味ないし・・・

俺はイッセーを無視るようにまた声をあげて叫んだ。

「さて、エントリーナンバーもついに六番ッ!!いよいよ終わりが見えてきましたッ!!さて、次はいったいどんな方がイッセーを罵るのでしょうかッ!!期待で胸がねじ切れますッ!!」

「テンションにすらついていけてないのに、この番組を理解するなんてとても出来そうにない・・・」

そこは根気だろ。

「では、登場してもらいましょうッ！！エントリーナンバー六番ッ！！」

今まで通り黒い布に手をかけるそして思い切り引っ張る。

「業務用クリップのクロード・ヴライアン・ジルザードですッ！！」

「だからその業務用シリーズ意味が分からないからッ！！まだ業務用ホッチキスは分かるよ、なんかでかそうなイメージがあるからッ！！けど業務用クリップッ！？なんそれ！？デカいの！？なんなの！？なんか特殊機能でも付いてんのッ！？ビームでもでんのかッ！？クリップの業務用はそんな人類破壊兵器を装備してんのかお菓子のおまけ的なノリでッ！？あと名前ッ！！どんな厨ニ病だッ！！クロードとかつけてる時点でそうとうな厨ニだぞ！？」

すげー・・・、一息で言い切りやがったぜ？イッセーのツッコミのキレだけは磨かれまくってるな。

「いやな？名前はパッと出てきたやつを繋げただけなんだ」

「名前のセンスに難ありすぎだろッ！！むらがありすぎてビックリだわッ！！」

いやんなこと言われても・・・。

「てか、もういいッ！！もういいからッ！！いい加減ネタばらししろッ！！とりあえず解ってるけど聞くわ。この集まりはいったいな

んなんだッ！！いやもう予想ついてるけど。キンチョールと業務用シリーズでた時点で予想ついたけどとりあえず聞くわ」

と、イッセーが非常にヤバい目をしながらこちらを睨んでくる。いや怖いからやめてくんね？

「えー・・・、ネタバラしすんのー・・・・」

けだるいなぁー・・・

「いやもういい加減しろよッ！！長い時間たえた読者や俺に謝罪の意味もこめてやれよッ！！」

「いやいや、なんでおまえや読者のためにんな面倒くさいことしにゃきゃならん？」

「俺はともかくせっかくよんで貰ってる読者に対してその態度はないだろッ！？どんだけ遙か高見から見下ろしてんだッ！？」

「まぁ、軽くエベレストの三倍くらいからかな？」

「世界最大の山よりも高い位置にいるのかよッ！！」

何を当たり前なことを。そんな事、いまさらだろ？

「はぁ～・・・、仕方ないなぁ。・・・えー、みなさんッ！！今回集まっていただいた方々はなんとッ！！イッセーの現在の妻や愛人の方々なのでしたぁ・・・」

「モチベーションの低下激しッ！？」

いやもうめんどくさくなってきた・・・。

「えー、ちなみにイッセーの本妻は一応キンチョールであり、ジェニファーは九番目の愛人でノコギリシリーズは１０、１１、１２をしめており、業務用ホッチキスは八番、クリップは七番目であります。本妻は一人、愛人は１７人と非常に緩い下半身をお持ちですね、イッセーさん」

「とりあえず一言。確かに俺は下半身の守備範囲は広いと思うけど、さすがに無機物には欲情せんわッ！！！！」

切れ気味で言い放つイッセー。なんかヤケクソ感が出てきてるような。

「そんでッ！！コイツらの目的はなんだよッ！！もう今更なにいわれても傷つかんわッ！！」

・・・修正。ガチでヤケクソだ。

「えーっと・・・。なんでも、イッセーが新しい女を連れてきたことに対してマジギレしたらしい」

「心せまッ！？女が十八人もいたらもう今更じゃね？」

女なんてそんなもんだろ？

「なんか、いままでは微妙なパワーバランスで成り立っていたのが崩れたらしいぞ？」

「・・・今思ったんだけど、俺無機物を口説いた記憶は一切ないんだけど・・・」

「人間（？）、されたことは良く覚えてるっていうだろ？」

「・・・ゴメン。それでもないと言い切れる」

がっくりとうなだれるイッセーに俺が思い出したように話しかける。

「そうそう。イッセー、忘れるところだった」

イッセーはうなだれたまま、声だけで返事をする。

「・・・なにさ？」

「学校、遅れるぞ？」

「ちくしょょょょ――――――――――――――――ッ！！！！！」

今日一番のイッセーの叫びが木霊した。

――――――――――――――――――――

「あ、あの何があったんですか？イッセーさん目がお魚さんみたいに虚ろなんですけど・・・」

部屋から帰ってきたイッセーの状態を見て心底心配している様子のアーシア嬢。

「あーまあ、大丈夫だろ。並みの精神力じゃねぇから。学校につく

頃には元通りだろ」

イッセーは・・・、まさしく廃人のように真っ白になっていた。いや、まあ俺のせいなんだけどね。

「あ、そうです学校!!進さん、はやく準備を!!」

アーシア嬢が思い出したように言ってきた。まあ、ここからなら走れば何とか間に合う時間帯だ。

「あー、それだがなアーシア嬢。今日は用事が出来ちまったから、休むわ」

俺の一言に心底驚いた様子のアーシア嬢。一々反応する子だ。

「え!?用事・・・ですか?」

「あぁ、まあな。ちょいとした諸事情だ。気にすんなよ」

「え?で、でも・・・」

「アーシア嬢。人にはね、ゆえないことの一つや百八つぐらいあるんだよ」

「そ、そんなにあるんですか!?」

アーシア嬢が驚いた顔をする。そんな彼女をみて苦笑する俺。まったく、この子は。冗談の通じない子だ。

「まぁ俺はそれぐらいあんの。つーわけで悪いけど、イッセー頼む

な。ほっといてたら勝手に直ってくから」

「あ、は、はい。わかりました・・・」

その返事を聞いた後、イッセーに呼びかける。

「おーい、イッセー?学校にいけよー?」

「・・・おー」

・・・ちょっとやりすぎたかな?

その後、イッセーとアーシア嬢が学校に向かうため出て行った。・・・イッセーがちょっと不自然だったが。

「さて、用事おわらすかな」

そう言って、また冷たくなってしまったベッドの中に体を滑り込ませた。

人の邪魔をするのが趣味です（後書き）

まず始めにゴメンナサイ。決してみなさんをバカにしてるわけじゃないので許してください。ただ単に思いつきでギャグを考えていたらああなっただけなので・・・。

さて、今話なんだけど。当初はもっと短かった。けど、なんか書いててつまらなかったからギャグを適当に放り込んだらどんどん凄い事になってああなった。だから遅れたごめんなさい。

さて・・・ジェニファー。名前はわかる人ならわかると思う。ただ単にジェニファーを使ったのはゴロ的な意味で使いました。初めはジェミーでした。たぶんもう二度とでません。えぇ、謎は謎のままです。コナン君にだって解けませんよ。

そしてまたでたキンチョール。いまだに続くキンチョール。作者の目標はあの通りです。妥協はしません。ただ頑張るだけです。

ハイスクールD×D、声優陣ドンドン決まりますね。

小猫はあずにゃんの人でしたね。まぁ、期待はしてます。俺的に声あってる気がする。

木場は野島さんでしたね。まさにイケメンッ！！野島さん超好きですもん。もうメルブラでの七夜やら志貴やら・・・。

朱乃さんは、ヒナギクさんでしたか・・・。予想通りだよッ！！完璧だよッ！！文句なしだよッ！！

というわけで決まっていく声優陣。地味に豪華。ということで、進にもイメージ声優をつけるか・・・。作者的には諏訪部順一さんなんだけど。

あの、「俺たちに翼はない」をやった人なら俺が言ってること解ると思う。なんか進とドラさん似てるし。

みなさん的にはなんかあります？気が向いたら俺に教えてください。

さて、最近あやかしびとばっかりしてるんですけど、ちょっとやっちゃいまして・・・。

刀子さんの可愛さが異常すぎて、パソコンに向かって「刀子ッ！！刀子ッ！！」って叫びまくってたら、妹にガチで「病気だ・・・」って言われました。うん、間違いなく末期だ。

トーニャは終わらせて今は刀子さんルート。それも終わり頃。次に薫さんしたあと神ルートであるすずをする。しっかし、九鬼先生はなにいってもカッコいいな。俺もあんな先生ほしかった。

人の邪魔をするのが趣味です～ボールと推測～（前書き）

はい、更新です。

遅れた理由はただ一つ！あやかしびとやってましたッ！！つか、やり切りましたッ！！

ええ、やりましたよ。やり切りましたよ！！感想はあとがきで。

それではどうぞ。

人の邪魔をするのが趣味です～ボールと推測～

「チャース」

時刻は深夜。悪魔としての仕事。つまり人間との契約を完遂してリアス・グレモリー眷属悪魔の集会所である旧校舎の2階にあるオカルト研究部の教室に入る。

ていうか、何故に2階なんだ？一階でもよくね？いちいち階段登んの面倒なんだが・・・。

「あら、進君。お疲れさまですわ。お茶はいかがですか？」

教室に入ると一番はじめに部長の懐刀である姫島朱乃が声をかけてきた。超個人的に偏見や決めつけでこの人を説明するとだ。

艶のある黒髪をポニテにした、二次元だったら間違いなくメインヒロインの人だ。今時ポニテって絶滅危惧種だぜ？あぁ・・・二次元だったら攻略してたのに・・・。ただ残念ながら、中身がエグい。いつもえせ笑い浮かべてる、すげードSの人だ。どっちかっつうと俺にとっては苦手な部類。どことなくお母様に似ててな・・・。

最近になって知ったんだが、この人とうちの部長は学園で『二大お姉さま』って呼ばれてるらしい。アイドル級の美人だから男女問わず人気があんだとさ。

イッセーとハゲとメガネにこの事を熱弁されたんだが、はっきり言おう、知らんがな。

「あー・・・遠慮しとくわ。さっきそこで缶コーヒー飲んだからさ」

朱乃の提案に断りを入れる。さっき喉が乾いたからガマンできずかって飲んじまったからな・・・。買わんかったら良かったな・・・。

「そうですか、コーヒー好きなんですか？」

「けっこうな。そういうわけで、俺の分は貰わないでいるよ」

「うふふ、わかりました。けれど、喉が渇いたらいつでもいってくださいね」

「あいよ。お気遣い傷み入ります、と」

短い朱乃との会話を終えて奥のソファーに向かう。ソファーに近づくと次に爽やかなイケメンが話しかけてくる。

「お帰り、進君。契約はどうだった？」

話しかけてきたイケメン、別名木場祐斗はこれまた女性が喜びそうな笑みを浮かべながらそういってきた。

木場祐斗というイケメンをこれまた先ほどと同じ様に説明すとだ。紳士的とか騎士とかんな感じ。我ながらテキトーだなー、けどこんな感じじゃね？

「問題はなかったと思う」

俺の言葉に今度は苦笑を浮かべるイケメン（祐斗）。

「あはは、そうかい。お疲れ様」

「そらまたどうも」

それだけいうと木場は手元にもった本を読み始めた。また難しそうな本を・・・。

本を読み出した祐斗を放置して、俺はテーブルにあったクッキーをひょいっと摘んで食べる。途端、さっきまでそれを美味しそうに食べてたロリに睨まれる。

「・・・先輩」

静かな声でそう言ってくるのは、眷属の中で一番年下である搭城小猫。説明するとだ、ロリコーンな人にとっては神のような存在だろうな。とても高校生には見えないんだわコレが・・・。良くて小学三年生だ。

こうやって説明してる間も、メッチャクチャ睨んできてる。なんかすげー睨んできてる。クッキー食った事でそんなにまでにらむか？

「睨むな睨むな、小猫。別に一個ぐらいいいだろ？」

「・・・・・」

俺の弁解もあっさり無視られ、なおも睨んでくるロリ。心なしか睨みがきつくなってる気がする。

俺は居心地が悪くなり頭をかく。くそっ、たかだかクッキー一個でなんでここまでされにゃーならん。

「あー、わかったわかった。わかりました。クッキー勝手に食べてごめんなさいね、小猫さん」

「・・・」

俺が根負けして謝ると、小猫は睨むのをやめ、始めから俺など眼中にないようにまたクッキーを頬ばりだした。このクソロリ・・・。ほんっといい性格してるな・・・。

俺はふつふつとでてきた怒りを頭の中で押さえ込んだあと、窓際にイスを置いて外の景色をみている部長に声をかけにあるく。そして、ある程度近づいてから部長に呼びかけた？

「部長」

俺の呼びかけを聞いても依然として外を見続けている部長。あん？聞こえなかったのか？

「部長！」

今度は先ほどより三割増しぐらいで呼びかける。するとようやく気がついたのか、驚いた様子でこちらに振り向いてきた。

「あ、あら進。帰ったのね、お帰りなさい」

「おう、帰ったよ。契約は問題なく済ませてきた。次は何したらいい？」

「そ、そうね。こちらがなにか指示を出すまで、自由にしてくれて

かまわないわ」

「ん。了解」

それだけ言うとまた部長はそとをみてぼーっとしだす。最近、部長がこんな感じでぼーっとするのが増えてきている。普段は普通なんだが、時間ができるとすぐにまたこうなる。まったく、なんだってんだろな?

ま、人の考えてることなんて余程の付き合いがないとわかりゃしないんだがら俺が気にしたってしょうがないわな。

部長との挨拶を終えた俺は、祐斗や小猫がいる方へいき、空いたソファーに腰をおろした。そして持ってきた携帯ゲームに電源を入れ、画面に視線を向けながら祐斗に話しかけた。

「そういや、イッセーとアーシア嬢はどうした?」

俺の質問に本に視線を落としたまま答える祐斗。

「夜のデートにいったよ?」

「そらまた、今晩イッセーは狼になって帰ってこないかもな・・・」

「進君、飛躍しすぎだよ。それじゃあデートじゃなくて営みになっちゃうよ・・・。さすがにそこまではないんじゃないかな?」

祐斗が苦笑混じりにいった一言に少しにやついて俺がかえす。

「わっかんねーぞー?今まさにパックリとアーシア嬢を食べてると

ころかもしれないぜ？」

「・・・先輩卑猥です」

小猫さまの厳しいツッコミをスルーして、俺は続ける。

「しっかし、アーシア嬢はすっかりイッセーに惚れちまってるねー。こん中でアレに気づいてないの、イッセーだけじゃね？」

「まぁ、アーシアさんがまだ目立ったアプローチをしてないからじゃないかな？それに、イッセー君元々鈍そうだしね」

「イッセーが鈍いのには同意するが、アプローチについてはそうでもないんじゃね？部長の話じゃ、イッセーの家に一緒に住めるように手を回したらしいし・・・。」

この前、あいつら二人が俺の家に朝から来たとき、疑問に思ってその後イッセーに問いただしたら、やけにイライラする笑顔で『一緒にすんでるから♪』と言ってきたのを鮮明に覚えている。

その後、俺がイッセーにパイルドライバーをかましたのはいうまでもない。

「あぁ、そうだったね。・・・となると、さっき進君が言ったことに妙に信憑性が出てきた気が・・・」

「だろ？もしかしたらもうすでに初夜は終わっちまってて、今何回戦目がはじまったのかますんないだろ？」

ニシシ、と悪戯するような笑みをする。すると突如、オレの顔に黒

い物体が迫ってくる！！

スコーンッ！！

あまりの急な出来事で避けられず、物体は見事に俺の額に命中する。だが、当てられた俺には痛みがなく、当たった物体も反射してあらぬ方向へと飛んでいった。

「まったく・・・人の恋路をネタに話をするだなんて、関心しないわね・・・」

さきほで投げだ物体（黒いゴムボールだった）を拾い上げながら部長がいう。

「そうですわ。そういう事は外野がとやかく言うことではないと思いますわ」

カップとポットをトレイに乗せて、朱乃もソファーに近づいてくる。

ボールに当てられた所をカリカリとかきながら、半笑いで俺が答える。

「冗談だよ、ジョーダン。真に受けんな。ただそれぐらい二人が進展してくれるとよ。俺も苦労せずにすみそうだなと思っただけだって」

「苦労って・・・。あなたは何かしてるのかしら？」

部長が空いているソファーに腰を下ろしながら呆れ顔でいう。その隣では朱乃がカップに紅茶を注いでいた。

「案外気を使ってるんだぜ？例えば、登校時間をずらしてやったり・・・」

「それはただ単に、あなたが学校に来てないだけよ」

「その通りだ」

俺が笑いながらいうと、部長は呆れたといわんばかりに嘆息した。

「しっかし、部長。いいのか？眷属内の恋愛って？」

クッキーを一つとるために手を伸ばしながらいう。ちゃんとこんどは小猫に断りをいれてからだがな。

「あら、私はそんな所まで縛るきはないわよ？恋愛はできるうちにしとかないといけないわ」

「理解あるご主人様でよかったなぁー、アーシア」

そこから少し間が生まれる。別段、気まずい訳じゃない。なんというか、話すネタがなくなったから生まれたみたいなものだ。わりとゆったりとしている。

そんな沈黙が三十秒ほどたったあとに次に口をひらいたのは朱乃に入れてもらった紅茶に一口つけてからの部長だった。

「で、実際のところはどうなのかしら？あの二人、もうキスまではいったのかしら？」

おいこらてめぇ。さっき人の恋路をどうたらこうたら言ってたのはテメェだろうが。んだよ、キョーミシンシンですねー。

「ないな」

俺が力強く断言する。俺の言葉に引っかかったのか、すぐに部長が質問してきた。

「あら、進？どうしてそう言い切れるのかしら？」

「だってなぁー・・・。もしそうなってたら、イッセーが俺に自慢してくるもん。それにキスなんてしてたら、あの二人のこったぁ、あの二人の空間だけ桃色オーラ全開だぜ、きっと」

「あぁ・・・なるほど」

部長が納得したのと同時にほかの部員も納得したような表情をする。

「でもそうだとしたら、何で進展しないのかしら？私達の方からみても、かなりアプローチしてるようにみえるのだけど・・・」

う～ん、とうなりながら考え出す部長。俺は頭をかきながら喋る。

「具体的にどんなアプローチしてたんだよ？」

俺の発言に心底驚いた顔をする女性陣。え？なにそのリアクション？

「・・・わからなかったんですか？」

「あんまみてないからわかるわけないだろ！？」

あの二人とあんま会わないんだから仕方ないだろうが。

いつものえせ笑いをしながら朱乃が口を開く。

「そうですわね・・・。例えば、一緒に行動をするとかですかね。現に、一緒に悪魔のお仕事に行ってますもの」

「俺はそれ、てっきり部長が言いつけたことだと思ってた」

「面倒をみなさい、とは言ったけどあそこまでベッタリだとは思わなかったわ」

さいですか。

「あとは？ほかになんかあんの？」

「極めつけは、イッセー君と一緒に住んでるところでしょうか。異性と一緒に生活することじたい、もう告白に近いですわよ？」

「さすがに俺でもそこまでいったらわかるけどさ。たぶんイッセーはその程度じゃ気づかないと思うぜ？」

俺の一言にさらに驚愕する女性陣＋野郎一人。いやまぁ、そのリアクションはもっともです。

「・・・そこまでしてもわからないの、イッセー？」

「断言しよう、わかってないなありゃ」

「・・・鈍感すぎです」

「小猫さまの仰る通りで」

俺はそれだけ言うと、いつの間にか入れられていた俺の紅茶のカップに手を伸ばす。朱乃に感謝だな。さすがにこんだけ喋ったら口の中が乾燥する。

朱乃に感謝して紅茶を飲んでいると祐斗が口を開く。

「どうしてそこまでいってもわからないんだろ・・・」

「ひどい話ですけど、単純にアーシアちゃんはタイプではないのかもしれません・・・」

朱乃の発言に俺が対応する。

「あー、それはないな。イッセーの中にある理想の『金髪の女の子』つー像とアーシア嬢がほぼピッタリハマってるからな。タイプであることは間違いない」

足りないとしたら胸の大きさだろうな・・・と、そんなセリフを心の中でのみ発する。

「じゃあ、どうしてイッセー君は好意に気づかないんだい？」

祐斗がこちらをみながら質問してくる。すると、またこちらに視線が集まる。

「その前に一つ言っとくが、俺だってイッセーのすべてが分かる訳

じゃないからな」

俺の発言にみんな苦笑する。なんでもかんでも俺に聞くなよな。

「まぁ、イッセーの性格と態度と俺の推測で原因を探るとだ。原因としては二つくらいかな？」

「あら、案外少ない。もっと多いと思ったのだけど」

部長が軽く驚いた顔をしていう。

「あぁ、少ないな。けど一つは決定的だぞ」

俺が苦笑まじりにいうが、周りの空気は引き締まっていた。・・・そこまで恋愛って大切なんだ。

「まず、決定的じゃない方から。ぶっちゃけ、イッセー・・・つか俺もだけど女性との経験がないんだわ」

俺の発言に疑問符が頭に浮かぶような顔をするみんな。すると、すぐに全員かるく頬を赤らめていく。

「とりあえず、女との性交渉の経験がないってことでいった訳じゃないからな？」

「「「「紛らわしい」」」」

全員に声をそろえられていわれました。

微妙な間が生まれたので俺が咳払いしてから話し出す。

「まぁ、さっきいったのはあながち間違いじゃなくて。俺もイッセーも、あんまり女と接点を持たなかったからな」

「・・・どういうことですか？」

「その説明の前に。祐斗、おまえ俺やイッセーの噂聞いたことあるか？」

俺が祐斗の方を向いてきくと奴は首を縦にふった。

「うん、何度かね」

「どんな事いわれてた？」

俺の質問に一瞬躊躇する祐斗。次に確認するように聞いてきた。

「言っていいのかい？」

「簡潔に頼む」

「えっと・・・、イッセー君はエッチな噂を、進君は、その・・・」

妙にどもる祐斗に部長が命令する。

「祐斗、素直にいいなさい。進が噂だけで傷つくようには見えないわ」

「あ、はい。・・・進君は、ＢＬ疑惑とか校外で暴力事件起こしたとか、イッセー君とは違って色々危ない方向の噂が多かったよ」

ですよねー。まあ確かに、ＢＬは自分で作ってたし、ケンカもよくしてたしな。暇つぶし程度にな。

「まあ、そう言うこと。イッセーも俺も噂が先攻しまくってさ、イッセーはエロさで俺はそういう系の噂があるから、女子は敬遠気味つーか、試合放棄してるわけ」

「噂のせいで女の子と話す機会が少なかった、ということですか？」

朱乃が薄ら笑いをしながら聞いてくる。

「あぁ、中学から似たような噂が二人とも合ったし。長い間、二人して女に無縁だったからな。そんなわけでイッセー、女に免疫がないからアーシア嬢のアプローチとかいまいちわからないでいるだろうよ」

「なるほど、鈍いのにも納得だね」

「そうね、つまり経験がなかったわけね」

「うふふ、ぼーや・・・と言うことですか」

「・・・納得、です」

各々の感想をいう部長たち。ったく、いい気なもんだ。

俺が少し冷めはじめた紅茶に手を出して飲んでいると次に部長が聞いてきた。

「イッセーが鈍いのはわかったけれど、それは時間をかければなん

とかなるでしょ？」

「だろうな。女に対する免疫がないってだけだから、どう接していいかわからないってだけだ。時間があれば慣れるだろ。ただ問題なのがこの次のやつなんだよ」

俺はソファーに背中からもたれかかる。いい加減筋肉固まっちまうよ。

「そう言えば、さっきも言ってたはね。聞かせてちょうだい」

部長が催促するように言ってくる。

「その前に、俺が言ってるのはあくまで推測に過ぎないって事。頭の中に入れといてくれよ。間違ってるかもしれないしな」

「わかってるわ、あくまで推測なんでしょ？」

ホントわかってんすかね？この人等。まあいっか。

「決定的な問題って言ったのさ。意識つーか・・・認識の問題だな」

「認識？認識がどうかしたの？」

部長が俺の言ったことにいち早く食らいついてくる。ほかの部員も興味がおありのようだ。

「俺があいつらをみた時の話なんだけどさ。アーシアがイッセーを見る目は、間違いなく異性として意識した感じで見てたんだ。まあ見てなかったから、この話は始めからなかったんだけどな」

ハハハと乾いた笑いを俺がするが、それ以外は物音一つしなかった。

「けど逆に、イッセーがアーシアを見る目は・・・そうだな、異性としての女の子じゃなく・・・妹とか、そう家族を見るような目で見ていた」

俺がそう言って冷め切った紅茶に口をつける。・・・マズい。もっと早く飲んどきゃよかったな。

紅茶のカップをおいてから話を続ける。

「な?決定的だろ?イッセーがただ単に鈍いだけだったら、アーシア嬢のアプローチも時間をかければ届いたかもしんない。けど、イッセーのその認識がある限り地味なアプローチは無効化だろうな。全部『かわいい妹からの愛情表現』ぐらいにしか思わないだろうな」

おれが間髪いれず続ける。

「もしこの推測があたってたら、アーシア嬢は苦労しないといけないかもしれない。一度できた認識を破るくらいのインパクトを相手に与えないといけないからな。最悪、押し倒すくらいしないといけないかもしれない」

そう考えるとイッセーって、ギャルゲでいう最難関攻略キャラじゃん。難易度高そー。

「はぁー・・・、アーシア・・・前途多難そうね」

部長がため息混じりに言うと、ほかの奴らも各々感想を言い出した。

「そうですね。なかなか難しいそうですわね」

いつもの似非笑いをしながらいう朱乃。

「あはは、まあなるべく手伝ってあげようか」

苦笑しながらいう祐斗。

「・・・そうですね」

いつも通り無表情だがどこかやる気が見える小猫。

まあ、俺の推測なんざ外れてくれるのが一番なんだけどな。

「余韻に浸るのはそろそろにしとこうぜ？イッセー達帰ってきたっぽいな」

いつの間にやら旧校舎の同じ階にまできていた。何でわかったかって？気配。

「あら、ほんと。みんな、あの二人には悟られないようにしましょうね。あくまで影から応援するわよ」

「「「はい」」」

部長の提案で俺以外全員が返事する。俺？ちょうど考え事をしていた。

さっきはなしていた原因。あれは確かにイッセーの周りの環境や認

識の問題だった。それで決着はついた。だが、そこでふと疑問が生まれた。結局、根本の原因は何なんだろうな・・・。

「――あ」

わかった、根本の原因。話がここまでややこくなる原因がわかった。

「なぁ、みんな」

俺の言葉に全員俺を見てくる。俺はそんな中声をだした。

「ぶっちゃけ、ここまでアーシア嬢が苦労しないといけない理由ってさ、――――イッセーのやってきたことが原因じゃね？」

「「「「――――――あ」」」」

そうなのだ、よくよく考えたらイッセーがこんなにエロくなければ女子と話す機会が増えて、女性に対する免疫も生まれて、なおかつアーシア嬢のアプローチにもさらっと気づけたのだ。

つまり――――――――自業自得。

「たっだいま帰還しましたぁーッ！！」

「戻りました！」

そんな中帰ってきたお二人さん。きっと３０秒前ならすぐに挨拶してたと思う。けどいまは・・・。

（みんな・・・殺っていいか？）

（（（（（・・・・・・GO））））

アイコンタクトの一秒会話終了。

「部長ー？みんなー？帰りまし・・・。あぁ、進。今かえったんんだけどお前はどうして、俺に近づいてきて後ろに回り込んでから腰をがっちり手で締め付けて後ろに体重移動して俺の体を浮かして後方に引っ張ってまるでジャーマンスープレッガァはァァァァ――――ッ！！！！！！！！？？？？？？？？？？」

人の邪魔をするのが趣味です〜ボールと推測〜（後書き）

今回書いてて思ったのが、進って物事の本質見抜くの上手ぃな、案外頭がいい。あのー勉強ができないけど頭はいいみたいな。そうだよ、別に勉強が出来るから頭がいいってわけじゃないんだよ。大事なのは頭の回転の速さと発想力とひらめきだよ！！だから俺はテスト勉強しないもん！！

アニメみてゲームしてアニメみてゲームして寝てアニメみてゲームしてアニメみてゲームしてアニメみてゲームして寝る！！それが俺の生活だ！！

はい、だめ人間発言でした。しっかし、今回もやはり落ちはアイツ。みなさんが「・・・あ」となったことを期待します。

あと、すっかり忘れてたコートの名前もこれからまた募集します。作者的にはなるべく、厨二チックなのを・・・。作者が厨二だからね。

さて、あやかしびとの感想。

九鬼せんせぇぇぇぇ――――――――――――――――――――――――ッ！！！！！！！！！でした。

訳わかんないって？やったらわかります。まさか最後にあの教えをもう一回いうとは、『男は・・・悲しいときに、泣いちゃいけない』・・・やべぇ、また泣けてきた。

全体的にみて、熱すぎる。熱すぎるよ。男性陣のキャラ濃すぎる。

ぶっちゃけ刀子ルート以外、ヒロインが途中で空気なってた気が・・・。特にすず・・・。

ルート的には、すず→刀子→薫→トーニャでした。キャラ的には、刀子→さくらちゃん→薫→トーニャ→すずの順でした。うん？なんでさくらちゃんがいるをだって？可愛いからにきまってんだろうが！！

なぜさくらちゃんルートがない！？さくらちゃんルートを作ってくれ頼むからぁぁぁ！！さくらちゃん！！俺だ！！後輩になってくれ！！

すんません、狂いました。さて、今あやかしびとを終えて迷ってます。マブラヴをするか弾丸執事するかで。今の気分的には弾丸執事してクロノベルトが早くしたいんです。けどマブラヴもしないといけない。どうしよ？どっちやったらいいかな？だれかオススメしてよ！！弾丸執事とマブラヴ、どっちがオモロい！？ちなみにマブラヴは一番始めの奴です。

人の邪魔をするのが趣味です～呼び出しと壁走り～（前書き）

三週間ぶりに更新しました。

言い訳・・・言い訳をきいてください！！

とりあえず、二週間ほどまったく書く気がうまれませんでした。そんで書き始めたら次から次へといらないものを次込んでしまった。結果遅れた。・・・まぁほかにも要因はあったんですがね。それは後書きで。

とりあえず、重要なことを一言。

作者の頭部に十円ハゲが出現した（笑）

・・・ガチでね。

人の邪魔をするのが趣味です～呼び出しと壁走り～

「ふぁぁ～・・・」

ずるずると非常に気怠そうに歩きながら、大きな欠伸がでる。ダルいなぁ・・・、寝不足なんだよなぁ・・・。さっきまで寝てたし・・・。あぁ・・・、１日が８０時間くらいあればいいのになぁ・・・。そしたら惰眠を貪れる。

よぉ、作者が最近小説書くのがめんどくさくなって放置してたら二週間も放置して、少しやる気が出たからかこうかな？と思ったんだが、冒頭部分をどうかくまったく思いつかないでいたら一週間たってしまった小説の主人公、本道進だ。

ん？メタな発言すんじゃねぇって？うん、もっともだ。まったくもってその通りだ。けど作者が書いてしまったんだから仕方ないだろ？

まぁ、そろそろこんなグダグダな話もやめてだ、少しみんなにいっておかないといけないことがある。

――――――春です。

春です。季節は春です。みんな忘れてるかもしれないけど春です。誰がなんと言おうと春です。この小説の季節はあくまで春です。だからクリ〇マスなんて言うリア充が調子乗り出す季節じゃないの！？わかる？アンダスタン？了解？だからリアルの季節と小説の季節を一緒にしないでくださいね。

とまた先ほど言ったように春ですよ、みなさん。えぇ、春です。さ

すがに桜は散りきったが春です。四月終わり頃ですがまだギリ春です。

春・・・つまり、外の気温と太陽の光がちょうどいい具合に眠気を誘ってくる訳よ。んで、さっきまでのグダグダな話をまとめるとだ。春だから眠い。

いやいや待てって、そんなソッコーで戻るボタン押そうとしないでって、俺がこんな事言うくらい想定内だろ？てか、そろそろ慣れてきただろ？

まぁ、時刻的には今午後3時くらいなんだが、いかんせん、ちょうど昼寝すると気持ちいい時間帯なんだわこれが。だからさっきから意識跳びかけてる。ヤベェ、まばたきしただけで寝ちまいそうだ・・・。

とまあ、そんな今にも寝てしまいそうな状態で学校にむかっている。ん？学校に行くような時間帯じゃないだろって？まあそうだよな。下手したらもう下校時刻だ。こんな時間にいったって授業は終わってるわな。

まあ、俺が学校にいく理由は授業を受ける為じゃないから良いんだよ。俺が学校にいく理由はさ、部活しにいってるんだから。

部活つってもオカルト研究部なんていう、オカルトな存在がオカルトの存在を研究するっていうなんか灯台下暗し的な感じがプンプンする部活だがな。

そう、長い前振りになっちまったが、俺はオカルトな存在、つまり悪魔だ。正真正銘、翼だって持ってる悪魔だ。

・・・うん、自分でいっといてなんだが俺って痛い奴だな。けど事実だからしょうがねぇよな。

まあ、色々な事があって悪魔がなった訳よ。詳しくはまた一話から読んでくれ。んで話を戻すがそのオカルト研究部っていう部活は表向きは普通の部活で通ってるんだが、その実態は俺の学校にいる悪魔が集まる集会みたいなもんだ。

部員は全員悪魔。人数にして7人。やってることは超地味。そんな集まりだ。

んで俺は学校は嫌だが部活はわりと好きだから、部活だけしに学校に来てるってわけ。アンダスタン？

説明じみた事を考えてたら我らが駒王学園に到着。時刻は丁度下校時間。目指すは使われなくなった旧校舎の二階にあるオカルト研究部の部室。今日もいつもと変わらず悪魔の仕事が始まりますっと・・・。

・・・ただ、今日はなんか起きそうな気が済んだよな・・・。

――――――――――――――――

旧校舎の入り口に向かうと、見知った顔が一人。ポツンと立っていた。

「やぁ、進君。今きたのかい？」

手を上げてイケメンフェイス全開で挨拶してくる祐斗。・・・この

イケメン、何故にこんな所でたってるんだ?

「お、おぅ・・・。その通りだが、・・・なんでこんな所でたってんの?」

俺が恐る恐る聞く。すると野郎は微笑んで。

「進君を・・・・・・待ってたんだよ?」

――――――俺は全力で引いた。

「・・・・・・・・・エッ!?」

顔が引きつる。いやだってそうだろ?こんなこといわれたら誰だって引くだろ。このままいったら間違いなくベーコンでレタスな展開がくるだろ!?

「・・・すまん祐斗。本気できもい」

俺がドン引きすると祐斗が焦り出す。いや、今のおまえ何してもキモイは・・・。

「す、進君!?さすがに冗談だってわかってほしいんだけど・・・」

「いやすまん。だって目がマジなんだもん・・・」

そういいながら少し後ずさりする俺。そんな俺の態度をみて祐斗が焦って声を出す。

「ほ、本気で引かないでよ・・・」

「だったらいうなよ」

おまえって、なんかナチュラルでアブノーマルだな。

「んで？なんでたってたんだ？」

俺が頭をかきながら改めて聞く。いや、さっきのはホント冗談抜きでキモかった・・・。

「ん？あぁ・・・だから、進君を待ってたんだよ」

「とりあえず半径４２、１９５キロ以内に入らないでくれるか？」

「ヒドっ！？」

・・・さっきと一言一句違いが無いのは俺の気のせいじゃないよな？

俺がガチで引いていると祐斗が困り顔で柔らかく言ってくる。

「さっき教室を出るときに進君が見えたから、どうせなら一緒に部室いこうかなって思ったからここでたって待ってたんだよ」

「あーそうなん？だったらそう言えよ。さすがにさっきのは身の危険感じたぞ・・・・」

「まぁ、ちょっとしたジョークって事で」

そう言ってウインクしてくる祐斗。うん、キモイ。ホントヤバい方向に進んでね、コイツ・・・。

「いつまでも立ってないで、部室にいかないかい？少し喉が渇いたから紅茶が飲みたいんだ」

「それもそうだな。イッセーならアーシア嬢と来るだろうからな。アーシア嬢の邪魔をするのも忍びないし、さっきに行っとくか」

といって、部室に向かおうとしたとき。

《ピーンーポーンーパーンーポーン》

・・・誰だ、こんな使い古された呼び出し音。なんだってコレなんだよ。もちょっと違うやつ用意しろよ。こう、例えば・・・ゾンビの声・・・とか？

・・・すまん、ただの断末魔の叫びだわ。

「ったく・・・校内放送で呼び出し食らうとか、いったいだれ――」

《えぇー、二年生の本道進。二年生の本道進。今すぐ職員室に来なさい》

「・・・・・・・・・」

俺か？俺なのか？俺なんだな？そうか。俺なんだな。・・・俺か。

「アハハ・・・進君だったね。なにしたの？」

苦笑して声をかけてくる祐斗。うん、俺だったね。

「いや、思い当たる節が有りすぎるというか、明確すぎるというか・・・。まず間違いなく、俺の出席についてじゃね？」

「あー、ついにきたのかぁー。さすがにサボリすぎたね」

「まぁ、呼び出し自体は一週間ぐらい前から家の電話にきてたんだけどな」

俺が気怠げにいった一言に軽く驚いた表情をする祐斗。

「え？じゃあ、それを悉く全部・・・」「あぁ・・・無視ったッ！！」

「いや、自慢げにいうことじゃないと思う」

「いやだって面倒だろ？いちいち職員室いって教師の小言きくんだぜ？時間の無駄だろ」

「そんな考えで呼び出しを無視する高校生がはたして全国に何人いるんだろうか・・・」

百人ぐらいじゃないか？俺とおんないことする奴。

それだけのやりとりをした後俺は職員室とは逆、つまり部室へと歩みを進める。

「あれ、進君？職員室いかないの？」

祐斗が怪訝そうな顔をして俺に聞いてきた。

「だから、さっきもいったろ？職員室いくだけ時間の無駄だって」

「いや、でも、呼び出し・・・」

「あー無視っとけ無視っとけ。ほっといて早くいこうぜ？」

俺が指で早く来るように促す。だが、祐斗は困ったという顔で言ってくる。

「いやでも、さすがにマズいんじゃ・・・」

「大丈夫大丈夫。ほっといても停学やら退学にはならねぇよ。だから別にいい――――――」

《本道進。もし15分以内に職員室に来なければ・・・君の両親に連絡します。以上》

「――――かなかったら間違いなく俺の命の灯火が消し飛んじまいますのでッ！！今すぐ光速よりも速くッ！！職員室にいってきまぁぁぁぁぁぁぁぁすぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ――――――――――――――――――――――――ッ！！！！！」

全力回避ッ！！面舵いっぱいッ！！回れ右して全力ダッシュッ！！

――――――――――――――――――――

「ったく・・・権力使って人を脅しやがって。こちとら本気で死ぬかと思ったわ・・・」

悪態をつきながら廊下を歩く俺。先ほどまで先生の説教をくらって

た。いや、・・・ありゃ説教なのか?下手して親に連絡でもされたら間違いなく極刑確定なんだが・・・。

ホント・・・勘弁してもらえないっすかね・・・。親父に殺されてお母様に滅せられちまう・・・。小学校のころ、一回マジで親に情報が回っちまって、説教くらったんだが・・・説教開始１２秒からさきまったく覚えてない。

なんか綺麗なお花畑にきづいたらいたんだけど、しばらくするとお花畑から地獄に変わってて、ずっと地獄で石積んでたのような気が・・・。

・・・やめとこ、思い出さないでいよ。

「しっかし、先生も先生だよなー。一時間近く説教しやがって・・・」

携帯で時計を確認すると祐斗と別れてから一時間近くたっていた。やべ、かんっぜんに遅刻だ。後で部長にどやされそうだ。

「しゃーね。走ってくかぁー」

それだけいって走り出す。放課後だからもう廊下には生徒が見当たらないが、それでも廊下は走らないように自重する。・・・かわりに壁を走ってたが・・・。

いやだって、さっきまで先生に怒られてたし。さすがに大人しくしてようかと。それにアレだって校則でも廊下は走っちゃだめって書いてあるが、壁を走っちゃだめだとは一言も書いちゃいないだろ?だから問題ないだろッ!!

・・・・・壁走った結果、窓ガラスやらなんやら壊しまくってるけど、きにしないほうこうで。

―――――――――――――――

はてさて、そんな感じでひたすら壁を走った結果、あれから一分とちょっとで旧校舎入り口に到着。いやー我ながら足が速い。てか、壁を走るって案外楽だな。今度から道が混んでたらそうしよ。

・・・まあその結果ドアやら窓やら大変なことになるだろうが俺は知らない。

まぁ、そんな事より。今は目の前の問題だよな。・・・部長、おこってるだろうなぁー。あの人、ただでさえ俺に厳しいのに怒らせた日にゃ、なにされっかわかったもんじゃないぜ。

よし、ここはあれだ、『コッソリ忍び込み、あたかもはじめからいたように振る舞おう作戦』～侵入時のＢＧＭはミッションインなポッシブルなやつ～だッ！！

作戦内容は・・・作戦名でわかるよね。

ま、まぁ、とりあえずだ。部長がいないタイミングみはかるために、気配を探るとするか。こっから部室ぐらいまでなら問題ないだろ。

思考を少し戦闘時に切り替え目を閉じる。ちょっとぐらい緊張感がないと、上手くできないからな。気配を探るってのは神経使うし。

数は・・・6・・・7？・・・え？8？八人・・・八人いんぞ。おっかしいな。確か部員は俺を除いたら6人の筈だ。それが二人オーバーのはちて・・・、客人か？

いやないな。八人目の気配。ただもんじゃない。こう、押し殺した闘気というか、実力というかそれがすさまじく高い。間違いなく俺より上だ。てか、俺とじゃ比べられないくらい高い。

さらにそれを完璧に押さえ込んでる様子からすると、かなり冷静な奴だろ。ハハ、こりゃまたすげーなおい。

「く、ふふ。ハハハ。」

自然と笑いがこみ上げてくる。当たり前だ。こんなにはやく、俺よりも強い奴にあえるなんてよぉ！！

ヤベェ、興奮してきた。頭に血が登り始めた。いいね、いいね、いいねぇ！！今すぐ戦いたい、戦いたい！闘いたい！！

それにだ。よくよく調べたらもう一つ敵意バリバリで強そうな奴いやがる。カハ！いいねぇ、今日はついてるぜ！？1日に二人も強い奴とあえるなんてよぉ！！

「・・・まったく、退屈しないですみそうだよホント！！」

そして、俺は床を思い切り蹴りだした。

――――――――――――――――

リアスｓｉｄｅ

気に入らない。気に入らない、気に入らない！気に入らない！！

私の将来を操ろうとするお父さまが気に入らない。私の気持ちを無視するお兄さまが気に入らない。私の自由を潰そうとする周りが気に入らない。

今回もそう。上級悪魔であるフェニックス家の三男、ライザーとの縁談。私の意志や考えをすべて無視して強引に進めようとしている。

冗談じゃないわ。私には私の考え、思いがあるのよ。それを、親だから、貴族だからという理由だけで決めないでちょうだい！！

確かに、家の跡取りや貴族であることがどれだけ大切かは私も理解はしてる。私が今この場にいることができているのは間違いなく貴族の・・・お父さまのお力ではある。

けれど、だからといって私の未来を勝手に決めるだなんて・・・そんなの許せる訳ないじゃない。

私は私よ。リアス・グレモリーよ。私の未来は将来は、私が考え、私が決め、私が実行する。ほかの誰からも指図は受けない。そうしなければ――――――――

――――私を私と見てくれる人が、誰もいなくなってしまう。

「お嬢様、それでは《レーティングゲーム》で決着をつけるという方向でよろしいのですね？」

銀髪のメイド服をきた女性――――グレイフィアが確認をとってくる。

「えぇ、かまわないわグレイフィア。それで決着をつけましょう」

ライザーとの縁談を拒否する私に対して、お父さまたちから与えられたチャンス。レーティングゲームを持って、その勝敗で、私の未来を決まる。

断る理由はない、いえ、むしろ好都合よ。ゲームで勝てば、お父さま達をだまらせる材料になるわ。

「ふーん。ゲームで決着を、か。ハハハ、おもしろいことをいうじゃないか、リアス」

薄く笑った顔をしながらライザーそう言ってくる。言葉の中にはこちらを小馬鹿したような感情が見え隠れする。

「なにが面白いのかしら、ライザー？」

私が腕を組んでそう聞き返すと、彼は軽く笑いながら行った。

「いやな？別にゲームをする事事態に問題はないぜ？俺はもう公式の大会に参加してるからな。ただな――」

「ただ？どうしたのかしら？」

スッ

ライザーは腕を上げ、私の眷属のいる方を指差す。

「あのメンツでゲームになるかな？見たところ・・・俺の眷属とや

り合えそうなのはそちらの女王ぐらいかな？あとは、実力が低すぎるぜ」

「ライザー・・・！あなた・・・ッ」

私の眷属を馬鹿にするように笑うライザー。

体に纏う魔力を跳ね上げる。今のライザーの発言に生まれた敵意と怒りをありったけ彼にぶつける。

私の、私の眷属を笑うなんて・・・ッ

「そう怒るなよ、リアス。俺は君を心配してるんだぜ？このままじゃ、恥をかくだけだぞってな」

その発言で私の中のなにかがキレかける。完全にこちらを下にみた発言、態度。何もかもが気に食わない。

パチン

ライザーが指をならす。すると部屋に魔法陣が出現する。紋様はフェニックスの紋様。つまり、ライザーの眷属。

魔法陣からライザーの眷属が現れる。一、ニ、三、四・・・。

「まぁ、こいつらが俺の下僕ってやつだ」

集まった人数は総勢１５名。つまり、『悪魔の駒』で眷属にできる人数の最大。

なるほど、ライザーは質より量、ということね。まぁ、フェニック

スの特性上それが一番いいのでしょう。

「リアス、おまえの眷属は見たところ・・・六人か？ハハ、人数差が二倍以上あるが本当にやるのか？」

「何度もいわせないでライザー。私の意志は変わらないわ。・・・それに、眷属が六人だけだなんて誰がいったのかしら？」

私の言葉に眉をしかめるライザー。

「そうなのか？それは悪かったな。だが、じゃあなんでこの場にいないんだ？眷属ならば主のそばにいるものだろ？」

うっ。痛いところを・・・。この場にいない私の眷属。つまりギャスパーと進をさすのだけれど。

ギャスパーは上からの命令で軟禁状態。つまりこの場にはいることができない。

その結果進が残るのだけれど・・・。あの子はもうッ！！いったい何をしてるのよッ！！普段はあまり意味がないときにはいるのに重要なときにいないってどういうことよッ！！

「それは――――」

私が弁解しようとしたとき――――。

「ん？あれ？なんだこのドア、あかねぇッ！？こいつ俺を舐めてんのかッ！？」

――――――いつものバカの声がドア越しに教室に鳴り響いた。

人の邪魔をするのが趣味です～呼び出しと壁走り～（後書き）

はい、十円ハゲが出来てしまって気づいたときは割と気にしてたんだが、一週間たつと逆にネタにするようになったアンサラーです。

いやがちで。ホントに出来ました（笑）いやー、実際できることにビックリしましたよ。ホントに円形にハゲが出現するんです。

まぁ、自身のハゲすらネタにするような人ですから気にしてないです（笑）

さて、それはさておき。久々に更新しますた。つか、今年も今日で終わりですね。いやー、色々あったなぁー・・・。とりあえず小説を始めたでしょ？大学に受かったでしょ？あとは・・・、ゴキが味噌汁の中に入ったことですかね？

いや、だってインパクトが強すぎたんだもん。わすれらんねぇよ。

まぁなにわともかく。今年一年。みなさんお疲れさまでした。色々とあった人も、なかった人も。なにがあろうと今日で２０１１年もおわりです。やり残したこと。あったのなら、今日にやっておきましょう。

作者がやり残したことは・・・色々ありすぎて1日じゃ終わらなさそう（笑）

とりあえず、エロゲ買ってやりたい。弾丸執事とワルキューレロマンツェとＤｉｅｓ ｉｒａｅがしたい。つか、今一番Ｄｉｅｓ ｉ

ｒａｅがしたい。

最近気づいたんです。俺に今足りないものは厨二養分が足りないんだって。だからコートの名前も思いつかないんだ（笑）

はぁー、Ｄｉｅｓ　ｉｒａｅがしたい。ルサルカが可愛い。可愛いすぎて生きてるのが嬉しい。ルサルカにあえるから嬉しい。

つーわけでＤｉｅｓ　ｉｒａｅがしたいんです。訳わからんて？うん俺も。

さて、今日はこれぐらいにします。ではみなさん、よいお年を♪

あ、言い忘れてましたけど1月1日は俺の誕生日です。（↑マジで）

人の邪魔をするのが趣味です～行と単語～（前書き）

さて、更新。

・・・物語が進まない、進まないよッ！？どういう事だよ！？

クソ・・・、主人公の名前『進』なのに全然進まない。

さて今話は、みなさんが多分忘れているであろう物がでてきます！

！いや、けっこう重要なんだよ？

それではどうぞ・・・。

人の邪魔をするのが趣味です～行と単語～

旧校舎の廊下を俺が疾駆する。もし今、陸上の選手が外からこの旧校舎の廊下をみてたら、プライドがズタズタになるだろうな。なぜかって？俺がおおよそ人の出せるスピードを軽く凌駕してるからな。

旧校舎の二階にある部室までノンストップで走り続ける。前も思ったんだが、何故に二階に部室をおいた？めんどくさいだけだろうに・・・。

と、建設物に対して文句を考えていたら時、異変に気づいた。

「――――あれ？・・・人数が、増えてる？」

部室の気配がスゴいスピードで増加していくのを感じ取った。先程まで八人だった気配が、一気に二十数人になっていた。

増えた気配は合計で１５・・・、その一人一人が多少は戦える実力は持ってる。少なくとも、イッセーやアーシアよりは強いな。てか、何故に人数が増えた。

「・・・いったいなにがどうなったらこうなるんだ？」

わからん。考えても何もわからんが・・・一つだけわかる。それは

――――

「楽しくなりそう♪」

――――また厄介事がはじまるっつーことだ。

―――――――――――――――

それから数十秒後に部室の前に辿り着く。もっと速く走ってもよかったんだが、そうすると靴が摩擦でエグいぐらい削れるから止めといた。

「さて、入りますか」

ご機嫌でドアを開けようとして取っ手に手をかけるが。

ガコン

「ん？あれ？なんだこのドア、あかねぇッ！？コイツ俺を舐めてんのかッ！？」

開かなかった、そらぁもう開かなかった。割と本気であけにいっても開かなかった。し、知らなかった・・・最近のドアって重たいんだな。

「って、ねぇーよ」

俺が開けられなかったらこの世界の人間のだいたいはあけられねぇよ。

「おーい、部長ぅ！！ドアが開かねぇぞ！？どうなってんだ！！」

俺のドア越しに中にいるであろう部長に呼びかけるが十数秒ほど運とも寸とも言わなかった。

無視かと思って無理やり突き破って入ろうと拳を握ると、ドア越しに部長が話しかけてきた。

「進？聞こえるかしら？聞こえたらまずドアを突き破ろうとするのをやめてちょうだい」

・・・エスパーかコノヤロウ。

「ソ、ソンナコトオモッテナイヨ？」

「あら、そう。良かったわ、いちいち壊れたドアを直すのはめんどうだものね」

「あ、あぁ・・・そうだな。んで？ドアが開かないんだが？」

俺がドア少し横に移動しながらそう聞く。

「あぁ、その事ね。もう大丈夫よ。少し取り込んでたから、誰にも入れないようにしてたの」

「あ、やっぱりか？・・・んじゃもう入っていいんだな？」

俺が部長にそう確認すると、ノリ良く答えてきた。

「えぇ・・・くれぐれも、ドアを殴り壊して入ってこないでね」

「はいはい、わかったよ。ドアは壊さないよ」

それだけ言うと、再び拳を握る。まったく、そんなに言われたらドアを壊したくなるんだが・・・。まぁいいか、体の調子も確かめた

いからな。久々に、四季極でも撃つかな。

さて、読者はすっかり忘れてるだろうから説明してやる。『四季極』と言うのは俺のやってる武術？の奥義みたいなもんだ。正確には『本道一心流』なんだがな。まぁ、武術と部類していいかわからんがな。だってもっぱら組み手・・・、つか組み手しかしない。いや組み手じゃねぇな。うん、あれは一方的な虐殺だな。

ま、まぁ四季極つーぐらいだからな。技としては四つ。この前撃ったのは秋葉だったか。あれは平たくいうとボクシングの『コークスクリューブロー』だ。

腕を捻りながら撃ち出すからな。ただ違いがあるとしたら圧倒的に威力と貫通力だろうな。

そんな事を考えながら腰を落とし、左手を掌にしながら前に、右手を拳にして後ろに、腕が一直線状になるようにする。と同時に左足を前に、右足を後ろにする。

さて、撃ってみるかな。今回は『秋葉』じゃダメだろうな。あれは威力と貫通力を極めた一転集中型。壊すんじゃなく貫いちまう。

今回はそれ以外で撃つ。悪魔になってからは始めだからな。力加減間違わないようにしないとな。

「さて、と・・・。んじゃまね。いきますかぁッ！！」

ドゴンッ！！

右足に力を入れると少し床がめり込む。逆にこの方が、蹴りだし安

い。

右足を蹴りだし、前に。それと同時に前にしていた左手をひく。

ダンッ！！

前に出した右足が床に１０？ほどめり込む。踏み込みで生まれた力をそのまま無駄にせずに使いながら、体を左に捻り右手を前に突き出す。

本道一心流の四季極が一つ、『春花』。打ち出し方や威力は普通のパンチだが、決定的に違う点が一つ。それは衝撃を伝える箇所。箇潔で分かり易くいうと、傷つけるのは外ではなく内。つまり、内側に衝撃を伝える打撃浸透――――！！

「チェリオ――――ッ！！！！！」

そんな某『刀語り』見た人のならわかるネタを叫びながら、右手を突き出して殴りつけた。

――

――――――――――――――――――――――――――――――壁を。

そう壁を。壁を殴りつけた。

そして殴りつけた壁は――――

バンッ！！！！！！！

――――花火があがったような音を立て内側が弾けた。

―――――――――――――――

壁を破壊した事により、俺一人が簡単に入れる穴が出現した。いい感じで穴が開いたな。力加減を覚えてきたぜ。それに、腕にかかる負担が前ほどじゃない。1日に二発か三発くらいは四季極撃っても問題なさそうだ。

ひょこりと俺がその穴に潜ってはいると、中にいた連中は等しく全員同じような表情を浮かべていた。

わかりやすくいうとだ。「えっ？こいつなにやってんの？」ってきな感じ？みたいな？

俺はどうしたものかと思う。いやだって、全員の視線が俺に向けられているんだもん。どうしろと？

服のほこりをはたいて落としながら考える。先程から一言も誰もしゃべってない。つまり、俺の発言を待ってるわけだ。

フッ・・・上等じゃねぇか。なにが上等なのか俺すらわからんが、とりあえず上等じゃねぇか。

まぁ、手始めにみんなにあいさつするか。たぶんみんな、俺のあいさつを待ってるんだろ。

「すまん、遅れた」

俺が何気なくあいさつすると――――

「違うだろッ！！」↑イッセー

「違うでしょッ！！」↑部長

「違いますわッ！！」↑朱乃

「違うよッ！！」↑祐斗

「・・・違うッ！！」↑小猫

「違いますッ！！」↑アーシア

――――――俺の仲間全員が全否定してきた。

「え？俺間違えたの？」

俺がすっとぼけたようなことをいうとツッコミマスターが拾ってくれた。

「当たり前だろうがッ！！壁ぶち破って入ってきて一言目がなんであいさつなんだよッ！？」

「いや、あいさつが妥当かなって思ってさ」

「普段絶対しないことをなんでよりによって今この場ですんだよ！！普段通りしろよ、普段通りッ！壁ぶち破って『すまん、壁が邪魔だったからぶち破った』っみたいなことというかなって思うだろうが！！」

「ムッ！？イッセー、それは偏見だぜ？」

「確固たる事実から推測される事ですッ！！」

なんだよ、その確固たる事実って・・・。俺が壁をぶち破るなんて、頻繁にありすぎて困るわ。

イッセーがまだなんか言ってきたのを無視して、俺は部長に話しかける。

「そんでま、悪いな部長。諸々なことがあったから遅れた」

「普段なら怒るところだけれど、今回は許してあげるわ。多少予想から外れたけれど、あちらを黙らすいいキッカケになったわ」

そう言って、いまだに状況が読み込めてなさそうな１６人の団体に視線を僅かにむける。

「・・・？予想？いったい何の話だ？」

部長曰わく、この教室全体に耐衝撃、防音、防火その他諸々の魔法による強化がかけられていた。（ただし、外側からの呼び掛けは聞こえるらしい）

んで、俺が来るちょっと前に、目の前の奴に自分の眷属をバカにされたからその舐めた口を聞けないようにするため、教室の強度をあげたまま、俺にドアをぶち破らせようとしたんだとさ。

まぁ、ドアじゃなく壁を殴っちまったんだがな・・・。

「まさか壁をぶち破るとは・・・。ああ言えば絶対にあなたはドアを壊すと思っていたのに」

部長が苦笑を浮かべながら俺にいってくる。

「いやだって、あんなに言われたドアになんかあるかなって思うじゃん。そんな分かり易い罠に引っかかる俺じゃないぜ！！」

俺がそう言うと部長は短く嘆息したが、少し笑ってはいた。

「リアス・・・もしかしてソレが、君の下僕かい？」

その声に部長と俺が反応する。声がした方を向くと、何ともいえない、といった表情で頭を抑えているなんかホストみたいな格好した野郎がいた。

わかるかな？こう・・・シャツが第四ボタンぐらいまであいてて鎖骨が見えまくってる。

「えぇ、そうよライザー。彼が私のもう一人の『戦車』よ」

部長俺のことを少しみながらそう言う。それを聞いたとたん、深々とため息をつき始めるホスト。しっつれいなやつだな・・・。

「リアス・・・、君のセンスを疑うぞ」

心底理解できないっつー面をしながらそういうホスト。

「どういうことかしら？ライザー」

「言葉通りだよ、リアス。君がどんな人間を眷属にするのは自由だが、自分の品格を陥れるような眷属は感心しない」

「あら、ずいぶんないいようじゃないライザー。この子のポテンシャルはなかなかのものよ」

話が一ミリも見えん。

「あぁ、それもわかる。強化した壁を一撃で意図もたやすく破壊する実力は認めよう。だが、忘れているんじゃないかね？君は貴族だ」

「なにを今更・・・そんな事、言われるまでも――」

「いいや、わかっちゃいない。いいかい？上級悪魔に求められるのは実力と品格だ。君の『戦車』からは品格どころか一般常識する感じられない」

うん、とりあえず俺をバカにしてんのだけはわかった。

だが、今回は我慢しといてやろう。あとでぶっ殺すがな♪

「あー、お取り込み中わるいんだがな部長」

さきほど以上に不機嫌になった部長に話しかける。

「なにかしら？」

「まったく状況が読み込めないんだが・・・？」

「・・・・・・」

訂正、さらに不機嫌になった。

「それについては私がお答えします」

それまで沈黙を守っていたメイドさんが口を開いた。銀髪の髪を小さく三つ編みにして一本にまとめた人だ。

「そりゃあ、いいが・・・あんたは？」

「申し遅れました。私はグレモリー家につかえるメイドのグレイフィアと申します。以後お見知り置きを」

すまん、それ無理。

「あぁ・・・そう」

メイドって・・・、悪魔界にはそういう職業があるのか・・・

「まず、あちらにおられるのは・・・」

といってメイドさんが説明を・・・って待った、待った！待った！！

「あー、えっと・・・グ、グレープフルーツさん？」

「グレイフィアです。なんでしょうか進様」

「二文字しか合ってないわ、進」

いやだって名前長いじゃん。覚えられるわけないだろ。

「その、グリーンアップルさん。その説明長くなるのか？」

「グレイフィアです。はい。多少、込み入った話になっているので」

無表情でそう返すグラフィックデザイナーさん。

「あ、だったらいいわ。説明しなくても」

「は？・・・なぜ、でしょうか？」

グランプリファイナルさんが少し意外そうな顔をして聞いてくる。

「そんなダラダラと説明されてもなぁー、俺の頭じゃ（ポンコツ）一割も理解できやしないだろうからさ。もっと短く、分かり易く説明できる奴に聞くわ」

「・・・そうですか。わかりました」

「どうも悪いね。・・・イッセー！」

俺が声を張り上げると、びっくりした表情を浮かべてイッセーがこちらを向く。

「えっ！？な、なに！？」

「今きた三行」

「あ、えーと・・・あのホスト部長の婚約者。部長それを解消したい。戦って決着つけましょう」

見事に三行じゃねぇか。

「把握。さすがイッセー、俺と同じネラーだな。ついでに今きた三単語」

「えっと・・・婚約者、別れたい、バトル決着」

すげ、冗談で言ったのに解るよ。

「と、まあ。優秀な情報提供者から教えてもらったので大丈夫です」

「「「「いやいやいやいや」」」」

部長、朱乃、祐斗、グーテンベルクさんからツッコミを貰った。んだよ。なんか問題あんのか？

「今の不思議な呪文については後で聞くからいいけれど・・・、とりあえず進。あなたはこの後なにが待ってると思う？」

部長が頭を抑えながらそう聞いてくる。てか部長、頭痛持ちか？大変だな。

「ドンパチだろ？」

「バトル脳過ぎますわ、進君」

いやだって、話の流れてきにそうじゃないかなって・・・。

「やはり、ちゃんと説明させていただきます」

「いやだから、別に――――」

「「「ぜひお願いします（するわ）」」」

なぜおまえらが決める？

人の邪魔をするのが趣味です～行と単語～（後書き）

グレイフィアファン、ごめんなさい。そうとしか言いようがない。
このＮＯＳ内のハイスクールＤ×Ｄ二次でヒロインにしてる小説も多々あるというのに・・・、この暴挙どうしよう。

とりあえず謝っとくしかない。ゴメンナサイッ！！！なんか後書きとか前書きで謝ってばっかだな俺！！

ライザー・・・、こんなキャラで良かったよね。初めくらいはキャラをたたせてやりたい・・・。

さて、アニメが始まりましたね。みたひとといます？まだ限られてるとは思いますけど・・・。

俺はみたんですけど・・・その、アレ・・・放送していいのか？俺がみた時には乳首モロだったぞ？いいのか？テレビ会社いいのか？俺としては超うれしいよ？

さて、最近ほかのＤ×Ｄの二次読んでて思ったことがあるんです。決定的に俺の小説にないものがみなさんのにはつまってるんです。それは――――――――――――エロシーンです。

・・・いまさらだなっておもう（笑）てか、みなさん薄臼は思ってたと思う。三十話もあるのにエロシーンゼロて！！

コレ、ハイスクールＤ×Ｄの二次だよな？ハイスクールＤ×Ｄって確かバトルと同じくらいの割合でエロいよな？エロってそれぐらい重要だよな？なのになんで俺かけてないんだぁッ！？

D×Dの二次にあるまじき暴挙じゃね？そう思って、エロをを書こうと思うんですよ。けど詰まった。なんでかって？

進が女を嫌ってるからさぁー？

しまったぁぁぁぁぁぁ――――――――ッ！！！！！でしたよ？

マジで。いやほんとしまった。

まさかこんな落とし穴があるとは思いませんでした。進のイラン設定でD×Dの良さを潰していたなんて・・・。ビックリだよ！！

まぁ、エロは・・・かけて四巻か？あの水着のシーンで。いや、その前にイッセーがドレスブレイクするか？あ、でも進の事だから無反応かもしれん・・・。

くそっ、進め・・・、この不能野郎ッ！！

「誰が不能だ！！」

グッ！？ガハッ！！ま、まて！！進！！肘をそっち方向に折ったら、二度と動かな・・・ギャァァァァ――――ッ！！

～しばらくお待ちを～

まぁ、早急にエロシーンを考えることにします。

さて、みなさん。三十話です。ついに三十話です。ながかっかった

な・・・。それでいてあっという間だった・・・。この小説がまさかここまで続くとは、つか未だに執筆してるとは・・・。よく続いてるよ。途切れ途切れだけど・・・。まぁ、これからもよろしく！！

それではまた次回。

追伸、弾丸執事買いました。雪が可愛くて死ねます。声優陣豪華すぎて死にます。戦闘が熱すぎてしにます。相変わらず漢キャラ全員格好良すぎて死にます。ベイルがほしいよぉぉ・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1928u/

ハイスクールD×D～道を貫き抜きし者～

2012年1月9日02時47分発行